

姫路市

竹の前遺跡

— (二) 船場川水系船場川 流域治水対策河川事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



令和2（2020）年3月

兵庫県教育委員会

姫路市

竹の前遺跡

— (二) 船場川水系船場川 流域治水対策河川事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



令和 2 (2020) 年 3 月

兵庫県教育委員会

例 言

1. 本書は兵庫県姫路市手柄に所在する竹の前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および出土品整理作業は、兵庫県中播磨県民センター姫路土木事務所による、二級河川船場川水系船場川 流域治水対策河川事業に伴うもので、発掘調査は中播磨県民センター長の依頼を受けた兵庫県教育委員会が直接実施した箇所と、兵庫県教育委員会を調査主体とし、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターが調査機関として兵庫県教育委員会から委託を受けて実施した箇所がある。
出土品整理作業は、中播磨県民センター長から依頼を受けた兵庫県教育委員会が公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターに委託して、兵庫県立考古博物館において実施した。
3. 本発掘調査の調査区別担当者は以下のとおりである。
西端橋台区（平成 28 年度） 兵庫県立考古博物館
総務部 埋蔵文化財課 村上泰樹
西端区・西区・東区・東 2 区・東 3 区（平成 28 年度）
公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター
埋蔵文化財調査部 調査課 岸本一宏・渡瀬健太
発掘調査は、西端橋台区以外は三協建設株式会社（姫路市飯田 3-117）に工事委託して実施し、下請業者の有限会社松浦興業（姫路市四郷町東阿保 1391- 1）が主として発掘調査業務にあたった。
4. 発掘調査時の地形および遺構の実測は空中写真測量図化として、西端橋台区以外は株式会社日建技術コンサルタント神戸事務所（神戸市中央区伊藤町 119）に委託して実施した。その他の詳細実測は有限会社松浦興業および調査員がおこなった。
5. 出土品整理作業は平成 29（2017）年度から兵庫県立考古博物館で実施した。主として嘱託員等が整理作業を担当し、発掘調査担当者が作業指示等を行い、これに工程管理の職員が加わって実施した。また、金属器・木製品保存処理についても保存処理担当職員と嘱託員により兵庫県立考古博物館で実施した。また、遺物実測および遺構・遺物図のデジタル浄写は嘱託員が行なった。
6. 本書に使用した写真のうち、遺構については調査員が撮影したもので、発掘中の空中写真撮影については株式会社日建技術コンサルタントに委託して撮影したものを使用した。また、遺物写真については国際文化財株式会社に委託して横山 亮氏が撮影したものを使用した。
7. 竹の前遺跡出土試料の自然科学分析のうち、サヌカイト産地推定と推定石棺材の石材同定については株式会社パレオ・ラボ、木製品の樹種同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。
8. 本書の執筆は岸本が行い、自然科学分析については各社の報告文の一部を掲載した。また、編集は嘱託員の前田陽子の補助のもと、岸本が行った。
9. 本報告で使用した図面・写真および遺物は、兵庫県立考古博物館および魚住分館で保管している。
10. 出土品整理にあたり、兵庫県立考古博物館の岡田章一氏に出土磁器についてのご教示を得た。

凡 例

1. 本書で使用した方位は第V系国土座標（世界測地系）を基準とし、北は座標北をさす。標高の数値は国土地理院一等水準点を利用した海拔高（T. P.）を使用した。
2. 竹の前遺跡の調査について、兵庫県教育委員会が設定した調査別の遺跡調査番号は以下のとおりである。
西端橋台区 本発掘調査 2016（平成28）年度 遺跡調査番号 2016076
西端区・西区・東区・東2区・東3区 本発掘調査 2016（平成28）年度
遺跡調査番号 2016059
なお、西区内で2008（平成20）年度に実施された調査の遺跡調査番号は2008176である。
3. 遺構等の土層色調名および土器の色調名は『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）によるものであり、土層名のうち、堆積物の粒度区分については、調査担当者が経験的に触感により判断したものであるが、一部『新版地学ハンドブック』（大久保雅弘・藤田至則編著、築地書館株式会社発行）によった。
4. 遺物番号は本文・図版・写真図版とも同一とし、遺物の種類ごとに通し番号としている。
また、遺物番号のうち、石器・石製品には番号の前に「S」、木製品には「W」、金属器には「M」をそれぞれ冠し、種類ごとに通し番号としている。
5. 土器類実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、磁器は60%、陶器は50%、瓦器・瓦質土器は30%の断面網かけにし、木製品の断面内の線は年輪をあらわしている。
6. 本書に掲載した挿図のうち、第1図は国土地理院発行の電子地形図25000を使用し、図版1と図版2は姫路市教育委員会2014年発行の『竹の前遺跡・畑田遺跡発掘調査報告書』の図を使用し、今回調査区の加筆をおこなった。
7. 本書の執筆は、第1～3・5章を岸本、第4章は分析会社の結果報告を掲載し、文責名があるものについては文末に執筆者名を入れている。

本文目次

第1章 遺跡の位置と環境	
第1節 位置と地理的環境	1
第2節 遺跡の歴史的環境	2
第2章 調査の経緯・経過と体制	
第1節 発掘調査に至る経緯と経過	5
第2節 出土品整理作業の経過と体制	6
第3章 調査の結果	
第1節 遺構	
1. 弥生時代～古墳時代	7
2. 平安時代以降	10
第2節 遺物	
1. 弥生時代～古墳時代	19
2. 平安時代以降	44
第4章 自然科学分析結果	
第1節 竹の前遺跡出土のサヌカイト製石器の産地推定	49 (株式会社 パレオ・ラボ)
第2節 竹の前遺跡出土推定石棺材の石材同定	52 (株式会社 パレオ・ラボ)
第3節 竹の前遺跡出土木製品の樹種同定	56 (バリノ・サーヴェイ 株式会社)
第5章 総括	
第1節 竹の前遺跡の変遷	59
第2節 弥生時代後期前葉の土器	61

挿図目次

第1図	周辺の遺跡分布図	3	第7図	分析試料と偏光顕微鏡写真	54
第2図	SD 202 出土土器 型式分類 1	21	(a : 解放ニコル、b : 直交ニコル)	54	
第3図	SD 202 出土土器 型式分類 2	22	第8図	遺跡周辺の地質図	55
第4図	SD 202 出土土器 型式分類 3	24	第9図	木材	58
第5図	サヌカイト産地推定判別図(1)	51	第10図	調査区内遺構配置図(弥生時代~古墳時代後期)	59
第6図	サヌカイト産地推定判別図(2)	51	第11図	調査区内遺構配置図(平安時代後期以降)	60
			第12図	讃岐・吉備型高坏の類例	63

表目次

第1表	遺跡名表	3	第5表	分析対象一覧	50
第2表	SD 202 出土土器観察表	27	第6表	岩石同定を行った試料とその詳細	52
第3表	原石採取地と判別群名称	49	第7表	岩石の化学組成(単位%)	52
第4表	分析値および産地推定結果	50	第8表	竹の前遺跡の樹種同定結果	57

図版目次

図版 1	既往調査区と今回調査区		図版 39	SB 4 平面	
図版 2	今回調査区と既往調査区		図版 40	SB 4 断面	
図版 3	調査区全体		図版 41	SB 9 平面	
図版 4	西端橋台区~西区南壁 土層断面		図版 42	SB 9 断面(1)	
図版 5	西端橋台区~西区南壁 土層名		図版 43	SB 9 断面(2)	
図版 6	西区~東区南壁 土層断面		図版 44	SD 166・168 埋土土層断面	
図版 7	西区~東区南壁 土層名		図版 45	SD 161・177・181、SX 183 埋土土層断面	
図版 8	東2区南壁~東壁 土層断面		図版 46	SX 187・270、SR 144	
図版 9	弥生時代遺構全体		図版 47	SE 182	
図版 10	SH 1		図版 48	SE 182 埋土土層断面	
図版 11	SH 1 内中央土坑・柱穴等 埋土土層断面		図版 49	SB 6	
図版 12	SH 2		図版 50	SB 5	
図版 13	SH 2 埋土土層断面		図版 51	SB 5 断面	
図版 14	SD 202 平面		図版 52	SB 7 平面	
図版 15	SD 202 南半 土器出土状況		図版 53	SB 7 断面	
図版 16	SD 202 北半 土器出土状況		図版 54	SK 286・291	
図版 17	SD 202 土器出土状況断面		図版 55	SB 8 (SB 3)	
図版 18	SD 202 埋土土層断面		図版 56	SB 8 他 平面	
図版 19	SD 164 平面		図版 57	SB 8 他 断面	
図版 20	SD 164 遺物出土状況(1)		図版 58	SA 1~3 平面・断面、SD 307 埋土土層断面	
図版 21	SD 164 遺物出土状況(2)		図版 59	SH 1・2 出土土器、SD 202 出土土器(1)	
図版 22	SD 164 埋土土層断面		図版 60	SD 202 出土土器(2)	
図版 23	SD 340 平面		図版 61	SD 202 出土土器(3)	
図版 24	SD 340 内 サヌカイト検出状況		図版 62	SD 202 出土土器(4)	
図版 25	SD 340 埋土土層断面		図版 63	SD 202 出土土器(5)	
図版 26	SR 308		図版 64	SD 202 出土土器(6)	
図版 27	SR 308 埋土土層断面		図版 65	SD 202 出土土器(7)	
図版 28	西端橋台区・西端区の遺構		図版 66	SD 202 出土土器(8)	
図版 29	平安時代~中世の遺構(1)		図版 67	SD 202 出土土器(9)	
図版 30	平安時代~中世の遺構(2)		図版 68	SD 202 出土土器(10)	
図版 31	SB 1 平面		図版 69	SD 202 出土土器(11)・SD 164 出土土器(1)	
図版 32	SB 1 断面(1)		図版 70	SD 164 出土土器(2)・SD 340 他 SD 出土土器	
図版 33	SB 1 断面(2)		図版 71	SR 308 出土土器(1)	
図版 34	SB 2 平面		図版 72	SR 308 出土土器(2)	
図版 35	SB 2 断面(1)		図版 73	SR 308 出土土器(3)	
図版 36	SB 2 断面(2)		図版 74	SR 308 出土土器(4)	
図版 37	SB 3 平面		図版 75	SR 308 出土土器(5)	
図版 38	SB 3 断面		図版 76	SR 308 出土土器(6)	

図版 77	S R 308 出土土器(7)・東 2 区流路出土遺物(1)	図版 84	出土石器・石製品(2)
図版 78	東 2 区流路出土遺物(2)、S B 1～3・8 出土遺物	図版 85	出土石器・石製品(3)
図版 79	S B 9・S X 270・S E 182 出土遺物	図版 86	出土石器・石製品(4)
図版 80	建物以外の柱穴出土遺物、包含層・攪乱出土遺物(1)	図版 87	S E 182 出土木製品(1)
図版 81	包含層・攪乱出土遺物(2)	図版 88	S E 182 出土木製品(2)・出土金属製品
図版 82	包含層・攪乱出土遺物(3)	図版 89	S R 308 出土木製品
図版 83	出土石器・石製品(1)		

写真図版目次

写真図版 1	調査区全景 (オルソ画像)	写真図版15上	S D 202 中央北部 土器出土状況 (北西から)
写真図版 2 上	調査区上空から南西を望む	下	S D 202 中央部 土器出土状況 (南から)
	下 調査区上空から北を望む	写真図版16上	S D 202 中央北部 土器出土状況 (南西から)
写真図版 3 上	調査区上空から東を望む	下	S D 202 中央南西部 土器出土状況 (北東から)
	下 調査区上空から南を望む	写真図版17上	S D 202 北西部 完掘状況 (南から)
写真図版 4 上	西区全景 (西上空から)	下	S D 202 北部 埋土層断面 (南から)
	下 西区全景 (東から)	写真図版18①	S D 202 内土器 16・36 等出土状況 (西南西から)
写真図版 5 上	東・東 2 区全景 (南西上空から)	②	S D 202 内土器 41・183・186 等出土状況 (東から)
	下 東・東 2 区全景 (南東上空から)	③	S D 202 内土器 47 出土状況 (西から)
写真図版 6 ①	西端橋台区調査前状況 (北東から)	④	S D 202 内土器 48 出土状況 (北東から)
②	西端区調査前状況 (西から)	⑤	S D 202 内土器 51 出土状況 (北から)
③	調査前状況 (西から)	⑥	S D 202 内土器 70 出土状況 (南東から)
④	西端区・西区調査前状況 (東から)	⑦	S D 202 内土器 71 出土状況 (西から)
⑤	西端橋台区南壁土層断面 (北西から)	⑧	S D 202 内土器 114 出土状況 (北西から)
⑥	西区東端部南壁土層断面 (北東から)	写真図版19①	S D 202 内土器 122・152・168 等出土状況 (東から)
⑦	東 2 区南壁土層断面 (北から)	②	S D 202 内土器 168 出土状況 (北東から)
⑧	東 2 区東壁土層断面 (西から)	③	S D 202 内土器 179 出土状況 (南西から)
写真図版 7 上	S H 1 (北から)	④	S D 202 内土器 184 出土状況 (南から)
	下 S H 1 中央土坑 (北西から)	⑤	S D 202 内土器 190 出土状況 (南東から)
写真図版 8 ①	S H 1 中央土坑等検出状況 (西から)	⑥	S D 202 南端 埋土層断面 (北から)
②	S H 1 中央土坑等埋土断面 (西から)	⑦	S D 202 北部 埋土層断面 (南から)
③	S H 1 中央土坑埋土断面 (西から)	⑧	S D 202 中央南部 埋土層断面 (南南西から)
④	S H 1 中央土坑埋土断面 (南西から)	写真図版20上	S D 164 全景 (上が北西)
⑤	S H 1 中央土坑内遺物出土状況 (南から)	下	S D 164 南西部 埋土層断面 (南西から)
⑥	S H 1 中央土坑内遺物出土状況 (東から)	写真図版21①	S D 164 南端部 埋土層断面 (北東から)
⑦	S H 1 中央土坑下部土層断面 (西から)	②	S D 164 南部 土器 216 出土状況 (北東横から)
⑧	S H 1 中央炭土坑埋土断面 (西から)	③	S D 164 南部 土器 216 出土状況 (北東から)
写真図版 9 ①	S H 1 中央炭土坑 (西から)	④	S D 164 南部 土器 216 出土状況 (北東上から)
②	S H 1 中央炭土坑内炭等詳細 (北西から)	下	S D 164 北部 礫検出状況 (西北西から)
③	S H 1 中央炭土坑 截ち割り断面 (西から)	写真図版22上	S D 164 北東部 埋土層断面 (東北東から)
④	S H 1 周壁溝埋土断面 (北西から)	①	S D 164 北東部 礫検出状況 (北北西から)
⑤	S H 1 内 S P 193 断面 (北から)	②	S D 164 北東部 下層礫検出状況 (東から)
⑥	S H 1 内 S P 194 断面 (西南西から)	③	S D 164 北東部 埋土層断面 (東北東から)
⑦	S H 1 内 S P 194 断面 (南西から)	④	S D 164 北東部 土器 197 出土状況 (北から)
⑧	S H 1 内 S P 297 断面 (南から)	写真図版23上	S D 340 全景 (南西から)
写真図版10上	S H 2 (南東から)	中	S D 340 南部 埋土層断面 (南南西から)
	下 S H 2 中央土坑 (南から)	下	S D 340 北部 埋土層断面 (北東から)
写真図版11①	S H 2 中央土坑埋土層断面 (南南東から)	写真図版24上	S D 340 サヌカイト剥片出土状況 (北北東から)
②	S H 2 内 S K 364 埋土層断面 (南南東から)	下	S D 340 サヌカイト剥片出土状況 (東南東から)
③	S H 2 内 S K 364 内焼土等 (南西から)	写真図版25①	S D 340 サヌカイト剥片出土状況 1 (北東から)
④	S H 2 内 S K 363 埋土層断面 (北から)	②	S D 340 サヌカイト剥片出土状況 2 (南南西から)
⑤	S H 2 内 S K 363 埋土層断面 (南東から)	③	S D 340 サヌカイト剥片出土状況 3 (東南東から)
⑥	S H 2 内 S P 322 内礎板石 (西から)	④	S D 340 サヌカイト剥片出土状況 4 (東南東から)
⑦	S H 2 内 S P 322 内礎板石 (東から)	⑤	S D 340 サヌカイト剥片出土状況 5 (東南東から)
⑧	S H 2 内 S P 355 内礎板石 (南から)	⑥	S D 340 北東端付近 土器出土状況 (北から)
写真図版12上	S D 202 (オルソ画像、西から)	⑦	S D 340 截ち割り土層断面 (南西から)
	下 S D 202 南西部 土器出土状況 (北北東から)	⑧	S D 340 截ち割り土層断面詳細 (南西から)
写真図版13	S D 202 南西部 土器出土状況 (北東から)	写真図版26上	S R 308 (南上空から)
写真図版14	S D 202 北東部 土器出土状況 (南南西から)	下	S R 308 全景 (南西から)

- 写真図版27上 SR 308 全景 (北東から)
下 SR 308 南西部 (北東から)
- 写真図版28上 SR 308 埋土土層断面 (北東から)
① SR 308 埋土土層断面詳細 (北東から)
② SR 308 内杭群 (北東から)
③ SR 308 内杭群 (北西から)
④ SR 308 内木製品 (W10) 出土状況 (南西から)
⑤ SR 308 内小枝等集積状況 (西から)
⑥ SR 308 内小枝等集積部詳細 (南から)
- 写真図版29① SR 308 内土器 233 出土状況 (南東から)
② SR 308 内土器 240 出土状況 (南から)
③ SR 308 内土器 260 出土状況 (北から)
④ SR 308 内土器 296 出土状況 (南西から)
⑤ SR 308 内土器 297 出土状況 (南から)
⑥ SR 308 内土器 298 出土状況 (北から)
⑦ SR 308 内土器 380 出土状況 (北西から)
⑧ SR 308 内土器出 386 土状況 (北から)
- 写真図版30上 西端橋台区全景 (東から)
① 西端橋台区 P 2 瓦 449 出土状況 (南から)
② 西端橋台区 P 8 土器 450 出土状況 (南から)
③ 西端橋台区 P 8 底土器 451 等出土状況 (南から)
④ 西端橋台区 P 13 礫検出状況 (南から)
- 写真図版31上 西端区全景 (西から)
① SP 075 土器 461 ~ 463 出土状況 (南西から)
② SP 075 土器 461 ~ 463 出土状況近景 (南西から)
③ SP 075 土器 461 ~ 463 出土状況 (北西から)
④ SD 014 埋土土層断面 (南西から)
- 写真図版32上 SB 1・2 全景 (東上空から)
下 SB 1・2 全景 (西から)
- 写真図版33上 SB 1 (東から)
① SB 1 内 SP 043 断面 (西から)
② SB 1 内 SP 053 断面 (北西から)
③ SB 1 内 SP 059 断面 (西から)
④ SB 1 内 SP 067 断面 (南東から)
- 写真図版34上 SB 2 (南東から)
① SB 2 内 SP 022 断面 (南東から)
② SB 2 内 SP 054 内土器 425 検出状況 (南西から)
③ SB 2 内 SP 076 断面と土器検出状況 (南東から)
④ SB 2 内 SP 077 断面 (南東から)
- 写真図版35上 SB 3・4・9 全景 (東上空から)
下 SB 3・4・9 全景 (西から)
- 写真図版36上 SB 3 (西から)
① SB 3 内 SP 128 断面 (北西から)
② SB 3 内 SP 132 断面 (南東から)
③ SB 3 内 SP 140 断面 (南東から)
④ SB 3 内 SP 143 断面 (南東から)
- 写真図版37上 SB 4 (北東から)
下 SB 4 (北西から)
- 写真図版38① SB 4 内 SP 145 断面 (南東から)
② SB 4 内 SP 151 断面 (南東から)
③ SB 4 内 SP 156 断面 (南東から)
④ SB 4 内 SP 159 断面 (北東から)
下 SB 9 全景 (西から)
- 写真図版39① SB 9 内 SP 124 断面 (北西から)
② SB 9 内 SP 130 上面土器 436 出土状況 (北西から)
③ SB 9 内 SP 141 断面 (西から)
④ SB 9 内 SP 146 断面 (北東から)
⑤ SB 9 内 SP 169 断面と土器検出状況 (南東から)
⑥ SB 9 内 SP 234 上面土器 438 出土状況 (北から)
⑦ SB 9 内 SP 237 断面 (東から)
⑧ SB 9 内 SP 293 断面 (北から)
- 写真図版40上 SX 270 (南から)
下 SX 270 副葬品検出状況 (南から)
- 写真図版41① SX 270 白磁碗・青磁碗出土状況 (南西から)
② SX 270 白磁碗内青磁碗検出状況 (南西から)
③ SX 270 青磁碗出土状況 (西から)
④ SX 270 白磁小壺出土状況 (南東から)
⑤ SX 270 白磁小壺出土状況 (北から)
⑥ SX 270 棺内埋土土層断面 (東から)
⑦ SX 270 墓壇埋土土層断面 (東から)
⑧ SX 270 墓壇 (南から)
- 写真図版42上 SX 187 (北から)
① SX 187 墓壇 (北から)
② SX 187 埋土土層断面 (北から)
③ SX 187 墓壇埋土土層断面 (北から)
④ SX 187 南西部 棺材遺存状況 (北から)
- 写真図版43上 SE 182 (南から)
下 SE 182 石組 (南から)
- 写真図版44上 SE 182 上半部 埋土土層断面 (南から)
下 SE 182 截ち割り断面 (東から)
- 写真図版45① SE 182 石組内 埋土土層断面 (南から)
② SE 182 石組底 曲物検出状況 (東から)
③ SE 182 石組底 遺物出土状況 (南から)
④ SE 182 石組底 遺物出土状況 (北から)
⑤ SD 161 埋土土層断面 (北から)
⑥ SD 177 埋土土層断面 (南から)
⑦ SD 181 埋土土層断面 (北西から)
⑧ SD 144 埋土土層断面 (西から)
- 写真図版46① SD 166・168 南部 埋土土層断面 (北東から)
② SD 166 南部 埋土土層断面 (北から)
③ SD 168 南部 埋土土層断面 (北東から)
④ SD 168 中央北部 埋土土層断面 (北から)
⑤ SD 168 北部 埋土土層断面 (北から)
⑥ SD 168 突出部 埋土土層断面 (南西から)
⑦ SX 183 埋土土層断面 (東から)
⑧ SK 178 埋土土層断面 (南西から)
- 写真図版47上 SB 5 (南から)
① SB 5 (南東から)
② SB 5 内 SP 205 断面 (南から)
③ SB 5 内 SP 208 断面 (北から)
④ SB 5 内 SP 292 断面 (東から)
- 写真図版48上 SB 5・7 (東北東から)
① SB 6 (東から)
② SB 6 内 SP 276 断面 (東から)
③ SB 7 内 SP 200 断面 (南から)
④ SB 7 内 SP 203 断面 (東から)
- 写真図版49上 東3区 SB 8 他 (南西から)
下 東3区 SB 8 他 (北東から)
- 写真図版50① SB 8 と北西柱列 (北東から)
② SB 8 内 SP 366 断面 (北東から)
③ SB 8 内 SP 372 断面 (南西から)
④ SB 8 北西柱列内 SP 367 断面 (北西から)
⑤ SB 8 北西柱列内 SP 368 断面 (北西から)
⑥ SB 8 北西柱列内 SP 369 断面 (北西から)
⑦ SD 307 埋土土層断面 (南西から)
⑧ 東3区截ち割り土層断面 (東から)
- 写真図版51① SK 286 (南から)
② SK 286 埋土土層断面 (南西から)
③ SK 291 (南西から)
④ SK 291 埋土土層断面 (南西から)
⑤ SA 1 内 SP 328 断面 (北西から)
⑥ SA 1 内 SP 329 断面 (北西から)
⑦ SA 1 内 SP 330 断面 (北西から)
⑧ SD 344 埋土土層断面 (南東から)
- 写真図版52① SP 300 断面 (北東から)
② 東2区流路内土器 414 他出土状況 (北から)

写真図版52③	東2区流路内土器 417 出土状況 (北から)	写真図版 75	S D 164 出土土器 2
④	東2区流路内瓦 419 出土状況 (北西から)	写真図版 76上	S D 164 出土土器 3
⑤	S D 164 礫精査状況 (西から)	下	S D 340 他出土土器 1
⑥	S B 5 断面実測状況 (北東から)	写真図版 77	S D 340 他出土土器 2・S R 308 出土土器 1
⑦	ドローンによる空中写真測量状況 (南から)	写真図版 78	S R 308 出土土器 2
⑧	測量のためのポール写真撮影状況 (南東から)	写真図版 79	S R 308 出土土器 3
写真図版53①	西区 重機による表土掘削状況 (西から)	写真図版 80	S R 308 出土土器 4
②	S R 308 掘削状況 (北東から)	写真図版 81	S R 308 出土土器 5
③	S B 1・2 付近 柱穴掘削状況 (南から)	写真図版 82	S R 308 出土土器 6
④	現地説明会開催状況 1	写真図版 83	S R 308 出土土器 7
⑤	現地説明会開催状況 2	写真図版 84	S R 308 出土土器 8
⑥	現地説明会開催状況 3	写真図版 85	S R 308 出土土器 9
⑦	現地説明会開催状況 4	写真図版 86	S R 308 出土土器 10
⑧	現地説明会開催状況 5	写真図版 87	S R 308 出土土器 11
写真図版54	S H 1・2 出土土器	写真図版 88	S R 308 出土土器 12
写真図版55	S D 202 出土土器 1	写真図版 89上	S R 308 出土土器 13
写真図版56	S D 202 出土土器 2	下	東2区流路出土遺物 1
写真図版57	S D 202 出土土器 3	写真図版 90	東2区流路出土遺物 2
写真図版58	S D 202 出土土器 4	写真図版 91	東2区流路出土遺物 3
写真図版59	S D 202 出土土器 5	写真図版 92	掘立柱建物跡出土土器 1
写真図版60	S D 202 出土土器 6	写真図版 93	掘立柱建物跡出土土器 2、S X 270 出土土器類、 S E 182 他出土遺物 1
写真図版61	S D 202 出土土器 7	写真図版 94	S E 182 他出土遺物 2
写真図版62	S D 202 出土土器 8	写真図版 95	S E 182 他出土遺物 3
写真図版63	S D 202 出土土器 9	写真図版 96	包含層・攪乱出土遺物 1
写真図版64	S D 202 出土土器 10	写真図版 97	包含層・攪乱出土遺物 2
写真図版65	S D 202 出土土器 11	写真図版 98	包含層・攪乱出土遺物 3
写真図版66	S D 202 出土土器 12	写真図版 99	包含層・攪乱出土遺物 4
写真図版67	S D 202 出土土器 13	写真図版100	出土石器・石製品 1
写真図版68	S D 202 出土土器 14	写真図版101	出土石器・石製品 2
写真図版69	S D 202 出土土器 15	写真図版102	出土石器・石製品 3
写真図版70	S D 202 出土土器 16	写真図版103	S E 182 出土木製品
写真図版71	S D 202 出土土器 17	写真図版104上	S R 308 出土木製品
写真図版72	S D 202 出土土器 18	下	出土金属製品
写真図版73	S D 202 出土土器 19		
写真図版74	S D 164 出土土器 1		

報 告 書 抄 録

ふりがな	たけのまえ いせき							
書名	竹の前遺跡							
副書名	(二) 船場川水系船場川 流域治水対策河川事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第514冊							
編著者名	岸本一宏 株式会社パレオ・ラボ (竹原弘展・藤根 久・米田恭子) パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 (兵庫県立考古博物館内) TEL.079-437-5561							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL.078-341-7711							
発行年月日	2020 (令和2) 年3月25日							
資料保管機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 TEL.079-437-5589							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
竹の前遺跡	ひょうごけんひめじし 兵庫県姫路市 てがら 手柄	28201	020435	34度 48分 53秒	134度 40分 50秒	20160620～20160629 20160927～20170120	本発掘 121 m ² 2,493 m ²	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
竹の前遺跡	集落	弥生時代後期 古墳時代後期 平安時代後期	堅穴住居跡・溝・自然流路 自然流路・溝 掘立柱建物跡・墓・井戸・溝	弥生土器・土師器・瓦・ 土製品・石器・石製品・ 木製品・金属器	長持形石棺片?

概 要
<p>弥生時代～中世の集落跡の竹の前遺跡を調査。弥生時代後期前葉の円形堅穴住居跡は流路に挟まれた微高地上で2棟検出した。どちらの中央土坑も炭土坑の付属施設を有する。住居跡の中間に存在する溝からは住居と同じ時期の後期前葉の土器が大量に出土した。同時期と判断できる溝はもう1条存在した。古墳時代では後期と思われる溝1条を検出したにとどまる。自然流路は弥生時代中期初頭に遡る可能性があり、幅約10mを測る。古墳時代後期までは存続していたようで、中世初頭までには埋没したと考えられる。</p> <p>平安時代以降の遺構には掘立柱建物跡が可能性も含めて9棟検出した。そのうち2棟は以前に調査されていたものの続きである。平安時代末頃と判断されるものが多く、その時期の木棺墓2基と井戸も検出した。木棺墓は後世の破壊を大きく被り、遺存状況は良くなかったが、一つには副葬品の白磁小壺や碗・皿が遺存していた。井戸は石組のもので、下半分のみ石組が遺存していた。井戸底からは曲物と底板や土師器皿を検出した。ほかに、同時期の可能性がある柵列または塀跡や、溝などがある。建物跡以外に数多くの柱穴を検出したが、それらの多くは平安時代末頃～鎌倉時代の所産と思われる。</p>

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 位置と地理的環境

本書で報告する竹の前遺跡は、兵庫県中央部を占める広範囲の市域をもつ姫路市の南部に位置する。

姫路市は兵庫県の南西部、播磨平野（姫路平野・播州平野）のほぼ中央部に位置する西播磨の中核都市であり、人口は約53万人（2019年11月推計）と兵庫県第2の人口規模を有する。市域の面積は、約534平方キロメートルとなっている。

姫路市は奈良時代に播磨国府や播磨国分寺が置かれ、旧播磨国の中心地として発展し、江戸時代には姫路城の城下町として都市形成が進められた。これにより、姫路市街地は姫路城の城下町とその周辺部からなり、周辺部の集落は沖積平野や海岸に近い砂堆・砂州上に点在するかたちで分布していた。

市街地はその後徐々に拡大し、大正期以降、市街地拡大は急速に進展し、昭和に入り広畑・飾磨等の臨海部の住宅化・工業化が促進された。太平洋戦争では2度の空襲を受け、市街地中心部は灰燼に帰したが、戦災復興土地地区画整理により大手前通りなど市街地の道路網が整備され、現在の都市の骨格が形成され、近代的な市街地へと変容していった。戦災からの復興とともに近代都市への躍進を目指し、昭和21年に隣接する1市3町3村と、また、平成18年（2006年）には隣接する旧神崎郡香寺町・旧飾磨郡夢前町・旧宍粟郡安富町・旧飾磨郡家島町の4町と合併し、新しい姫路市が誕生し、今日に至っている。

姫路市の地形は、市域の北部に中国山脈から連なる不連続性山地で占められており、増位山・広嶺山・書写山・雪彦山などの山々が連なり、中国山地を水源とする市川・夢前川・揖保川等の河川が南流し、河川により形成された沖積平野に市街地が形成されている。市域の南部は瀬戸内海に面し、瀬戸内海には家島諸島が位置している。

姫路市内の山地・丘陵部の地質は、流紋岩・火砕岩・花崗岩からなる火成岩が占めており、北部山地は流紋岩・閃岩質砂岩・凝灰質砂岩など酸性火山岩地層からなり、中生代白亜紀（約1億4千万年前～6千5百万年前）に属する。

平野部は沖積層と大阪層群からなり、沖積層は主として完新世（約180万年前以降）に属する地層で、河川沿いの低地は主として礫・砂からなり、下流に向かうほど泥・砂が多くなっている。大阪層群は主として鮮新世（約530万年前～180万年前）から更新世（約180万年前～1万年前）に属する地層で、市東北部の市川沿いの地域や東部の段丘に一部存在する。

竹の前遺跡が存在するのは姫路市の平野部、特別史跡姫路城の南南西約3kmの地点で、遺跡の北側～西側には船場川、遺跡の東約2kmには市川、西約3.5kmには夢前川が南流している。市川は兵庫県で第2位の流域延長を有する二級河川であり、兵庫県中部の朝来市生野町の三国岳（標高855m）を源とし、その名称は播磨国府の市（飾磨の市）によるといわれている。船場川は、姫路城北東の姫路市保城の飾磨井堰で市川から分かれ、市川の西側を南流するが、姫路城以南では市川との間に外堀川が南流している。

船場川は現在、市川と比較して小規模な河川であるが、古代には市川の主流であるとされ、姫路城主池田輝政が姫路城下を水害から守るために瀬替をおこなったために、現在の市川の流れになったとされている。また、船場川も池田輝政により姫路城の堀に沿った船場川を水運などに利用できると同時に、防御にも活用しようと河川改修が行われた。なお、船場川は江戸時代には妹背川または三和川と呼ばれていた。

第1図をみれば、市川と夢前川に挟まれた地域のうち、海岸付近を除くと、西半部には遺跡が数多く存在するが、三宅遺跡（43）が最も東部にあり、市川西岸付近にあたる東半部にはほとんど遺跡が存在していない。遺跡がほとんど存在しない部分は市川の氾濫原にあたり、洪水などで冠水する率が高いことや軟弱地盤であったことなどが理由として考えられよう。ただし、北部では市之郷遺跡（32）や阿保遺跡第2地点（34）、北条遺跡（35）などが存在しているが、市川から船場川にかけての東西方向の高さでは、市之郷遺跡の部分が最高所であることがJR高架事業に伴う市之郷遺跡の発掘調査報告書で明らかにされており、市之郷遺跡や姫路城周辺遺跡の発掘調査結果からも河川により大きく分断された部分は発見されていない。

市川の流れは、これらの遺跡の南部分の市川左岸に仁寿山山塊が存在していることから、この山塊や北東側の丘陵に遮られたことにより西側に大きく蛇行していたものと推定され、遺跡がほとんど存在しない部分はその流域であったと推定される。ただし、このことは遺跡の存在位置から判断したものであり、市川の後世の氾濫によって遺跡がすでに削られてしまった結果であるかもしれないが、このことを前提にすれば、池田輝政がおこなった瀬替には、市川の蛇行部分であった姫路城南部の市川右岸の築堤や市川東岸を開削するなど、市川の蛇行部分を東側に移したものであったと推測される。

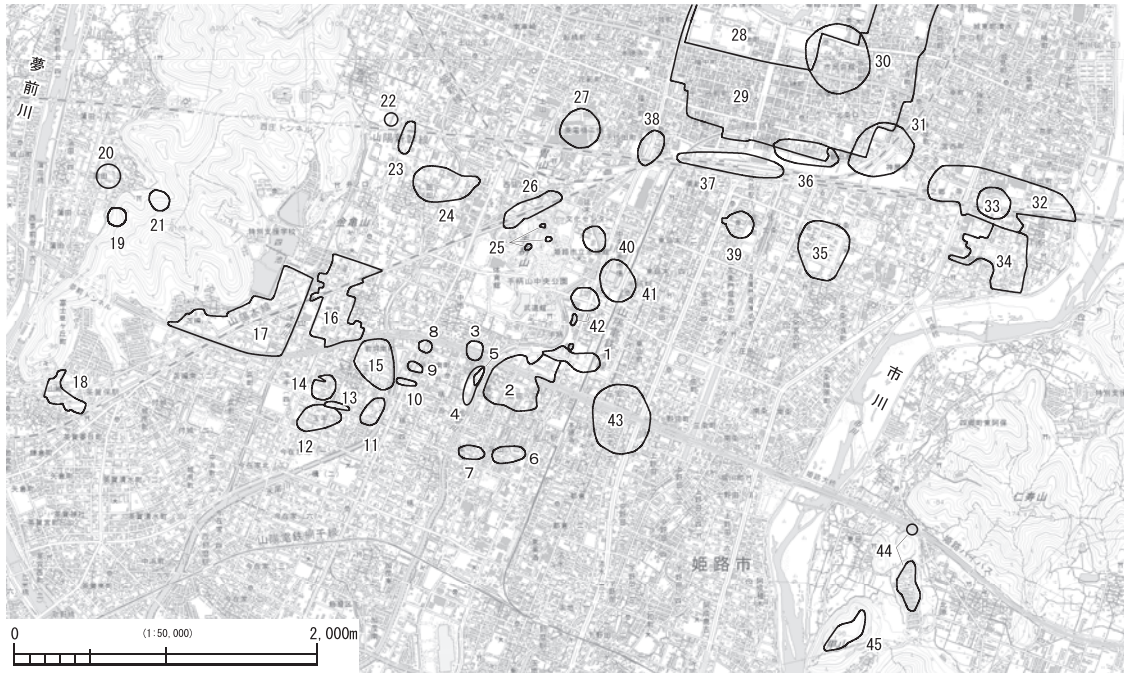
第2節 遺跡の歴史的環境

竹の前遺跡が位置する市川と夢前川に挟まれた姫路城以南の沖積平野部分には、縄文器時代以降の遺跡が数多く存在している。ここでは弥生時代以降の遺跡を取り上げ、竹の前遺跡の歴史的環境を述べる。ただし、この地域の情報量は膨大である上に断片的な情報も多く、遺漏が多いものとなることを断っておきたい。

竹の前遺跡（1）周辺の弥生時代前期の遺跡には、旧河道から土器が出土した豆田遺跡（16）や、西庄遺跡の名称で調査され、弥生時代前期～中期初頭の沼状遺構が検出された町田遺跡（23）がある。市之郷遺跡（32）では木棺墓が調査され、小山遺跡（42）では前期～後期の流路が調査された。ほかに、八反長遺跡（24）や千代田遺跡（27）、黒表遺跡（41）などで土器が出土している。

弥生時代中期に続く遺跡には前出の千代田遺跡・市之郷遺跡・小山遺跡・町田遺跡・黒表遺跡があるが、中期前葉には竹の前遺跡（1）や豊沢遺跡（39）が出現している。竹の前遺跡では流路から土器が出土した。豊沢遺跡では土坑が調査され、中期後半の竪穴住居跡や竪穴工房と推定される遺構や焼土塊が出土した廃棄土坑などが調査されている。また、西播磨では数が少ない磨製石包丁も出土し、中期末の円形住居跡や土坑・溝なども調査されている。中期中葉には兼田遺跡（44）の北側谷部分で土器が出土しており、中期後半には、東川遺跡（11）・大石橋遺跡（15）、石ツミ遺跡（22）、橋詰遺跡（40）が新たに加わり、丘陵上の甲山遺跡（45）でも土器や石器が採集されている。石ツミ遺跡では中期後半～後期の溝や詳細時期不明であるが木棺墓も発見され、そのうちの1基は長さ0.7mで被葬者が子供であったことがうかがえる。中期の遺跡では畑田遺跡（2）で竪穴住居跡や土壇墓と推定される遺構などが調査され、蒲田山本遺跡（20）・山所遺跡（21）では土器が採集されている。市之郷遺跡（32）では竪穴住居跡、小山遺跡（42）では旧河道がそれぞれ調査され、豆腐町遺跡（37）や南畝町遺跡（38）も弥生中期からの遺跡で河道や土坑が検出されている。また、竹の前遺跡でも中期後半の土坑が調査されている。

後期前葉には竹の前遺跡や畑田遺跡で竪穴住居跡や流路が検出されているが、他には権現遺跡（10）や



第1図 周辺の遺跡分布図

第1表 遺跡名表

1 竹の前遺跡	13 出手遺跡	25 手柄山北丘遺跡	37 豆腐町遺跡
2 畑田遺跡	14 鹿谷道遺跡	26 山崎遺跡	38 南畝町遺跡
3 長越遺跡	15 大石橋遺跡	27 千代田遺跡	39 豊沢遺跡
4 飯田遺跡	16 豆田遺跡	28 姫路城	40 橋詰遺跡
5 湯田遺跡	17 池ノ下遺跡	29 姫路城城下町跡	41 黒表遺跡
6 善慶田遺跡	18 村東遺跡	30 本町遺跡	42 小山遺跡
7 飯田カスカエ遺跡	19 山所廃寺	31 神屋町遺跡	43 三宅遺跡
8 西久保遺跡	20 蒲田山本遺跡	32 市之郷遺跡	44 兼田遺跡
9 中地天神遺跡	21 山所遺跡	33 市之郷廃寺	45 甲山遺跡
10 権現遺跡	22 石ツミ遺跡	34 阿保遺跡第2地点	
11 東川遺跡	23 町田遺跡	35 北条遺跡	
12 横枕遺跡	24 八反長遺跡	36 駅前町遺跡	

手柄山北丘遺跡（25）で竪穴住居跡が検出されている程度で、遺跡数は少ない。権現遺跡では詳細時期不明であるが、溝から工具・農具・武器・食器など多数の木製品が出土している。手柄山北丘遺跡では弥生後期の竪穴住居跡と数基の箱式石棺・壺棺の可能性が高い遺構が発見され、石棺付近で内行花文鏡の鏡片研磨鏡が出土している。後期後葉には兼田遺跡（44）の兼田山丘陵上で竪穴住居跡、北側谷中では後期後葉～古墳時代の土器が溝から出土している。ほかに後期の土器が出土した遺跡には豆田遺跡（16）・豊沢遺跡（39）・黒表遺跡（41）・三宅遺跡（43）などがあり、豊沢遺跡では貨泉も出土している。また、市之郷遺跡（32）や小山遺跡（42）では竪穴住居跡も調査されている。

続く庄内期には、竹の前遺跡で流路から庄内期～布留期の土器が出土し、畑田遺跡（2）では後期後半～庄内期の大型円形周溝墓や竪穴住居跡・溝・土坑などが調査され、銅鏃が出土している。長越遺跡（3）では姫路バイパス建設に伴う調査で竪穴住居跡15棟をはじめ、大溝から多量の土器が出土し、そ

の岸から銅鏡・銅鏃なども出土した。また、飯田遺跡（4）は湯田遺跡（5）の範囲を含み、長越遺跡の続きであるとの見解もあり、庄内期～布留期の竪穴住居跡多数が調査されている。善慶田遺跡（6）では弥生時代後期～庄内期の土坑が調査され、飯田カスカエ遺跡（7）では土坑から庄内期の土器がまとまって出土しており、他地域系の土器が含まれている。この時期には長越遺跡や飯田遺跡などでも山陰系・吉備系・四国系・北近畿系など他地域系土器が含まれ、豆田遺跡（16）では庄内期の円形土坑から四国系土器が出土している。玉手遺跡群の東川遺跡（11）は、大井川第6地点遺跡の名称で調査された際に溝から中期後葉～庄内期の土器とともに銅鐸片や砥石・鞆羽口などが出土している。池ノ下遺跡（17）では竪穴住居跡や溝が調査され溝から他地域系を含む多量の庄内期の土器が出土している。また、豊沢遺跡（39）でも庄内期～布留期の竪穴住居跡が調査されている。なお、橋詰遺跡の庄内期の土器は学史に残るものである。

続く古墳時代中期以降では、竹の前遺跡（1）では流路などから少量の土器が出土したにとどまるが、畑田遺跡（2）では中期～後期の竪穴住居跡や井戸が調査され、流路から土器が出土しており、渡来系遺物も含まれている。また、市之郷遺跡（32）でも数多くの竪穴住居跡などとともに渡来系遺物が多く出土している。なお、池ノ下遺跡でも古墳時代の遺構が調査されている。

奈良時代では竹の前遺跡で遺構・遺物が発見されず、畑田遺跡でも発見されていないようである。寺跡としては、7世紀後葉に遡る市之郷廃寺（33）や奈良時代の山所廃寺（19）が竹の前遺跡から遠く離れた位置に所在しており、市之郷廃寺では金堂と推定される仏堂跡が検出されたほか、削平された塔の存在も推定され、築地跡も検出されたことから、位置関係から四天王寺式伽藍配置が想定されている。山所廃寺では唐草文の軒丸瓦や瓦搏が出土している。竹の前遺跡の南東に所在する三宅遺跡（43）では、地名から『播磨国風土記』の「飭磨御宅（しかまのみやけ）」の遺称地として「ミヤケ」の存在が推定されていたが、調査により奈良時代～平安時代の溝・土坑・瓦溜りなどから重弧文軒平瓦をはじめ多種多数の奈良時代を中心とした瓦が出土した。また、搏や石燈籠の破片なども出土したことから、寺跡と推定されるようになっている。

一方、姫路城（28）の南東部にある本町遺跡（30）は播磨国府跡中枢部の国衙跡と推定され、掘立柱建物跡や井戸などが発見されている。また、北条遺跡（35）や豆腐町遺跡（37）では奈良時代～平安時代の掘立柱建物跡や井戸などが発見され、豆腐町遺跡では道路跡や漆紙文書などに加え、漆工房関連遺物や鍛冶関係遺物も出土していることから、国庁域内に存在した国府工房に関係する遺跡とみられる。

竹の前遺跡に近い長越遺跡（3）では奈良時代の墨書土器や緑釉陶器が出土しており、池ノ下遺跡（17）では唐三彩の破片も出土している。

平安時代から中世にかけての掘立柱建物跡は竹の前遺跡をはじめ畑田遺跡（2）、権現遺跡（10）、横枕遺跡（12）、出手遺跡（13）、鹿谷道遺跡（14）、大石橋遺跡（15）、豆田遺跡（16）、池ノ下遺跡（17）、村東遺跡（18）、八反長遺跡（24）などで検出されており、竹の前遺跡や鹿谷道遺跡・村東遺跡では井戸・木棺墓、出手遺跡でも井戸、豆田遺跡では木棺墓・土壙墓もそれぞれ検出されている。鹿谷道遺跡では鍛冶関係遺物も出土しており、蒲田山本遺跡（20）では青磁碗・白磁壺なども出土している。

主要参考文献

『兵庫の地質』兵庫県 1996年

『姫路市史』第7巻下 考古資料編 姫路市 2010年

『兵庫の古代遺跡』下 神戸新聞総合印刷 近刊予定

第2章 調査の経緯・経過と体制

第1節 発掘調査に至る経緯と経過

竹の前遺跡は姫路市手柄の二級河川船場川左岸に接して存在するが、船場川の洪水対策の一つとして船場川の川幅を広げるなどの、(二) 船場川水系船場川流域治水対策事業が実施されることになった。船場川河川改修工事の飯田工区(その6)は竹の前遺跡の範囲内にあたり、平成14年度の姫路市教育委員会による試掘調査の結果、工事範囲内(第19坪)に遺構が存在していることが確認されていた。なお、姫路市教育委員会では、今回の調査区の南側にあたる部分について、区画整理事業に伴って平成19～21年度にかけて区画道路部分を対象に発掘調査を実施し(図版1)、竹の前遺跡部分では弥生時代の自然流路や後期の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物跡などが検出されている。

今回、事業主体である姫路土木事務所が所属する中播磨県民センター長からの発掘調査依頼〔平成28年6月7日付け 中播(姫土)第1166号〕を受けた兵庫県教育委員会が、一部分は直接執行の形態で調査をおこなったが、(公財)兵庫県まちづくり技術センターに委託して発掘調査を実施した。また、すでに工事が開始されており、工事工程に遅れが出ないようにするため、発掘調査は工事工程に合わせて調査区を分割して西から順に実施し、順次工事業者に引き継がざるを得なかった(図版3)。本発掘調査の実施面積は合計2,614㎡であったが、工事工程に合わせた各調査区の面積と調査期間は次のとおりである。

1. 西端橋台区 平成28(2016)年6月20日～6月29日 121㎡

船場川を渡る歩道橋の橋台部分の発掘調査で、兵庫県立考古博物館による直接執行の形態をとった。

2. 西端区 平成28(2016)年9月27日～10月7日 316㎡

3. 西区 平成28(2016)年10月6日～11月14日 1,226㎡

4. 東区・東2区 平成28(2016)年11月14日～12月20日 889㎡

東区の流路がさらに東にのびることが判明したため、東2区を追加設定して同時に調査を実施した。

5. 東3区 平成29(2017)年1月5日～1月18日 62㎡

仮設道路の付け替え終了および耕土除去を待って、調査を実施した。

調査は各地区ともに、盛土や旧耕土・床土が存在しており、バックホウによって掘削・除去した。盛土や旧耕土・床土は最も厚い箇所約1.1m、最も薄い箇所約0.2m認められた。掘削土は、西端区および西区の調査時には東区の位置に、東区および東2区を調査する際には西区側に仮置きし、いずれも本体工事業者が搬出を行った。東3区では、調査区の北東側の事業用地内に集積した。なお、後世の削平により遺物包含層はほとんど失われており、盛土や旧耕土・床土の直下に遺構面を確認した。

調査区全体については電子平板による平面図の作成および調査区壁面の土層断面実測を行い、個別の遺構についてはそれぞれ必要に応じて、平面・断面の実測および写真撮影を実施した。また、ポールやドローンを用いた写真測量についても適宜行い、図面を作成した。なお、図面の作成は主に遺構実測補助員が行った。全景写真については仮設足場の設置および高所作業車などを使用して撮影した。空中写真測量については株式会社日建技術コンサルタントに委託して実施した。空中写真測量は西端区、西区、東区・東2区の計3回実施した。

調査成果の公開を図るため、12月15日(木)に記者発表を、18日(日)に現地説明会を行った。記者発表には新聞社5社の参加があり、現地説明会には地元住民を中心として106名の参加者があった。

第2節 出土品整理作業の経過と体制

竹の前遺跡の出土品整理作業は、平成29（2017）年度から開始し、平成31・令和元（2019）年度まで実施した。出土品整理作業は中播磨県民センター長から兵庫県教育委員会への依頼によるもので、年度ごとの依頼文書番号は以下のとおりである。

平成29（2017）年度 平成29年6月1日付け中播（姫土）第1126号

平成30（2018）年度 平成30年3月2日付け中播（姫土）第1821号

平成31・令和元（2019）年度 平成31年4月1日付け中播（姫土）第1141号

兵庫県教育委員会は出土品整理作業を公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターに委託して、兵庫県立考古博物館で実施した。年度ごとの整理作業工程は以下のとおりである。

平成29（2017）年度：水洗い、ネーミング、接合・補強、平成30（2018）年度：実測・拓本、復元、写真撮影、写真整理、図面補正、トレース、分析鑑定、木器・金属器保存処理、平成31・令和元（2019）年度：レイアウト、報告書印刷

ネーミングは、土器の出土遺構名や出土位置などを出土単位ごとに台帳に整理した番号を土器に書き込む作業で、接合・補強は、土器片を接合し、欠損している部分をモルタルで補強する作業である。また、土器等の実測・拓本後にもモルタルを使用して土器の欠損部分の復元作業を行い、遺物写真撮影を実施した。遺物写真は出土遺構・出土場所や種類ごとに整理を行った。また、現場で作成した実測図等について補足・修正を実施した。金属器保存処理は出土状態での形状観察、エックス線写真撮影、脱塩作業を実施し、錆取り作業の後、樹脂含浸作業を実施した。分析鑑定は、出土した石器の材質の産地同定と石棺片と思われる石製品の石材鑑定、出土木製品の樹種について、実施した。また、発掘調査現地で作成した実測図や測量図、出土品整理作業により実施した遺物実測図のトレースを行った。

平成31・令和元年度には、報告書原稿執筆を行い、トレースした遺構・遺物の図面や、調査で撮影した写真・空中写真および、空中写真測量図・遺物写真のレイアウト作業を経て、報告書印刷を実施した。

3年間を通じた出土品整理作業の体制は下記のとおりである。

事業主体 兵庫県教育委員会

実施場所 兵庫県立考古博物館（加古郡播磨町大中1丁目1番1号）

整理担当 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター

整理担当職員 （工程管理） 菱田淳子 深江英憲

（作業指示） 岸本一宏

（木器・金属器保存処理） 大本朋弥

整理作業担当嘱託員等

（実測・トレース・レイアウト） 前田陽子 古谷章子 森本貴子 八木和子

（ネーミング・接合補強・復元） 荻野麻衣 小野潤子 今村直子 門田諭佳 小林礼子

菅生真理子 中井 翠 長井香苗 七尾宏美 沼田真奈美

（木器・金属器保存処理） 大前篤子 桂 昭子 児玉昌子 香山玲子

遺物写真撮影 国際文化財株式会社 横山 亮

分析鑑定 株式会社パレオ・ラボ 竹原弘展 藤根 久 米田恭子

パリノ・サーヴェイ株式会社 赤堀岳人 斉藤崇人 興津昌宏

第3章 調査の結果

第1節 遺構

本発掘調査の結果、調査区のほぼ全域にわたって柱穴・溝等を検出した（図版3、写真図版1～5）。ただし、東区の北東半および東2区はほぼ全面が流路となっており、遺構の分布は少ない。遺構面は黄褐色系の粘質土で、西区東端部から東1、2区にかけては砂質が強まる。遺構面はほぼ平坦で、標高は5.0m～5.3mである。遺構面以下は拳大から人頭大の礫を多く含む礫層となり、河川堆積を示す。

遺構面の上には主として耕土・床土があり（図版4～8、写真図版6）、調査区南壁の2008年度調査区付近から東側に旧耕土上の埋立盛土層が認められた。なお、遺構面には少量の縄文土器を含んでいた。

検出した遺構は竪穴住居跡2棟、柱穴約350基、木棺墓2基、井戸1基、溝11条、流路2条があり、遺構の時期は大きく分けて、弥生時代と古墳時代、平安時代末の3時期に分類できるが、すべて同一面に検出した。また、現船場川沿いには攪乱が多く、西端区・西区では流路跡のような形態をしていた。

1. 弥生時代～古墳時代

検出した弥生時代の遺構には、竪穴住居跡2棟（SH1・2）、溝3条（SD164・202・340）があり、弥生時代～古墳時代では流路（SR308）がある。また、溝（SD176）も古墳時代の可能性がある。

（1）竪穴住居跡

① SH1（図版10・11、写真図版7～9）

検出状況 西区東部の南端壁ぎわで検出したが、さらに南にのびる。削平により東側周壁溝のみ遺存していたが、床面まで削平を受けていたと考えられ、住居跡内の埋土は認められなかった。

形状・規模 東側周壁溝を基準とした推定復元では直径6.4mの円形であろう。

屋内施設 周壁溝のほかに中央土坑SK231とその南西脇に炭土坑、柱穴を検出した。SK231は径75cm程度の円形に近く、検出面からの深さ約20cmの部分から、さらに中央の径30cmの部分で30cmほど深く掘り込んでいた。埋土の3層～6層には炭化物・焼土を含んでいた。位置としては土坑の中心が住居跡の中心にあたる。炭土坑は、検出時に底面の炭化層が楕円形の輪状に確認され、土坑底面に炭化物と焼土が薄い層状に堆積していた。埋土の状況から、2基の土坑がそれぞれ単独で床面に存在していたのではなく、検出面から12cmの深さ部分でつながっていたと判断できた。これらの土坑は「イチマル土坑」とも呼称され、弥生時代後期の播磨地域を中心に数多く認められる、炭土坑が付属した中央土坑である。炭土坑の底は赤化しておらず、底が継続的に高温であったとは考えられないが、焼土粒が認められた。

周壁溝は幅約20cmで、検出面からの深さは10cmで、底は丸い。柱穴のうちSP193、SP194、SP296、SP298・SP299が主柱穴と思われるが、深さは一定していない。調査区外にはもう1つの柱穴が推定され、5本柱であった可能性が高い。なお、SP194の柱痕底には塊石の礎板石が認められた。

遺物出土状況 SK231の埋土から壺・脚部（1～5）と敲石・磨石のS16が出土し、SK231上面から8・9が出土した。柱穴ではSP194の上面から6、SP297の掘形から7が出土している。また、SP194上面出土の須恵器壺10は上層からの混入であろう。なお、SP194・SP197・SP295・SP296・SP297の柱穴掘形から弥生土器の小片や細片が出土している。

時期 出土土器から、弥生時代後期前葉と判断される。

② SH 2 (図版 12・13、写真図版 10～11)

検出状況 東区西部北寄りで見出した。SD 340 が埋まった後に構築されている。周壁はかなり削平され西部では床面まで削平がおよんでいた。また、南東側はSR 308 により一部削られていた。

形状・規模 楕円形ないし円形と思われ、直径 5.1 m～5.4 m で、SH 1 よりも小規模である。

堆積状況 周壁溝は大きく削平されていたが、床面部分では厚さ約 5 cm の埋土が残存していた。

屋内施設 幅 15 cm 前後、深さ 10 cm 弱の周壁溝で囲まれた内部では、北西側の削平された部分を除いた床面残存部分のほぼ全体に貼床が認められた。住居跡の中央に 2 基の土坑 (SK 363・SK 364) が存在しているが、中央土坑となるのは SK 363 で、平面は長径 86 cm、短径 56 cm の楕円形を呈する。深さは 36 cm である。埋土には炭化物を含んでいた。中央土坑の南西側にある SK 364 は床面からの深さ 10 cm と浅いもので、埋土には灰層があり、炭化物・焼土を多く含んでいた。後世の攪乱坑があるが、概ね平面楕円形を呈し、長径 1.3 m、短径 65 cm ほどで、中央土坑よりも平面規模は大きい。SH 1 と同様に、本住居跡においても炭土坑が付設された中央土坑となっていた。なお、SK 363 は住居跡の中央に位置している。

柱穴は 4 箇所合計 7 個検出したが、支柱穴は 4 個である。SP 354 以外の 3 箇所では柱穴が 2 個ずつ認められることから、柱の建て替えがおこなわれたと判断できる。SP 322 と SP 355 の柱痕底には礎板石が入れられており、SP 322 では柱の根固め石も認められた。

遺物出土状況 住居跡内西部の埋土から 11 の甕片、中央土坑埋土から甕 12 と壺 14 の破片がそれぞれ出土し、SP 362 の柱痕から 13 の甕片が出土した。

時期 出土土器から、SH 1 と同時期の弥生後期前葉と判断している。

(2) 溝

① SD 202 (図版 14～18、写真図版 12～19)

検出状況 調査区中央部東寄りで見出した南北方向の南流する溝で、調査区の西区と東区にまたがって存在したため、南部と北部に分けて調査を実施した。姫路市教育委員会による 2009 年度調査区の SK 2 にあたり、2007 年度の畑田遺跡 20 次調査の SR 1 につながる可能性がある。

堆積状況 溝の埋土は大きく二つにまとめることができる。溝内側部に堆積した比較的明るい色の土壌化層 (下層) と、それを切るようにして溝中央部に堆積し、腐植が進んだ暗い色を呈する上層である。

形状・規模 調査区を横断するかたちで北北東から南南西に向かって緩やかな S 字を描いており、延長約 22 m を調査したが、北東端は攪乱によって途切れている。検出面からの深さは 50 cm 前後で、溝底の高低差は北東端が南西端よりも約 30 cm 高い。溝は北半部では二段に深くなるが、南半部では緩やかな一段に近い。下層堆積前の溝は上層のものより底幅が広く、溝肩との差が少ない。下層溝幅は 1.5 m～2.5 m、上層溝上端幅は 1.3 m 程度である。上層溝の底は下層溝底をえぐっているようにみえる部分があり、下層溝がある程度または完全に埋まった後に、上層溝を人為的に掘削あるいは上層溝の水が下層溝と同じ場所を流れたと判断できよう。

遺物出土状況 上層溝の下半からは大量の土器が列状をなして出土した。大部分の土器は底から約 15 cm 上の同一面上に位置しており、比較的短期間に捨てられたものと考えられる。また、自然礫も混じっており、特に南端に近い部分で顕著に認められた。土器に混じって白色粘土の塊もみられ、長径 35 cm、短径 30 cm で、厚さ 10 cm 程度の鏡餅形状のものが検出された。土器製作用の粘土であったと思われる。

出土遺物 図示できた土器は15～192で、壺・甕・高坏など180点近くにのぼる。

時期 弥生時代後期前葉の土器で、短期間に廃棄されたものと思われる。数メートルの距離で近接存在する住居跡2棟と同時期であることから、住居跡で使用されていた土器が廃棄されたと推定している。

② S D 164 (図版19～22、写真図版20～22)

検出状況 調査区中央部西寄りで検出した溝で、2008年度の調査でS D 02とされていたものの北東・南西の延長部分である。また、2007年度の畑田遺跡20次調査のS R 2と同一である可能性がある。

形状・規模 調査区を斜めに横断するかたちで北東から南西に直線的にのびるが、北東端付近では東寄りに緩やかなカーブを描いている。また、北東端では後世の攪乱により形状がかなり乱れていた。溝幅は1.5m～2.3mで、南西側が比較的広い。溝底は丸みがあり、検出面からの深さは北東部で65cm、南西部では80cmあり、底の標高も北端近くよりも南端付近が17cmほど低くなっている。

堆積状況 埋土は比較的単純で、溝下半は灰色ないし黄灰色系、上半はやや腐食が進み、南部では褐灰色系、北部ではやや淡い色調を呈していた。

遺物出土状況 南端付近で第5層を下面にして鉢と思われる脚部216が出土した。北部では板石および15cm前後の礫を長さ約4.7mにわたって検出した。板石および垂角礫のほとんどが第3層を下面にしてしたが、一部下層(第7層)からも検出された。板石はすべて凝灰岩で、最大のもので長さ75cm、幅45cm、厚さ10cm～15cmを測るが、他の板石も含めて加工痕は認められなかった。これらの用途は不明である。

出土遺物 図示した193～221の土器および222の瓦片が出土した。大半が北部から出土しており、南部からは194・195と吉備系細頸壺体部の202～204、脚部の216の合計6点が出土したに過ぎない。

時期 出土土器から弥生後期前葉に埋没したと判断される。

③ S D 340 (図版23～25、写真図版23～25)

検出状況 東区西端付近で、S D 202の東側で検出した。方向はS D 202に近い。

形状・規模 検出長は約26mであるが、南西端はS R 308、北東端は川に沿った攪乱により途切れている。また、溝が埋まった後にS H 2が重複して建てられていた。溝幅は北東部で狭く1.0m程度、南西部では約2.1mと広がっており、溝底の標高も10cm程度とわずかであるが、南西部が北東部よりも低くなっていることから、北東から南西に流れていたと考えられる。検出面からの深さは北東部・南西部ともに約30cmであるが、S H 2の上部が削平されていることから、もとはより深かったと判断できる。

堆積状況 上層は淡い灰黄色や褐灰色および、にぶい黄灰色の埋土で、下層はやや暗色を呈する灰黄褐色やにぶい黄褐色の埋土であるが、南西部ではその間に砂層を挟んでいた。

遺物出土状況 北東端付近で埋土の最上層に含まれるかたちで土器が比較的まとまって出土した部分がある。また、S H 2の南西側でサヌカイト剥片が土器片に混じって大量に出土した。幅1.5m、長さ約4.7mの範囲に剥片が散らばっており、そのなかでも北東部の幅1.2m、長さ2mの範囲に集中して認められた。1点のみ未成品と判断できたものがある。剥片はほぼすべてが第1層に含まれており、剥片の下端は北西部が高い位置、南東部では低くなっていたことに加えて、遺構面を形成する土層中からも出土したことから、溝ができる以前の地表面に存在したものが、堆積が進んだことで埋没し、その後溝が形成された際に流出したものと考えられる。

出土遺物 223～225は北東端付近、サヌカイト剥片集中部からは226、S H 2重複部分からは227がそれぞれ出土した。サヌカイト剥片集中部出土の未成品はS 13、埋土出土の石器はS 9・S 10に図示した。

時期 226や227は中期初頭と思われ、ほかにも中期初頭の体部片が多く出土したことから、溝の埋没

は中期頃の可能性があるが、北東端では後期前葉にも窪みとして残っていた可能性がある。

④ S D 176 (図版 29、写真図版 35)

検出状況 調査区西部の北端付近で検出した。南北方向に近い溝で、S D 177 が横断するかたちで重複し、北端はS R 144 とも重複し、ともにS D 176 が切られている。

形状・規模 検出した長さは約5 m、幅1.5 m前後で、検出面からの深さは約20 cmである。

出土遺物 S D 177 よりも北側の埋土から231の須恵器高坏、南側の埋土から出土した須恵器蓋230はS D 177 出土須恵器と接合した。

時期 確証はないが、古墳時代後期に埋没した可能性がある。

(3) 河道 (流路)

① S R 308 (図版 8・26・27・30、写真図版 26～29・52)

検出状況 東区・東2区で検出した北東-南西方向の自然流路で、姫路市教委による2009年度4次調査のS R 2へと続く。東2区では流路の南肩が調査区内に存在せず、後世の流路により削られている。

形状・規模 幅約9～10.5 m、検出面からの深さ約1.4 mで、東区での検出延長は約57.5 mである。流路底には所々窪みや高まりが存在するが、概して溝底の高さは北東端が南西端よりも35 cm程度高いことから、南西方向に流れていたことになる。東2区では形状・規模は不明であるが、長さ約14 mを調査した。

堆積状況 埋土は大きく上層・中層・下層の3層に分けることができ、遺物の取り上げもこの分層でおこなった。上層は灰黄色から褐灰色の砂質土で、細礫～中礫を多く含む。中層は土壤化が進んでおり、灰黄褐色から暗灰黄色を呈する。土質は上層よりも粒度が細かく、シルト質である。下層はグライ化が進み、灰色から灰黄色を呈する。シルト混じりの砂質土層である。東2区での流路は東区とは異なり、底の形状も歪となり、埋土のほぼ全部である第7～第12層に平安時代までの遺物を包含する。

遺物出土状況 中層および下層は土器を多く含んでおり、下層からは弥生時代中期から後期の土器が出土した。中央部の溝底には木杭を打ち込んでいる状況も確認できた。また、最上層から須恵器片が出土することから、長期間流路としての機能を維持していたことがわかる。

出土遺物 東区では232～398の土器167点と、S 2・S 4～S 8・S 11・S 12・S 14・S 15のサヌカイト製石鏃や楔形石器・スクレイパーなど、木製品ではW 10の天秤棒のほか木杭(W 11・W 12)が出土した。

東2区からは399～417の弥生土器のほか、青磁碗や瓦・土錘・瓶栓が第22層とその上面から出土した。

時期 流路は弥生時代中期初頭には存在していた可能性があるが、溝底を削りながら何度も流れていたようであることから、断言はできない。また、S H 2の一部を削っていることから、古墳時代後期までは存続していたようである。なお、平安時代末頃とみられる柱穴に切られることから、遅くとも中世初頭までには埋没していたと考えられる。ただし、東2区では底から青磁碗や瓶栓が出土していることから、この部分については、中世～近・現代にも流れによる攪乱を受けていたと推定される。

2. 平安時代以降

平安時代末以降と判断できた遺構には、掘立柱建物跡8棟(S B 1～3・5～9)、木棺墓2基(S X 187・270)、井戸1基(S E 182)などがある。

(1) 掘立柱建物跡

① S B 1 (図版 31～33、写真図版 32・33)

検出状況 西端区で検出した建物跡のうち南側のもので、南端は調査区外に続く可能性もある。

規模・形状 総柱建物跡で、調査区内では3間×3間分を検出した。規模は南北6.90m×東西6.13m～6.30mで、柱間が長い南北方向が桁、東西方向が梁方向と思われる。桁方向はN10°Eで、3間分の南端は調査区南壁に接しているため、さらに南側に桁間がのびる可能性も残る。S P 049やS P 067など位置がややずれているものもある。柱痕は直径15cm前後、掘形は直径30cm程度の円形のものが多い。

出土遺物 S P 053の柱痕から須恵器埴片の422、S P 067の柱痕から423の瓦器埴片が出土し、図示できなかったが、他の多くの柱穴の柱痕や掘形から土師器皿などの細片が出土した。

時期 出土土器およびS B 2との関係から平安時代末(12世紀後半)と考えられる。

② S B 2 (図版 34～36、写真図版 32・34)

検出状況 西端区北寄りでS B 1とは約1.6m離れた北側に位置し、S B 1とは1m前後東にずれる。

規模・形状 3間四方の総柱建物跡で、南北6.22m～6.47m、東西6.55m～6.70mで、東西方向が少し長くなっている。東西方向の柱心間は西端で2.55m程度、中央で2.30m程度、東端で1.60m～1.90mと東側が徐々に狭くなっている。南北方向の柱心間は1.93m～2.25mで中央が10cm程度広い傾向がある。東西が桁方向の可能性があり、その方向はE10°Sで、S B 1とは梁桁方向が異なるが同一方向である。

柱穴掘形は径25cm前後の円形、柱痕も円形で、径13cm前後が多い。また、S P 057やS P 089など位置がずれているものがあり、間柱と思われるような小規模の柱穴も3箇所で見られる。なお、柱痕埋土上半部で礫を検出したものがいくつかあり、柱を抜いた穴に詰めたものと想定される。

出土遺物 須恵器埴424・425はS P 022柱痕とS P 054の柱痕底から出土しており、S P 076の柱痕から土師器甕426～428、S P 063の柱痕からは土師器皿429が出土した。また、それ以外の柱痕や掘形から土師器甕・皿の細片、須恵器埴や坏・鉢の細片のほか、S P 057上面から瓦の細片も出土している。

時期 須恵器埴の破片が大きいことから、土器が示す時期の平安時代末(12世紀後半)であろう。

③ S B 3 (図版 37・38、写真図版 35・36)

検出状況 西区西端付近に位置し、S B 4廃絶後であるが、S B 9との先後関係は不明である。

規模・形状 2間四方の建物跡で、東西5.16m～5.40m、南4.06m～4.28mで、桁方向はE15°Sになる。桁方向の柱心間は2.38m～2.86m、梁間の柱心間は1.90m～2.18mである。掘形は直径20cm～30cmの円形で、柱痕も丸く直径8cm～15cmである。

出土遺物 430の須恵器埴口縁部片はS P 143の柱痕出土である。他にも図化できなかったが、柱痕や掘形から土師器皿などの細片や須恵器埴や坏などの細片が出土している。

時期 柱穴より出土した土器から、平安時代末(12世紀後半)と考えられる。

④ S B 4 (図版 39・40、写真図版 35・37・38)

検出状況 西区西部でS B 3・S B 9と重複して検出した。柱穴の重複から本建物跡が最も古い。

規模・形状 2間×3間の側柱建物跡で、東西に近い方向の規模は6.50m・6.88m、南北に近い方向は4.36m・4.64mであることから、主軸の桁方向はN61°Eとなる。桁方向中央の柱心間は2.60m・2.84m、両端の柱心間は1.72m～2.04mで、中央部の柱間が広がっている。梁方向では1.84m～2.50mである。柱痕は径15cm～20cm程度の円形で、柱穴掘形は直径約40cm～50cmと他の建物跡より大きく、

長径70cmの楕円形のものもある。SB3の柱穴によりSP142が、SB9の柱穴によりSP145が切られている。

出土遺物 図示できた遺物はないが、SP145・SP149・SP150・SP151・SP156の掘形から土師器皿や須恵器甕の小片や細片が出土している。

時期 時期を決定する遺物が出土しなかったため、時期は不明であるが、SB3・SB9の両建物跡よりも先行する。平安時代後期あたりであろうか。建物の方向から、さらに遡る可能性も捨てきれない。

⑤ SB9 (図版41～43、写真図版35・38・39)

検出状況 西区西部でSB3・SB4と重複状態で検出したが、柱穴は整然と揃ってはいない。

規模・形状 位置ずれや検出されなかった柱穴が多くあるが、4間四方の建物跡であったと想定している。東西規模は約9.10m、南北規模約8.40mで、東西にやや長い。長軸方向はE8°Sあたりと思われる。柱穴の掘形や柱痕は他の平安時代末頃のものと同様の小規模なものである。

出土遺物 SP146の柱痕から土師器埴432・433と土師器皿434が出土し、SP124の柱痕から土師器皿または埴の435、SP130からは瓦質三足436、SP172の柱痕から須恵器埴437、SP234の柱痕上端から瓦器埴438、SP169の柱痕からは瓦器皿439と鎌のような鉄器片M2がそれぞれ出土した。

時期 出土遺物から鎌倉時代前期の可能性はある。

⑥ SB6 (図版49、写真図版48)

検出状況 西区の中央部東寄りの南部で検出した。2008年度調査時にSB01とされていたものである。

規模・形状 梁方向2間、桁方向3間ないし4間の側柱建物跡で、今回検出した桁方向はN8°Wとなっている。桁方向の規模は西側で8.60m、東側では9.10m、梁方向の規模は北側で3.90m、南側で3.66mである。梁方向の柱心間は1.74mと1.80mである。攪乱等のため検出できなかった柱穴がある。掘形は直径30cm前後の円形で、柱痕も円形で直径15cm前後である。

出土遺物 柱穴内から遺物は出土しなかった。

時期 前回の報告では、実年代は不明であるが、中世前半とされている。

⑦ SB5 (図版50・51、写真図版47・48)

検出状況 西区東部の北寄り検出した。攪乱により多くが失われているうえに柱穴の並びも歪であることから掘立柱建物跡とするには躊躇されるが、一応SB5として報告する。

規模・形状 東西2間ないし3間、南北2間以上の総柱建物跡で、2間四方分を検出した。規模は南北3.52m、東西約3.64mで、柱心間は東西約1.50m～2.22mとばらつきが大きい、南北は1.48m～1.80mと比較的揃っている。東西軸と思われる方向はE5°Sになる。柱穴掘形は径30cm前後の円形、柱痕も円形で、直径15cm～20cmである。礎板石がやや多く認められ、柱の沈み込み防止を必要とする性格の建物であったことがわかる。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかったが、SP205とSP292の掘形から土師器細片、SP207の柱痕からは弥生土器の細片が出土している。

時期 時期は決定できないが、柱穴の規模などから平安時代後期～鎌倉時代前期と推定している。

⑧ SB7 (図版52・53、写真図版48)

検出状況 西区東端に位置し、SD202の西隣で検出した。

規模・形状 2間四方の側柱建物跡で、南北規模は4.06m・4.30m、東西規模は4.40m・4.86mと東西方向に長いやや歪んでいる。東西軸はE18°～20°S方向で、東西方向の柱心間は北側で2.14m・

2.60 m、南側で2.16 mとなっている。南北方向の柱心間は北側が2.08 m・2.22 m、南側が1.86 m・1.90 mで、北半分の柱間がやや広い。柱穴掘形は直径20 cm～35 cmの円形、柱痕は10 cm～15 cmの円形で、他の建物跡よりもやや小さめである。礎板および礎板石は認められなかった。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかったが、S P 201の柱痕から土師器皿の小片が出土している。

時期 時期の判断は難しいが、柱穴の規模や建物の方向から鎌倉時代の可能性がある。

⑨ S B 8 (図版55～57、写真図版49・50)

検出状況 東3区で検出した。姫路市教委による第2次調査(2007年度)で検出されていた掘立柱建物跡S B 3の北西隅部分にあたる。

規模・形状 南北5間以上で11.4 m以上、東西3間で北端では9.08 mの規模で、以前の数値と大きな差はない。ただし、今回の調査ではS D 307と重複した部分の柱穴は溝の方が新しく、柱穴が残っていなかった点が異なる。S P 366とS P 372の柱心間は2.20 mで、柱痕はともに径16 cmの円形、掘形は径31 cmの円形と31×24 cmの楕円形である。西側には約50 cmの距離を置いて長さ2.45 mで3間の塀あるいは柵が存在していた。建物跡と方向が異なるため建物に伴うものであったかどうかは不明である。柱心間は70 cmと90 cmで中央がやや広いものの、概して狭い。掘形は直径20 cm～25 cmの円形、柱痕も円形で直径10 cm～14 cmと他の建物跡との差は少ない。頑丈な構造が必要であったものと推察される。

出土遺物 S P 372の柱痕埋土から431の管状土錘が出土し、図示した。他にS P 366の掘形やS P 372柱痕・掘形から土師器小片が出土している。また、塀あるいは柵のS P 367柱痕からは弥生後期～古墳前期の甕体部小片、掘形からは弥生土器小片が出土した。

時期 時期を判断できる遺物が出土しなかったが、建物跡の方向がS B 1・2に近いことから、平安時代末頃(12世紀後半)の可能性がある。

(2) 柵列跡・塀跡

① S A 1 (図版58、写真図版51)

検出状況 S R 308西部の埋土上面で検出したS A 1～3のうち最も東側のものである。

規模・形状 2間分を検出し、長さ4.28 mを測る。柱心間は2.00 mと2.10 mで円形の掘形は径20 cmと径30 cmで、柱痕は直径12 cm～16 cm程度である。方向はN 25° Eである。

出土遺物 図示できた遺物はないが、S P 328柱痕から土師器細片、S P 329柱痕から須恵器壺小片と土師器細片、掘形からは弥生土器・土師器の小片が出土している。

時期 不明であるが、S R 308埋没後であることと柱穴埋土土層から、平安時代末頃の可能性がある。

② S A 2 (図版58)

検出状況 S R 308西部の埋土上面で検出したS A 1～3のうちの中央に位置するもので、S A 1とは約8 m、S A 3とは約3.6 mの間隔を置いて存在している。

規模・形状 N 20° E方向の3間分で、長さは6.0 m。柱心間は1.75 m～2.22 mで、掘形は直径30 cm程度～35 cmの円形で、柱痕は直径12 cm～17 cmの円形である。

出土遺物 図示できた遺物はないが、S P 335掘形およびS P 336柱痕から弥生後期～古墳前期の甕小片、S P 337柱痕から土師器小片が出土している。

時期 不明であるが、S R 308埋没後であることから、平安時代末頃(12世紀後半頃)の可能性がある。

③ S A 3 (図版 58)

検出状況 S R 308 西部の埋土上面で検出した S A 1～3 のうちの最も西側に位置するものである。

規模・形状 長さ約 4.1 m で 2 間分検出した。N 16° E 方向である。中央の柱穴がやや大きく掘形は長径約 30 cm、短径 24 cm の楕円形や直径 16 cm の円形のものもある。柱痕は径 16 cm のものが中央に残存していた。

出土遺物 中央の S P 339 の柱痕から 465 の土師器脚台部が出土し、S P 338 の柱痕から中期初頭の弥生土器片が出土している。

時期 不明であるが、S R 308 埋没後であることから、平安時代末頃（12 世紀後半頃）の可能性はある。

(3) 木棺墓

① S X 187 (図版 46、写真図版 42)

検出状況 西区西端中央北部で検出した。北側の半分以上が大規模な攪乱により破壊されていた。

規模・形状 長軸を南北にとる。残存長は墓壙が最大 82 cm、木棺部分は最長で 67 cm である。墓壙幅は 70 cm 程度、検出面からの深さは 27 cm であることから、後世に削平を受けたと判断できる。墓壙の平面は隅丸長方形である。木棺痕跡は幅 40 cm～45 cm、検出面までの残存高は 17 cm で、棺底の南西隅部分には棺と思われる木質がかろうじて遺存していた。針葉樹と思われる。腐朽した棺材は黄灰色から褐灰色のシルト～極細粒砂の粘質土として認められ、埋土土層断面では棺痕跡の厚さは最大 4 cm を認めることができた。棺の主軸は建物跡 S B 1～3・9 と同じ方向で、S B 2 とは 4.8 m の距離で最も近く、屋敷墓と思われる。

出土遺物 墓壙内や棺内の副葬品はみられなかったものの、墓壙埋土から鉄釘 M 1 が 1 点出土した。また、S X 187 を切る攪乱の埋土中から須恵器壙片が多く出土し、須恵器壙が副葬されていた可能性がある。

時期 攪乱出土の須恵器壙が副葬品とすれば、平安時代後期（11 世紀～12 世紀末）であり、S B 2 と同時期になる。

② S X 270 (図版 46、写真図版 40・41)

検出状況 西区西部北端近くで検出した。南半分が暗渠のような礫を含む攪乱溝により破壊されていた。

規模・形状 長軸を東西方向にとり、S X 187 とは約 90° 主軸方向が異なるものの、建物跡の軸方向とは合致する。墓壙は平面長方形に近く、長さ 2.02 m、残存幅は 80 cm で、攪乱溝の南側にはひろがらないことから、墓壙幅は 1.1 m 以下である。検出面から墓壙底までの深さは 19 cm であることから、後世に削平を受けていたと判断できる。木棺痕跡は長さ 155 cm、残存幅 52 cm で、棺幅は 60 cm 程度であったと推定している。検出面からの棺の残存高は 14 cm である。埋土土層にはにぶい黄褐色から灰黄褐色のシルト～極細粒砂で構成される棺材痕跡がみられ、その厚さは 3.5 cm 程度である。また、土層断面から棺は底板の上に長側板が乗るかたちであったと推定できた。S X 187 と同様に屋敷墓であったと推定しており、S X 187 との直線距離は約 9 m である。

遺物出土状況 棺内中央部北側には白磁の小壺 440 が 1 点、東側には白磁碗 442 と皿 441 が 2 点入れ子の状態で伏せて副葬されていた。3 点の白磁は中国製の輸入陶磁器である。副葬品の出土位置から、東側頭位であった可能性がある。なお、墓壙や棺の埋土には須恵器・土師器の細片が含まれていた。

時期 平安時代末（12 世紀末）頃と思われ、S X 187 や S B 1・2・3 と同時期である。

(4) 井戸

① S E 182 (図版 47・48、写真図版 43～45)

検出状況 西区中央部北寄りで検出した。

規模・形状 円形の井戸で、下半には石組が遺存していた。掘形は直径 1.85 m～1.95 m、検出面から井戸底まで 1.51 m 程度で、掘形は底から 50 cm 程度上で一度狭まる 2 段掘りになっている。2 段目の掘形径は約 90 cm、掘形底の直径は 35 cm 程度である。井戸底は砂礫層に達している。石組は検出面から 58 cm～68 cm 下方から底近くまで遺存しており、最大 85 cm の高さを測る。長径 20 cm 前後の亜角礫～亜円礫を使用して、小口面が井戸内面にくるように積まれている。石組上端部での直径は約 70 cm、石組下端部では直径約 35 cm で、上部が外側に開く形となっている。井戸底は石組下端からさらに 9 cm 程度砂礫層を掘り込んでおり、灰色シルトが堆積していた。その上面には水溜として曲物が置かれた状態で、この面の高さは石組下端と同一レベルとなっていた。

堆積状況 石組内は水平堆積でシルト～極細粒砂の細かい粒度となっていた。石組より上部のうち、下半は中央の井戸枠内に向かう緩やかな傾斜堆積で、掘形埋土が井戸内に埋まっていった状況で、上半は井戸中央部分の窪みにレンズ状に堆積していることから、井戸周囲および掘形埋土上部の土が堆積していったと判断できる。また、石組外側の掘形埋土は主として粘質土層が用いられていた。

井戸が使用されていた状態については不明な点が多い。①石組は井戸上端付近まで存在していた。②井戸上半の石組上に木製の井戸枠が存在していた。③残存石組の上端付近から上部は埋められずに土坑状に空いていた。以上 3 通りの推定ができるであろう。①については、石組内および上半部の埋土中に含まれていた礫の数が少ないことから、井戸廃絶時以降に石組上半の石が持ち去られたことになる。埋土土層断面からも不自然さはない。②では、井戸上半のみ木製井戸枠を使用した例は寡聞にして類例を知らない。また、堆積土層中央部に礫が存在している点も不自然である。③の場合については、石組上端外側の掘形埋土上面に腐植化や土壌化、踏みしめられて固く締まるなどの痕跡が認められず、60 cm 前後の段差に対する昇降施設が認められなかった点からも否定的にならざるを得ない。したがって、①のように、井戸使用時には上端付近まで石組が存在していた状態であったと推定しておきたい。

遺物出土状況・出土遺物 井戸底では石組に密着したかたちで部分的に曲物側板を検出したが、遺存状況が悪く、原形のまま取上げることができなかった。断片は W 1～W 7 に図示した。また、釣瓶と思われる曲物底板 W 8 や W 9 の棒状製品といった木製品と土師器小皿 443 も井戸底から出土した。他には埋土上半などから出土した 444・445 といった土師器小皿のほか、446～448 の布目瓦片も出土した。

時期 土師器小皿で時期を限定することは難しいが、他の遺構の時期に合わせて平安時代末頃としておきたい。

(5) 溝・流路

① S D 014 (図版 28・29、写真図版 31)

検出状況 西端区および西端橋台区で検出した、北東－南西方向の溝である。

規模・形状 50 cm 程度の一定幅の溝で、検出面からの深さは 12 cm 程度で、断面は丸みのある逆台形を呈する。攪乱により途切れているが、延長 12.5 m を検出した。柱穴と重複する部分もある。西端区南寄り部分が最も深く、流れの方向は不明である。

堆積状況 ほぼ褐灰色の単一層であるが、部分的に灰黄褐色土の部分がある。

出土遺物 土師器の小片が出土したのみである。

時期 不明であるが、平安時代後期頃としておきたい。

② S D 161 (図版 29・45、写真図版 45)

検出状況 西区西端付近の南部で検出した。南北方向に近く、S B 3・9 とほぼ同一方向である。

形状・規模 調査区南端から約 5 m を検出したが、北部は傾斜に合わせて自然消滅している。幅 1.6 m ～ 1.9 m で、検出面からの深さは南端付近で 14 cm である。溝底の標高から南流していたことがわかる。

堆積状況 灰黄褐色の単一土層である。

出土遺物 228 の古墳時代須恵器坏蓋や高坏片・甕片、土師器の破片が埋土から出土している。

時期 出土遺物は古墳時代後期初頭のものが多いが、溝の位置と方向から平安時代末頃としておきたい。

③ S D 166・168 (図版 29・44、写真図版 35・46)

検出状況 西区西端で検出した。南北方向に近く、S B 1～3・9 とほぼ同一方向である。

形状・規模 南端付近では幅 1.2 m の S D 168 と 1.3 m ～ 1.7 m の S D 166 の 2 条の溝である。中央部で途切れるが、中央以北は合体して幅 3.0 m ～ 3.5 m の溝となっている。溝底の高さから南流していたと判断できる。検出面からの深さは最も深い部分で 25 cm ～ 30 cm である。

堆積状況 土層断面からは同時存在か前後関係かの判断ができなかった。また、溝は遺構面とした土層も含むことや、遺物が出土しなくなったため掘削を中止した。平安末頃の溝とするならば、上層の 1 ～ 2 層がその埋土となろう。

出土遺物 須恵器大型壺口縁部片 229 が北端付近の埋土から出土し、他に埋土には縄文土器・須恵器坏・須恵器甕の破片や平安時代の須恵器碗や土師器の細片が含まれていた。

時期 建物跡方向との同一性や位置から S B 1・2 に関連する溝として平安時代末と推定している。

④ S D 177 (図版 29・45、写真図版 35・45)

検出状況 西区西部北端で検出した北東－南西方向の溝である。S D 176 と重複し、本溝が新しい。

形状・規模 北東端は S R 144、南西端は攪乱により途切れ、検出した延長は約 7 m にとどまる。北東端の幅は 60 cm と狭く、南西端では幅 2.5 m とひろがっている。検出面からの深さは 10 cm 程度である。

堆積状況 埋土は単一でやや暗い黄灰色を呈する。埋土には古墳時代後期の須恵器を含んでいた。

出土遺物 出土須恵器は古墳時代の可能性がある S D 176 出土土器と接合した 230 の蓋である。

時期 古墳時代の土器が出土しているが、時期は不明である。

⑤ S D 181 (図版 29・45、写真図版 20・35)

検出状況 西区中央部で検出した。2008 年度調査区では S D 01 とされていたものの西端部分である。

形状・規模 2008 年度調査区東部では幅 80 cm 程度と狭いが、西に行くにつれ徐々に幅広くなり、今回検出した西端部分での幅は 4.5 m と大きくひろがっている。前回調査分も含めた全長は約 18.5 m で、東端は今回検出できなかった。検出面からの深さは 17 cm で、前回よりも浅い。溝の機能は不明である。

堆積状況 3～4 層の堆積がみられる。第 3 層にはマーブル状のブロックが認められ、湿地状に滞水していたことがうかがえる。

出土遺物 図示できる遺物は出土しなかったが、須恵器・土師器の細片が埋土から出土している。

時期 前回の調査で出土した遺物により 11 世紀後半とされている。

⑥ S D 307 (図版 30・58、写真図版 27・49・50)

検出状況 東区東部および東 3 区で検出した。南北に近い方向の直線的な溝である。

形状・規模 北端はS R 308に接しており、その部分では攪乱が多く、前後関係を明らかにすることができなかったが、本溝の方が新しいようである。調査区内では延長約20mを検出し、さらに南にのびるが、姫路市教委による2007年度の調査では約4.8mのびた後終息している。溝幅は約80cmでほぼ一定し、断面は逆台形に近い。検出面からの深さは18cm前後で、底の標高からは北流しているようである。

堆積状況 埋土は淡い色で、灰色よりも黄色味が強く、ブロックが多く混じるもので、単一層である。

出土遺物 図示できなかったが、弥生中期初頭の壺片や須恵器碗の細片が出土している。

時期 時期を決定できる遺物は出土しなかったが、埋土土層の色調等やS B 8との重複関係から、中世末以降近世の可能性はある。

⑦ S D 344 (図版29、写真図版51)

検出状況 東区西端南部、S D 202の東肩近くで検出した、北北西—南南東方向の浅い溝状遺構である。

形状・規模 若干弧状を呈する直線的な溝で、検出長は約3m、幅20～25cm程度で両端がやや狭まる。

堆積状況 上層は10YR6.6/2.3にぶい黄橙色 極細粒砂で10YR4.4/1.7 灰黄褐色の極細粒砂をブロック状に含む。下層は2.5Y5.7/2.6にぶい黄色 極細粒砂混じり細粒砂。検出面からの最大深は8cmである。

出土遺物 埋土から縄文土器細片が出土したが、図示できなかった。

時期 時期を判断できる遺物が出土しなかったが、埋土から平安時代の可能性が考えられる。

(6) その他の遺構

① 掘立柱建物跡以外の柱穴 (図版28、写真図版30・31・52)

建物跡として組み合わなかったが、特筆できる柱穴には西端橋台区のP 2・P 8・P 13、西端区のS P 075、東区東端のS P 300などがある。

規模・形状・遺物出土状況 西端橋台区のP 2はP 1などに切られているが、掘形径36cm、柱痕径14cm、深さ20cmを測る。P 8は掘形径30cmで、柱痕は検出していないが、中央部の径12cm程と思われる。深さは検出面から70cmと深い。底には礎板石・根固め石があり、土師器甕や須恵器鉢の破片も出土した。P 13では径20cmの掘形は深さ28cmを測る。S P 075は掘形径25cm、柱痕径17cmで、検出面からの深さは28cmであるが、柱痕の中央部分から下端にかけて上から須恵器碗・土師器碗・土師器鉢などが重なった状態で検出した。S P 300は掘形径約35cm、柱痕径は20cm程で、柱痕埋土上端から被熱した角礫が出土した。角礫は1面が黒く煤けていた。

出土遺物 P 2の柱痕上部から出土した布目瓦は449、P 8の柱痕位置の底出土の土師器皿は451で、柱痕埋土中位の土師器皿は450である。P 13の柱痕上面で検出したのは砥石の可能性のある石製品S 17である。S P 075の柱痕出土土器は上から須恵器碗461・土師器碗462・土師器鉢463である。

時期 S P 075は11世紀代の可能性が高いが、他の柱穴出土のものも平安時代後期の11世紀～12世紀であろう。

② S X 183 (図版29・45、写真図版46)

検出状況 西区西端でS D 168と重複して検出した土坑である。S D 168との新旧関係は不明である。

規模・形状 上端は約90cm×60cm程度の不定形で、中央部に径14cm、検出面からの深さ30cm程の柱痕のような円形落ち込みがある。掘形状の土坑の深さは検出面から48cmで、底は径10cmの円形で平坦である。

堆積状況 上層および柱痕状埋土中および最下層には焼土・炭化物を含んでおり、ブロック土も混じる。

出土遺物 焼土・炭化物以外に遺物は出土しなかった。

時期 機能も含め、時期も不明であるが、平安時代のものかもしれない。

③ S K 286 (図版 54、写真図版 51)

検出状況 西区東部北寄りで検出した土坑である。

規模・形状 平面は長方形に近いが歪である。長軸で約 1.3 m～1.4 m、短軸で 80 cm 前後の規模で、検出面から 20 cm～30 cm 落ち込んだ後、さらに中央部が 65 cm×70 cm の円形で深さ 50 cm 程度落ち込んでいる。中央部の壁は垂直に近く落ちる。検出面からの深さは 70 cm 程度で、円形の底は平らに近い。

堆積状況 大きく 2 段階に分かれ、土坑壁の崩壊や周囲からの土坑壁に沿った黄灰色系土層の堆積の後、中央部に灰黄褐色系の土層が堆積していた。埋土には炭化物を含んでいた。

出土遺物 縄文土器と思われる細片が出土したが、図示できたものはなかった。

時期 所属時期や機能は不明である。

④ S K 291 (図版 54、写真図版 51)

検出状況 西区東部北寄り、S K 286 の東隣で検出した溝状の土坑である。

規模・形状 長さ 1.16 m、中央での最大幅 38 cm で、検出面からの深さは 16 cm である。若干弧状を呈する。

堆積状況 埋土上層は褐灰色で炭化物と焼土塊を含み、下層は暗灰黄色で炭化物を少量含む。

出土遺物 炭化物・焼土塊以外は土器片も出土しなかった。

時期 S K 286 と同様に所属時期や機能は不明である。

⑤ S K 178 (図版 29、写真図版 46)

検出状況 西区中央部の調査区北壁に接して検出した。

規模・形状 北側は調査区外にのびるが、東西の 2 基の土坑が接した状態で検出された。北側のものは南北 1.13 m 以上、東西 1.60 m の規模で、南側のものに切られている。南側のものは東西 2.25 m で、南北は 1.4 m 以上である。検出面からの深さは北側が 33 cm、南側のものは東端の最深部で 85 cm を測る。

堆積状況 北側・南側ともに水平堆積をしており、北側は灰黄色系埋土、南側は灰色と黄色系の埋土である。一部に木根の攪乱が入る。埋土にはブロック土が多く混じることから、攪乱の可能性が高い。

出土遺物 図示できなかったが、古墳時代・平安時代の須恵器および土師器の小片がある。

時期 攪乱とすれば近世以降と思われるが、確証は得られなかった。

⑥ S R 144 (図版 29・46、写真図版 1・45)

検出状況 西端区～西区西半の調査区北端で北壁に沿って存在したが、北部は調査区外に続く。

規模・形状 調査区北壁に沿うように東西に直線的にのびる流路状のものである。東端は S K 178 で調査区から外れる。調査区内で検出した延長は約 46 m で、上端幅は西端で 3.5 m 以上を測る。南法面の傾斜は急で、底には若干の凹凸があるものの、ほぼ平坦である。検出面からの深さは 70 cm～80 cm でほぼ一定で、底の標高は凹凸により、4.44 m～4.60 m であるが、西側が目立って低いわけではない。

堆積状況 黄褐色や灰黄色系の土層が埋土で、第 5・7・11・14 層の円礫を多く含む層があり、川の攻撃面にあたることから、地山をえぐりながら堆積したことがわかる。埋土中には土器を含んでいた。

出土遺物 479～490 に図示した弥生時代後期～現代の遺物がある。大半が近世以降の所産である。

時期 出土遺物から近世以降の流路と判断している。

第2節 遺物

1. 弥生時代～古墳時代

(1) 竪穴住居跡

① S H 1 (図版 59・84、写真図版 54・101)

図示した土器のうち1～5は中央土坑のSKSK 231から出土したものである。

壺 1の壺はSD 202出土土器の壺A 3-1に分類され、口縁部外面ににぶい凹線を段状に施し、その下部には沈線のようなものも1条認められる。口縁端部は水平な面をもつ。外面はハケのち横ナデ、内面下半にはシボリ目が残し、内面上半は横ナデ仕上げである。5YR6/6 橙色を呈する赤い土器である。口径は13.8 cm。2は壺A 4-2またはA 5に分類され、端部を丸くおさめる長頸壺である。黄橙色を呈し内外面とも器表が荒れており調整不明である。口径は11.2 cmで残存高は9.4 cm。3は壺A体部で、外面下半には細かい縦ハケが残る。体部最大径17.8 cmで残存高は15.4 cmである。底面には葉脈痕が残る。4は10YR4/3 にぶい黄褐色で胎土には金雲母・角閃石の細粒を含みチョコレート色を呈する讃岐地域の胎土である。外面ににぶい凹線を施す。香川県上天神遺跡の直口壺BやCに分類されるものである。6は壺Eで口径は13.6 cm、口縁端部外面に3条の凹線を施す。9は壺口縁部と判断した。端部は凹面をなすが、凹線は認められない。

脚部 5は裾端部を僅かに拡張させる脚C 2で、高坏と思われる。脚端径は9.8 cmで外面はハケ調整が残る。7・8は脚裾部で、7は大きく外反し、8は直線的であるが、ともに端部は若干上方に拡張している。裾部径は10.8 cmと15.2 cmである。

石器(石製品) S 16は下端部に敲打痕があり、敲石・磨石と判断した。また、側面は若干窪んでおり、使用による磨滅の可能性がある。長さ17.6 cm、幅8.1 cm、厚さ4.7 cmで1025.9 gの重量である。

須恵器壺 S P 194の上面から出土した10は須恵器の壺で口径16.5 cm、硬質で焼成良好である。平安時代後期以降の所産である。

② S H 2 (図版 59、写真図版 54)

甕 11は甕A 3で、体部外面はハケ、内面はヘラケズリ調整である。口径14.4 cm。体部外面に煤が付着している。12は甕Cの小片で、口径は16.6 cmを測る。外面に煤の付着が認められる。13は甕E 1で、体部の器壁はやや厚い。外面はハケ、内面はヘラケズリであるが上部までおよんでいない。粘土紐接合痕が残る。口縁部下面には煤が残存している。

壺 14は壺A 5と思われる口縁部片である。外上方に外反気味に開き端部は丸くおさめるが、外面はやや平らな面のようにになっている。外面には沈線で文様状のものが認められる。口径は11.6 cmを測る。

(2) 溝

① S D 202

弥生時代後期前半の土器が非常に多く出土しているため、器種・型式分類をおこなって、型式ごとの特徴を述べることにし、個別の詳細は観察表にゆずる。

土器の器種分類および特徴 (第2～4図、第2表)

壺 (図版 59～63、写真図版 55～65)

壺A 壺Aは頸部が長いもので、出土壺のうち最も多く出土している。直口壺とも呼ばれるものであ

るが、ここでは長頸壺と呼称する。口縁部の形態によりA1～A6に分類し、細部の形態等によりさらに細分した。

壺A1 口縁部が外反し、広口状になるもので、体部と頸部の境は漸移的である。15の1点である。

壺A2 直立した長い頸部から口縁部付近で急に外反して外上方にのびるもので、口縁端部を上下に拡張して端面に凹線文を施している。端面は内傾する。16の1点のみである。

壺A3 口頸部は緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁端部は水平な面をつくるもので、口縁外面に3～4条の凹線を施すが、にぶい段状になっているものが多い。17～20の4点がある。

壺A4 口頸部の形状はA3とほぼ同じであるが、端面が外傾するものである。端部を外側に少し拡張する21・22と拡張しない23・24がある。

壺A5 緩やかに外反する口頸部のA5-1と、直線的なA5-2に細分する。記号文のような幾何学的な文様を施すものが多い。

壺A5-1には口縁端部に鈍い面をもつ25～28や、口縁付近で外反度を強め、端部が尖りぎみの29・31・32、端部を丸くおさめる34～37・42、端部のみ強く外反させて丸くおさめる30・33がある。

壺A5-2の口縁端部は丸くおさめる(38～41・43)が、38のように体部が球形のものと39のように長胴のものがある。ただし、長胴のものはA5-1の28においても認められる。

壺A6 口頸部が短い一群で、体高に比べて口頸部の高さが60%以下のものである。口径部は緩やかに外反するものが多くを占める。45～49の5点あり、異なる型式の可能性はあるが、50も一応ここに含めておく。

壺B 口縁部が大きく開く広口壺で、口縁端部を下方に拡張して端面に凹線文・竹管円形浮文を貼付する58・59や凹線文のみの60がある。

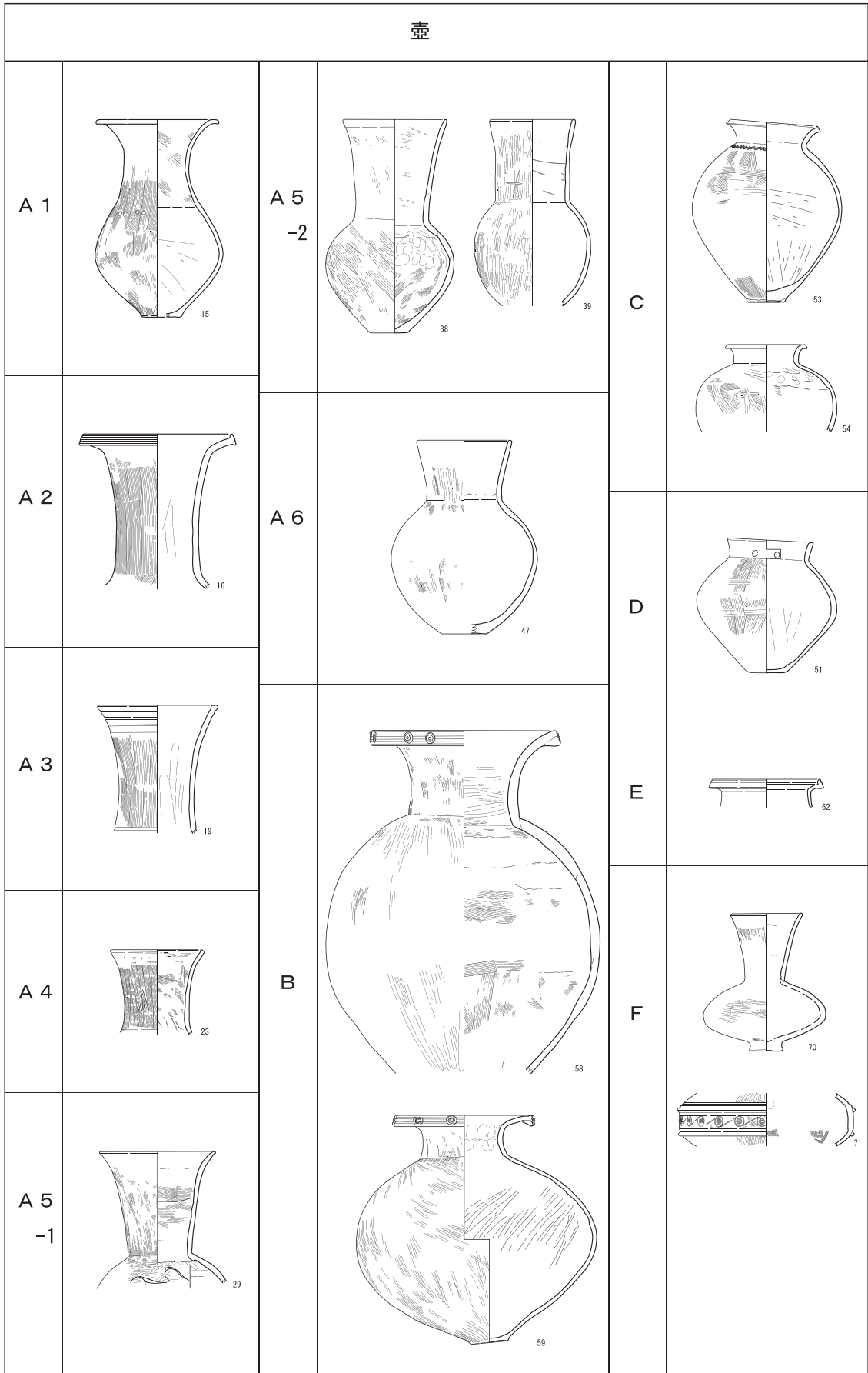
壺C 頸部が短い、口縁部が外上方に開く、短頸広口壺の一群である。口縁端部を上方に少しつまみ上げたような53のほか、形態は異なるが端部を下方に少し拡張する54・56、端部を上下に少し拡張した55のほか、小型の61、小型で甕に似た形態の76がある。また、口縁部を欠くが、57もここに含めた。さらに、甕Bと判断していた91は本類型になる。なお、53の外面上半には煤が付着しており、甕としても使用されている。

壺D 直口の短頸壺で51がある。また、52もここに含めたが、残存部分が少ないことから、壺A6の可能性もある。

壺E 62の形態は甕に似るが、頸部がほぼ垂直であることから、壺と判断した。口縁部は甕A2のように上方のみ折り曲げたように拡張し、外面に3条の凹線を施す。

壺F 細頸壺形態のもので、70がある。また、口頸部は欠失するが、71・72は体部が扁平であることや文様を多く施しており、他遺跡での出土例から細頸壺と判断できるものである。2条突帯の存在から吉備系のものに似るが、棒状浮文は認められない。71の文様は竹管文を重ねて同心円文とし、同心円を斜行線でつないだ連続同心円文としている。なお、壺肩部破片73の連続同心円文とした部分がある。

壺体部として図版63に示したもののうち、64は壺A、65もその可能性があるが底部中央に焼成後穿孔されている。67・68は壺Fの可能性はある。壺体部69の胎土には金雲母・角閃石を非常に多く含んで7.5YR 5/4にぶい褐色を呈しており、他の出土土器の形態的特徴からも讃岐地域の胎土である可能性が高い。74・75は沈線状の凹線と波状文を施したもので、壺と思われる。63は蓋で、口縁部は反りあがっており、二個一組の穿孔がある。



第2図 SD 202 出土土器 型式分類 1

甕 (図版 63～65、写真図版 65～68)

甕A 甕Aは口縁端部を拡張させて外面に凹線を施すものである。頸部付近の肩上部外面がにぶい凹面となるものが多いが、肩が張りぎみのものもある。体部外面はハケ調整で、内面はヘラケズリを施すものが多い。口縁部および口縁端部の形態と肩上部の状況により甕A1～甕A4に細分した。

甕A1 口縁端部を上下に大きく拡張し、端面は内傾するものが多い。肩上部外面は凹面ないし直線的なもので、肩上部から大きく外反して口縁部につながるものである。77～80がある。77の外面肩部にはハケ原体による斜行刺突文を全周させている。

甕A2 口縁端部を上方にのみ折り返したように拡張するもので、端面は内傾する。肩上部外面はやや凹面となる。肩上部から外折して口縁部となっている。81・82がある。

甕A3 口縁端部は上下に大きく拡張し、肩上部外面は凹面気味または直線的のもので、甕A1に近いが、肩上部から「く」字形に外折して口縁部へつながる点で異なる。83～86・96の5点がある。

甕A4 口縁端部は上下に拡張し、肩上部から口縁部へは緩やかな「く」字形を呈する。甕Aのなかでは肩上部が最も張り出したものである。87・88・90・97の4点に加え、89も本類型と判断した。内面はすべてヘラケズリで、ユビオサエは残していない。

甕B 口縁端部を上下に少し拡張し、端面に凹線を施すもので、口縁端部付近の断面は三角形に近い。肩上部は丸みがある。92・93の2点がある。

甕C 外反しながらのびる口縁部で、端部を主として下外方に拡張するもので、端面に凹線を施す。94・95の2点であるが、94のように内面側には拡張しないものもある。端面の傾斜は水平に近い。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ調整である。

甕D 口縁端部を下方にのみ拡張するもので、端面はやや凹面をなす。肩部上半の断面は直線的なものがある。98～101の4点がある。

甕E 体部は丸みをもち、口縁端部を肥厚させるもので、若干拡張するものもある。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ調整がほとんどを占める。口縁部の傾きによって甕E1と甕E2に細分した。

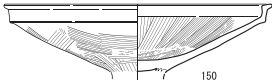
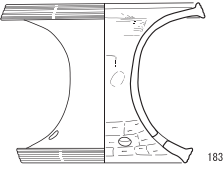
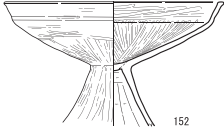
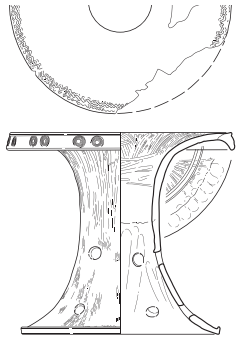
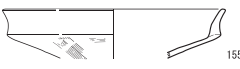

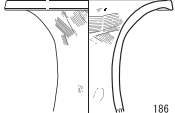
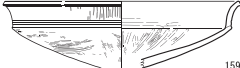

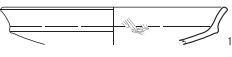
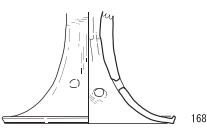

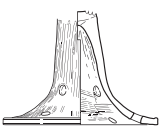
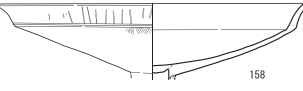
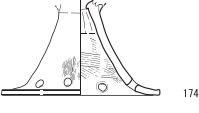
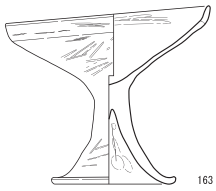
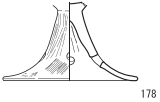
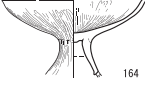
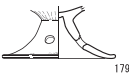
甕E1 体部から外反してのびる口縁部が甕E2に比べて水平に近いものである。103～106・108・109の6点がある。

甕E2 口縁部の傾きが甕E1よりも垂直に近いものである。口縁部外面中央部を外に少し膨らませるものもある。102・107・110・111の4点がある。

甕F 体部から「く」字状に外折して上外方に直線的にのびる口縁部になっているもので、口縁端部には面をもつ。112～114の3点があり、113の端部は下方に若干引き伸ばしている。113・114の体部は胴が張っており、体部最大径は上位にある。底部は比較的大きく、113の底部は直径が大きく突出している。一方、114の底部は体部から続き、ほとんど突出しないものの、底径はやや大きい。113・114ともに体部外面はタタキ成形のままで、ハケは施さない。体部内面下半は縦方向のヘラケズリである。

甕G 体部から外反して外方にのびる口縁部をもつもので、端部は丸くおさめている。115～117の3点あり、115では端部を下方に少し拡張している。

甕H 受け口状の口縁部のもので、近江系とされるものである。口縁端部は丸みをもっている。118・119の2点出土した。119は無文であるが、118では屈曲した受け口状口縁部の屈曲部外面に櫛による列点文を加えている。

高 坏	A		器 台	A	
	B			B	
	C	 		C	
	D		脚 (部)	A	
	E			B	
	F			C 1	
	G			C 2	
	H			D	
	I				

第4図 SD 202 出土土器 型式分類3

鉢（図版 65、写真図版 68・69）

鉢A 口径 25.7 cmの大型のもので、口縁端部には面をもち、端面に凹線を施す。120の1点がある。

鉢B 外上方にのびる口縁部で端面は若干拡張するが、凹線は施さない。体部内面はヘラケズリ、外面はハケ調整である。121・122の2点がある。口径は19 cm程度である。

鉢C 有孔鉢で、123では口縁部は殆ど外反せず、体部との境も不明瞭である。底部は丸みをもって尖底気味であるが、148では突出した平底となっている。

鉢D 125の1点である。口径 7.1 cmの小型のもので、口縁部は短く外反し、端部は磨滅しているが、丸くおさめるようである。体部に較べて底径は大きい。

ほかに124の壺口縁部とも判断できるものや、壙形の鉢部の破片126がある。

体部・底部（図版 66、写真図版 68～70）

分類は行わなかったが、127～129は体部の形態から壺Aの体部と思われる。130～132もその可能性がある。133～138は壺B・C・Fの底部であろう。138は讃岐地域の胎土と判断している。139～143は底部の形態と体部の器壁が薄いこと、外面に煤が付着していることから、甕の底部と判断している。144～146は器種不明であるが、147の外面に煤が付着しており、形態的に似ていることから甕の可能性もある。148は有孔鉢で、焼成前に内側から穿孔している。149は鉢の脚台部であろう。

高坏（図版 67、写真図版 70・71）

高坏A 150・151は坏中位で強く上方に屈曲するように折れ、坏上部は短い。口縁端部は主として外側に折り曲げるように拡張させ、内方にも若干ひろがる。口縁上端は平坦面を有し、本例ではやや内傾している。讃岐地域では圧倒的に主要な形態で、吉備地域にも比較的多くあるが、他地域では数少ないことから、讃岐・吉備型高坏と呼称する。ただし、本例の胎土は讃岐地域とは異なる。高坏Aの脚部は失われているが、本類型には脚Aが対応する。

高坏B 坏上部が外上方に直線的にのびるもので、横ナデにより坏底部との境にはにぶい稜がある。口縁部は主として外方に拡張し平坦な上端面となるが、高坏Aよりもかなり狭い。上端面は若干内傾する。152の1点がある。

高坏C 坏上部は坏底部から直立したのち外反するもので、口縁端部は丸くおさめる。155と口径 16.5 cmで小型の162がある。157も高坏Cに含めているが、小片のため口径は不正確である。

高坏D 高坏Cと同様に坏底部から直立する坏上部であるが、直立した後大きく外反し、端部は外方に少し引き出すあるいは若干拡張し、外傾もしくはやや外傾する狭く平坦な端面としている。153と159があるが、159の屈曲部外面には2条の凹線を施す。

高坏E 154・156のように坏底部と坏上部境の外面の稜が外に張り出し、坏上部はあまり外反せず外上方に直線的にのびるものである。高坏C・Dに較べてその傾きは大きい。口縁端部は丸みをおびた平坦面となっている。

高坏F 坏上部が横外方に外反しながらのびるもので、坏底部との屈曲が小さい。口縁端部は面をもち外傾する。160に加え小片であるが、161も本類型に含めた。

高坏G 口径 32.2 cmと大型の158で、坏上部と坏底部との屈曲度合いは高坏Fに近い。坏上部は端部に近づくにつれその器厚を徐々に減じ、口縁端部に丸みをもったにぶい面となっている。坏上部外面にはヘラミガキを暗文のように間隔をあけて施している。

高坏H 坏底部と坏上部との境界の稜線が無いが、極めてにぶいもので、163の1点である。やや内

湾しながら外上方にのびる坏上部の口縁端部は丸くおさめる。脚端部も丸くおさめるが、やや上方に反りあがっている。脚柱部上半は中実となっている。脚部では全く同じものは出土していない。

高坏 I 口径 14.9 cm と小型の塊形坏部のものである。口縁端部は丸くおさめ、僅かに外方に引き出している。164 の 1 点である。

ほかに 165 や脚柱部に 5 条単位の櫛描直線文を 3 段に施した 166 が出土している。

器台 (図版 68・69、写真図版 72・73)

器台 A 口縁部と脚部が似た形態の単純な器台で、口縁端部と脚端部は拡張して端面にそれぞれ 4 条と 3 条の凹線を施す。脚部は脚 A の形態となっている。183 に加え 184 も本類型とした。

器台 B 185 の 1 点がある。形態的には器台 A に近いが、口縁部を横外方まで外反させて、端部を下方のみ拡張している。端面には 2 個一對の同心円文スタンプ文を全周させ、口縁部上面は櫛描波状文で飾る。脚端部は脚 B の形態で、上方にのみつまみ上げるように小さく拡張している。下方にのみ拡張し端面に文様を施した 187・188 は器台とすれば本類型であるが、187 は壺の可能性もある。

器台 C 口縁部があまり大きく広がらず、端部の拡張もほとんど見られないもので、186 の 1 点がある。脚部は不明である。

ほかに、へら描き直線文と半截竹管文・綾杉状に刺突文を施した 189 や、中央が膨らんだエンタシス状脚柱部の 190 といった、器台筒状体部や脚柱部が出土している。

脚部 (図版 67～69、写真図版 71～73)

脚 A 脚端部を上下に拡張し、端面に凹線を施したもので、拡張は上側が大きい。167 の 1 点がある。器台 A の脚部と同じ形態で、高坏 A の脚部も同様であることが讃岐地域の例で明らかになっている。

脚 B 器台 B の脚部にみられるように、脚端部を上方にのみ折り返すようにつまみ上げたもので、拡張の度合いが大きいものである。168～170 がある。器台のみならず高坏の脚も本類型になっているものがあると推定できるが、高坏 B～G との関係は次の脚 C・D も含めて対応関係が不明である。ただし、拡張の度合いおよび端部の形態によって時期的な差がありそうである。なお、168 の拡張部下端は工具で沈線状におさえ込んでおり、この拡張そのものに強い意識が窺える。

脚 C 脚端部を上方にわずかに拡張した脚 C 1 とほとんど拡張しない脚 C 2 があるが、その差はわずかである。ただし、脚 C 2 では裾部が脚端部近くで大きく外反している。端面は凹面となるものがほとんどである。脚 C 1 には 171・173、脚 C 2 には 172・174・175 がある。

脚 D 脚端部を丸くおさめるものである。176～179 の 4 点があり、高坏 I が脚 D と対応するかもしれない。

高坏の脚柱部と想定されるものには 180～182 がある。なお、191 は脚径が 24.3 cm と大きいことから器台の脚部と想定しているが、脚端部の形態では脚 C 2 と脚 D の中間を示す。

石器 (図版 83、写真図版 100)

石器では石鏃が 1 点土器群精査中に出土した。S 3 は凹基式石鏃でサヌカイト製である。先端を折損している。残存長 21.0 mm、幅 16.8 mm、幅 3.8 mm、現在の重さは 1.1 g である。金山産である。

金属器 (図版 88、写真図版 104)

上面付近から出土した M 3 は、残存長 3.3 cm、幅 4.0 mm、厚さ 2.7 mm で弧状を呈し、横断面は三角形を呈している。先端が尖りぎみであることから釘の可能性があり。後世の混入と思われる。

第2表 S D 202 出土土器観察表

番号	器種と類型	法量 (c m)				技法・その他の特徴	残存率	備考
		口径	器高	腹径	底径			
15	壺A 1	(15.5)	27.25	(17.6)	5.6	外面：縦ハケ、肩部に2個一対の竹管文、 底部付近はイタナデか 内面：口縁部は斜めハケ、体部は横ヘラケ ズリ	口縁部若干 体部 3/4 底部 1/2	
16	壺A 2	(20.3)	(21.3)	—	—	外面：口縁端部に4条の凹線、頸部は縦ハケ 内面：横ナデ	口縁部 2/3	
17	壺A 3	12.3	(7.1)	—	—	外面：口縁部に2条の凹線、頸部は縦ハケ 後縦ヘラミガキ 内面：口縁部は横ナデ、頸部は横ハケ	口縁部 1/2 強	
18	壺A 3	(13.3)	(7.1)	—	—	外面：口縁部に3条の凹線、頸部は縦ハケ、 端部は凹面 内面：口縁部は横ナデ、頸部は縦ナデ	口縁部 1/7	
19	壺A 3	16.0	(17.6)	—	—	外面：口縁部に4条の凹線、頸部下端に凹 線か、頸部は縦ハケ 内面：口縁部は横ナデ、頸部は縦ユビナデ	口縁部 5/6	
20	壺A 3	(14.6)	(11.9)	—	—	外面：口縁部に3条の凹線、頸部は縦ハケ 内面：口縁部は横ハケ、頸部は縦ナデ、シ ボリ痕あり	口縁部 1/2 弱	
21	壺A 4	(13.0)	(7.3)	—	—	外面：口縁部は横ナデ、頸部は縦ハケ 内面：口縁部は横ナデ、頸部は縦ナデ	口縁部 1/4	外表面赤彩
22	壺A 4	(11.7)	(4.0)	—	—	外面：口縁部は横ナデ、頸部は縦ハケ 内面：口縁部は横ナデ、頸部は横イタナデ またはハケ	口縁部 1/4	
23	壺A 4	12.2	(11.7)	—	—	外面：口縁部は横ナデ、頸部は縦ハケ 内面：口縁部は横ハケ後横ナデ、頸部は斜 めハケ、シボリ痕あり	口縁部完存	頸部に線刻文 様
24	壺A 4	13.4	(9.5)	—	—	外面：口縁部は横ナデ、頸部は縦ハケ、口 縁端部は凹面 内面：口縁部は横ナデ、頸部にユビオサエ	口縁部 2/3	
25	壺A 5-1	(14.3)	(8.9)	—	—	外面：口縁部は器表面剥離（縦ハケ後横 ハケ後横ナデか）、頸部は縦ヘラミガキ 内面：口縁部は斜めハケ、頸部はナデ	口縁部 1/6	
26	壺A 5-1	12.3	25.9	14.5	4.4	外面：頸部は縦ハケ、体部は横ヘラミガキ、 底部側面はヘラケズリ 内面：口縁部は横ナデ、肩部にユビオサエ、 底部はナデ	完形	
27	壺A 5-1	(11.9)	(15.3)	—	—	外面：口縁部は縦ハケ後横ナデ、頸部は縦 ハケ 内面：横ハケ後横ナデ	口縁部 1/2 頸部完存	頸部にヘラ描 き直線2条線 刻
28	壺A 5-1	11.4	27.35	15.0	5.6	外面：口縁部は横ナデ、頸部～体部は縦ハケ、 底部はナデ 内面：ナデ、底部にユビオサエ	ほぼ完形	
29	壺A 5-1	15.7	(18.85)	—	—	外面：口縁部は横ナデ、頸部～肩部は縦ハ ケ後ヘラミガキ 内面：口縁部は横ハケ後横ナデ、頸部は横 ハケ	口縁部 3/4 体部 1/3	肩部にヘラ描 き文様
30	壺A 5-1	(10.8)	(21.25)	(13.6)	—	外面：縦ハケ後ヘラミガキ、口縁部は横ナ デ 内面：頸部は横ハケ後ナデ、肩部はユビオ サエ後ナデ、下半は横ハケ	口縁部 1/3 体部 1/3	肩部にヘラ描 き文様 内面粘土紐接 合痕顕著
31	壺A 5-1	(14.15)	(12.1)	—	—	外面：口縁部は横ナデ、頸部は縦ハケ後縦 ヘラミガキ 内面：口縁部は横ナデ、頸部は縦ナデ	口縁部 1/5 頸部 1/4	頸部にヘラ描 き文様
32	壺A 5-1	(12.25)	(8.0)	—	—	外面：口縁部は横ナデ、頸部は細かい縦ハ ケ 内面：縦ユビナデ	口縁部 1/6	
33	壺A 5-1	(13.45)	(14.5)	—	—	外面：口縁部は横ナデ、頸部は縦ハケ 内面：横ハケ	口縁部 1/3 頸部完存	
34	壺A 5-1	(14.0)	(10.4)	—	—	磨滅激しいため調整不明	口縁部 1/6	
35	壺A 5-1	(15.8)	(22.3)	20.9	—	外面：縦ハケ、体部は一部横ハケ、口縁部 は横ナデ 内面：頸部ナデ、体部はユビオサエとナデ	口縁部 1/4 頸部完存 体部 2/3	肩部に円形に 赤色顔料附着
36	壺A 5-1	(12.0)	(10.65)	—	—	外面：縦ハケ後縦ヘラミガキ 内面：斜めハケ	口縁部 3/4	頸部に3条の ヘラ描き文様
37	壺A 5-1	(13.5)	(10.6)	—	—	外面：縦ハケ、口縁部は横ナデ 内面：横ナデ	口縁部 1/2 頸部 1/2	

第2節 遺物

番号	器種と類型	法量 (c m)				技法・その他の特徴	残存率	備考
		口径	器高	腹径	底径			
38	壺A 5-2	13.9	29.4	17.65	(5.4)	外面：口縁部はハケ状工具による横ナデ、頸部～体部は縦ハケ後ナデ 内面：頸部は横ハケ後ナデ、体部は縦ハケ、肩部はユビオサエ顕著	口縁部 2/3 体部 1/3 底部 1/2	
39	壺A 5-2	(11.4)	(25.7)	(16.0)	—	外面：頸部～体部は縦ヘラミガキ、口縁部は横ナデ 内面：頸部は横ナデ、体部は磨滅のため調整不明だがイタナデか	口縁部若干 頸部 1/2 体部 1/4	頸部に十字のヘラ描き文様 粘土紐接合痕残る
40	壺A 5-2	11.3	(21.0)	(14.1)	—	外面：口縁部は縦ハケ後横ナデ、頸部～体部は縦イタナデ、タタキ成形 内面：口縁部は横ナデ、頸部～体部はナデ、ユビオサエ残る	口縁部 1/3 体部 1/3	肩部に渦巻のヘラ描き文様 外面下半に煤付着
41	壺A 5-2	—	(25.2)	(18.4)	6.15	外面：頸部は縦ハケ、肩部は縦ハケ後縦ヘラミガキ 内面：磨滅のため調整不明	頸部 1/3 体部 3/4 底部完存	肩部に線刻文様 粘土紐接合痕残る
42	壺A 5-1	12.25	23.0	(17.1)	4.7	外面：頸部は縦ハケのちヘラミガキ、体部は縦ハケ後縦ヘラミガキ 内面：頸部は磨滅のため調整不明、体部は縦ハケ	口縁部 5/6 体部 1/2 底部完存	
43	壺A 5-2	9.15	(18.3)	(13.8)	—	外面：口縁部は横ナデ、頸部～体部は縦ハケ 内面：頸部は縦ハケ後横ナデ、肩部はユビオサエ後ナデ、体部は縦ナデ	口縁部完存 体部 1/2	肩部に部分的な刻目文と刻目状にヘラ描き文様
44	肩部 壺	—	(3.8)	—	—	外面：ナデ 内面：ナデ	破片	刻目文と刻目状にヘラ描き文様 43 と同一個体か
44	肩部 壺	—	(4.0)	—	—	外面：ナデ 内面：ナデ	破片	刻目文と刻目状にヘラ描き文様 43 と同一個体か
45	壺A 6	(11.25)	18.8	13.65	5.3	外面：口縁部は横ナデ、頸部～体部は磨滅のため調整不明、底部はナデ 内面：頸部は磨滅のため調整不明、体部は縦ユビナデ、一部横ヘラケズリ	口縁部若干 体部・底部完存	粘土紐接合痕残る
46	壺A 6	(12.0)	(20.7)	17.4	—	外面：口縁部～頸部は縦ハケ後横ナデ、体部は縦ハケ 内面：磨滅と器表剝離のため調整不明	口縁部 1/3 頸部完存 体部 1/2	
47	壺A 6	(12.4)	26.65	(20.1)	(6.0)	外面：頸部～体部は縦ハケ後縦ヘラミガキ 内面：磨滅のため調整不明	口縁部若干 体部 3/4 底部 1/4	
48	壺A 6	7.4	13.8	9.2	3.3	外面：頸部～肩部は縦ハケ、体部は横ハケ 内面：口縁部は横ナデ、体部は不明だが上半はヘラケズリか	完形	
49	壺A 6	(8.6)	(9.8)	(10.6)	—	外面：磨滅のため調整不明、口頸部は縦ヘラミガキか、体部はイタナデか 内面：頸部は横ナデ、体部はユビオサエとナデ	口縁部 1/2 体部 1/2	
50	壺A 6	10.15	(10.0)	—	—	外面：口縁部は平行タタキ、頸部は粗い縦ハケ 内面：縦ユビナデ	口縁部 1/4	
51	壺D	11.4	18.55	19.4	(4.6)	外面：口縁部横ナデ、体部横ハケ後縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、体部上半横ナデ、下半縦の板ナデか	口縁部 1/2 底部 1/2	
52	壺Dか	(9.3)	(4.35)	—	—	外面：横ナデ 内面：横ナデ	口縁部 1/3 弱	
53	壺C	11.9	25.2	20.5	4.5	外面：口縁部横ナデ、肩部太細4条の波状文、体部縦ハケと横ハケ 内面：口縁部横ナデ、体部上半横ヘラケズリ、下半～底部縦ヘラケズリ	口縁部 3/4	外面下半に煤付着
54	壺C	(10.45)	(12.0)	(19.4)	—	外面：口縁部横ナデ、体部横ハケ後ハケ状工具による縦ナデ 内面：口縁部横ナデ、体部縦ユビナデ後横ナデ、肩部ユビオサエ後一部横ハケ	口縁部 1/4 体部 1/6	
55	壺C	(12.9)	(5.25)	—	—	外面：口縁部横ナデ、端面に凹線2条、頸部縦ハケ 内面：頸部横ハケ	口縁部 1/4	

番号	器種と類型	法量 (c m)				技法・その他の特徴	残存率	備考
		口径	器高	腹径	底径			
56	壺C	(13.1)	(3.3)	—	—	外面：口縁部横ナデ、端部下方に拡張、頸部縦ハケ、原体の接触痕跡 内面：磨滅のため調整不明	口縁部 1/6	
57	壺Cか	—	(16.0)	(15.8)	4.9	外面：体部縦ハケ 内面：不明	体部 5/6 底部 2/3	肩部のみ橙色、他は白色の胎土を使用
58	壺B	24.8	(47.3)	(37.8)	—	外面：口縁部横ナデ、端面に凹線3条に竹管円形浮文2個一対で6箇所加飾、頸部～体部縦ハケ、下半に縦ヘラミガキ加える 内面：頸部横ハケ後横ヘラミガキ、体部横ハケ、下半縦ハケ	口縁部ほぼ完存 体部 2/5	
59	壺B	18.1	31.4	33.15	5.2	外面：口縁部横ナデ、端面凹線2条に貼付による竹管文風円形浮文、頸部縦ハケ後横ナデ、体部ヘラミガキ 内面：頸部ユビオサエ、肩部縦ナデ、体部上半細かい単位の縦ヘラケズリ、下半イタナデ	口縁部 5/6 体部 2/3 底部完存	
60	壺B	(20.6)	(2.45)	—	—	外面：口縁端面凹線3条 内面：磨滅のため調整不明	口縁部 1/7	
61	壺C	(6.7)	8.2	(8.0)	4.3	外面：口縁部横ナデ、体部ナデ後縦ヘラミガキ、底部ナデ 内面：口縁部横ナデ、体部ナデ・部分的に横ハケ、底部クモの巢状ハケ	口縁部 1/4 体部 1/2 底部完存	
62	壺E	(14.7)	(4.0)	—	—	外面：口縁部横ナデ、端面に凹線3条、頸部横ナデ 内面：口縁部横ナデ、頸部ナデ	口縁部 1/4	
63	蓋	(9.1)	(2.3)	—	—	外面：口縁部横ナデ、2個一対の穿孔、天井部磨滅のため調整不明 内面：ナデ	口縁部 1/3 天井部 1/3	
64	体部壺Aか	—	(21.0)	18.35	6.0	外面：頸部横ナデ、体部上半横ハケ後縦ハケ、下半縦ハケ、底部ハケ 内面：頸部ハケ後ナデ、体部上半横ヘラケズリ、下半縦ヘラケズリ	体部 5/6 底部 1/2	
65	体部壺Aか	—	(15.15)	13.95	5.6	外面：体部縦ハケ後縦イタナデ、底部ナデ 内面：体部斜～縦ハケ	体部 7/8 底部ほぼ完存	焼成後底部に穿孔
66	体部壺	—	(14.6)	(22.2)	—	外面：肩部縦ハケ後横ヘラミガキ、体部中央横ハケ後横ヘラミガキ、体部下半横斜ハケ後縦ヘラミガキ 内面：体部上半縦ナデ、下半斜ヘラケズリ	体部 4/5	
67	体部壺Fか	—	(7.9)	(15.35)	3.95	外面：体部中央横ヘラミガキ、下半縦ハケ後縦ヘラミガキ、底部ナデ 内面：体部中央上半ユビオサエとナデ、下半～底部板ナデ	体部 1/4 底部完存	内面下半全体が薄い黒斑状
68	体部壺Fか	—	(7.1)	(11.2)	3.8	外面：体部中央ユビオサエ、体部下半ナデか、底部ナデ 内面：ナデか、体部中央ユビオサエ	底部完存	器表荒れている
69	体部壺	—	(10.55)	(19.2)	—	外面：体部上半細かい横ヘラミガキ、下半縦ヘラミガキ 内面：上半ユビオサエとナデ、下半ナデ	体部 1/3	讃岐地域の胎土
70	壺F	9.5	18.95	16.85	4.6	外面：口縁部横ナデ、頸部縦ハケ、体部横ヘラミガキ、一部ハケ遺存、底部側面横ナデ、底面ナデ 内面：口縁部～頸部横ナデ、体部～底部にハケが認められる	ほぼ完形	
71	壺F	—	(7.3)	(24.6)	—	外面：体上部・体下部縦ヘラミガキ、沈線2条、体部中央斜ハケ後ナデ、突帯間に連続同心円文、同心円文は大小竹管文を3重スタンプ 内面：体部上半ナデ、下半細かい縦ハケ	体部 1/2	
72	壺F	—	(6.6)	(21.0)	—	外面：体上部縦ハケ後ヘラミガキか、3重竹管の同心円文、体部突帯間に5重竹管の同心円文 内面：横イタナデまたは横ハケ	体部 1/2	
73	体部壺	—	(3.3)	—	—	外面：横ハケと縦ヘラミガキ、後沈線3条の上下に半載竹管文、それらの文様間に3重同心円文を一部連続 内面：ユビオサエ後横ナデ	体部小片	
74	体部壺か	—	(4.3)	—	—	外面：ナデ後3条単位波状文と凹線4条以上 内面：磨滅のため調整不明	体部小片	

第2節 遺物

番号	器種と類型	法量 (c m)				技法・その他の特徴	残存率	備考
		口径	器高	腹径	底径			
75	体部 壺か	—	(3.8)	—	—	外面：ナデ後凹線6条以上と3条波状文2段以上 内面：ナデ	体部小片	
76	壺C	3.6	6.0	(5.1)	1.8	外面：口縁部横ナデ、体部～底部ナデ 内面：口縁部横ナデ、体部～底部ナデ	口縁部 2/3 体部 2/3	
77	甕A 1	15.4	26.5	21.0	4.65	外面：口縁部横ナデ、端面に凹線4条、体部縦ハケ、最大径上部に列点文状の刺突文(ハケ原体か)、底部ナデ 内面：口縁部横ナデ、頸部～体部上半ナデ・ユビオサエ、下半縦ヘラケズリ、底部横ナデ	ほぼ完形	外面煤付着
78	甕A 1	(15.4)	(3.9)	—	—	外面：口縁部端面凹線2条以上、磨滅・器表剥離のため調整不明 内面：磨滅・器表剥離のため調整不明	口縁部 1/6	
79	甕A 1	(15.75)	(6.25)	—	—	外面：口縁部横ナデ、端面に凹線3条、肩部縦ハケ、上部横ナデ 内面：口縁部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	口縁部 1/2	
80	甕A 1	(14.3)	(5.5)	—	—	外面：口縁部横ナデか、端面に凹線3条、頸部横ナデ 内面：ナデか	口縁部 1/7	
81	甕A 2	(12.8)	(4.9)	—	—	外面：口縁部横ナデ、端面に凹線3条、肩部縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、肩部イタナデ	口縁部 1/4	
82	甕A 2	(14.2)	(8.0)	—	—	外面：口縁部横ナデ、端面に凹線3条、肩部縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、肩部ユビオサエ・ナデ	口縁部 1/6	外面に煤付着
83	甕A 3	(15.9)	(10.85)	(19.1)	—	外面：口縁部横ナデ、端面に凹線3条、体部縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、体部ユビオサエ・ナデ	口縁部 3/7	器表激しく磨滅
84	甕A 3	(14.0)	(5.7)	—	—	外面：口縁部端面に凹線3条、器表磨滅 内面：磨滅のため調整不明	口縁部 1/5 肩部 1/5	
85	甕A 3	(13.4)	(4.85)	—	—	外面：口縁部横ナデ、端面に凹線3条、体部縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、肩上部縦ナデか	口縁部 1/6 体部若干	
86	甕A 3	(18.8)	(4.0)	—	—	外面：口縁部横ナデ、端面に凹線2条、肩部縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、肩部斜ヘラケズリ	口縁部 1/4	外面に煤付着
87	甕A 4	(13.7)	(3.7)	—	—	外面：口縁端面に凹線2条、磨滅のため調整不明 内面：口縁部磨滅のため調整不明、肩部横ヘラケズリ	口縁部 1/5	
88	甕A 4	(16.8)	(16.95)	(24.6)	—	外面：口縁部端面に凹線2条、体部縦ハケか、器表磨滅のため調整不明 内面：口縁部磨滅のため調整不明、体部横ヘラケズリ	口縁部 1/3 体部 1/6	
89	甕A 4	(11.8)	(3.6)	—	—	外面：口縁部横ナデ、端面に凹線2条、肩部縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	口縁部 1/6	口縁部内面～端面に赤色スリップ塗布
90	甕A 4	(15.0)	(7.05)	—	—	外面：口縁部横ナデ、端面に凹線2条、肩部縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	口縁部 1/4 肩部 1/4	
91	壺C	14.5	28.2	(24.9)	7.7	外面：口縁部横ナデ、端面に凹線4条、体部縦ハケ後上半横ヘラミガキ、下半は縦ヘラミガキ 内面：口縁部横ナデ、体部下半縦ヘラケズリ後、上半横ヘラケズリ	口縁部完存 体部 1/3 底部完存	
92	甕B	(21.5)	(5.75)	—	—	外面：口縁部横ナデ、端面に凹線2条、肩部縦ハケ 内面：口縁部磨滅のため調整不明、肩部横ヘラケズリ	口縁部 1/4	
93	甕B	(21.8)	(5.9)	—	—	外面：口縁部横ナデ、端面に凹線2条、肩部縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、肩部ユビオサエ後イタナデか	口縁部 1/6	
94	甕C	(15.4)	(5.35)	—	—	外面：口縁部横ナデ、端面に凹線2条、体部縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	口縁部 1/5 肩部 1/5	口縁部外面に煤付着

番号	器種と類型	法量 (c m)				技法・その他の特徴	残存率	備考
		口径	器高	腹径	底径			
95	甕C	(14.9)	(3.4)	—	—	外面：口縁部横ナデ、端面に凹線2条、肩部縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	口縁部 2/5	
96	甕A 3	14.85	(10.75)	(19.35)	—	外面：口縁部横ナデ、端面に凹線2条、体部上半縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、体部上端横ヘラケズリ、上半縦ヘラケズリ	口縁部完存	
97	甕A 4	(13.0)	(8.75)	(17.0)	—	外面：口縁部横ナデ、端面に凹線2条、体部上半縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、体部上半斜ヘラケズリ	口縁部ほぼ完存 肩部 1/4	
98	甕D	(16.0)	(3.55)	—	—	外面：口縁部横ナデ、端面に弱い凹線2条、肩部縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	口縁部 1/9	
99	甕D	(14.2)	(11.1)	(18.3)	—	外面：口縁部横ナデ、体部縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、体部横ヘラケズリ、器表剥離	口縁部 1/3	体部下半に煤付着
100	甕D	(14.6)	(3.0)	—	—	外面：口縁部横ナデ、肩部ナデ 内面：口縁部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	口縁部 1/6	
101	甕D	(15.5)	(2.5)	—	—	外面：口縁部磨滅のため調整不明、頸部横ナデ 内面：口縁部磨滅のため調整不明、頸部横ヘラケズリ	口縁部 1/7	
102	甕	(14.0)	(6.1)	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部上半縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、体部上半斜ヘラケズリ	口縁部 1/4	外面に煤付着
103	甕E 1	(16.0)	(11.75)	(17.75)	—	外面：口縁部横ナデ、体部斜～縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、体部斜～横ヘラケズリ	口縁部 1/2	体部外面再被熱による器表剥離部分あり
104	甕E 1	(12.95)	(4.6)	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	口縁部 1/4	
105	甕E 1	13.95	(1.95)	—	—	外面：口縁部横ナデ 内面：口縁部横ナデ、肩部横ヘラケズリ	口縁部 10/11	
106	甕E 1	(14.2)	(4.45)	—	—	外面：口縁部・体部磨滅のため調整不明、頸部横ナデ、体部は縦ハケか 内面：口縁部磨滅のため調整不明、肩部横ヘラケズリ	口縁部 1/4 弱	口縁部外面再被熱により器表剥離
107	甕E 2	(11.8)	(8.0)	(15.0)	—	外面：口縁部横ナデ、体部縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、体部上半横ヘラケズリ	口縁部 1/2 体部 1/6	
108	甕E 1	(14.25)	(7.35)	(17.4)	—	外面：口縁部横ナデ、体部縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、体部上半横ヘラケズリ	口縁部 1/7 体部若干	
109	甕E 1	(16.0)	(7.7)	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部上半ナデ 内面：口縁部横ナデ、体部上半横ヘラケズリ	口縁部 1/8	
110	甕E 2	(12.9)	(3.55)	—	—	磨滅のため調整不明	口縁部 1/2 弱	
111	甕E 2	(11.0)	13.8	(13.2)	3.65	外面：口縁部横ナデ、体部縦ハケで一部縦ヘラミガキ、底部ナデ 内面：口縁部横ナデ、体部斜ヘラケズリ、肩部に粘土紐接合痕	口縁部 1/4 体部 1/2 底部完存	体部に穿孔(焼成後か)
112	甕F	(14.7)	(6.2)	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部縦ハケ 内面：口縁部横ハケ後横ナデ、肩部イタナデか	口縁部ほぼ完存	
113	甕F	(12.4)	16.7	(14.1)	6.1	外面：口縁部横ナデ、体部平行タタキ成形、底部周囲ユビオサエ、底面ナデ 内面：口縁部横ナデ、体部上半横ナデか、粘土紐接合痕、下半縦ヘラケズリ	口縁部 1/4 底部完存	
114	甕F	(14.0)	15.8	(13.8)	(4.2)	外面：口縁部器表剥離、体部平行タタキ成形、底面ナデ 内面：肩部横ヘラケズリ、体部縦ヘラケズリ	口縁部 1/2 底部 1/2	
115	甕G	11.15	(7.2)	(13.7)	—	外面：口縁部横ナデ、体部縦イタナデ 内面：口縁部横ハケ後横ナデ、体部上半横ヘラケズリ	口縁部ほぼ完存 肩部ほぼ完存	歪みあり
116	甕G	(10.4)	(11.6)	(10.8)	(3.2)	外面：器表剥離のため調整不明、体部縦ハケか 内面：肩部ユビオサエ後ナデ、粘土紐接合痕	口縁部 1/4 底部 1/4	外面下半再被熱により赤色化

第2節 遺物

番号	器種と類型	法量 (c m)				技法・その他の特徴	残存率	備考
		口径	器高	腹径	底径			
117	甕G	(12.5)	(10.7)	(12.9)	—	外面：器表剥離のため調整不明、頸部にハケ残存 内面：器表剥離のため調整不明、体部イタナデまたはヘラケズリか	口縁部 1/3	
118	甕H	(15.65)	(1.8)	—	—	外面：口縁部横ナデ後榦による列点文 内面：横ナデ	口縁部若干 頸部 1/9	近江系土器
119	甕H	(15.65)	(4.4)	—	—	外面：口縁部横ナデ、頸部縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、肩部ヘラケズリか	口縁部 1/4	近江系土器
120	鉢A	(25.7)	(8.5)	(24.8)	—	外面：口縁部横ナデ、端面に凹線2条、体部縦ハケ後ナデか 内面：口縁部横ナデまたは横ハケ、体部ユビオサエ後横ハケ	口縁部 1/8	
121	鉢B	(19.0)	(4.4)	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部磨滅のため調整不明 内面：口縁部横ナデ、体上部横ヘラケズリ	口縁部 1/6	口縁部外面の一部に煤付着
122	鉢B	(19.05)	(7.7)	(19.75)	—	外面：口縁部横ナデ、体部斜ハケ 内面：口縁部横ナデ、体部上半横ヘラケズリ	口縁部 1/4 弱	口縁部外面と体部外面に煤付着
123	鉢C 有孔鉢	(16.0)	13.45	(15.7)	4.2	外面：口縁部横ナデ、口縁下にユビオサエ、体部タタキ成形か(痕跡なし)、底部ケズリ 内面：口縁部横ナデ、体部多方向のイタナデ、底部ユビオサエ	口縁部 1/3 底部完存	底部焼成前穿孔
124	鉢または壺	(20.4)	(4.15)	—	—	外面：器表磨滅により調整不明、口縁端面に凹線1条、棒状浮文貼付 内面：器表磨滅のため調整不明	口縁部 1/12	
125	鉢D	(7.1)	5.3	—	4.25	外面：器表剥離のため調整不明、口縁部・底部側面ユビオサエ、底面ナデ 内面：体部縦・横のヘラケズリ	口縁部 1/3 底部完存	
126	鉢	(13.65)	(4.7)	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部縦ハケ後横ヘラミガキ 内面：口縁部横ナデ、体部磨滅しているが縦ヘラミガキか	口縁部 1/4 弱	
127	体部 壺A	—	(15.1)	(14.0)	(6.1)	外面：体部太筋縦ハケを浅く施し一部にナデ、底面ナデ 内面：肩部ナデ、体部横ハケ、下半にナデ加える	体部 1/2 弱 底部 1/3	
128	体部 壺A	—	(20.0)	(18.3)	4.8	外面：体部縦方向のハケ、底部ナデ 内面：体部上半横方向のヘラケズリ、下半縦方向のヘラケズリ	体部 1/2 強 底部 1/2	
129	体部 壺A	—	(17.5)	(15.2)	5.3	外面：体部縦ハケ、底部ナデ 内面：体部上半横ヘラケズリ、下半縦ヘラケズリ	体部 1/2 底部ほぼ完存	外面肩部にヘラ描き文様
130	体部 壺A か	—	(11.15)	—	(4.8)	外面：体部下半縦ヘラミガキ、底部側面横ナデ、底面円を描くようヘラケズリ 内面：体部下半斜・横ヘラケズリ、底部磨滅のため調整不明	体部 1/8 底部ほぼ完存	
131	体部 壺A か	—	(11.15)	—	4.1	外面：体部下半縦ハケ後縦ヘラミガキ、底部ナデ 内面：体部下半縦ヘラケズリ	体部 1/6 底部完存	
132	体部 壺A か	—	(9.05)	12.4	4.4	磨滅のため調整不明	体部 1/2 底部 5/6	
133	底部 壺	—	(4.8)	—	6.8	外面：器表磨滅のため調整不明、太筋ハケか 内面：器表磨滅のため調整不明、ヘラケズリか	体部若干 底部 7/8	
134	底部 壺	—	(4.35)	—	(6.0)	外面：体部縦ヘラミガキ、底面ナデ 内面：イタナデか	体部若干 底部 1/4	
135	底部 壺	—	(3.85)	—	6.7	外面：体部縦ヘラミガキ、底部側面横ヘラケズリ、底面一方向ヘラケズリ 内面：体部縦イタナデ、底部ナデ	底部完存	
136	底部 壺	—	(3.3)	—	4.25	外面：体部縦ヘラミガキ、底面粗いハケ 内面：縦ヘラミガキ	底部完存	
137	底部 壺	—	(3.6)	—	7.1	外面：体部縦ヘラミガキ、底面ユビオサエ後ナデ 内面：縦ヘラケズリ	体部若干 底部 2/3	
138	底部 壺	—	(2.9)	—	(4.9)	外面：体部イタナデか、底部ナデか 内面：ヘラケズリか	底部完存	讃岐地域の胎土

番号	器種と類型	法量 (c m)				技法・その他の特徴	残存率	備考
		口径	器高	腹径	底径			
139	底部 甕	—	(9.6)	—	5.3	外面：体部縦ハケ、底面ナデ 内面：体部縦ヘラケズリ、底部横ヘラケズリ	体部 1/6 底部完存	
140	底部 甕	—	(4.8)	—	(4.55)	外面：体部縦ハケ、底面ナデか 内面：多方向ヘラケズリ	体部 1/3 底部 1/2	外面に煤付着
141	底部 甕	—	(6.3)	—	5.1	外面：体部縦ヘラミガキ、底面ナデ 内面：上半横ヘラケズリ、下半縦ヘラケズリ	底部 3/4	外面に煤付着
142	底部 甕	—	(4.55)	—	6.0	外面：体部縦ヘラミガキ、底面ナデ 内面：体部縦ナデ、底部ユビナデ	底部ほぼ完存	
143	底部 甕	—	(8.1)	—	4.9	外面：体部ハケ後縦ヘラミガキ 内面：縦ヘラケズリ	底部ほぼ完存	
144	底部	—	(7.3)	—	4.4	外面：体部縦ハケ後一部縦ヘラミガキ加える 内面：縦ヘラケズリ	体部 1/2 底部完存	
145	底部	—	(4.9)	—	5.5	外面：体部縦ハケ、底面丁寧なナデ 内面：横ヘラケズリ	底部完存	底部輪台技法
146	底部	—	(7.75)	—	6.15	外面：体部縦ハケ、底部側面ユビオサエ、 底面不定方向のヘラケズリ後ナデ 内面：体部磨滅のため調整不明、イタナデか	体部若干 底部完存	
147	底部 甕	—	(7.8)	—	5.25	外面：体部縦ハケ後縦ヘラミガキ、底面ナデ 内面：体部横ナデ後縦ナデ、底部ナデ	体部 1/2 底部完存	外面に煤付着、再被熱により赤変
148	鉢C 有孔鉢	—	(9.0)	—	4.5	外面：体部平行タタキ成形後ナデ、底部側面横ナデ、底面ナデ 内面：縦ヘラケズリ後不定方向イタナデ	体部 1/2 底部完存	焼成前内側から穿孔
149	脚台部 鉢か	—	(3.6)	—	(4.2)	外面：底部側面ユビオサエ、底面ナデか 内面：磨滅のため調整不明	底部 1/3	
150	高坏A	(28.2)	(7.3)	—	—	外面：口縁部横ナデ、杯部粗い横ハケ後横ヘラミガキ 内面：口縁部横ナデ、杯部放射状の粗いハケ後杯底部にヘラミガキ	杯部 1/3	讃岐系高坏
151	高坏A	(25.8)	(3.3)	—	—	外面：口縁部横ナデ、杯部ハケまたはナデ 内面：口縁部横ナデ、杯部放射状ヘラミガキ	口縁部 1/12	讃岐系高坏
152	高杯B	22.8	(13.55)	—	—	外面：口縁部横ナデ、杯部上半横ヘラミガキ、 杯部下半と脚柱部縦ヘラミガキ 内面：杯上部横ヘラミガキ、杯底部放射状ヘラミガキ、脚柱部横ヘラケズリ	口縁部完存 脚柱部完存	
153	高杯D	(25.0)	(4.7)	—	—	外面：口縁部・杯上部横ナデ、杯底部放射状、 杯底部上端横ヘラミガキ 内面：口縁部・杯上部横ナデ、杯底部放射状、 杯底部上端横ヘラミガキ	口縁部 1/3	杯底部擬口縁面にハケ残存
154	高坏E	(29.0)	(3.7)	—	—	外面：杯上部縦ハケ、下端に沈線、杯底部横ナデ 内面：口縁部・杯上部横ナデ、杯底部不明	口縁部 1/5	
155	高坏C	(23.0)	(5.2)	—	—	外面：口縁部・杯上部横ナデ、杯底部放射状ハケ 内面：器表剥離のため調整不明	口縁部 1/2 弱	
156	高杯E	(23.3)	(3.95)	—	—	外面：磨滅のため調整不明 内面：杯部縦・横ヘラミガキ	口縁部 1/9	
157	高坏C	(28.8)	(4.0)	—	—	外面：口縁部・杯上部横ナデ、杯底部ナデか、 粘土紐接合痕 内面：磨滅のため調整不明	口縁部小片	
158	高坏G	32.15	(8.1)	—	—	外面：杯上部縦ヘラミガキ暗文状、下端に沈線、 杯底部一部放射状ヘラミガキ 内面：磨滅のため調整不明	口縁部 6/7 杯部 7/8	
159	高坏D	(24.6)	(7.15)	—	—	外面：口縁部横ナデ、杯上部疎らな縦ヘラミガキ、 下端に凹線2条、杯底部縦・横ハケ後ナデ後横ヘラミガキ 内面：杯上部下端横ヘラミガキ、杯底部放射状ヘラミガキ	口縁部 1/4 杯部 1/2	
160	高坏F	(26.45)	(5.25)	—	—	外面：口縁部・杯上部横ナデ、杯底部上端横ヘラミガキ 内面：杯上部縦ヘラミガキか、杯底部ハケ後放射状ヘラミガキ	口縁部 1/6	

第2節 遺物

番号	器種と類型	法量 (c m)				技法・その他の特徴	残存率	備考
		口径	器高	腹径	底径			
161	高坏F	(31.1)	(3.2)	—	—	外面：口縁部・坏上部横ナデ、坏上部縦ヘラミガキ 内面：磨滅のため調整不明	口縁部 1/10	外面口縁部直下にハケ残存
162	高坏C	(16.5)	(4.35)	—	—	外面：口縁部横ナデ、坏上部縦ハケ後縦ヘラミガキ、坏底部上端横ハケ後横ヘラミガキ、坏底部放射状ヘラミガキ 内面：坏上部横ヘラミガキ、杯底部放射状ヘラミガキ	口縁部 1/8	
163	高坏H	(21.5)	18.8	—	13.2	外面：口縁部～脚柱部横ヘラミガキ、裾部横ナデ 内面：杯上部横ヘラミガキ、脚柱部シボリ目・ユビオサエ・ナデ	口縁部 11/12 脚部 1/2	表面凹凸多い
164	高坏I	(14.85)	(8.3)	—	—	外面：口縁部横ナデ、杯部放射状ヘラミガキ、脚柱部縦ヘラミガキ 内面：口縁部横ナデ、杯部放射状ヘラミガキ、脚柱部上半横ヘラケズリ、下半横ナデ	口縁部 1/2 脚柱部完存	円形透孔3方向か
165	脚柱部高坏	—	(13.0)	—	—	磨滅のため調整不明	杯部若干 脚基部完存 脚端部 1/2	
166	脚柱部高坏	—	(8.65)	—	—	外面：脚柱部5条櫛描直線文3段 内面：磨滅のため調整不明、脚柱部シボリ目	脚柱部 1/2	円形透孔3方向か
167	脚部 脚A	—	(3.55)	—	(17.8)	外面：脚部縦ヘラミガキ、脚端部横ナデ、凹線2条 内面：横ヘラケズリ、一部ナデ	脚端部 1/7	円形透孔
168	脚部 脚B	—	(11.8)	—	18.0	外面：脚端部横ナデ、脚柱部ハケか、上部に工具アタリ痕残存 内面：磨滅のため調整不明、シボリ目、脚端部横ナデ	脚柱部完存 脚端部 3/4	円形透孔4方向
169	脚部 脚B	—	(1.9)	—	(19.7)	外面：磨滅のため調整不明、脚端部横ナデ、凹線1条 内面：横ナデ	脚端部 1/8	
170	脚部 脚B	—	(2.5)	—	(15.6)	外面：縦ハケ、脚端部ぎわハケ状工具で横ナデか、脚端部横ナデ 内面：横ハケ	脚端部 1/4	円形透孔
171	脚部 脚C1	—	(12.0)	—	(16.4)	外面：脚柱部縦ヘラミガキ、脚端部横ナデ 内面：脚柱部シボリ目、裾部横ハケ、脚端部横イタナデ	脚柱部完存 脚端部 1/3	上段円形透孔4方向か 下段円形透孔6方向
172	脚部 脚C2	—	(5.15)	—	(21.0)	外面：器表剥離のため調整不明、凹線2条 内面：磨滅のため調整不明、脚端部横ヘラミガキ	脚端部 1/9	円形透孔1残存
173	脚部 脚C1	—	(8.7)	—	(15.8)	磨滅のため調整不明	脚柱部完存 脚端部 1/9	円形透孔5方向か
174	脚部 脚C2	—	(10.0)	—	16.8	外面：横ナデ後縦ハケ後縦ヘラミガキ加える？、裾部横ナデ 内面：脚柱上部ケズリ、脚柱中央部横ハケ、裾部横ナデ	脚部完存	円形透孔8方向
175	脚部 脚C2	—	(3.9)	—	(13.5)	外面：斜ハケ後疎らな縦ヘラミガキ、脚端部横ナデ 内面：横ハケ、裾部横ナデ加える	脚端部 2/5	円形透孔3方向
176	脚部 脚D	—	(4.05)	—	(13.4)	外面：縦ヘラミガキ、脚端部横ナデ 内面：横ヘラケズリ、裾部横ナデ	脚端部 1/3	
177	脚部 脚D	—	(3.3)	—	(17.1)	磨滅のため調整不明	脚端部 1/8	円形透孔1残存
178	脚部 脚D	—	(8.3)	—	(14.3)	外面：縦ヘラミガキ、裾部ハケ、脚端部横ナデ 内面：上半シボリ目、縦ナデ、裾部横ハケ後ナデ、脚端部横ナデ	脚部 1/2	円形透孔4方向
179	脚部 脚D	—	(5.5)	—	(11.9)	外面：坏底部ヘラミガキ、脚部磨滅のため調整不明、裾部ハケ、脚端部横ナデ 内面：ナデか、脚端部横ナデ	脚柱部完存 脚端部 1/6	円形透孔3方向
180	脚柱部高坏	—	(7.5)	—	—	外面：縦ハケ 内面：脚柱部上半シボリ目、横ヘラケズリ、下半横ハケ	脚柱部完存	円形透孔4方向
181	脚柱部高坏	—	(7.7)	—	—	外面：粗い縦ハケ後疎らな縦ヘラミガキ 内面：ナデ	脚柱部完存	円形透孔3方向 上下2段
182	脚柱部高坏	—	(7.7)	—	—	外面：縦ハケ、裾部横ナデ 内面：脚柱部上半縦ナデ、下半横ナデ	脚柱部完存	円形透孔4方向

番号	器種と類型	法量 (c m)				技法・その他の特徴	残存率	備考
		口径	器高	腹径	底径			
183	器台A	20.2	16.9	—	17.2	外面：口縁部横ナデ、凹線4条、筒部磨滅のため調整不明、脚端部横ナデ、凹線3条 内面：口縁部横ナデ、上半不定方向ハケ後ヘラミガキか、下半横ヘラケズリ、脚端部横ナデ	ほぼ完形	円形透孔5方向
184	器台A	(20.6)	(16.25)	—	—	外面：口縁部横ナデ、凹線5条、筒部上半不調整、中央以下縦ヘラミガキ 内面：口縁部横ナデ、筒部上半横ヘラミガキ、筒中央部横ヘラケズリ、裾部ナデ	口縁部3/4弱 筒部完存	2段に円形透孔 上段4方向
185	器台B	23.15	21.4	—	(20.9)	外面：口縁部横ナデ、端面に3重の同心円スタンプ文、口縁部下ユビオサエ、受部下に凹線2条、筒部縦ハケ後縦ヘラミガキ、裾部縦ハケ、脚端部横ナデ 内面：口縁部横ナデ、上面に4条の櫛描波状文、放射状ハケ後放射状ヘラミガキ、筒部上半横ナデ後横ヘラミガキ、下半縦ユビナデ、裾部磨滅のため調整不明	口縁部3/4 脚部1/6	上下2段に円形透孔5方向
186	器台C	17.0	(11.9)	—	—	外面：口縁部横ナデ、筒上部斜ハケ、筒部丁寧な縦ハケ 内面：口縁部横ナデ、筒部上半横ハケ、下半ユビオサエか	口縁部3/4	透孔不明確
187	口縁部壺か器台	(31.25)	(3.1)	—	—	外面：口縁部横ナデ、端面上下斜刻目文間に6条櫛描直線文後竹管円形浮文貼付 内面：ハケ後ヘラミガキか	口縁部1/5	讃岐地域の胎土
188	口縁部器台か	(37.6)	(2.15)	—	—	外面：口縁端面ヘラ描複合鋸歯文間に竹管円形浮文貼付、一部縦ハケ残存 内面：磨滅のため調整不明、ヘラミガキか	口縁部小片	
189	筒状体部器台	—	(11.15)	—	—	外面：筒部上端縦ハケ、中央部上下5条のヘラ描直線文間にヘラミガキ後半截竹管文、下側直線文下に短い綾杉状刺突文、下部縦ハケ後縦ヘラミガキ 内面：筒部上端縦ヘラミガキ、中央部ナデ、下部横ハケ	筒部1/3	筒部中央円形透孔4方向
190	脚柱部器台	—	(12.75)	—	—	外面：縦ヘラミガキ 内面：横ナデ、充填円板不整形	脚柱部4/5	上下2段円形透孔4方向互い違い位置
191	裾部器台	—	(2.4)	—	(24.25)	外面：縦ヘラミガキ後直線文3条以上、端部横ナデ 内面：横ナデ	脚端部5/12	円形透孔6方向
192	壺	—	(13.25)	—	—	磨滅・器表剥離のため調整不明	頭部1/4	

② S D 164

土器 (図版 69・70、写真図版 74～76)

S D 164 では S D 202 と同様に弥生時代後期前半の土器が出土しているため、S D 202 出土土器の型式分類にあてはめて説明する。

甕 193 は口縁端部の拡張が大きい、甕 A 2 にあたる。口径 13.9 cm、体部最大径は 19.8 cm を測る。口縁端面上半に凹線 2 条を施す。体部はハケ仕上げで、内面にはユビオサエ痕が多く残る。外面下半にヘラミガキを加えているようである。煤が付着している。194 は甕 E 1 に近く、口縁端面に凹線 1 条を施す。体部内外面はハケ仕上げで、再被熱により赤化・黒化している。口径 14.7 cm で口縁部と体部の境に焼成前穿孔があるが用途は不明である。195 の底部は 194 と同一個体と思われ、外面縦ハケで、底径は 5.4 cm である。196 の口縁部は鉢 A に近いが、凹線は施さない。口径は 24.6 cm と大きい。器表が剥離している。197 の口縁部は甕 F と思われる。口径 15.2 cm で外面は横ナデをハケ状に施す。口径 13.6 cm と小型の 198 は甕 E 1 で、体部外面は縦ハケ、内面は縦ヘラケズリ、体部最大径は 14.6 cm である。199 は口縁端部に丸味があり、甕 G である。器表剥離のため調整は不明で、口径 11.2 cm、体部最大径 15.0 cm である。

鉢 200 は口径 11.5 cm の鉢 A である。凹線は施さない。体部外面は縦ハケ後ヘラミガキ、内面は縦方向にイタナデを施す。201 は塊形の鉢で、口径 9.9 cm、器高 5.8 cm。口縁部外面に 6 条の楕描波状文を施す。体部内外面ともにヘラミガキである。底部は突出し、中央が窪んだ上げ底状になり、棒を刺したような穿孔が貫通している。丁寧なつくりとなっている。

壺 202～204・504 は壺 F で、同一個体かもしれない。202 は貼付突帯に竹管文を加える。203・204 は突帯間に 8 条 1 組と思われる棒状浮文を貼付している。いずれも調整不明で、体部径は 26 cm 程度である。吉備系とされるもので、同一溝である 2008 年度調査区の S D 02 や、2007 年度市教委調査の S H 1 からも 2 条突帯間に棒状浮文を施した同じ形態のものが出土している。

底部・体部 205 は底径 5.7 cm で、内外面ともにヘラミガキで壺と思われる。206 は外面ハケ、内面はヘラケズリで、底径 4.4 cm。207 は体部以下の破片で、タタキ成形後、外面はハケ、内面はヘラケズリで、外面には煤が付着していることから、甕と思われる。突出ぎみの底部は径 4.1 cm である。208 は細くすぼまる底部で、底径 4.3 cm。外面はイタナデ、内面は荒いヘラケズリである。器壁が厚い。209 は底径 9.8 cm を測り、壺と思われる底部で、外面はイタナデのようで、内面にはユビオサエが残り、ナデのようである。これも器壁が厚い。210 は底径 7.3 cm で、器表が剥離しているため調整は不明である。211 は突出した平底で、径 4.6 cm。底部周囲ユビオサエ、外面はイタナデ、内面はハケを施している。212 も突出した平底で、器表が磨滅している。底径は 4.2 cm である。

高坏 213 は口径 31.5 cm と大きな高坏 C で、坏上部外面に 3 条の凹線を施し、坏底部はヘラミガキを加える。214 は高坏 D に分類できそうである。坏上部内外面はヘラミガキ、坏底部との境の外面に凹線を施す。口径は 29.7 cm と大きい。215 は高坏 F で、口径は 30.7 cm。器表剥離により調整不明である。

脚部 216 は鉢の脚部で、脚端径 21.3 cm と大きく、脚 A に分類できる。端面の凹線は 4 条で、部分的に楕状工具による 7～8 回の刺突痕跡がある。外面は縦ハケ後一部に横ハケを直線文のように加える。内面は横ヘラケズリで、充填円板はやや薄い。217 は脚 C 2 で、径は 15.8 cm。円形透孔を 4 方向に穿ち、外面は縦ハケ後ヘラミガキ、内面にはシボリ目が残存する。坏底部も一部残存しており、ヘラミガキ調整と思われる。218 の脚柱部は器表剥離のため調整不明で、器種も確定しない。219 の脚端部は脚 A で凹線 2 条を加える。径 15.1 cm。器表が剥離した 220 も形態的には脚 A であるが、凹線は確認できない。径

は16.3 cm。脚径16.0 cmの221は脚C 2である。外面はハケをミガキ様に施す。円形透孔を4方向に穿つ。

なお、混入と思われる丸瓦の破片222も出土している。凹面には布皺が残る。土師質である。

③ S D 340

土器 (図版70、写真図版76・77)

弥生後期前半の土器(223～225)が溝東端から、弥生前期の227がSH 2の重複部分から出土している。223は壺Cに分類できる。口径11.4 cmで端部はやや拡張して凹線1条を施す。肩部はヘラミガキしている。底部225と同一個体の可能性がある。224も壺Cと判断する。口縁端部は下方に少し拡張する。口径13.8 cm、体部最大径18.0 cmで、磨滅のため調整不明であるが、外面下端に煤が付着しているようである。225は底径6.2 cmで、外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリである。底部はやや突出するが底面は丸い。226は壺体部下半である。外面上部は横方向、下部は縦方向のヘラミガキ。線刻文のようにみえるが、調査時の傷の可能性が高い。胎土に大粒の砂粒を含み中期初頭の可能性がある。227は口径30.1 cmの甕で、如意形口縁端部には刻目を施し、破片の外面下半はケズリを施す。内面はハケまたはナデのようである。

なお、図示していないが、溝埋土から弥生中期初頭の体部片が多く出土している。

石器・剥片 (図版83・84、写真図版100～102)

サヌカイト剥片集中部があり、細片も含めて合計1,200点以上の剥片が出土したが、未成品と判断できたのはS 13の1点に限られた。他は溝埋土出土である。いずれも金山産のサヌカイトである。

S 9は楔形石器で、折断面が認められ、下側縁にはスクレイパーのような連続した剥離が認められるが、上側縁はつぶれが著しい。金山産で、長さ43.1 mm、幅42.2 mm、厚さ9.3 mm、重さは17.2 gである。S 10はスクレイパーで、サヌカイト剥片群中の1点である。横側縁付近では両面とも数回にわたって敲打しているために剥離面が複雑になっている。やや階段状の剥離が認められる。また、下側縁には微細な剥離が連続している。長さ60.1 mm、幅50.8 mm、厚さ9.9 mm、重さは25.6 gである。金山産のものである。S 13はスクレイパーの未成品と判断される。片面のみ連続した剥離をおこなっている。外側縁には使用痕か意図的に作られたかの判断ができない細かな剥離が認められる。その上側には層状の剥離が認められる。上部の一部と下部には折断面が認められる。長さ57.3 mm、幅55.2 mm、厚さ8.8 mm、重さ22.0 gである。サヌカイト剥片群中の1点である。

④ S D 161 (図版70、写真図版76)

228は南の中央部分から出土した須恵器坏蓋で、口径13.8 cm。ヘラケズリは口縁部境まで施されている。口縁端部は内傾する面をもつが、丸味がある。MT 15型式期で6世紀前葉の所産であろう。

⑤ S D 168 (図版70、写真図版76)

229に示した須恵器甕口縁部片は北端付近の埋土から出土したものである。7条の沈線を施し、中央部には櫛描波状文を省略したヘラ描き斜線を描いている。口縁端部を欠いているが、古墳時代後期後半の所産と思われる。

⑥ S D 176・177 (図版70、写真図版76)

230はつまみを有する須恵器蓋で、S D 176とS D 177出土破片が接合した。口縁部を欠失しているため詳細な時期は不明であるが、古墳時代後期前半のものであろう。231は長脚2段透孔の須恵器高坏脚柱部である。中央部に2条の凹線を施すが、シャープさに欠けることから、6世紀後葉～7世紀初頭のものであろう。S D 176の北溝埋土から出土した。

(3) 河道（流路）

東地区のSR 308とその延長上の位置にあたる東2区の流路跡から多くの土器などが出土している。

① SR 308

埋土の取上げ2・3層を中心に弥生時代中期初頭～中期後半、弥生時代後期前半、弥生時代後期末～古墳時代中期の土器が大半を占めているが、層位的に土器の新旧は認められない。また、縄文時代晩期の小片や古墳時代後期および中世のものも少量出土し、土器以外に石器や木製品も出土している。

土器

縄文時代晩期・弥生時代中期（図版71・72・74、写真図版77～80・83・84）

232や235の壺などがあり、口縁下に突帯を貼り付け刻みを加える。232の口縁端部にも刻目を施す。

233は取上げ第3層（この後「取上げ」を省略）出土の長胴の壺で、体部最大径部分にヘラ描沈線を2条めぐらすが、一部3条になっている。内外面ともハケ仕上げで、体部最大径21.0cm、底径7.0cm、残存高25.2cmで弥生中期初頭のものであろう。234も第3層出土の壺体部で、縦ハケ後に太筋4条の櫛描直線文を8段以上めぐらす。弥生中期初頭のものである。236～239は弥生中期初頭の甕で、236のみ第3層、他は第2層出土である。236・237の口縁端部には刻目を施すが、237では密になっている。236の口径は24.5cmで、外面には煤が付着している。238は口縁端部を上方に少し引き伸ばしている。口径は19.7cm。239は口径21.5cmである。ともに小片で、混和材の砂粒は大粒である。

壺 240～250は弥生中期中葉～後葉の壺口縁部で、大半が広口壺である。242・243・248～250が第3層出土、他は第2層出土である。240～244は口縁端部を下方にまで大きく外反させた播磨に特徴的な形態で、240～242の口縁端部はほとんど肥厚しないもので、中期中葉の時期である。いずれも口縁内突帯を貼り付けているが、241では剥落している。240の口縁端面上下に刻目、中央に2条の凹線を施している。また、頸部に近い部分に列点文も加飾し、頸部突帯が一部残存している。外面は縦ハケ、内面は横ヘラミガキ調整で、口径18.5cmを測る。241の口径は17.3cmで、器表が剥離している。蓋と結合するための紐通し円孔が2個一対で穿たれている。242の口径は14.5cmで、口縁内突帯には刻目が加飾されている。

243・244は口縁端部を少し拡張した、中期後葉のものである。243では円形浮文と刻目を施し、口縁内突帯上面に刻目を加える。頸部には指頭圧痕文突帯を貼り付けている。外面は縦ハケ、内面は横ハケ後ナデで、口径は15.9cmである。244の口縁部は無文で、口径は16.2cmである。245・246は口縁端部を上下に拡張するもので、端面に凹線を施していることから、中期後葉の所産である。245の端面にはさらに4個以上単位の円形浮文を貼付し、浮文間に櫛列点文を施す。円形浮文は5方向と思われる。口径は13.7cmでハケ後ナデ調整である。246の端部にも同様の施文が認められるが、列点文は刻目文になる。口径14.0cmで、内面には横ヘラミガキが一部残存する。247も端部を拡張するが、凹線文は施さない。端面には竹管円形浮文を2個以上で数方向に貼付し、浮文がある位置の口縁上面に竹管文を加えている。口径は18.4cmで器表は磨滅している。

248は垂直の頸部から水平に外反する壺口縁部で、端部は拡張せず無文である。口径は23.7cm。249は外上方に直線的にのび、端部付近でやや外反し、端部に凹面をもつ壺口縁部で、口径は15.8cmである。外面には縦ハケが残る。内面はナデで、頸部に凹線を施しているようである。250は頸部の破片で、外面は縦ハケ調整。ハケ原体による圧痕を加えた突帯を貼り付けている。

251は第1層出土の壺体部で、23.5cmの体部最大径部分に二枚貝腹縁の刺突文を施す。外面は器表が

磨滅しているが、底部付近にヘラミガキが残る。内面のハケ調整は残存している。底径 6.0 cm、残存高は 14.9 cmである。252 の 14.0 cmの体部最大径部分にも同様の施文がある。外面の調整はヘラミガキで、上部が斜め、中央部が横、下部が縦方向である。内面はハケ仕上げで、第2層から出土した。

265～270は壺の体部で、265は7条の櫛描直線文に扇形文を向かい合わせに重ねて描き、流水文風文様としている。直線文は4段以上認められる。弥生中期前半と思われる。胎土に微細な金雲母を含んでいる。266は櫛描斜格子文に櫛描直線文を重ね、さらに直線文の上に円形浮文を貼付する。267～270は櫛描波状文と櫛描直線文を交互に施したもので、268では波状文が2段になっている。266～270は弥生中期中葉～後葉のものである。268・269が第2層、その他は第3層から出土している。

甕 253～257は甕で、255・256が第3層、他は第2層から出土したものである。いずれも体部から「く」字状に外折して短くのびる口縁部で、端部に若干の差異はあるが、端部を肥厚させない。253は口径 19.8 cmで端部は丸くおさめる。254は端部に面をもち、端部は若干拡張する。口径は 17.1 cmで253とともに口縁部外面に煤が付着している。口径 25.5 cmと大きい255も端部は丸く、体部外面は縦ハケ調整である。256の口縁部は端部上端を少し引きのばしており、端面が凹線状になっている。口径は 16.9 cmで、外面は縦ハケ、内面は縦ハケ後ナデで仕上げている。外面全体に煤が付着している。257の口縁端部は少し上方に拡張し、肥厚して端面が凹面となっている。口径は 17.2 cmで、体部外面に縦ハケが一部残り、内面はナデのようである。外面下半に煤が付着し、再被熱による胎土の色調変化が認められる。これらの甕は弥生中期中葉の時期と思われる、257は若干時期が降る可能性がある。

高坏 258・259は垂下口縁の高坏で、258は垂下部に弱い凹線3条を施している。口径は 21.1 cm。259は垂下部のみの破片で、文様は施さない。258・259は第3層出土である。高坏脚部の260は外面と坏部内面がヘラミガキ、裾部内面は横ヘラケズリである。脚端部は上下に大きく拡張し、2条の凹線を施す。上下2段に円形透孔を推定5方向に穿つ。裾部径 18.3 cm、残存高 17.1 cmを測る。261も大きく開く以外は同様の形態で、凹線4条を施している。脚端径は 17.5 cmで、透孔は確認できない。同形態の262では端面に凹線は施さない。脚端径は 16.4 cmである。小型の263は脚端部を上方のみ拡張したもので、径 10.2 cmである。高坏坏部および脚部は中期後半の特徴を示している。脚柱部の264は調整不明で、下端に透孔の一部が遺存する。263が第3層、その他は第2層出土である。

弥生時代後期前半（図版 73・75・76、写真図版 80・82・84～86・89）

壺 271～283は壺口縁部で、271は口径 14.4 cmで、口縁端部がやや受け口状になるが、SD 202の壺A 5-1に分類できる。外面は縦ハケ、内面はナデであるが粘土紐接合痕が残っている。口径 14.0 cmの272と口径 14.2 cmの273はともに壺A 5-2で、外面・内面はともに縦ハケとナデである。273の内面には横ハケが残り、粘土紐接合痕も残っている。272の口縁端部直下には沈線を1条描く。274の長頸壺頸部にはヘラ描文があるが全容不明である。275・276は頸部が比較的短い壺A 6で、277も同じであろう。275・276は外面縦ハケ、内面横ハケ調整で、ユビオサエやユビナデも残る。275の口径は 12.8 cm、276は 11.6 cmである。277は口径 12.7 cmで、器表磨滅のため調整不明である。271・272・276は第3層、273～275・277は第2層出土である。

278は壺A 2に分類される。口縁端部を少し拡張し、凹線1条を施す。口径は 13.6 cmである。279～281は壺Cで、279の口縁端部は上下に少し拡張し、2条の凹線を施す。内外面ともヘラミガキで、口径は 14.2 cmである。280の口縁端部は下方に少し引きのばす。口径 15.3 cmで、口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面はヘラミガキである。281は口径 13.8 cmで、口縁端部を上方にわずかに拡張する。体

部外面はハケ、内面には粘土紐接合痕が残る。282は筒形の頸部から外反した口縁部で、端部を少し拡張し、垂直端面とする。内外面ともヘラミガキであるが、頸部内面は横ナデで粘土紐接合痕を残す。口径は11.7cmである。283は受口状の口縁部で、拡張した端面に2条の凹線を施す。時期的に新しい可能性もある。口径は13.8cm。以上の278～283は第3層出土である。

甕 286は口縁端面に3条の凹線を施し、口径14.7cm、体部外面は縦ハケ、内面はユビオサエ後ナデである。甕A4に分類される。287は甕A3で、口径15.7cm。3条の凹線を施す。288は口径14.8cm、垂直な端面に2条の凹線を施す。甕A4に分類される。289・290は甕E1またはDで、289の口径は18.4cm、290は口径15.7cmで、外面肩部にはタタキ成形の痕跡が残る。291は甕E2で、口径は14.8cm。器表が磨滅している。292は甕E1で口径は11.8cm、293は甕Fに分類でき、口径18.4cm。口径15.8cmの294は鉢Bの口縁に近いもので、大きく外反した後はねあげ状の端部となっている。時期が降る可能性もある。295は体部を欠失するが、甕Fと判断できる。口径は16.4cmである。これらの甕は、288が第1層、293・294は第2層、その他は第3層からそれぞれ出土した。

弥生時代後期末～古墳時代前期初頭（図版73・74、写真図版80・81・83）

壺 第2層出土の284は破片を復元図化したものであるが、体部最大径が下方に偏っていることから弥生後期末頃と判断した。底部はやや突出し、周囲をヘラケズリしている。体部外面は横ナデのようで、内面上部は横ナデで、粘土紐接合痕が残る。内面中部は横ハケで、下部はイタナデのようである。体部最大径は26.5cmである。285は第3層から出土した東海系の壺で、体部最大径部分が下部にあり、体上部が直線的にすばまる形態で、口縁部が有段になっている体部には櫛描で直線文と波状文を上から順に交互に描き、受け口状口縁部の内外面にも櫛描波状文を施し、口縁部屈曲部分の内面、波状文の下には刺突文を連続させている。刺突文原体は中空の不揃いの繊維（植物の茎か）を束ねたもので、列点文のようになっている。イタナデと横ナデで調整している。東海系の壺のうち、形態的には柳ヶ坪型壺と称されるものに類似している。ただし、285では体部に波状文・直線文を多く重ね、口縁部にも波状文を施文している点で違いがあるものの、中空で不揃い原体を使用した列点の刺突文は、近隣では見かけないもので、一例をあげると、浜松市森西遺跡出土の銅鐸形土製品に施されたものと酷似している。柳ヶ坪型壺は元屋敷式新段階の廻間Ⅲ式期に編年されており、古墳時代前期の時期が与えられる。

甕・鉢 296は壺の可能性が高いが甕に含めておく。外上方に長く直立した口縁部で、口径13.0cm。端部には丸みがある。丸みのある体部はタタキ成形で、内面はヘラケズリ調整である。297は尖底に近い平底で縦に長い体部はやや歪んでいるが最大径は下部にある。タタキ成形後ハケを施し、底部付近はヘラケズリをおこなっている。内面はハケ後ナデ仕上げである。口縁部は体部から外反し、口径15.5cmで、端部は丸い。体部最大径18.0cm、器高20.6cmである。やや小型の298は尖底で口径11.9cm、器高13.4cm、体部最大径13.1cm。丸みのある体部外面は多方向のハケ、内面は上からヘラケズリ、イタナデ、ハケの調整である。口縁部は内湾ぎみで、端部は丸い。内面は横ハケである。口径11.8cmで小型の299は、体部タタキ成形後不調整、内面イタナデ調整で、口縁端部は尖りぎみで丸い。以上の296～299は第2層から出土した。300の口縁部は叩き出し技法のままで、端部は丸く仕上げている。301の口縁部は北近畿系のナデ甕に近く屈曲する。口径15.5cmで、体部はタタキ成形、内面はヘラケズリである。302の口縁端部は上方に引き上げて丸くおさめる。タタキ成形で、口径は12.8cmである。303は受け口に近い口縁部で、口径は13.8cm。山陰系の304・305のうち第1層出土の304は口径17.8cmで、体部外面はハケのようである。口縁端部はやや尖りぎみで丸い。305は口縁端部に面をもち、口

径 13.3 cm で、壺の可能性がある。306 は甕肩部片で、線刻にみえる部分がある。あるいは物が当たって刻まれたものかもしれない。

307 の鉢は口径 11.9 cm、器高 6.9 cm で、底径 4.3 cm とやや大きくユビオサエで突出させていることから、時期が後期前葉まで遡る可能性がある。内面はイタナデ、外面はハケのちナデであるが、粘土紐接合痕が残る。第3層出土。第2層出土の308は口径 15.7 cm とやや大きく、有孔鉢の可能性もある。タタキ成形後内外面にハケを施す。309 も第2層出土で、丸みのある平底と丸みのある体部で、口縁部は外反気味で端部は丸くおさめる。口径 10.3 cm、器高 5.9 cm。

底部 (図版 74・75、写真図版 81・83～86)

詳細な時期を決めがたい底部をまとめて記述する。

310～321 は弥生時代中期から後期前葉のものであろう。310～312 は中期後半の大型壺の底部と思われ、310 の底径は 16.7 cm、311 は 11.2 cm で、ともに外面はヘラミガキ調整、底面はヘラケズリとなっている。312 の底径は 11.8 cm で外面はハケである。胎土に大粒砂粒を多く含んでいる。313 は底径 9.3 cm。

314～317 は内面の形態と体部が直立ぎみであることから、中期前葉と考えられる。319・320 もその可能性がある。317 は内面にオコゲ状のものが付着していることから、甕であろう。318 は壺または鉢で、内外面ヘラミガキである。321 は外面にヘラ描きで直線を3条以上描いており、記号文のようである。

322～353 は弥生後期前葉から古墳前期初頭と思われる底部である。322 は体部に線刻文様があり、底径 6.2 cm、残存高 10.9 cm で、壺と思われる。第2層出土である。323 は底径 5.5 cm、タタキ成形で外面にヘラミガキを加え、内面はハケである。324 は底径 6.0 cm。325・326 はともにタタキ成形で、326 には外面にハケを加える。325 の内面にはヘラミガキを施す。326 は木葉底である。327 はタタキ成形後内面にヘラミガキを施す。328 は底部周囲をイタナデする。330・331 の底面は上げ底状になっている。332 はタタキ成形後外面ナデである。333 は径 3.4 cm の突出しない小さな平底で、庄内期前半のものであろう。336 はタタキ成形後内外面にイタナデを施す。337 は東四国の胎土である。338 は 339 とともに底部輪台技法の痕跡が残る。340 は尖底のような小さな上げ底で、底面にヘラで十字を描く。大きな上げ底の 341 は金雲母・角閃石を含み褐色を呈する。東四国の胎土である。342 は脚台に近い形態である。344 は外面ハケのちヘラミガキである。346 は外面ハケ・イタナデ後ヘラミガキで、内面はイタナデである。底面にヘラ描き線を2条以上線刻している。349 は底面にタタキ痕を残す。350 は底面に靱圧痕が認められる。352 は中期前葉の可能性もある。353 は第1層出土で、底径は 8.2 cm と大きい器壁が薄い。

354～357 は有孔鉢で、354 の孔は楕円形を呈するが欠損部分が多い。355 は尖底に近い径 3.7 cm の平底で、径 9 mm 前後の円孔を内側から穿つ。356 も尖底に近く、底径 2.4 cm で、径 8 mm 前後の円孔を穿つ。357 は尖底で、径 8 mm 前後の円孔を穿つ。タタキ成形で、内面はハケである。

高坏・器台 (図版 75、写真図版 85)

358・359 は有稜高坏坏上部で、358 は口縁端部ににぶい面をもつ。359 の口縁端部は外傾する面をもつが鈍い。坏上部下端外面ににぶい凹線を2条施す。360～362 は器台の口縁部で、360 は口縁端部を下方に拡張し、端面上下に沈線を施す。沈線間に竹管文を大小4個重ねた同心円文の間に斜線を引いて連続同心円文としているが、小片のためすべて連続しているかどうかは不明である。361 は口縁端部を下方に拡張し、端面に5条の凹線を施す。362 は口縁端部を下方に拡張するが、拡張部分が剥落して擬口縁となっている。端面には複合鋸歯文を斜格子で描く。363 は高坏と思われる破片で、坏上部が大きく外反し、端面は垂直な凹面となっている。後期前半のものかもしれない。364 は大型器台体部で、破

片中央部に沈線があり、その下に上端を直線で区画した複合鋸歯文を描いている。東四国の胎土である。

脚部 (図版 75・76、写真図版 85～87・89)

365～379は脚部で、弥生時代後期前半と後期末頃のものがある。365は第3層から出土した脚部で、端部は短く外反し、端部には面をもつ。形態的にはSD 202の脚C 2に近い。367の外面には上下2段にそれぞれ6条以上、3条以上の沈線を施している。後期前葉のものであろう。368は脚C 2の形態の脚部で、円形透孔を4方向に穿つようである。369は高坏Hの脚柱部に近い形態であるが、4方向の円形透孔を同じ位置で2段に穿っている。坏底部との境に充填する円板が剥離している。370は円形透孔を推定3方向に穿つ。371は脚C 1に似る。外面へラミガキで、円形透孔を4方向に穿つ。372の坏底部内面はへラミガキである。中実の373は推定4方向の円形透孔を穿つ。374～379は脚裾部である。374は脚Aで、端面に凹線を1条施す。375は径24.8 cmで、口縁部の可能性もあるが、脚Aとした。端面に5条の凹線を施す。376には円形透孔が1箇所確認できる。端部を上方に拡張している。377は壺口縁部の可能性がある。378には円形透孔の一部が遺存する。379の端部上面には4条の沈線が施されている。

古墳時代前期～古墳時代後期 (図版 76・77、写真図版 87～89)

甕 380～386は甕である。380は第2層から出土した。口径14.8 cm、器高24.7 cmで、口縁端部を内側に肥厚させる。布留式土器の範疇でとらえられる。381は口縁部を欠失するが、尖底に近い底部でやや肩が張り、タタキ成形でハケを加えていることから、庄内後半～布留初期の時期ととらえている。382の口縁端部は外側に少し引き出したようになっており、古墳時代中期のものであろう。東四国の胎土である。383は口径15.4 cm、器高31.5 cmで、外面ハケ、内面横へラケズリで、口縁端部は水平に近い面をもつ。古墳時代中期の可能性もある。384・385は内傾する口縁端面を凹ませている。古墳時代前期であろう。386はやや長胴の甕で、器高28.7 cm、腹径25.1 cmで、口径は17.0 cm。古墳時代中期である。

壺 387～392は壺で、387・388は甕口縁部の可能性もある。389の肩部には3個一組の竹管文を4方向に施文している。古墳時代中期後半～後期前半であろう。390の肩部の竹管文は2個のみ残存している。389よりやや古い可能性がある。391・392の小型壺はともに口縁部を欠損する。丸底でやや扁平な体部であることから、古墳時代中期前半の所産であろう。

須恵器 393の坏蓋はTK 10型式期でも古相のもので、口縁端部にはにぶい凹面の段を残す。口径15.0 cm。394はTK 43型式期と思われる坏で、口径は11.6 cmを測る。395は坏Aもしくは壺などの蓋である。内外面にへラ記号が線刻されている。口径11.6 cmである。

中世 (図版 77、写真図版 89)

396は鏝釜と呼称される埴で、口径は19.2 cm。14世紀後半の所産であろう。397は埴と思われるが小片である。外面に煤が付着している。398は瓦質の火舎である。すべて北東部から出土しており、東2区と同一土層であった可能性が高い。

石器 (図版 83・84、写真図版 100・101)

石鏃S 2は凹基のもので、少し風化がみられる。完形品である。長さ16.6 mm、幅15.2 mm、厚さ3.7 mm、重さは0.6 gを計る。凹基式石鏃S 4は先端と基部片側を少し欠失している。残存長は21.9 mm、残存幅13.7 mm、厚さ4.0 mmで、重さは1.0 gである。石錐S 5の先端は磨滅している可能性がある。装着部は折損しているため形状は不明である。残存長は30.1 mm、残存幅14.9 mm、残存厚は4.8 mmで現重量は1.6 gである。S 6は石錐と思われるが、基部が欠損している。先端部は使用による磨滅が認められる。残存長23.9 mm、残存幅11.7 mm、残存厚5.7 mm、残存重量1.7 gでやや風化している。S 7は楔形石器で、

一部欠損している可能性がある。上部には階段状剥離が認められる。長さ33.0mm、幅48.1mm、厚さ8.0mm、重量は14.9gである。S8は一部に自然面が残る楔形石器で、上端の階段状剥離はつぶれが認められ、下端はつぶれ方が著しい。長さ34.8mm、幅34.7mm、厚さ7.2mm、重さは8.1gである。S2・S4～S8は金山産のサヌカイト製で、第1層～第3層から出土した。

S11は流路上面から出土したスクレイパーで、サヌカイトであるが、他とは石質が異なっている。上端には層状で階段状の剥離が認められるが、自然面と剥離が混在している。下部には層状の剥離が認められる。自然面が多く残る。長さ47.1mm、幅34.7mm、厚さ12.2mm、重さ19.3gである。S12はスクレイパーと判断した。一部に階段状剥離や微細な敲打が認められる。サヌカイト製であるが、石に白い斑点がみられ、金山の特徴である細かなフィッシャー7があまり見られない。長さ91.8mm、幅55.1mm、厚さ16.3mmで重さは76.7gである。S14は使用痕のある剥片で、中央部分に使用痕が認められる。反対側縁には層状の剥離が認められる。長さ49.2mm、幅22.0mm、厚さ6.9mm、重さ5.7gを計る。

S15は卵形の礫で、長さ6.30cm、幅4.85cm、厚さ4.00cm、重さ158.9gを計る。全面が平滑になっており、磨石・敲石と判断した。花崗岩の可能性はある。

木製品 (図版89、写真図版104)

W10は天秤棒である。端の一部を欠失するが、残存長98.1cm。径4.0cmの丸太でやや反りがある。コナラ属アカガシ亜属を使用している。W11・W12は先端を尖らせた杭で、W11は丸太を使用し、樹皮が残っている。残存長は67.4cm、太さは4.1cm程度である。W12は先端のみの破片である。分割材である。

② 東2区流路

弥生時代中期初頭の土器が多くを占めるが、青磁碗・布目瓦や瓶の磁器製蓋が混在出土している。

弥生時代中期初頭 (図版77・78、写真図版89～91)

399は口径17.4cmの壺で、口縁端部に刻目を施し、頸部および体部に半截竹管直線文を施し、頸部では上に沈線を加えている。400・401は壺口縁部で、400の口縁端面の幅広の刻目には縄文に似た圧痕が残っている。401の頸部と肩部には3条の櫛描直線文を施している。

402～405は甕である。402と403は逆「L」字形口縁で、端部に刻目を加える403と、無文の402がある。403の外面には煤が付着している。404・405は如意形口縁で、405の端面には刻目を密に施し、口縁下に直線文を多く描き、下に三角形の刺突文を連続させている。直線文は6条の櫛原体で5回に分けて施しているようである。煤付着の404は無文である。中期初頭の土器はいずれも混和材の砂粒径が大きい。

406は壺の頸部と思われ、ヘラ描沈線の直線文が4条以上確認できる。407の壺体部には縄文類似圧痕文の突帯を貼り付け、半截竹管による直線文を4(8)条以上施文する。408は甕の可能性のある破片で、3条単位の直線文を4段に施す。409は甕の破片で、口縁下にヘラ描沈線を描いた後、半截竹管で沈線間の1条おきに直線文を描いている。410の壺肩部には2条の櫛描波状文と4～5条の櫛描直線文を交互に施文する。411には8条以上の弧線が描かれている。壺体部と思われる。

412～414の底部にも大粒の砂粒を含む。415は中期後半かもしれない。円板状の底部をもつ416の外面には3条の櫛描直線文を3段にめぐらす。鉢と思われる。417の高坏脚柱部外面には、上半部に上から横三角刺突文、5条の櫛描直線文3段、横三角刺突文を施し、下半部には横三角刺突文の間に2段の櫛描直線文、4条ほどの波状文、直線文を施文している。

その他 (図版78、写真図版90・91)

418は青磁碗で、口縁端部が外反する。14世紀頃のものと思われる。419は凹面に布目、凸面に斜格

子タタキの平瓦で、須恵質である。420は10.8cm長の大型の土鍾であるが、約半分が欠損している。土師質。421は磁器製で瓶栓と思われる。上面に「手柄」の文字があり、この場所に醤油屋が存在していた。

③ 表面採集

石棺部材 (図版85・86、写真図版102)

東区西端南部で表土上に石の集積がみられた。その中に石棺部材の可能性のある破片が混在していた。S 19は残存長約50cm、残存幅約32cm、残存厚約21cmのほぼ直方体の破片であるが、石棺の長側石の破片と判断し、厚さおよび外面下端を面取りすることから長持形石棺と推定している。外表面は剥落等があり、部分的にコンクリートが付着し、下面など一部に平滑な表面が残存するにすぎないが、石棺内面下端の段状割り込み部分は遺存している。長持形石棺底石の場合、長側石が乗る部分は一段掘り下げられ、そこに組み合わせるために長側石の内面下端も断面「L」字形に割り込まれている。S 19では長側石として立てた場合の割り込み高さは4.5～6cmで、その深さは3.5～4.5cmである。この割り込み断面形が直角「L」形ではなく鈍角になっているだけでなく、底面とも鈍角になっていることも長持形石棺と共通する。この石棺部材の石材は流紋岩質凝灰岩との同定結果を得ている。姫路市内から加西市にかけて竜山石や高室石といった凝灰岩製の長持形石棺で、古墳から持ち出された部材が多く確認されている。本例もその一つとして加えることができよう。

2. 平安時代以降

(1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡の柱穴内から出土した遺物で図示したものについて述べる。

① S B 1 (図版78、写真図版92・94)

須恵器埴口縁部片の422がS P 053の柱痕、瓦器埴の底部423がS P 067の柱痕からそれぞれ出土した。口径15.7cmの422は軟質で、423の表面下は土師器色に近い。見込みに斜格子暗文が遺存している。

ほかに多くの柱穴の掘形から出土したものには、須恵器埴の小片や土師器甕体部や小片などがある。

② S B 2 (図版78、写真図版92～94)

424・425は須恵器埴である。S P 022柱痕から出土した424は口径15.3cm、器高5.0cmで、回転糸切りの平底は全く突出しない。同様底部の425は口径15.4cm、器高4.6cmで、S P 054の柱痕底から出土した。ともに平安時代末～鎌倉時代初頭の12世紀末～13世紀初頭である。S P 076の柱痕から出土した土師器甕426～428のうち、426・427は同一個体の可能性がある。428は口径21.8cmで、3点とも12～13世紀のものと思われる。429の土師器小皿はS P 063の柱痕から出土した。口径8.0cm、器高1.25cmで、底面は回転ヘラキリである。

他の柱穴の柱痕や掘形から出土した土器には土師器の甕・皿などの小片・細片がある。

③ S B 3 (図版78、写真図版92)

430はS P 143の柱痕から出土した須恵器埴の口縁部小片である。他の柱穴の柱痕から須恵器埴小片・土師器細片、掘形からも土師器小皿小片や土師器細片が出土している。

④ S B 4

図示できなかったが、柱穴掘形から須恵器や土師器皿の小片、須恵器甕片などが出土している。

⑤ S B 9 (図版79、写真図版92)

土師器甕・埴の432・433や、434の土師器小皿はS P 146の柱痕から出土したものである。432は

口径 35.45 cm で、口縁部内面を横ハケする。433 はタタキ成形で、外面に煤が付着している。435 の土師器皿は口径 11.9 cm と大型で、形態から埴の可能性もある。S P 124 柱痕出土。436 の瓦質三足片は S P 130 から出土したものである。437 の須恵器埴口縁部細片は S P 172 の柱痕出土で、口径 15.7 cm。438 の瓦器埴は口径 17.4 cm と大きい、もう少し小さくなる可能性がある。S P 234 の柱痕上端から出土した。439 の瓦器皿片は内面に暗文がある。S P 169 の柱痕埋土から出土した。

その他の柱穴から須恵器埴小片や土師器皿片、土師器甕片などが柱痕・掘形から出土している。

鉄器 (図版 88、写真図版 104)

M 2 は S B 9 の S P 169 柱痕埋土出土のもので、鉄鎌先端片の可能性はある。

⑥ S B 5

土師器の細片が S P 205・292 の掘形や S P 207 の柱痕から出土している。

⑦ S B 7

土師器小皿の破片が S P 201 の柱痕から出土している。

⑧ S B 8 (図版 78、写真図版 92)

431 は S P 372 の柱痕から出土した土師質管状土錘である。片方を欠損し、残存長 3.5 cm。2.9 g である。図示できなかったが、土師器の小片は S P 366 掘形と S P 372 の柱痕・掘形から出土している。

(2) 柵列跡・塀跡

① S A 2

図示していないが、S P 355 の掘形と S P 336 の柱痕から弥生後期～古墳前期の甕小片が出土している。

② S A 3 (図版 80、写真図版 94)

465 は径 9.7 cm の脚台部で、土師器鉢の可能性はある。S P 339 の柱痕から出土した。S P 338 の柱痕からは弥生中期前葉の土器片が出土している。

(3) 木棺墓

① S X 270 (図版 79、写真図版 93)

440 は白磁の小壺で、腹径 5.6 cm、器高 4.0 cm、口径 2.0 cm で口縁端部の一部を欠失する。体部は沈線で 6 分割する。口縁端部は外反して上方にわずかにのびる。底面は露胎である。441 は白磁の皿で口縁の一部を欠失する。Ⅱ類。口径 9.7 cm、器高 3.2 cm、高台径 3.2 cm で、高台とその少し上は露胎である。口縁端部は丸い。内面には目跡が残る。442 はⅣ類の白磁碗で、口径 15.8 cm、器高 6.9 cm、底径 5.2 cm である。外面の施釉範囲は上半に限られる。12 世紀末頃である。須恵器・土師器の細片も出土した。

② S X 187 (図版 88、写真図版 104)

墓壙内から出土した鉄器片 M 1 は、幅 7.2 mm で断面は四角く、残存長は 1.8 cm である。釘と思われる。また、図示できなかったが、須恵器と土師器の細片が出土している。S X 270 と同時期と思われる。

(4) 井戸

① S E 182 (図版 79・87・88、写真図版 93～95・103)

土器類 土師器皿には石組底で木製品とともに出土した 443、石組より上層から出土した 444、出土層位不明の 445 がある。また、446～448 の瓦は 446 が石組より上層から出土した。

443 は歪が大きい、口径 7.6 cm、器高 1.5 cm の土師器小皿で、外面には製作時の掌痕が残る。444 は口径 10.3 cm、器高 2.1 cm で、器表の剥離が激しい。445 は器高 2.8 cm と深いもので、口縁部も体部途中から外反している。口径 10.5 cm で、薄手のつくりである。器表が剥離しており、調整痕は不明である。

446 は厚手の平瓦で、凹面に布目が残る。凸面はナデのようである。土師質のような軟質である。447 は須恵質の平瓦片で、凸面は斜格子叩き、凹面には布目が残る。448 は土師質の丸瓦片で、凹面には布目と縫い合わせ目が残る。凸面はナデである。

木製品 W1～W7 は曲物側板の残片で、W8 は曲物底板、W9 は棒状製品である。いずれも井戸石組底から出土したものである。曲物側板は脆弱であったため小片に分かれた。内面には刃物により縦に線が入る。合わせ目は遺存していなかった。W6 では高さが 7.7 cm である。材は底板とともにヒノキである。W8 は概ね楕円形を呈するが、最大径部分は直線となっている。長径 20.1 cm、短径 18.5 cm で、厚さは 5.5 mm である。内面には端から 0.5～1 cm 内側にケガキ線があり、側板がのっていた部分であろう。端に偏った位置に刃物による傷が数条認められる。W9 は不明棒状製品である。箸状製品のようにみえるが、先端の形状が異なり、切り込みがあるが斎串とは断定しがたい。残存長は 7.1 cm である。

(5) 柱 穴 (図版 80・84、写真図版 93・94・101)

組み合って建物跡と判断したもの以外の柱穴から出土した遺物を以下に述べる。

① P 2

449 は西端橋台区の P 2 柱痕上部から出土した丸瓦片で、土師質である。凸面はナデ仕上げ、凹面には布目が残る。

② P 8

西端橋台区の P 8 から出土した 450 の土師器小皿は口径 8.7 cm、器高 1.7 cm で、底面には粘土のひねり痕や乾燥時の箕子状の圧痕が残っている。ほかに須恵器埴や土師器の細片が出土している。451 の土師器小皿は、柱穴内下層から出土したもので、底面には粘土のひねり痕が残る。口径 9.1 cm、器高 1.7 cm である。下層からはほかに須恵器捏鉢や土師器甕の破片も出土した。

③ P 10

西端橋台区 P 10 出土の 452・453 は縄文土器である。出土層位は不明であるが、地山には縄文土器が含まれることから、掘形や柱痕に混入したものであろう。452 は波状口縁の深鉢口縁部片で、沈線文様と縄文を施し、一部磨消している。453 は深鉢体部片で、沈線と縄文および磨消縄文が認められる。内面は条痕である。両者とも胎土には微細な角閃石を含むことから、同一個体かもしれない。縄文後期。

④ P 13

西端橋台区 P 13 上面から出土した S 17 は砥石の可能性はある。自然石に近い形状であるが、側面の 3 面が平滑で、砥石の可能性があると判断した。長さ 13.6 cm、幅 7.6 cm、厚さ 8.1 cm で重さは 1,265 g。

⑤ S P 008

掘形出土の 454 は須恵器埴の底部で、回転糸切りの平臺台は少し突出する。11 世紀代のものである。

⑥ S P 023

須恵器坏 A の 455 は掘形から出土した。小片である。口径 11.6 cm、器高 3.0 cm である。

⑦ S P 027

456 の土師器小皿は掘形出土のものである。口径 8.2 cm、器高 1.2 cm で、底部は回転ヘラキリである。

ほかに柱痕・掘形から土師器小片が出土している。

⑧ S P 028

457 は柱痕から出土した須恵器碗の底部である。見込みに段をもち、回転糸切りの平高台は少し突出している。11世紀代中頃のものであろう。

⑨ S P 030

土師器小皿 458 は柱痕から出土した。口径 8.7 cm、器高 1.3 cm である。

⑩ S P 046

459・460 は瓦器碗で、459 は柱穴上面から出土した。土師質で、表面は殆ど磨滅している。口径は 14.2 cm である。460 は底部で、掘形出土である。底径 4.0 cm で、表面は磨滅し、土師質である。ほかに柱痕・掘形から土師器の小片が出土している。

⑪ S P 075

461 の須恵器碗、土師器碗・鉢の 462・463 は柱痕から出土したものである。461 は口径 14.8 cm でやや深みのある体部であることから、11世紀代の可能性が高い。462 の平底に近い底部は回転ヘラキリ後ロクロナデを施す。底径 7.9 cm。463 は回転糸切りで径 6.8 cm の突出した平底である。柱痕からは須恵器壺・甕や土師器羽釜・甕の破片が出土している。

⑫ S P 244

柱痕から出土した 464 は須恵器鉢である。口径 25.8 cm、口縁端部は上方にはね上げ、端面は垂直である。12世紀末～13世紀初頭頃と思われる。ほかに柱痕から土師器甕の破片が出土している。

(6) 溝

平安時代以降の溝から出土した土器で図示できるものはなかったが、S D 14 からは土師器小片、S D 161 からは古墳時代須恵器高坏片や甕片・土師器の破片、S D 166 では土師器の小・細片が出土している。また、S D 168 では縄文土器小片や6世紀の須恵器坏・甕片のほか平安時代の須恵器碗細片・土師器坏片が出土し、S D 307 からは弥生中期前葉の壺片等や須恵器碗の細片が出土している。

(7) その他の遺構

図示できなかったが、S X 178 からは古墳時代と平安時代の須恵器、土師器の小片が出土している。

(8) 包含層・攪乱出土遺物

① 包含層 (図版 80・81・83、写真図版 94・96・97・99・100)

縄文・弥生土器 466・467 は弥生中期前葉のもので、466 は甕で、如意形口縁である。施文はしていないようである。467 の底部には大粒砂粒を含む。ともに東区東端から出土した。469～478 は縄文土器で、473～478 は S P 057 の截ち割りの際に地山から出土し、他も遺構面といった地山に含まれていたものである。469・470 は波状口縁の深鉢口縁部で、西区中央部出土である。469 には波状の沈線を平行に多く施す。470 は波頭部であるが、器表磨滅により沈線は遺存しているものの、縄文は確認できない。中期末の時期であろう。471 も口縁部付近の破片で、中期末のものであるが、沈線による文様のみ確認できる。西端区出土である。472 は器表の磨滅が激しく、沈線文様が存在するようであるが、確認できない。西区中央部出土。473～478 は粗製深鉢の体部で、同一箇所出土で、胎土からも同一個体であろう。す

べて外面は横条痕で、内面はナデである。473はくびれた部分であることから、縄文晩期のものであろう。

瓦 468は平瓦で、土師質である。凸面には斜格子の叩き、凹面は布目をヘラケズリで消している。西端区北西隅で出土したものである。

石器 S1は遺構面から出土した石鏃で、基部近くが外側に張り出したやや特異な形態のものである。長さは22.9mm、幅10.9mm、厚さ4.5mm、重さ0.6gで、サヌカイト製であるが風化により稜の摩耗が著しく、リングやフィッシャーが不明瞭となっている。東区西端の流路北西側の遺構面から出土した。

② S R 144ほか攪乱 (図版81・82・84・88、写真図版96～99・101・104)

479～490はS R 144から出土した。479・480は弥生後期の底部である。481・482は燻瓦の軒平瓦である。481は均整唐草文、482は青海波文である。483・484は燻瓦の丸瓦である。どちらも玉縁部分まで遺存している。485は鬼瓦片である。東鬼形の覆輪部分で、鬼文様は施さないものであろう。ただし、覆輪下部に彫刻の一部が残存する。覆輪の縁は角張り、上端は外方に丸く張り出す。486は磁器皿で、内面には呉須で蛸唐草などを描き、外面にも文様を描いている。現破断面のほぼ全体に欠け継ぎが認められる。487は青磁の鉢で、角鉢のようである。外面には魚が彫刻されているようである。488は陶器に近い硬質土師器の鉄鉢形埴である。外面にはタタキ痕が残る。489は細かい胎土の陶器で、花活けであろうか。底径は8.6cm。以上の481～489は近世の所産と思われる。490は土師器皿で、口縁端部を内側に折り曲げたもので、口径7.7cm、器高1.0cm。焼成良好で、13～14世紀のものであろう。492は直径4cmほどの瓦質の棒状製品である。一部に銅線の痕跡がある。道具瓦の一部であろうか。

491はS B 5北側の攪乱から出土した風炉で、口径21.0cm、外径26.8cm、高さ11.8cmで、楕円形の透孔を4方向に穿つ。内面底部には粗いハケを施す。胎土に金雲母を多く含んでいる。493は土師質の不明土製品で、東区中央部の川沿いの攪乱から出土した。1mmほどの刺突を背側以外に密に施し、褐色のスリップも背以外にかかる。須弥山を表現したものであろうか。高さ7.1cm、下端での長径6.4cm、短径4.6cmである。同じ攪乱からM4の古銭も出土した。遺存状況が悪く、元祐通宝の可能性があり、北宋銭である。西区攪乱出土の494は口径8.5cmの土師器皿で、底部はヘラキリである。燻瓦495は巴文の軒丸瓦で西区東寄りの攪乱から出土した。同じ攪乱からは石白S18も出土した。上部の破片であるが、凝灰岩製で、直径40.0cm、推定12.5cmの深さに彫り込み、周囲を面取りしている。

東2区の攪乱層からは496～503が出土した。496は弥生土器の脚台部と思われ、ユビオサエが顕著である。497はイイダコ壺の形態に似るが、塩壺であろう。内面底部に布目があり、粘土の接合痕が顕著である。厚手のつくりで、口径5.4cm、器高8.1cmで、底部は丸みのある平底である。型作りの可能性がある。498は瓦質羽釜の口縁部片で、器表が磨滅している。499は施釉陶器の灯明具で、芯置きのある切り欠きがある。底面と内面は露胎である。500は陶器埴の底部で、高台には3方向に抉りがある。内面に釉の斑点があることから、上部には施釉しているようである。501は砂粒を多く含んだ土師質で、火鉢であろうか。内面下部が被熱により黒色化している。胎土が粗いことから、鋳型の可能性も残る。502は不明土師質土製品である。長径3.1cm、短径1.4cmの小判形で、厚さは6mmである。偏った位置に径2mm程度の円孔を穿っている。503は磁器の瓶栓(王冠)であろう。かつてこの地に醤油屋があったことから、その関係かもしれない。上半部に施釉し、直径6mmの円孔が貫通している。内部には鉄が詰まっており、蓋が外れず密閉するための針金と思われる。大正時代～昭和初期の清酒の硝子瓶の栓(王冠)に例がある。

第4章 自然科学分析結果

第1節 竹の前遺跡出土のサヌカイト製石器の産地推定

株式会社 パレオ・ラボ

1. はじめに

姫路市手柄に所在する竹の前遺跡より出土した弥生時代のサヌカイト製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は、竹の前遺跡より出土したサヌカイト製石器、計15点である。時期は、弥生時代中期～後期とみられている。石器はいずれも風化層に覆われていたため、サンドブラストを用いて自然面を避けつつ風化層を一部除去し、新鮮面を露出させて測定箇所とした。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000 μ A、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

分析方法は、黒曜石産地推定法として用いられている蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法(例えば望月2004)を用い、分析対象をサヌカイトに置き換えて適用した。方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)とルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps; count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) Rb 分率 = $Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 2) Sr 分率 = $Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 3) $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$
- 4) $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度 \times 100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸 $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$ の判別図)を作成し、各地のサヌカイトの原石データと石器のデータを照合して、産地を推定する方法である。サヌカイトの原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を表出させた

上で、分析対象の石器と同様の条件で測定した。第3表に各原石の採取地とそれぞれの試料点数を示す。

第3表 原石採取地と判別群名称

都道府県	エリア	判別群	原石採取地(試料点数)
奈良	二上山	春日山	春日山みかん畑内(10)、株山(61)
香川	讃岐	国分台1	自衛隊演習場付近(5)、神谷神社前(13)、高産霊神社谷(12)、国分台下みかん畑(5)、神谷(17)、蓮光寺(26)、出雲神社裏手(8)
		国分台2	
		国分台3	
		赤子谷・法印谷	赤子谷第1地点(5)、赤子谷第2地点(5)、法印谷(10)
		金山1	
		金山2	北峰道路脇(10)、金山南麓(31)、金山北東部(27)
		城山	城山城山南側(5)、城山北側(5)
		雄山雌山	雄山(5)、雌山(5)
		双子山	双子山南嶺(10)

3. 分析結果

第4表に石器の測定値および算出された指標値を、第5図と第6図に、サヌカイト原石の判別図に石器の分析結果をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

測定した石器15点のうち、14点が金山1、1点が赤子谷・法印谷の範囲にプロットされた。第4表に産地推定結果を示す。比較対象となる原石産地が少なく、他の産地の可能性が無いとは言い切れないが、少なくとも判別図の一致しなかった産地のサヌカイトではないといえる。

第5表に、試料の一覧と産地推定結果を示す。15点とも讃岐地方産のサヌカイト製石器であった。

第4表 分析値および産地推定結果

試料No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	$\frac{Mn*100}{Fe}$	Sr分率	$\log \frac{Fe}{K}$	判別群	エリア	試料No.
1	213.5	187.4	8464.1	508.9	1355.4	268.9	1563.0	13.77	2.21	36.67	1.60	金山1	讃岐	1
2	211.8	192.9	8588.3	533.2	1397.7	275.7	1644.2	13.85	2.25	36.30	1.61	金山1	讃岐	2
3	215.7	192.7	8638.3	534.1	1397.0	277.1	1651.0	13.84	2.23	36.20	1.60	金山1	讃岐	3
4	219.3	194.9	9595.2	502.8	1482.7	275.8	1697.0	12.70	2.03	37.46	1.64	赤子谷・法印谷	讃岐	4
5	177.1	159.3	7063.9	441.4	1151.0	238.4	1380.7	13.75	2.26	35.84	1.60	金山1	讃岐	5
6	220.2	197.0	8730.9	534.7	1387.9	279.2	1646.6	13.89	2.26	36.06	1.60	金山1	讃岐	6
7	215.2	194.3	8670.1	542.7	1408.1	283.5	1653.4	13.96	2.24	36.22	1.61	金山1	讃岐	7
8	212.2	192.7	8564.9	514.3	1352.3	267.5	1580.1	13.85	2.25	36.41	1.61	金山1	讃岐	8
9	217.3	195.3	8727.3	535.0	1393.3	276.8	1633.1	13.94	2.24	36.30	1.60	金山1	讃岐	9
10	202.6	184.2	8181.8	480.2	1275.2	252.7	1492.9	13.72	2.25	36.42	1.61	金山1	讃岐	10
11	208.5	187.1	8383.9	521.5	1372.6	269.0	1618.5	13.79	2.23	36.29	1.60	金山1	讃岐	11
12	201.0	180.7	8144.6	490.7	1294.7	257.0	1505.7	13.83	2.22	36.49	1.61	金山1	讃岐	12
13	192.2	171.3	7655.2	468.9	1233.9	248.9	1459.3	13.75	2.24	36.17	1.60	金山1	讃岐	13
14	130.9	117.1	5124.7	327.7	843.8	175.3	1019.8	13.84	2.28	35.66	1.59	金山1	讃岐	14
15	177.8	158.4	7009.3	436.6	1162.9	234.6	1374.2	13.61	2.26	36.25	1.60	金山1	讃岐	15

第5表 分析対象一覧

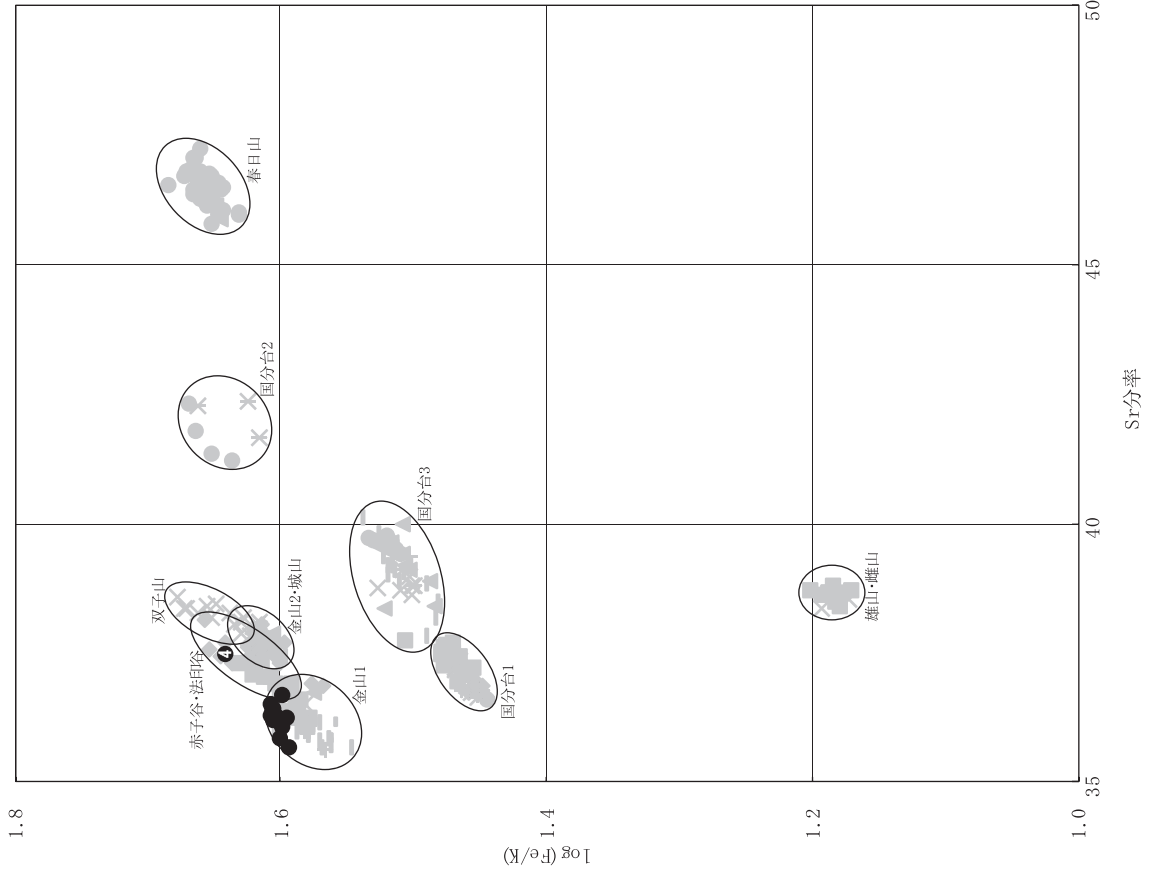
試料No.	地区	出土遺構	出土層位	備考	ネーミング No.	産地
1	西区中央		面精査		655	讃岐
2	西区南寄り	SD164			119	讃岐
3	東2区		砂利層		627	讃岐
4	東区(北東端から10~20m)	旧河道	第2層(暗灰色粘質土~灰色砂層)	(流路)	470	讃岐
5	東区(北東端から30~40m)	流路	第3層	(東側下層)	539	讃岐
6	東区(北東端から20~30m)	流路	第3層		666	讃岐
7	東区中央		第3層	アゼ中出土	673	讃岐
8	東区	SD340		サヌカイト集中部	254	讃岐
9	東区	SD340		サヌカイト集中部	258	讃岐
10	東区	SD340		サヌカイト集中部	266	讃岐
11	東区西側	SD340			675	讃岐
12	東区西側	SD340		サヌカイト集中部	676	讃岐
13	東区	SD340		サヌカイト集中部	1078	讃岐
14	東区	SD340		サヌカイト集中部	1080	讃岐
15	東区	SD340		サヌカイト集中部	なし	讃岐

4. おわりに

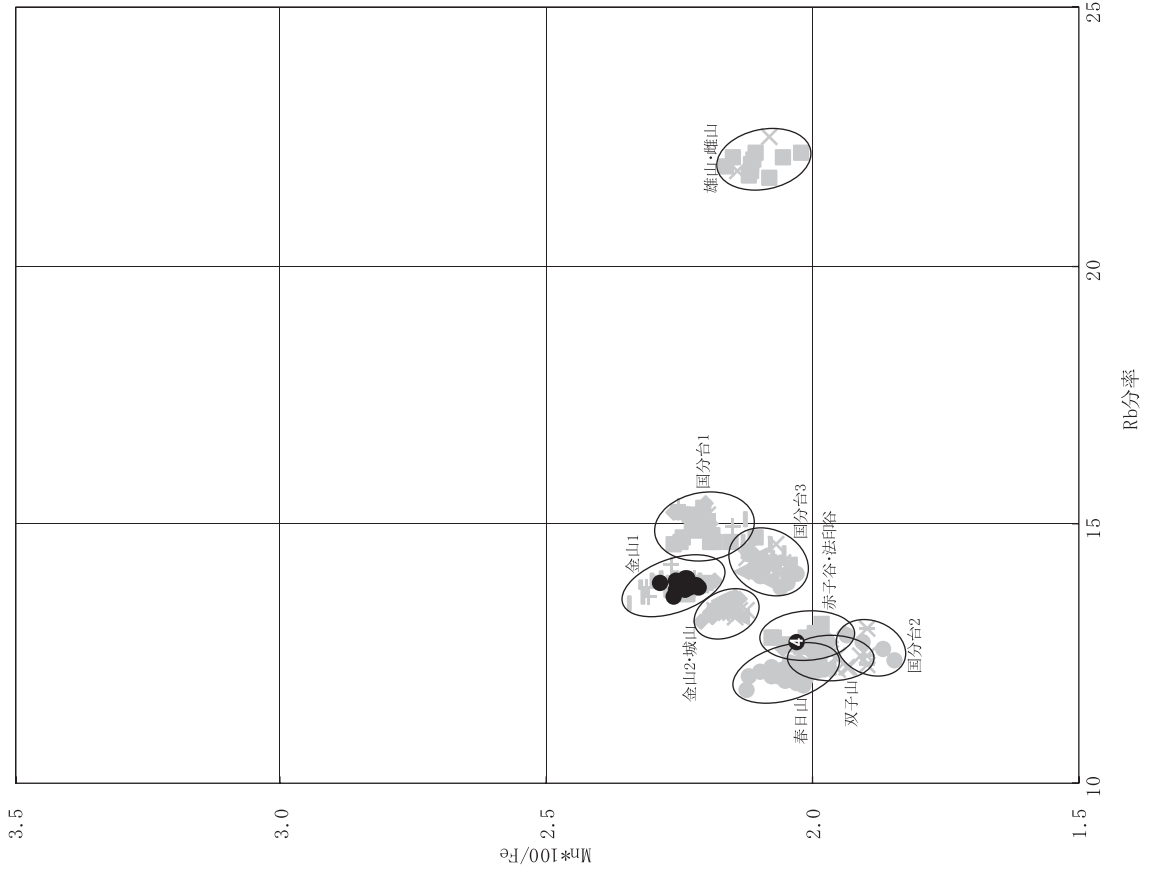
竹の前遺跡より出土したサヌカイト製石器15点について、蛍光X線分析を用いた判別図法による産地推定を行った結果、15点いずれも讃岐地方産の可能性が高いと推定された。(竹原弘展)

引用文献

望月明彦(2004) 用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定. かながわ考古学財団編「用田大河内遺跡」: 511-517, かながわ考古学財団.



第5図 サヌカイト産地推定判別図(1)



第6図 サヌカイト産地推定判別図(2)

第2節 竹の前遺跡出土推定石棺材の石材同定

株式会社 パレオ・ラボ

1. はじめに

兵庫県姫路市手柄地内に所在する竹の前遺跡において、東区西部撓乱から古墳時代の石棺材を転用したと思われる岩石が検出された。ここでは、岩石薄片の顕微鏡観察による石材同定を行った。なお、蛍光X線分析による化学組成についても調べた。

2. 試料と方法

試料は、東区西部撓乱から検出された岩石1点である（第6表）。

第6表 岩石同定を行った試料とその詳細

分析 No.	試料	遺構	岩石の特徴	備考
1	岩石	東区西部の撓乱	灰白色 (5Y 8/2)、やや多孔質岩石、斑状組織	古墳時代の石棺材の転用か

岩石試料は、ダイヤモンドカッターで切断した後、エポキシ樹脂で固化処理を行い、精密岩石薄片作製機および研磨フィルムを用いて厚さ20～30 μmの岩石薄片を作製した。

岩石薄片（岩石プレパラート）は、偏光顕微鏡を用いて観察し、岩石の色調、組織および構成鉱物の特徴の観察と記載を行い、岩石同定を行った。

なお、化学組成を確認するために蛍光X線分析も行った。分析には、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製エネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置は、X線管が最大50kV、1000 μAのロジウム（Rh）ターゲット、X線照射径が8mmまたは1mm、X線検出器はSDD検出器（Vortex）である。測定条件は、管電圧・一次フィルタの組み合わせが15kV（一次フィルタ無し）・50kV（一次フィルタ Pb 測定用・Cd 測定用）の3条件で、測定時間は各条件500～1000s、管電流自動設定、照射径8mm、試料室内雰囲気真空に設定した。定量分析は、酸化物の形で算出し、ノンスタンダードFP法による半定量分析を行った。

3. 結果および考察

岩石は、灰白色（5Y 8/2）で、斑状組織を示すやや多孔質の岩石である（第7図-1）。切断面では、最大径が3mm強の軽石粒子が斑状に見られた（第7図-2）。

偏光顕微鏡観察では、石英、斜長石（双晶）からなる粒径200 μm～1.7mmの斑晶鉱物から構成される斑状組織を呈する岩石であった（第7図-3a・3b～6a・6b）。基質は、微細結晶～隠微晶質な石英や長石類からなり、ガラス質部が少なく結晶度がやや高い。なお、一部に流理構造を示すような塊状粒子が見られたが、これらの粒子が切断面に見られる軽石粒に対応する。なお、空隙部分などには方解石が晶出していた（第7図-7a・7b）。

蛍光X線分析では、酸化ケイ素（SiO₂）が71.30%であったため（第7表）、化学組成として流紋岩（流紋岩は、酸化ケイ素（SiO₂）が70%以上の岩石：都城・久城，1975）に分類された。

第7表 岩石の化学組成（単位%）

分析 No.	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	ZnO	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	BaO	PbO	合計
1	2.48	0.03	14.07	71.30	0.43	0.21	6.31	1.50	0.09	0.06	3.19	0.08	0.03	0.02	0.01	0.05	0.11	0.01	99.98

以上の切断面の肉眼的特徴および顕微鏡観察から、流紋岩質凝灰岩（ハイアロクラスタイト）と同定される。なお、ハイアロクラスタイトとは、マグマが水に急冷されてできた細かい碎屑粒子を主体とする岩石である。

姫路市周辺部には、中世代白亜紀―古第三紀の流紋岩及びデイサイト火砕岩類及び溶岩（第8図の凡例 Ar）や流紋岩火砕岩類（第8図の凡例 Hm）が広く分布する。

5万分の1地質図幅では、高砂市竜山一帯では、竜山石もしくは宝殿石と称される石材が古くから採掘され、これら岩石は後期白亜紀の宝殿層の成層ハイアロクラスタイトである。これら岩石は、流紋岩の小片及び同質の細粒基質から構成される岩石で節理密度が極めて低い特徴を有する。なお、竜山山頂付近の成層ハイアロクラスタイトでは、斜長石の大半が方解石に置換している（尾崎・原山，2003）。

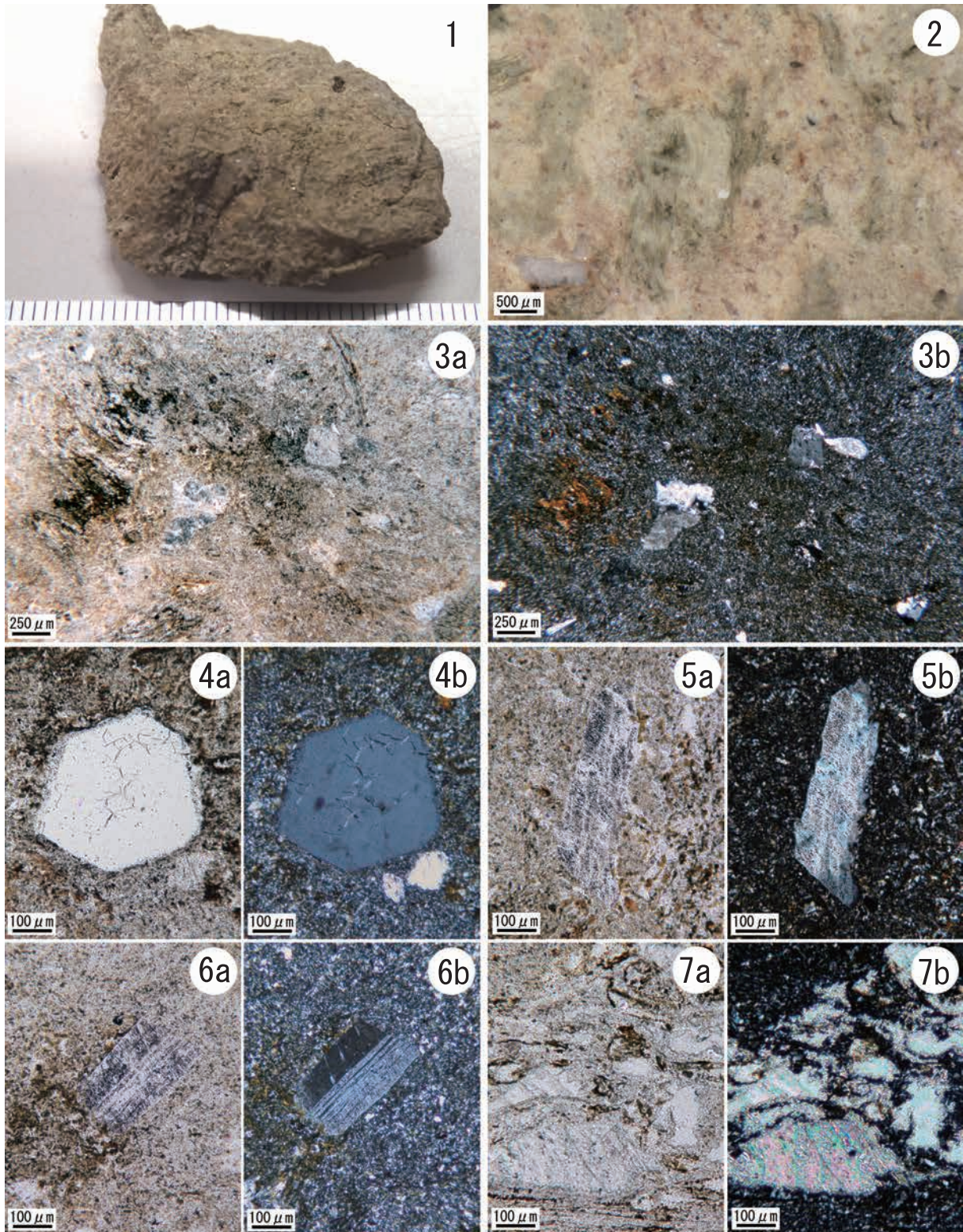
分析した岩石の特徴は、この高砂市竜山一帯に分布する成層ハイアロクラスタイトの特徴に酷似する。ただし、分析した岩石が、この高砂市竜山一帯に分布する岩石と断定することはできないが、類似した岩石が容易に採取できる地質環境にあると考えられる。（藤根 久・米田恭子）

引用文献

猪木幸夫（1981）20万分の1地質図幅「姫路」，地質調査所。

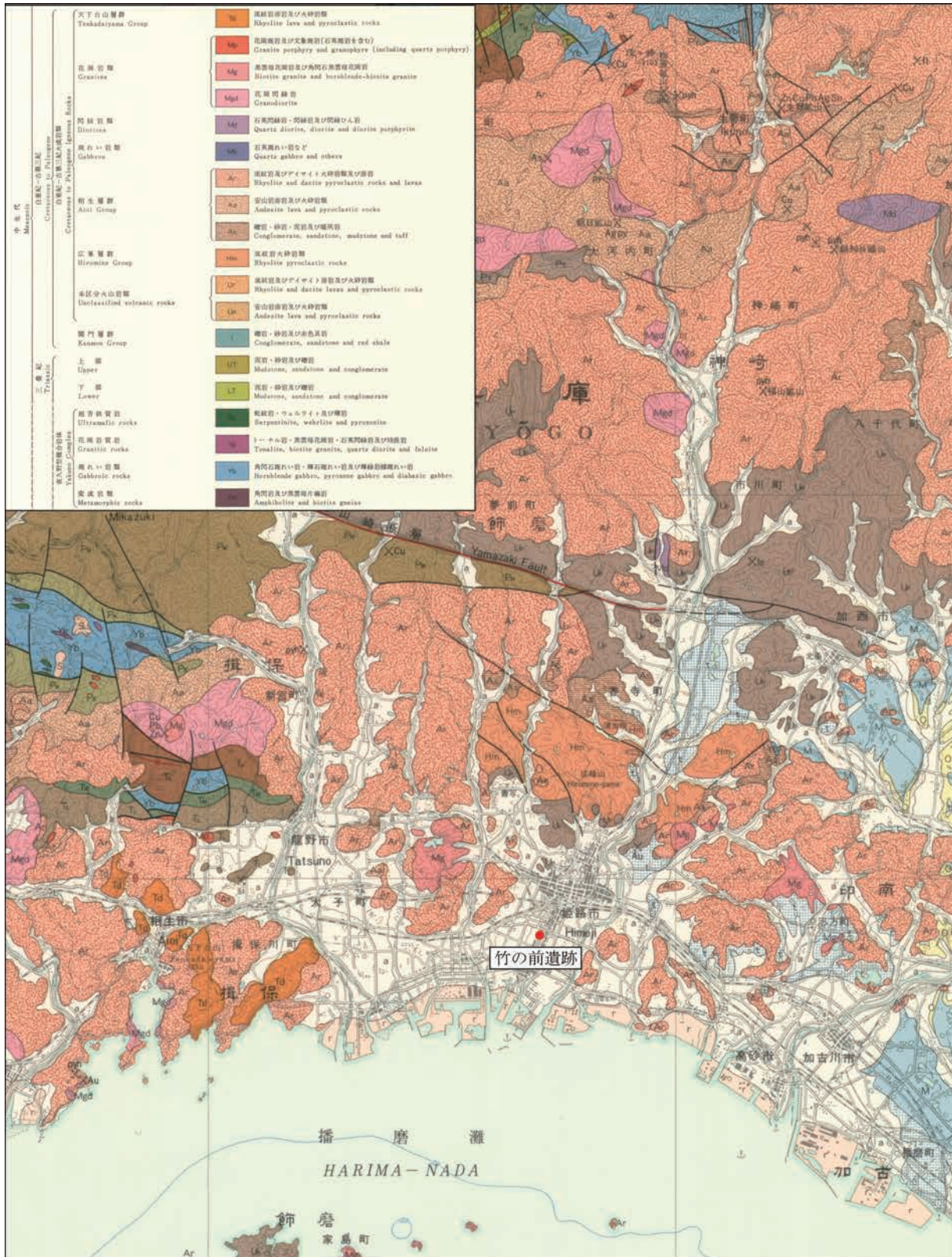
都城秋穂・久城育夫（1975）岩石学Ⅱ．岩石の性質と分類．共立出版，171p.

尾崎 正紀・原山 智（2003）高砂地域の地質．地域地質研究報告書（5万分の1地質図幅）．産業技術総合研究所地質調査総合センター，87p.



第7図 分析試料と偏光顕微鏡写真（a：解放ニコル、b：直交ニコル）

1. 分析試料 2. 切断面 3a・3b. 典型的な部分 4a・4b. 石英
5a・5b. 斜長石（双晶？） 6a・6b. 斜長石（双晶） 7a・7b. 方解石



第8図 遺跡周辺の地質図(猪木(1981)20万分の1地質図幅「姫路」を編集)

第3節 竹の前遺跡出土木製品の樹種同定

パリノ・サーヴェイ 株式会社

はじめに

竹の前遺跡は姫路市手柄に所在し、弥生時代から中世の集落跡と考えられている。本分析調査では、各遺構から出土した木製品を対象に樹種同定を実施し、木材利用について検討する。

1. 試料

試料は、出土した木製品4点である。なお、木6・7は、2片存在したため、-1、-2と枝番を付した。よって、竹の前遺跡の同定点数は5点となる。

2. 分析方法

資料の木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口（横断面）、柁目（放射断面）、板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler et. al.（1998）、Richter et. al.（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995;1996;1997;1998;1999）を参考にする。

3. 結果

結果を第8表に示す。出土した木製品は、針葉樹1分類群（ヒノキ属）と広葉樹1分類群（コナラ属アカガシ亜属）に同定された。なお、木9は組織の遺存状況が不良のため樹種不明である。

各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ属 (*Chamaecyparis*) ヒノキ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型で、1分野2個が基本。放射組織は通常単列。ヒノキと思われる個体を含む。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと複合放射組織とがある。

4. 考察

木6・7、木8はいずれもヒノキ属、木10はコナラ属アカガシ亜属に同定された。各種類の材質等についてみると、針葉樹のヒノキ属は山地に生育する常緑高木で、木材は木理が通直で割裂性、耐水性、防虫性が高い。広葉樹のアカガシ亜属は、暖温帯性常緑広葉樹林の主要な構成種となる常緑高木で、木

第8表 竹の前遺跡の樹種同定結果

番号	地区	層位	木取り	樹種
木6・7-1	西区西側	SE182 最下層	柾目	ヒノキ属
木6・7-2	西区西側	SE182 最下層	柾目	ヒノキ属
木8	西区中央	SE182 石組み内埋土 最下層	柾目	ヒノキ属
木9	西区西寄り	SE182 最下層	分割状	不明
木10	東区	流路第3層	芯持丸木	コナラ属アカガシ亜属

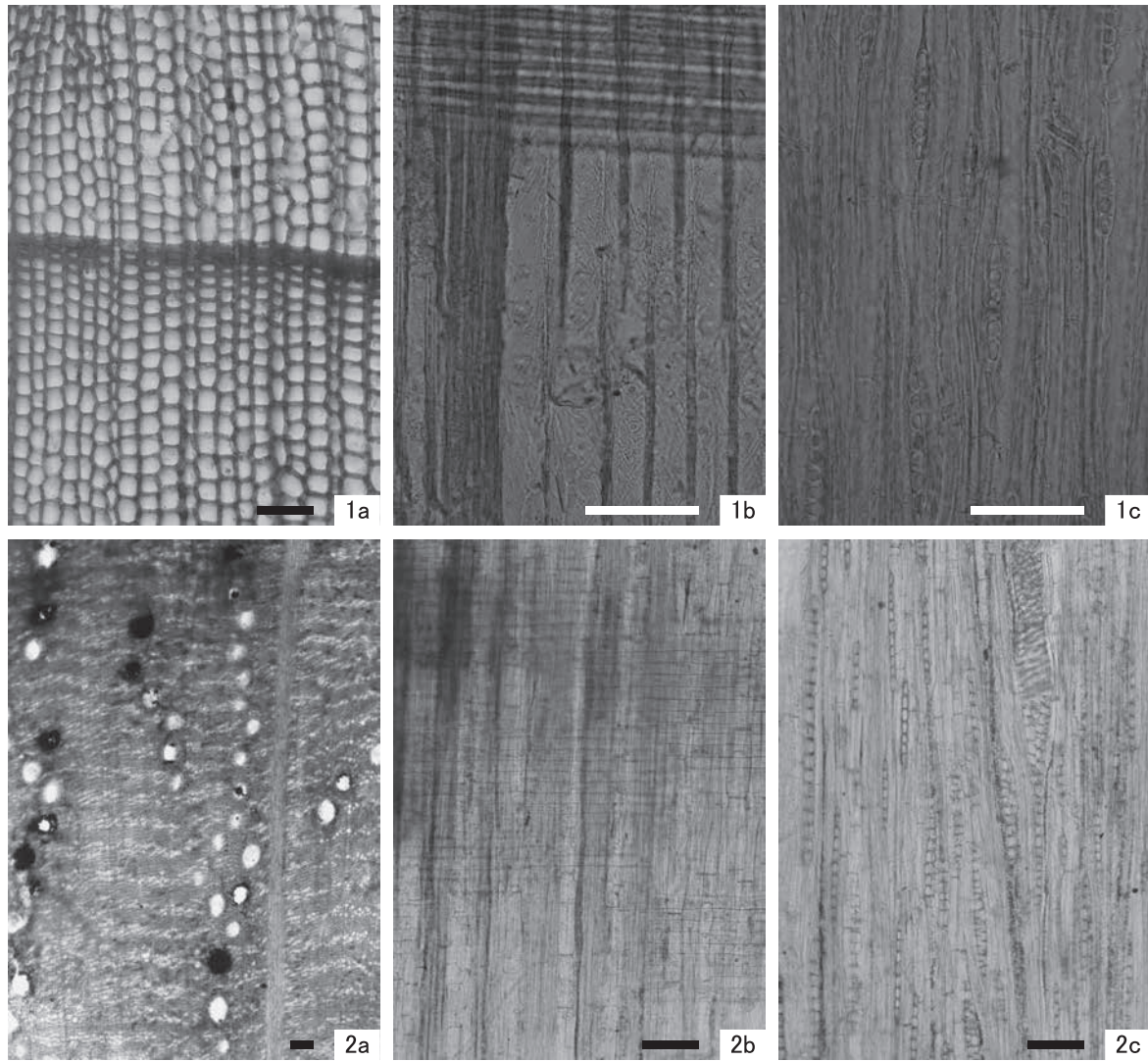
材は重硬で強度が高い。

木6・7、木8はいずれも柾目取りの板状を呈し、木6・7は曲物の一部の可能性が指摘されている。伊東・山田（2012）のデータベースで兵庫県内の曲物など底板の事例をみると、ヒノキとスギが主体で、わずかにサワラなどを伴う。本分析調査結果は、このような過去の調査事例と矛盾しない。

一方、木10は先端が尖った杭状の芯持ち材で、コナラ属アカガシ亜属に同定された。前述のデータベースで県内の杭の出土例をみると、針葉樹ではマツ属複雑管束亜属、スギ、ヒノキなどが、広葉樹ではコナラ節、クヌギ節、アカガシ亜属、クリ、シイ属などが報告されており、重硬で強度が高い種類を利用していたと思われる。本分析調査で対象とした杭についても、このような理由から材が選択された可能性が考えられる。なお、木9は組織の状態が不良であり、種類の同定に至らなかった。なお、木9は分割材で、箸や齋串のような形状を示す。前述のデータベースにおける県内の箸や齋串の事例をみると、スギ、ヒノキなどの針葉樹の利用が多い。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久 (編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.
- Richter, H. G., Grosser, D., Heinz, I. and Gasson, P. E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter, H. G., Grosser, D., Heinz, I. and Gasson, P. E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Wheeler, E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler, E. A., Bass, P. and Gasson, P. E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].



第9図 木材

1. ヒノキ属 (竹の前遺跡; 木8)
2. コナラ属アカガシ亜属 (竹の前遺跡; 木10)

スケールは 100 μ m
a : 木口 b ; 柁目 c ; 板目

第5章 総括

第1節 竹の前遺跡の変遷

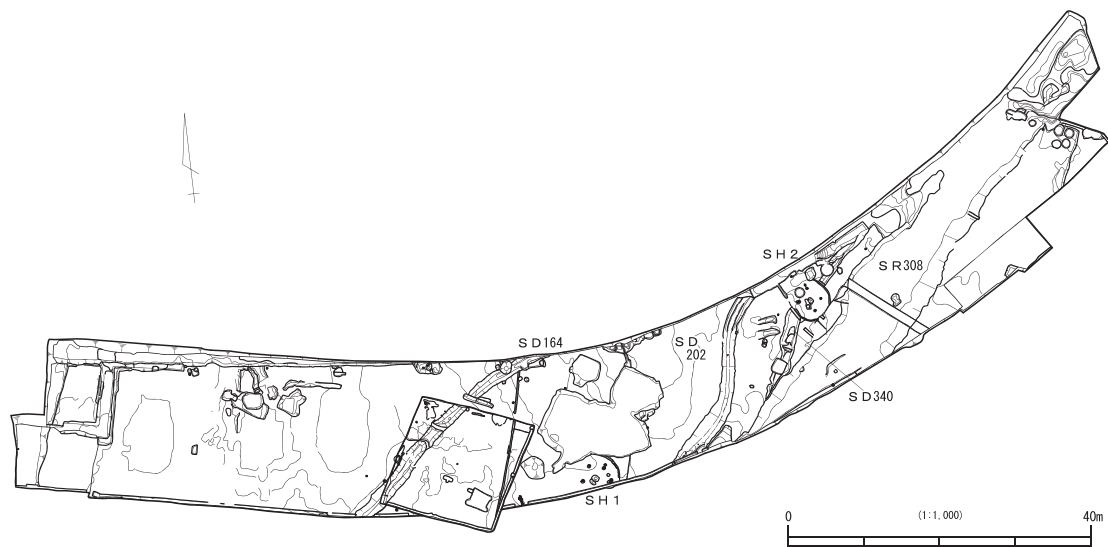
竹の前遺跡はこれまでの調査により弥生時代から中世の集落跡であることが判明している。今回の調査においても、ほぼ同時期の遺構の存在を明らかにすることができた。ただし、姫路市教育委員会の調査で検出された弥生時代中期後半に限った時期の遺構は検出されなかった。

1. 弥生時代～古墳時代後期の遺構

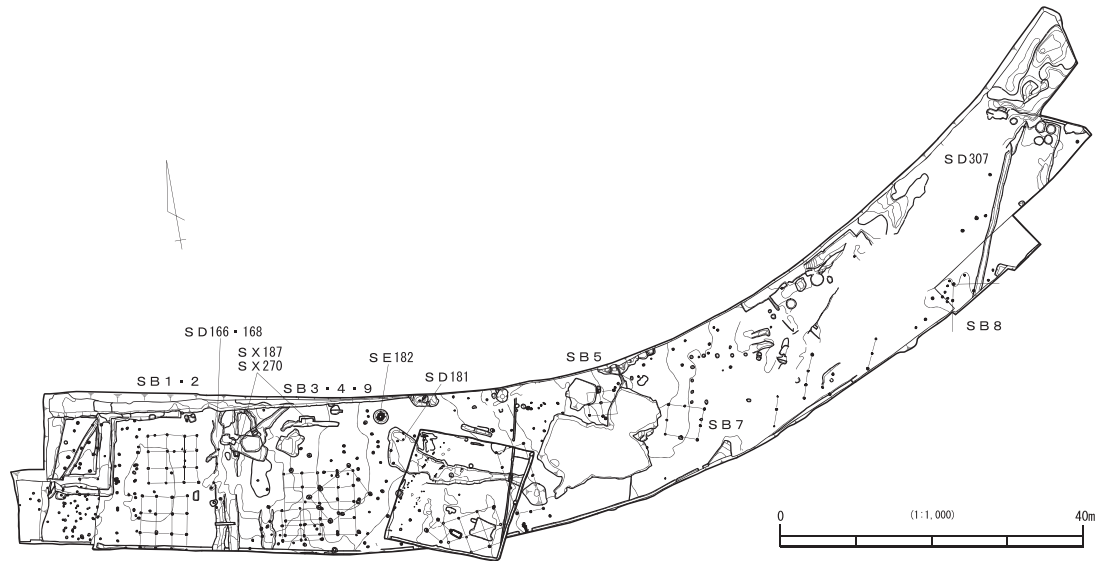
弥生時代の竪穴住居跡は約30m離れて2棟検出した。どちらも大きく削平を受け、壁はほとんど遺存していなかった。どちらも平面円形で、直径はSH1で推定6.4m、SH2は5.3m前後である。弥生時代後期前葉に属すると判断され、中央土坑には平面楕円形で浅い炭土坑が附属するもので、「イチマル」と呼ばれているものである。炭土坑の埋土には炭化物のほか焼土も多く混じっており、中央土坑でも少量認められたが、中央土坑と同様に内面には被熱の痕跡は認められなかったことから、炉としての機能には躊躇せざるを得ない。竹の前遺跡の竪穴住居跡は姫路市教育委員会の調査で隅丸方形のものが2棟検出されているが、出土土器をみると今回のものより若干降るようである。

2棟の住居跡の中間で土器が大量に出土した溝SD202が検出された。また、SH1の西側でも溝SD164を検出した。SD202の土器は廃棄されたものと思われ、弥生後期前葉の様相を呈し、住居跡と同時期であることから、竪穴住居で暮らした人々が不要になった土器を溝に廃棄していたことが推測できる。なお、SD164は姫路市教育委員会の調査区隔で検出されたSK2にあたる。

自然流路SR308は幅約10m、深さ約1.4mで、姫路市教育委員会調査のSR2につながる。流路内からは弥生時代中期初頭から古墳時代後期までの土器や石器が出土していることから、流路は竪穴住居が廃絶した後も流れていたとみられ、遅くとも中世初頭までには埋没していた。また、溝SD340として調査した部分は、流路に向かう傾斜面上の堆積土部分でもあり、SD340および溝肩から多くのサヌカイト剥片が出土したことから、中期以前に周辺で石器製作などの活動が行われていたことが推測される。



第10図 調査区内遺構配置図（弥生時代～古墳時代後期）



第11図 調査区内遺構配置図（平安時代後期以降）

古墳時代後期と推定される遺構は、調査区西部で溝を検出したにとどまる。姫路市教育委員会による調査では、本調査区から南に約150mの地点で古墳時代の竪穴住居跡が8棟検出されており、古墳時代では集落の中心地はより南に位置していた可能性が高い。

2. 平安時代後期以降の遺構

この時期の遺構には、平安時代末や鎌倉時代の掘立柱建物跡9棟、木棺墓2基、井戸1基、柵・塀跡3基、溝、土坑のほか、数多くの柱穴を検出した。

調査区西部では、柱穴出土土器や建物の方向から、平安時代後期～末と判断した掘立柱建物跡はSB 1～3・9の4棟を検出した。すべて総柱建物で、同一場所で検出したSB 4は時期が遡ると思われる。木棺墓SX 187・270はSB 9の西と北で共にSB 9から約6m離れた位置で検出した。SB 1～3・9と同時期で方向も似ており、その位置からこれらの建物に関わる屋敷墓であろう。石組井戸SE 182は、調査区内の地山下部が礫層の湧水層であるにもかかわらず、SB 9に近い位置にあることに加え、前述の屋敷墓の方向や位置から、SB 9が屋敷の居住建物であった可能性がある。また、井戸の南東約1mしか離れていない位置にあるSD 181は、幅広いが不定形で浅く、湿地状の滞水があったことから、井戸SE 182に関連した流し場のようなところであったのかもしれない。同時に、SB 1・2の東側の溝SD 166・168やSD 161は、その方向と位置から西部建物跡群に関連した区画溝の可能性があろう。なお、木棺墓SX 270は稀少な白磁小壺を副葬しており、被葬者が在地の有力者層であったことが想定される。

調査区中央部～東部では掘立柱建物跡4棟と柵・塀跡を3基検出したが、SB 5・7・8が西部建物群の方向に近く、柵・塀とも似た方向で近い時期でもあることから、関係が深いものと思われる。また、調査区西端部では柱穴を多く検出したことから、今回は確認できなかったが、もう1～2棟の平安時代後期頃の掘立柱建物跡があったものと想定される。

他にいくつかの溝や土坑なども検出したが、SD 307が中世末以降近世の可能性はある以外は、時期不明のものがほとんどである。

第2節 弥生時代後期前葉の土器

1. S D 202 出土土器群の編年的位置

西播磨地域の弥生時代後期土器編年

S D 202 から出土した土器は弥生時代後期前葉に属するものであるが、市川・夢前川流域にあたる姫路地域の弥生時代後期の詳細な土器編年が未確立であることから、西側の揖保川・千種川流域の資料をもとに西播磨地域の編年として設定されたものを使用して、S D 202 出土土器群の編年的位置を検討する。

西播磨における弥生時代後期の土器編年細分については、1990年に甲斐昭光氏が赤穂市周世入相遺跡出土土器を出土遺構別に周世Ⅰ式～周世Ⅴ式に分割し、編年的変化として位置づけたものがある。このなかで周世Ⅰ式と設定した土壇22出土土器について後期前半でも初頭を除く位置に置き、岡山県の上東・鬼川市Ⅰ～Ⅱ式、河内Ⅴ-2様式併行と判断した。なお私見では、周世編年について、①周世Ⅰ式（土壇22）と同時に近い直後に②周世Ⅳ式（溝4）があり、その後③周世Ⅴ式（土壇9）→④周世Ⅲ式（土壇21）→⑤周世Ⅱ式（土壇20）の変遷順になると判断している。この点は別の機会に譲りたい。

その後、1998年に岸本道昭氏は、たつの市小神辻の堂遺跡出土の後期初頭土器を検討し、小神辻の堂遺跡の21-溝出土土器を中心に、同遺跡の1-方形周溝墓の溝・19-土坑・17-堅穴住居からの出土土器を使用して、後期前葉とした西播磨後期Ⅰを設定し、さらに古相と新相の前後2期に細分した。さらに、後期中葉として西播磨後期Ⅱを設定し、それまで後期前半とされていた周世Ⅰ式（土壇22）と、『弥生土器の様式と編年』の後期中葉とした周世Ⅱ式をそれぞれ古相と新相にあて、西播磨後期Ⅲを後期後葉として周世Ⅲ・Ⅳ期式を位置づけ、周世Ⅴ式を庄内式とした。ただし、西播磨後期Ⅰと西播磨後期Ⅱの土器については、特に変化が激しい甕や高坏について形態変化のヒアタスが大きく、直後に続くにもう1型式必要であると判断できる。

2003年には赤穂市東有年・沖田遺跡報告で中田宗伯氏は、東有年・沖田遺跡堅穴住居1出土土器を小神辻の堂21-溝の次に位置づけた。同時に、周世Ⅰ式よりも古く位置づけ、西播磨後期Ⅰ古相（小神辻の堂21-溝）→西播磨後期Ⅰ新相（東有年・沖田堅穴住居1）→西播磨後期Ⅱ古相（周世Ⅰ式）の変遷とし、西播磨後期Ⅰ新相に併行する明確な一括資料とした。それでもなお、甕や高坏において、西播磨後期Ⅰ古相と新相の変化の大きさは埋められていない。なお、東有年・沖田遺跡土坑40出土土器については鬼川市Ⅱ～Ⅲ式として周世Ⅰ式よりも後出と判断された。

2007年には長友朋子氏が西播磨地域の土器編年のなかで、西播磨の弥生時代後期をⅤ期1段階（Ⅴ-1）からⅤ期5段階（Ⅴ-5）の5期に分け、Ⅴ-1を後期初頭として、小神辻の堂遺跡の21-溝資料を中心に1-方形周溝墓の1-溝資料を使用し、姫路市和久遺跡S H 21・太子町亀田遺跡S K 415資料を加えた。Ⅴ期前半古相のⅤ-2では東有年・沖田遺跡堅穴住居1出土資料をあて、たつの市新宮宮内遺跡円形周溝墓Ⅱ-ⅢとⅣの資料を加えた。続くⅤ-3は後期前半新相として周世入相遺跡土壇22資料（周世Ⅰ式）をあて、東有年・沖田遺跡堅穴住居2資料と新宮宮内遺跡S H 35・S H 37出土資料を加えた。後期後半古相としたⅤ-4では東有年・沖田土坑40の資料や赤穂市高雄・根木遺跡堅穴住居1出土資料などをあてた。

S D 202 出土土器の編年的位置づけと西播磨地域の弥生後期前半土器編年

竹の前遺跡（以下遺跡名省略）S D 202 出土土器の特徴をみると、小神辻の堂遺跡21-溝出土土器や東有年・沖田遺跡堅穴住居1出土土器とは細部で異なり、周世入相遺跡土壇22出土土器とは大きく異なる。

甕では、21一溝は口縁端部を上下に大きく拡張するものが大半を占める点ではSD 202と同様であるが、体部から口縁部へは外反しながら推移するものが大半で、口縁部も短い、SD 202では口縁部が体部から「く」字形に外折するものが多い点や、口縁部が長い点に違いがある。堅穴住居1では出土量が少ないが、上下に拡張せず、下方にのみ拡張するSD 202の甕Dや甕Bに近いものが主流となっている。

壺は、21一溝では出土量が少ないが、端部を拡張するものや端部に面をもつもので、前代である中期末の直口壺等の口縁端部が面をもっている点で技法がつながっている。SD 202では端部に面をもつものと丸くおさめるものがあり、広口壺以外は端部を拡張しない。堅穴住居1の長頸壺は頸部が直線的で端部は丸い。なお、堅穴住居2では頸部から口縁部が外反するものがあるが、端部は丸い。

有稜高坏では、21一溝資料では坏上部が短く、ほとんど外反しない吉備地域や讃岐地域に多い形態のもので、端部に面をもつものや端部を拡張するものである。SD 202資料には高坏Aとしたものが認められるが、それ以外は口縁端部に面をもつものの、端部を拡張せず外反するものである。堅穴住居1や堅穴住居2の資料も坏上部が長く大きく外反し、端部を丸くおさめるものである。

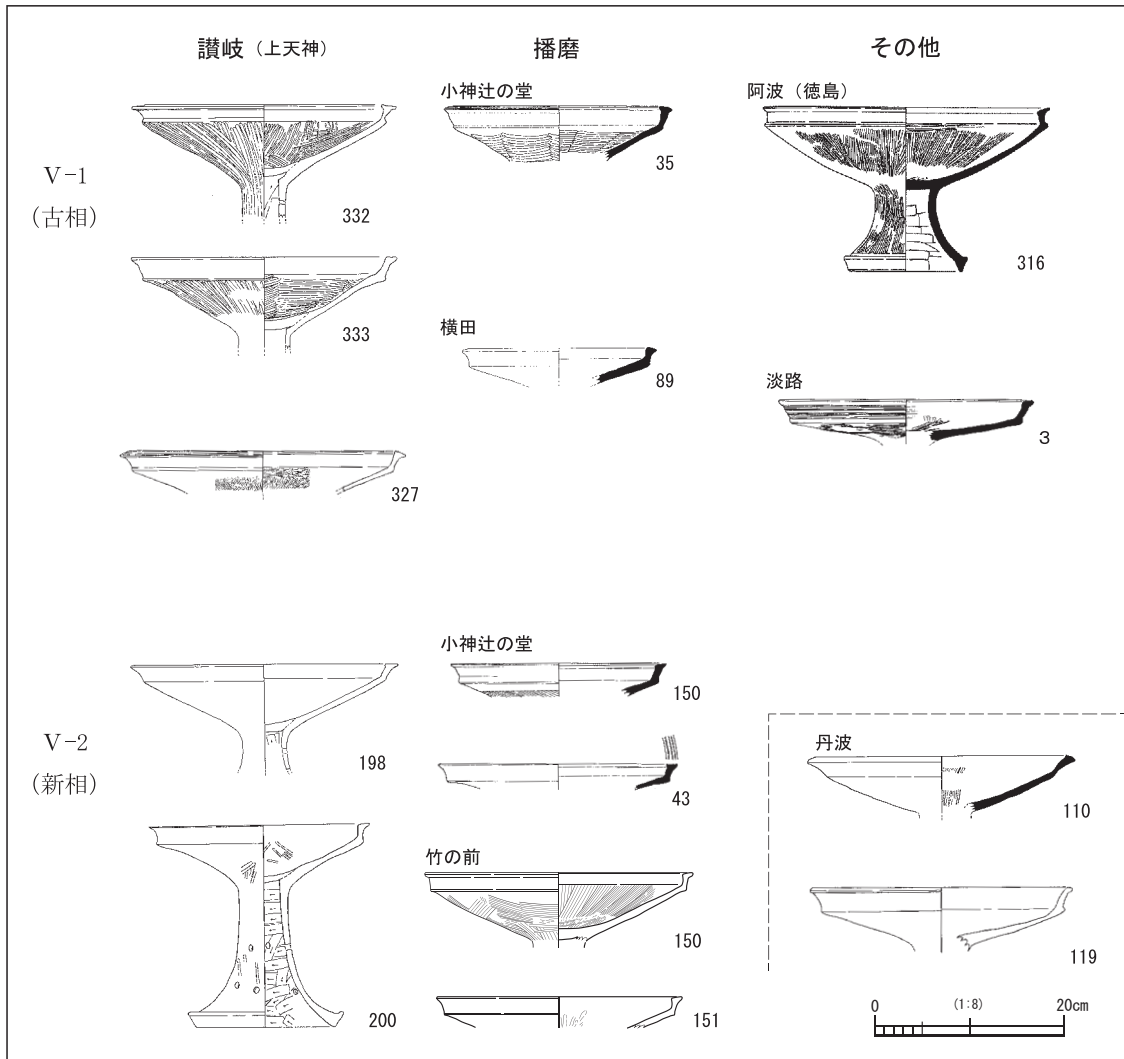
高坏や器台の脚部では21一溝のものは中期以来の透孔が簡略されたものや直線文を付すものが多くみられるが、SD 202出土脚部では稀である。また、21一溝出土脚端部は拡張あるいは拡張ぎみのものが大半で、上方にのみ拡張するものも認められる。SD 202出土土器では脚端部を拡張するものが多くあり、上方にのみ拡張するものも認められる。また、ほとんどの端部には面をもつ。これに対し、堅穴住居1や堅穴住居2では端部に面をもつものと丸くおさめる両者が認められるものの、端部を拡張するものは皆無である。なお、堅穴住居1・2以降の土壙22や東有年・沖田土坑40から出土した脚部も端部を拡張するものは極めて稀になり、高坏については端部を丸くおさめるものが徐々に主流となる傾向にある。

以上述べた点から、SD 202出土土器は、21一溝資料と同じ様相を示すものを含みながら、堅穴住居1とも共通するものを含んでいることになり、両者の間を埋める資料として位置づけることができる。

したがって、21一溝は後期初頭の第1期に置くとして、その次に位置づけられていた堅穴住居1との間にSD 202資料をあてて第2期とし、堅穴住居1を第3期とすべきであろう。その後は土壙22を第4期、土坑40を第5期として後期前半の最後に位置づけておきたい。なお、新宮宮内遺跡円形周溝墓J-Ⅲ区出土土器はSD 202出土土器と類似点が多く、第2期に含めておきたい。さらに、SD 202出土土器には古相と新相があり、畑田遺跡SR1出土土器はごく一部を除き、SD 202が示す第2期の古相にあたりと位置づけられる。古相には壺のA1・A2・E、甕ではA1・C、高坏A、脚部Aがあり、新相には壺A5、甕ではE・F・Gなどがある。

2. 讃岐・吉備型高坏について

SD 202から出土した高坏Aは坏中位で上方に強く屈曲するように折れ、坏上部が短く口縁端部を外側に折り曲げるように拡張しているもので、讃岐地域や備前・備中地域の弥生時代後期初頭を中心とした時期に存在する高坏であり、阿波地域にも少数存在するようであるが、特に讃岐地域では後期初頭段階の圧倒的形態となっている。このような形態の高坏は、播磨地域では小神辻の堂遺跡で多く出土している。また、管見では加西市横田遺跡の自然流路NR 04や淡路島の洲本市大明神遺跡SH 01からも出土しており、竹の前遺跡に最も近い太子町亀田遺跡流路1でも小片が出土しているが、出土例は極めて少ないようである。また、丹波地域の篠山市上板井遺跡旧河道②層からは坏上部の傾斜が緩いものの、口縁端部を拡張して平坦面をもつ類似例が出土しており、さらに口縁端部が外反して上面に面をも



第12図 讃岐・吉備型高坏の類例

つ丹波市国領遺跡竪穴住居 15 出土例も類似例の可能性のあるものとしてあげておきたい。

讃岐地域の香川県上天神遺跡の高坏Aでは、明確な分離はされていないものの、出土土器に古相と新相があり、上天神遺跡高坏Aは坏部の稜が外側に突出するほど明確にし、口縁端面を外側に大きく拡張して水平かやや外傾する面とし、そこに凹線を施すものから、口縁端面の拡張が小さくなり、端面が水平かやや内傾するようになって、稜を強調しなくなるという傾向がうかがえる。S D 202 出土の高坏Aは上天神遺跡の新相の特徴を示しており、讃岐系と呼ぶべきであろう。

いっぽう、小神辻の堂遺跡出土高坏は、坏部の稜を外側に突出させるが、坏上部外面が単純な凹面となるものが少なく、稜の直上と端部直下を窪ませるものが多く、端部を内側にも拡張しているものが多い。これらは吉備系の特徴をよく示しており、大明神遺跡S H 01 の高坏も阿波地域よりも吉備系の特徴を示しているようである。これらは備前地域や備中地域のV-1様式のものと同じ特徴をもつ。また、加西市横田遺跡N R 04 出土高坏は2点あり、端面が外傾し坏上部が短いものは讃岐地域にも存在するようであるが、もう1点は稜が突出する点で吉備系に近いようである。

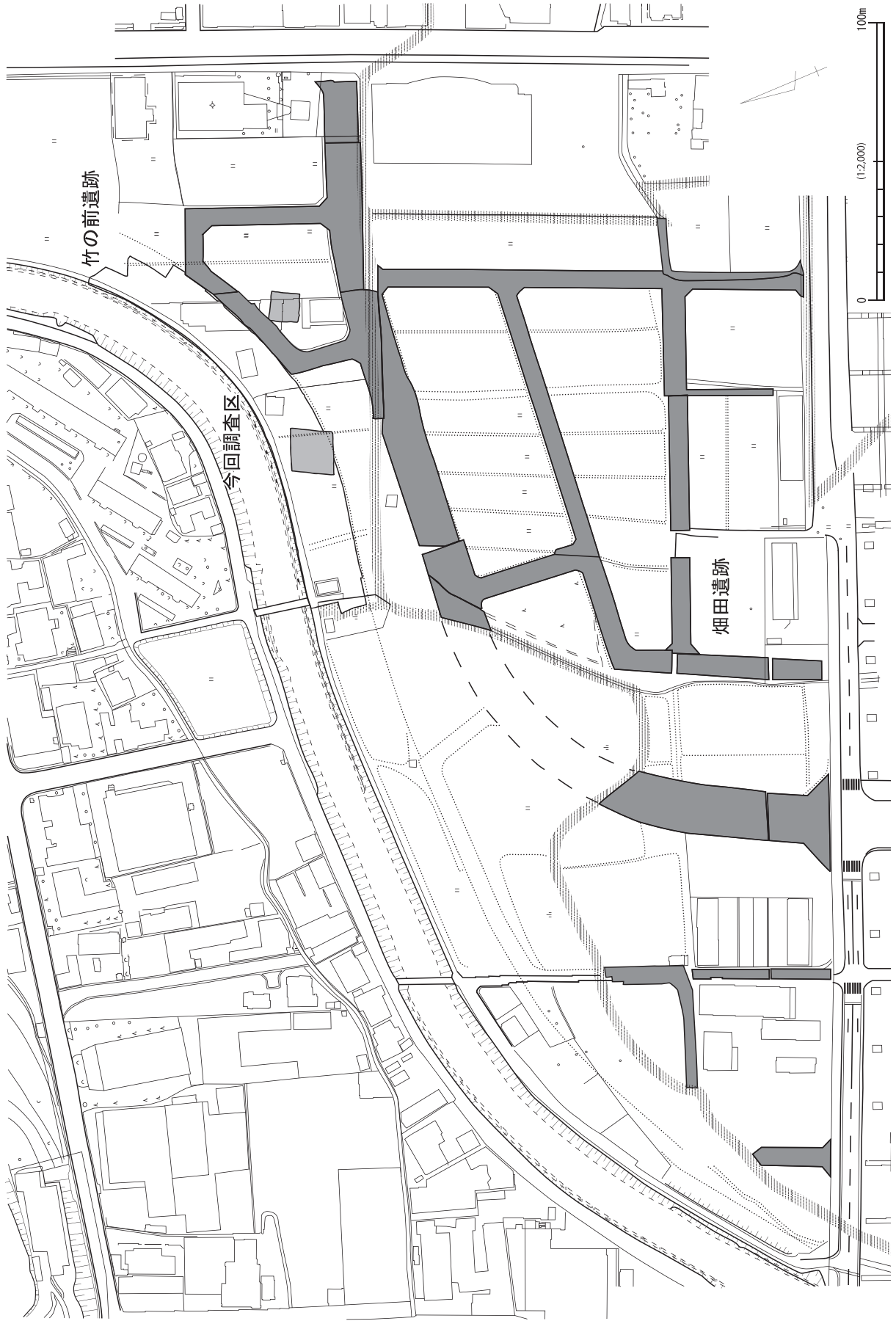
S D 202 出土高坏Aのように口縁端面が内傾するものは小神辻の堂遺跡でも認められるが、坏上部外面が高坏Aでは稜の張り出しが少なく単純な凹面状を呈する。いっぽう、小神辻の堂遺跡では稜部分が外に張り出すものとそうでないものがある。この後者とS D 202 出土高坏は讃岐地域の上天神遺跡の新

相のものとはほぼ共通した形態となっている。

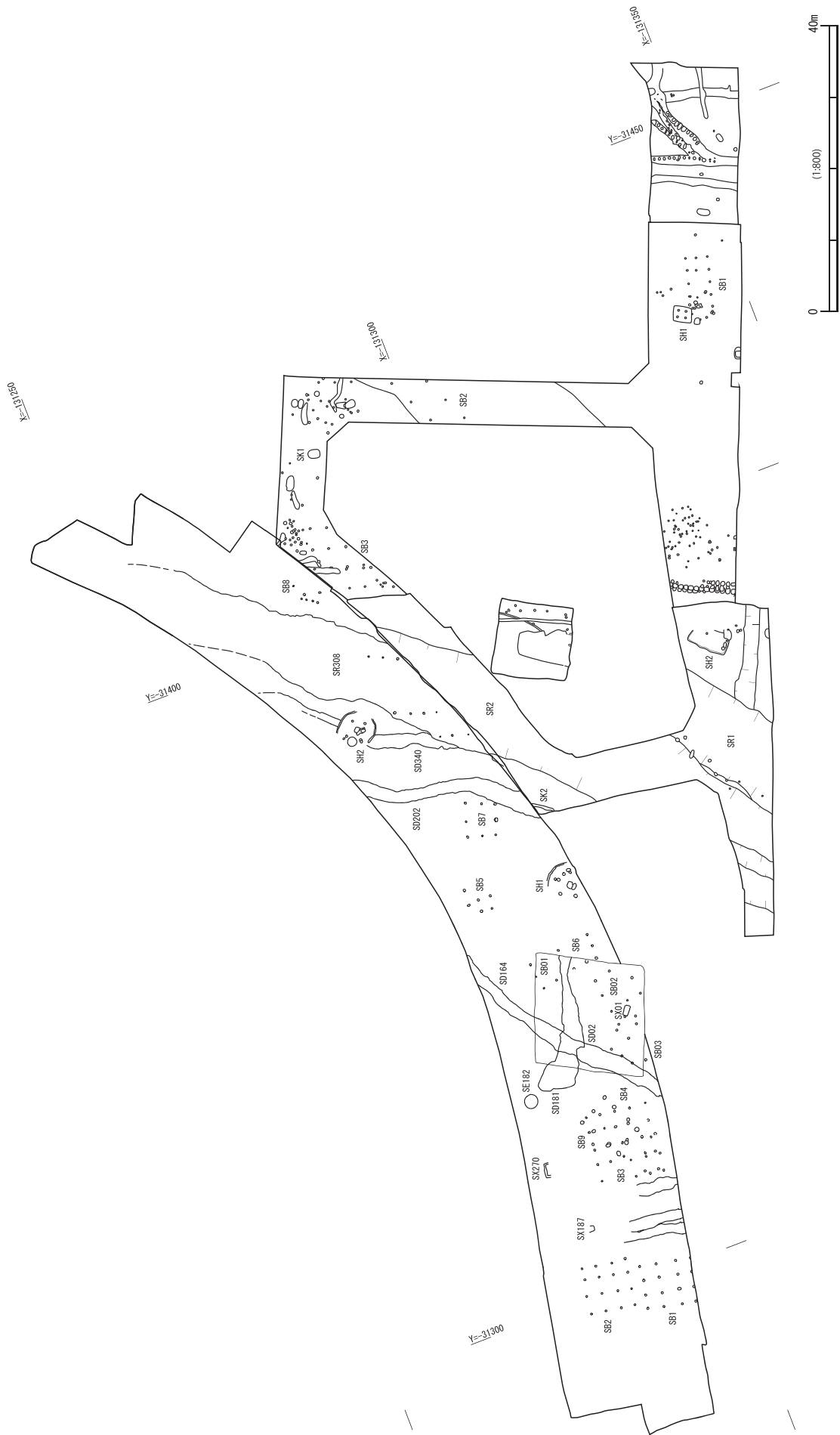
兵庫県内で出土している讃岐・吉備系高坏については、小神辻の堂遺跡以外では類例が少ないようである。しかし、SD 202 高坏Aや小神辻の堂遺跡出土高坏の一部は上天神遺跡新相の特徴を示し、横田遺跡出土のものや小神辻の堂遺跡の大半、淡路大明神遺跡出土のものは、上天神遺跡古相や備前・備中地域の後期初頭の特徴を示す。すなわち、小神辻の堂遺跡のものは吉備系に加え、讃岐系の上天神古新両相の特徴を示すものがあるようである。なお、国領遺跡のものをあえて位置づけるとすれば弥生時代後期の第2段階あたりであろうか。上板井遺跡のものは第2段階の新相に位置づけておきたい。また、横田遺跡の多くは第3段階のものであろう。

参考文献

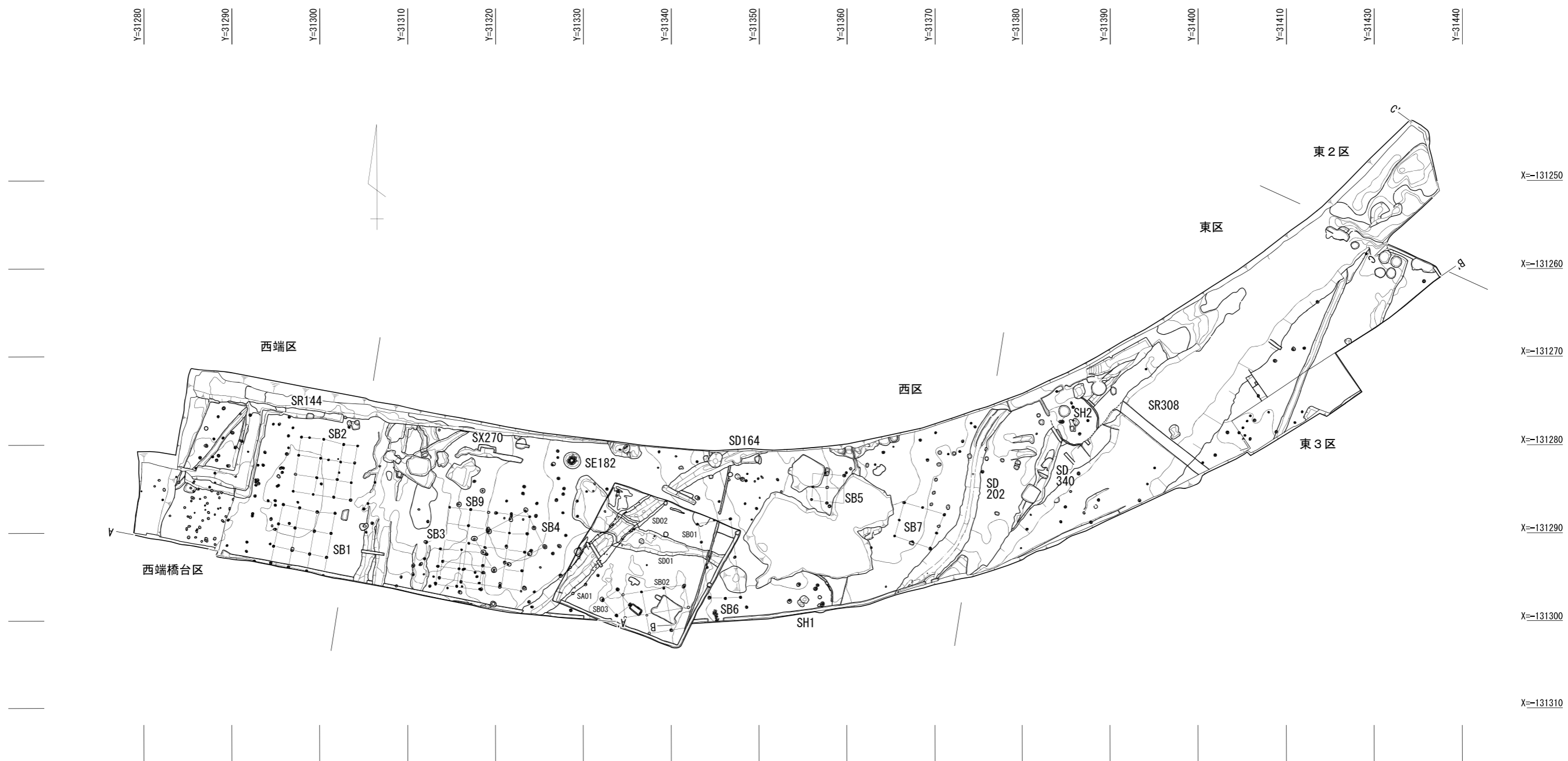
- 赤塚次郎 1990「V 考察 1 廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- 上田健太郎 2012「V 竹の前遺跡の遺構と遺物」『播磨・長越遺跡Ⅲ』兵庫県文化財調査報告 第432冊 兵庫県教育委員会
- 大久保徹也・森 格也 1995『上天神遺跡』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊 香川県教育委員会・勘香川県埋蔵文化財センター・建設省四国地方建設局
- 甲斐昭光編 1990『周世入相遺跡』兵庫県文化財調査報告 第70冊 兵庫県教育委員会
- 岸本道昭 1998『小神辻の堂遺跡』龍野市文化財調査報告 20 龍野市教育委員会
- 菅原康夫・瀧山雄一 2000「四国地域の様式編年 1 阿波地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』菅原康夫・梅木謙一編 木耳社
- 高木芳史・深江英憲編 2000『亀田遺跡（第1分冊）』兵庫県文化財調査報告 第210冊 兵庫県教育委員会
- 高畑知功 1992「山陽・山陰地域の様式編年 2 備中地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』正岡睦夫・松本岩雄編 木耳社
- 中田宗伯 2003「第4章 第2節 弥生時代後期土器の検討」『東有年・沖田遺跡』赤穂市文化財調査報告書 56 赤穂市教育委員会
- 長友朋子 2007「3. 西播磨地域の土器編年 II 前期から後期の編年 2、編年」『弥生土器集成と編年—播磨編—』大手前大学史学研究所
- 浜松市生涯学習課（文化財担当）編 2009「森西遺跡」『浜松の遺跡 2 2003 - 2008』浜松市
- 福井 優・南 憲和 2014『竹の前遺跡・畑田遺跡発掘調査報告書』姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第24集 姫路市教育委員会
- 正岡睦夫 1992「山陽・山陰地域の様式編年 1 備前地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』正岡睦夫・松本岩雄編 木耳社
- 松本正信・加藤史郎・中浜久喜・義則敏彦・岩井顕彦 2005『新宮宮内遺跡』新宮町文化財調査報告 30 兵庫県新宮町教育委員会
- 真鍋昌宏 2000「四国地域の様式編年 2 讃岐地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』菅原康夫・梅木謙一編 木耳社
- 宮越健司 2012「第5章 総括 第2節 古墳時代前期土器の変遷と様相」『姫下遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第168集 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団、愛知県埋蔵文化財センター
- 村上泰樹・久保弘幸編 1991『上板井遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告 第76冊 兵庫県教育委員会
- 森 幸三・友久伸子 2000『横田遺跡（第2次）』加西市埋蔵文化財調査報告 26 加西市教育委員会
- 山田清朝 2014「第3章 第3節 大明神遺跡の調査」『大坪遺跡 大明神遺跡』兵庫県文化財調査報告 第466冊 兵庫県教育委員会
- 吉識雅仁・村上泰樹 1993『国領遺跡（II）（川畑・蓮町Ⅲ地区の調査）』兵庫県文化財調査報告 第122冊 兵庫県教育委員会



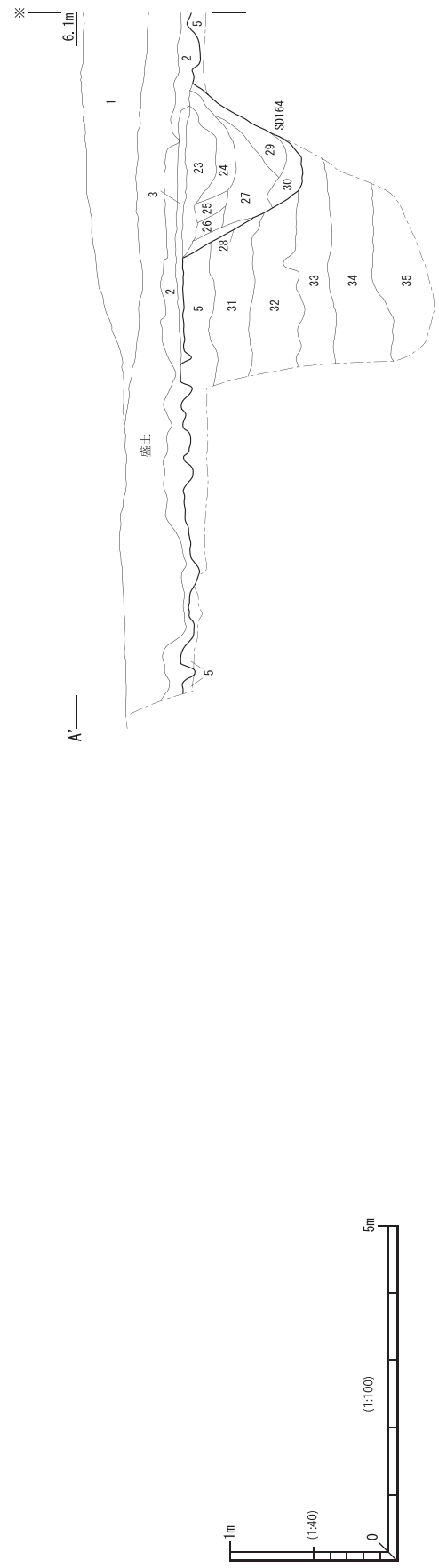
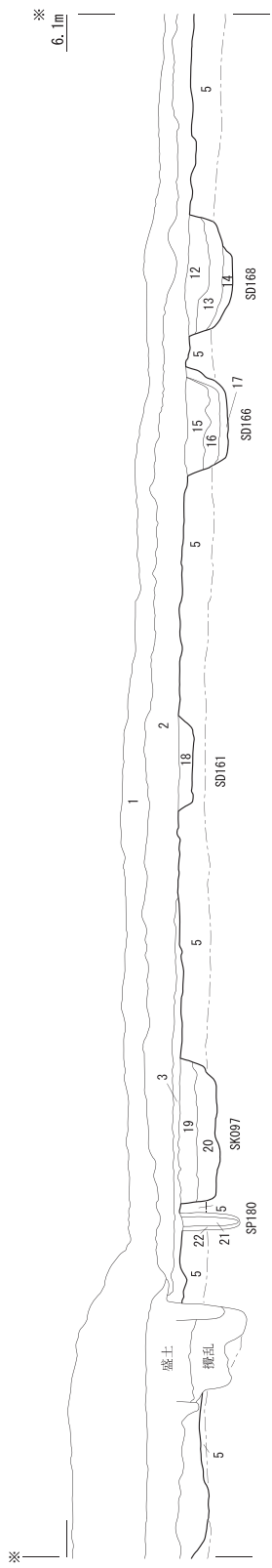
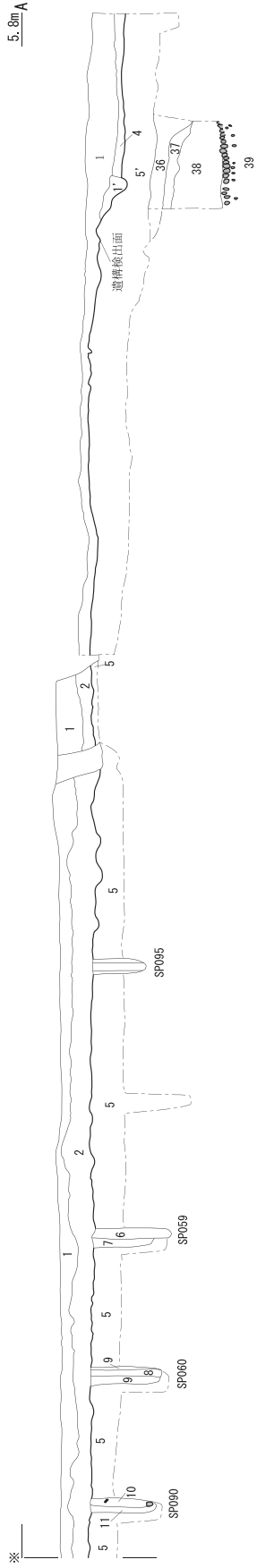
既往調査区と今回調査区



今回調査区と既往調査区



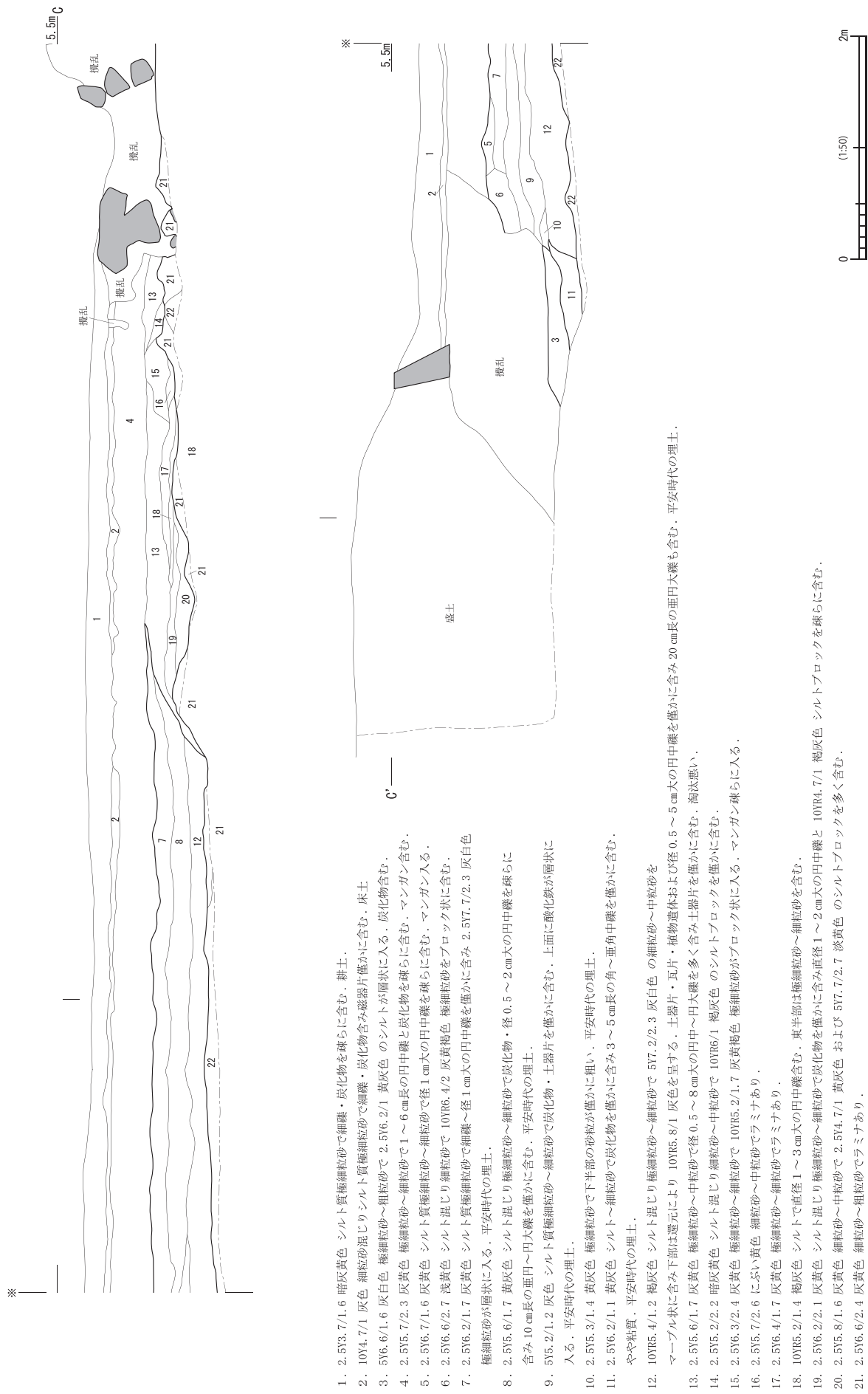
調査区全体



西端橋台区~西区南壁 土層断面

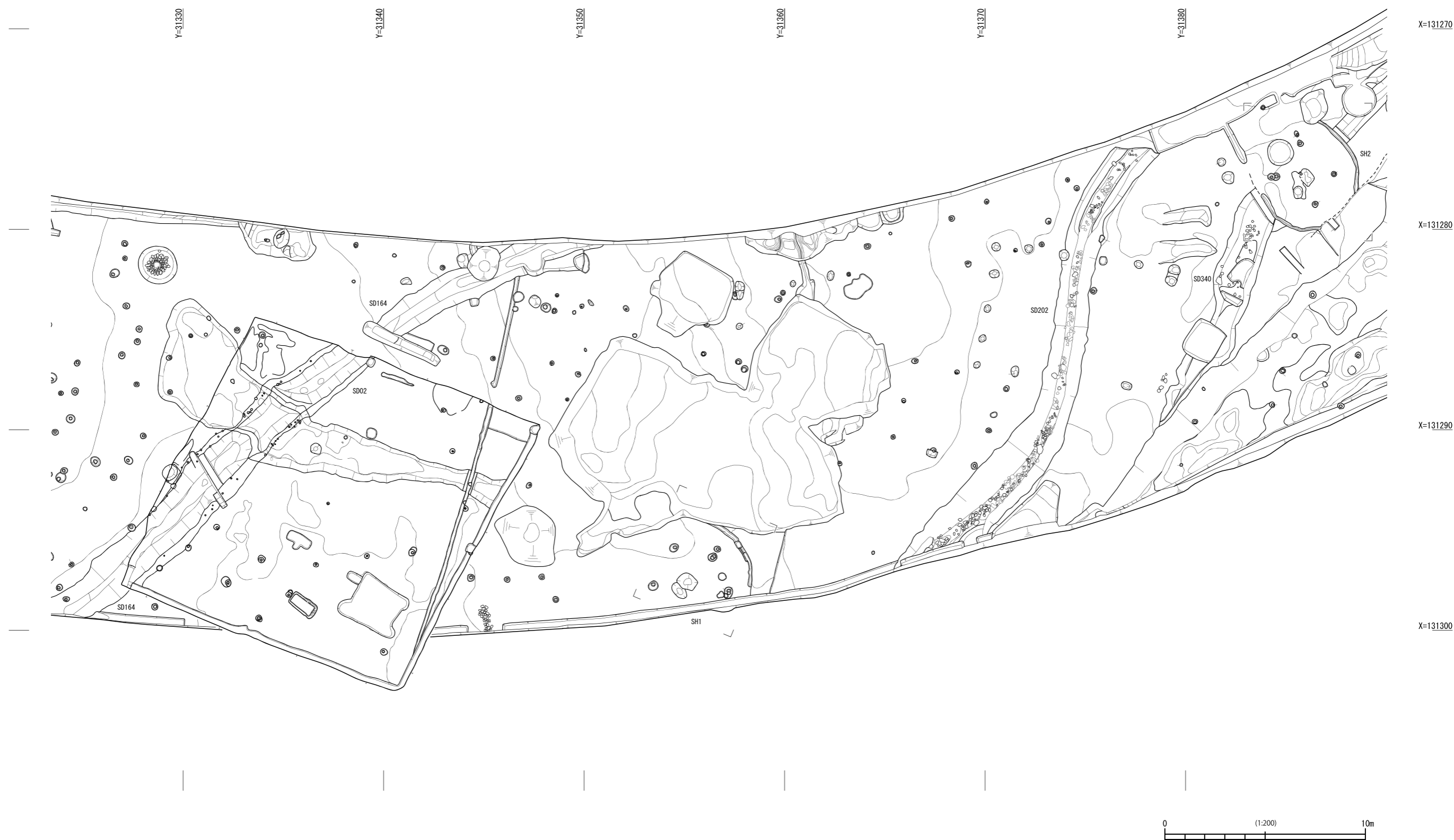
1. 2.5Y3.7/1.2 黄灰色 極細粒砂～細粒砂。耕土。
2. 5Y4.7/1.4 灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で 2.5Y5.7/2.3 黄灰色 シルト混じり極細粒砂がブロック状に入る。旧耕土。
3. 5Y5.2/1.3 灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂
4. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト質極細粒砂～細粒砂
5. 2.5Y6.3/2.4 灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で 10YR4.3/1 褐灰色 シルト質極細粒砂のブロックを疎らに含む。マンガン含む。地山。
- 5' 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質細粒砂で中粒砂混じる。地山。
6. 2.5Y6.4/2.2 灰黄色 シルト混じり極細粒砂。S P 059 柱根埋土。
7. 2.5Y5.7/1.4 黄灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂。S P 059 掘形埋土。
8. 2.5Y6.3/1.4 灰黄色 極細粒砂で焼土を僅かに含む。S P 060 柱根埋土。
9. 2.5Y6.7/2.2 灰黄色 シルト質極細粒砂で 2.5Y5.7/1 黄灰色 極細粒砂のブロックを疎らに含む。S P 060 掘形埋土。
10. 2.5Y5.3/1.7 暗灰黄色 極細粒砂～細粒砂。S P 090 柱根埋土。
11. 2.5Y6.3/2 灰黄色 極細粒砂～細粒砂。S P 090 掘形埋土。
12. 2.5Y5.4/1.3 黄灰色 シルト混じり極細粒砂で 2.5Y4.6/1.3 黄灰色 シルト質極細粒砂のブロックを含む。S D168 埋土。
13. 10YR6.4/1.4 褐灰色 シルト混じり極細粒砂で 10YR4.6/1.3 褐灰色 極細粒砂のブロックを含む。S D168 埋土。
14. 2.5Y5.8/1.3 黄灰色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で炭化物を僅かに含む。S D168 埋土。
15. 2.5Y4.8/2.3 灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で上部にマンガンが多く入る。S D166 埋土。
16. 2.5Y5.8/2.3 灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂。S D166 埋土。
17. 10YR6.7/2.2 にぶい黄褐色 シルト質極細粒砂～細粒砂で 2.5Y5.2/1.4 黄灰色 シルト質極細粒砂のブロックを含む。S D166 埋土。
18. 7.5YR3.7/1.2 褐灰色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で 2.5Y5.6/1.4 黄灰色 シルト質極細粒砂がブロック状に入る。S D161 埋土。
19. 2.5Y6.3/1.7 灰黄色 シルト質極細粒砂～極細粒砂で焼土を僅かに含みマンガンが入る。S K 097 埋土。
20. 2.5Y5.3/1.3 黄灰色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂に 10YR4.3/1.8 灰黄褐色 シルトブロックを含む。直径1～2cm大の円中礫を僅かに含む。S K 097 埋土。
21. 10YR5.6/1.8 灰黄褐色 極細粒砂で炭化物を僅かに含む。S P 180 柱根埋土。
22. 2.5Y5.6/1.7 灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂に 10YR5.3/1 褐灰色 極細粒砂ブロックを含む。S P 180 掘形埋土。
23. 10YR4.6/1.3 褐灰色 極細粒砂～細粒砂で土器片を僅かに含みマンガンが疎らに入る。S D164 埋土。
24. 10YR3.6/1.3 褐灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で直径2～5cm大の角・円中礫を含み土器片含む。S D164 埋土。
25. 2.5Y4.7/1.2 黄灰色 極細粒砂～細粒砂で細礫・土器片を僅かに含む。S D164 埋土。
26. 2.5Y5.7/1.4 黄灰色 極細粒砂～細粒砂で土器片を僅かに含みマンガン入る。S D164 埋土。
27. 10YR4.3/1.4 褐灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で土器片を僅かに含み直径2～5cm大の円中礫を疎らに含む。2.5Y3.3/1.2 黒褐色 シルト～極細粒砂のブロックを疎らに含む。S D164 埋土。
28. 2.5Y5.3/1.8 暗灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂に 2.5Y4.7/1.3 黄灰色 極細粒砂ブロック含む。マンガン入る。S D164 埋土。
29. 2.5Y5.4/2.3 暗灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂に直径1cm大の 2.5Y3.6/1 黄灰色 シルトブロックを疎らに含み土器片を僅かに含む。S D164 埋土。
30. 10YR4.8/1.2 褐灰色 極細粒砂～細粒砂で細礫～直径1cm大の中礫を含み炭化物を含む。S D164 埋土。
31. 2.5Y6.6/1.3 灰白色 シルト質極細粒砂で直径1～2cm大の円中礫を含み炭化物を僅かに含む。マンガン入る。10YR4.3/1.2 褐灰色 極細粒砂がブロック状に入る。地山。
32. 2.5Y6.7/1.8 灰黄色 シルト混じり細粒砂で細礫～直径1cm大の中礫を含み 2.5Y4.2/1 黄灰色 シルト～極細粒砂のブロックが疎らに入る。地山。
33. 5Y5.4/1.2 灰色 シルト混じり細粒砂～極粗粒砂で直径2cm大の中礫を上面に含む。逆級化構造を示し 10YR4.7/1.2 褐色 シルトブロックを含む。ラミナあり。地山。
34. 10YR4.7/1.2 褐灰色 シルト混じり細粒砂～極粗粒砂で細礫～直径3cm大の中礫を逆級化構造で含む。2.5Y4.9/1 黄灰色 シルトのブロックを含む。ラミナあり。地山。
35. 10YR5.3/1.3 褐灰色 細粒砂～極粗粒砂で細礫～直径1cm大の中礫を級化構造で多く含む。ラミナあり。地山。
36. 10YR4/2 灰黄褐色 細粒砂～中粒砂混じりシルト。地山。
37. N6/ 灰色 シルト混じり細粒砂～中粒砂。地山。
38. N6/ 灰色 細粒砂～中粒砂。地山。
39. 砂礫。地山。

1. 10Y4.6/1 灰色 極細粒砂～細粒砂．耕土．
2. 2.5Y3.7/1.6 暗灰黄色 シルト質極細粒砂で細礫・炭化物を疎らに含む．耕土．
3. 5Y4.7/1.4 灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で 2.5Y5.7/2.3 灰黄色 のシルト混じり極細粒砂がブロック状に入る．
4. 5YR5.2/1.3 灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂．旧耕土状．
5. 5Y4.7/1.4 灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で 2.5Y5.7/2.3 灰黄色 シルト混じり極細粒砂がブロック状に入る．旧耕土．
6. 10YR4.8/1.8 灰黄褐色 シルト質極細粒砂～細粒砂で土器片・炭化物を疎らに含む．床土．
7. 10Y4.7/1 灰色 細粒砂混じりシルト質極細粒砂で細礫・炭化物を含み磁器片を僅かに含む．旧耕土・床土．
8. 2.5Y3.7/1.6 暗灰黄色 細粒砂混じり極細粒砂で地山ブロックを疎らに含む．近現代溝埋土か．
9. 2.5Y5.8/2.6 にぶい黄色 細粒砂でマンガン僅かに入る．近現代溝埋土か．
10. 2.5Y5.3/1.4 黄灰色 極細粒砂～細粒砂．マンガンを疎らに含む．SH1埋土．
11. 10YR4.3/2.4 灰黄褐色 シルト混じり細粒砂～中粒砂で 2.5Y4.3/1.4 黄灰色 シルト～細粒砂のブロックを含む．土器片僅かに含む．SH1埋土．
12. 10YR4.3/1.7 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で 10YR5.4/1 褐色 シルトのブロックを疎らに含み土器片・炭化物を含む．マンガン入る．SD202埋土．
13. 7.5YR3.6/1.3 褐色 シルト質極細粒砂～細粒砂で直径5～10cm大の中礫～大礫(亜角礫～円礫)を僅かに含む．炭化物を疎らに含み土器片含む．マンガン入る．SD202埋土．
14. 10YR3.3/1.2 黒褐色 シルト質極細粒砂～細粒砂で直径5cm大の亜円中礫を僅かに含む．土器片・炭化物を含みやや粘質で 2.5Y7/2.6 浅黄色 シルトのブロックを含む．SD202埋土．
15. 10YR3.7/1.4 褐色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で 2.5Y5.7/1 黄灰色 細粒砂～中粒砂が層状に入る．下部に 2.5Y3.6/1 黄灰色 と 2.5Y7/3.3 浅黄色 で直径0.5cm大のシルトブロックを含む．土器片を僅かに含む．SD202埋土．
16. 10YR4.7/1.4 褐色 シルト質極細粒砂～細粒砂で 2.5Y4/1 黄灰色 の直径2cm大シルトブロックと直径5cm大の円中礫含む．SD202埋土．
17. 2.5Y4.6/1.3 黄灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で 10YR4.7/1 褐色 の直径1～2cm大のシルトブロックを疎らに含む．マンガン入る．SD202埋土．
18. 5Y4.7/1.2 灰色 シルト～極細粒砂で極細粒砂～中粒砂が脈状に走る．2.5Y4.6/1 黄灰色 シルトがマーブル状に入り 2.5Y7/4 浅黄色 の直径1cm大のシルトブロックが疎らに入る．直径10cm大の亜円大礫・土器片含む．SD202埋土．
19. 2.5Y5.3/1.8 暗灰黄色 極細粒砂～粗粒砂で 2.5Y7/3 浅黄色 の直径1cm大のシルトブロックを含む．級化構造．SD202埋土．
20. 10YR5.2/1.8 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂に 2.5Y4.3/1 黄灰色 で直径5cm大のシルトブロックを含む．炭化物を僅かに含む．SD202埋土．
21. 5Y5.6/1.2 灰色 シルト～細粒砂で 5Y7.2/2.7 浅黄色 のシルトが層状に入る．炭化物を僅かに含む．SD202埋土．
22. 10YR4.7/2.3 灰黄褐色 細粒砂混じりシルト質極細粒砂．マンガン入る．SD202埋土．
23. 10YR6.3/1.4 褐色 シルト質極細粒砂で酸化鉄が多く入る．SD202埋土．
24. 2.5Y6.2/1.6 灰黄色 極細粒砂～細粒砂で 10YR5.6/1 褐色 のシルトがマーブル状に入る．SD202埋土．
25. 2.5Y5.3/2.3 暗灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で 2.5Y4.3/1 黄灰色 のシルトブロックを僅かに含む．SD202埋土．
26. 流路土層断面の大別第1層に対応．SR308埋土．
27. 流路土層断面の大別第2層に対応．SR308埋土．
28. 2.5Y4.7/1 黄灰色 シルト混じり極細粒砂～中粒砂で炭化物・植物遺体を疎らに含む．下部に 10YR7.7/5 黄褐色 で直径1cm大のシルトブロックを多く含む．10YR3.7/1.2 褐色 シルト質極細粒砂が層状に入る．SR308埋土．
29. 10YR6.8/1.7 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂．SR308埋土．
30. 5Y3.6/1 灰色 細粒砂混じりシルトに 10Y7/1 灰白色 で直径1～2cm大のシルトブロックを疎らに含む．炭化物・植物遺体を僅かに含み粘性強い．SR308埋土．
31. 2.5Y5.3/1.6 暗灰黄色 シルト質混じり極細粒砂～細粒砂で 10YR6/1 褐色 シルトが層状に入る．炭化物を僅かに含む．SR308埋土．
32. 2.5Y6.6/1.8 灰黄色 シルト質極細粒砂で 10YR6/1 褐色 のシルトブロックを疎らに含む．クサリ礫を僅かに含む．SR308埋土．
33. 2.5Y4.7/1.3 黄灰色 シルト質極粗粒砂で炭化物を疎らに含み細礫～直径1cm大の中礫を含む．SR308埋土．
34. 2.5Y6.2/1.4 黄灰色 シルト質極粗粒砂でマンガン多く入る．SR308埋土．
35. 流路土層断面の大別第3層に対応．SR308埋土．
36. 10YR3.4/1 褐色 極細粒砂混じりシルト．SR308埋土．
37. 10Y2.6/1.6 オリーブ黒色 シルト～細粒砂で細粒砂～中粒砂をブロック状に含み細礫～直径3cm大の中礫を下面に多く含む．植物遺体・炭化物を疎らに含む．東側の1/3は 7.5Y7.2/1.3 灰白色を呈する．SR308埋土．
38. 2.5Y5.6/2.4 灰黄色 極細粒砂～細粒砂で焼土を疎らに含みマンガン粒入る．酸化鉄多く入る．SD307埋土．
39. 2.5Y4.7/2.5 暗灰黄色 シルト質極細粒砂で土器片を僅かに含みマンガン粒疎らに入る．酸化鉄多く入る．やや粘質．SD307埋土．
40. 10YR5.8/2.3 灰黄褐色 細粒砂混じりシルト質極細粒砂．SD307埋土．
41. 2.5Y5.7/2.3 灰黄色 極細粒砂～細粒砂で 2.5Y6/1.4 黄灰色 のシルト質極細粒砂ブロックを疎らに含む．地山．
42. 10YR6.2/1.8 灰黄褐色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で 2.5Y5.7/1 黄灰色 のシルトブロックを含む．長さ40cm大の平石含む．地山．
43. 2.5Y6.3/2.7 にぶい黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂で 2.5Y5/1 黄灰色 のシルトブロックを含む．マンガン入る．
44. 2.5Y5.7/1.3 黄灰色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂で 10YR6.3/1 褐色 のシルトブロックを含む．
45. 2.5Y6.2/1.4 黄灰色 シルト混じり細粒砂で 2.5Y4.6/1 黄灰色 のシルトブロックを含む．
46. 10YR4.7/2.3 灰黄褐色 細粒砂～粗粒砂．地山．
47. 2.5Y6.7/2.6 浅黄色 極細粒砂～細粒砂で 2.5Y7.3/1.4 灰白色 シルト質極細粒砂がブロック状に入る．西半はシルト質極細粒砂が主となる．地山．
48. 10YR5.6/2.7 にぶい黄褐色 シルト質極細粒砂混じり細粒砂でマンガンが僅かに入る．地山．
49. 10YR6.2/1.7 灰黄褐色 シルト質極細粒砂でクサリ礫を僅かに含みやや粘質．地山．
50. 2.5Y5.7/2.4 灰黄色 シルト～細粒砂でマンガン多く入る．地山．
51. 10YR5.6/2.4 灰黄褐色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂．地山．
52. 5Y5.8/1.2 灰色 シルト混じり極細粒砂～中粒砂で粗粒砂が疎らに混じる．地山．

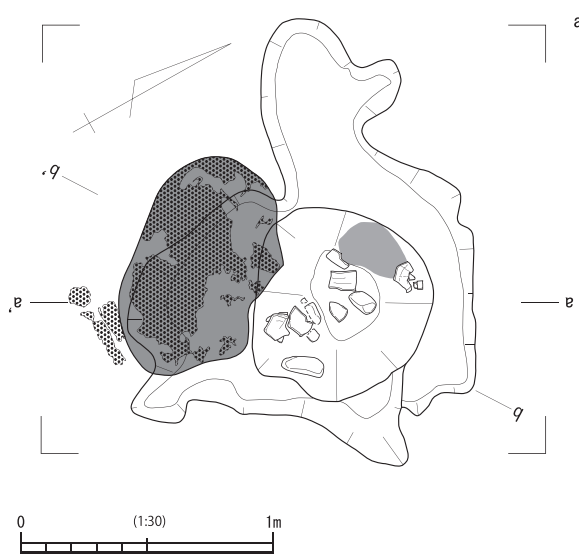
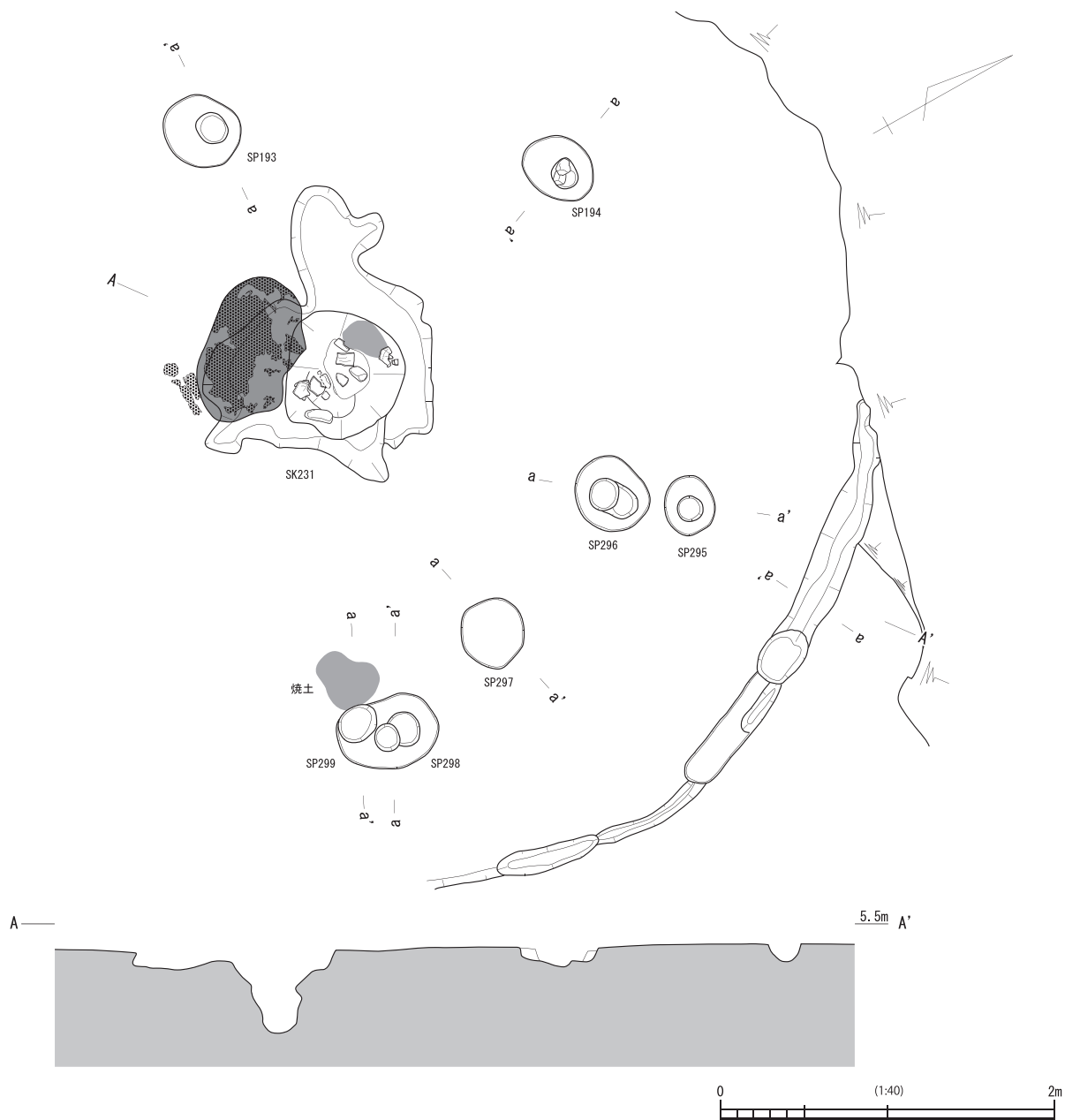


1. 2.5V3.7/1.6 暗灰黄色 シルト質極細粒砂で細礫・炭化物を疎かに含む。耕土。
2. 10V4.7/1 灰色 細粒砂混じりシルト質極細粒砂で細礫・炭化物を含み磁器片僅かに含む。床土。
3. 5V6.6/1.6 灰白色 極細粒砂～粗粒砂で 2.5V6.2/1 黄灰色 のシルトが層状に入る。炭化物含む。
4. 2.5V5.7/2.3 灰黄色 極細粒砂～細粒砂で1～6 cm長の円中礫と炭化物を疎かに含む。マンガン含む。
5. 2.5V6.7/1.6 灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂で径 1 cm大の円中礫を疎かに含む。マンガン入る。
6. 2.5V6.6/2.7 浅黄色 シルト混じり細粒砂で 10YR6.4/2 灰黄褐色 極細粒砂をブロック状に含む。
7. 2.5V6.2/1.7 灰黄色 シルト質極細粒砂で細礫～径 1 cm大の円中礫を僅かに含む。2.5V7.7/2.3 灰白色 極細粒砂が層状に入る。平安時代の埋土。
8. 2.5V5.6/1.4 黄灰色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で炭化物・径 0.5～2 cm大の円中礫を疎かに含む。10 cm長の匝円～円大礫を僅かに含む。平安時代の埋土。
9. 5V5.2/1.2 灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で炭化物・土器片を僅かに含む。上面に酸化鉄が層状に入る。平安時代の埋土。
10. 2.5V5.3/1.4 黄灰色 極細粒砂で下部の砂粒が僅かに粗い。平安時代の埋土。
11. 2.5V6.2/1.1 黄灰色 シルト～細粒砂で炭化物を僅かに含む。3～5 cm長の角～亜角中礫を僅かに含む。やや粘質。平安時代の埋土。
12. 10YR5.4/1.2 褐灰色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で 5Y7.2/2.3 灰白色 の細粒砂～中粒砂をマープル状に含む下部は還元により 10YR5.8/1 灰色を呈する。土器片・瓦片・植物遺体および径 0.5～5 cm大の円中礫を僅かに含む。20 cm長の匝円大礫も含む。平安時代の埋土。
13. 2.5V5.6/1.7 灰黄色 極細粒砂～中粒砂で径 0.5～8 cm大の円中～円大礫を多く含む土器片を僅かに含む。淘汰悪い。
14. 2.5V5.2/2.2 暗灰黄色 シルト混じり細粒砂～中粒砂で 10YR6/1 褐灰色 のシルトブロックを僅かに含む。
15. 2.5V6.3/2.4 灰黄色 極細粒砂～細粒砂で 10YR5.2/1.7 灰黄褐色 極細粒砂がブロック状に入る。マンガン疎かに含む。
16. 2.5V5.7/2.6 ぶい黄色 細粒砂～中粒砂でラミナあり。
17. 2.5V6.4/1.7 灰黄色 極細粒砂～細粒砂でラミナあり。
18. 10YR5.2/1.4 褐灰色 シルトで直径 1～3 cm大の円中礫含む。後半部は極細粒砂～細粒砂を含む。
19. 2.5V6.2/2.1 灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で炭化物を僅かに含む直径 1～2 cm大の円中礫と 10YR4.7/1 褐灰色 シルトブロックを疎かに含む。
20. 2.5V5.8/1.6 灰黄色 細粒砂～中粒砂で 2.5V4.7/1 黄灰色 および 5Y7.7/2.7 淡黄色 のシルトブロックを多く含む。
21. 2.5V6.6/2.4 灰黄色 細粒砂～粗粒砂でラミナあり。
22. 5V5.4/1 灰色 細粒砂～極粗粒砂で細礫～30 cm長の中礫～巨礫(匝円～円礫)を多く含む土器片を僅かに含む。

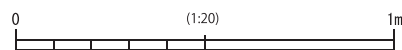
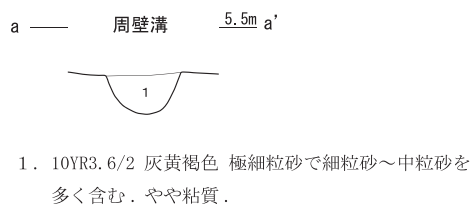
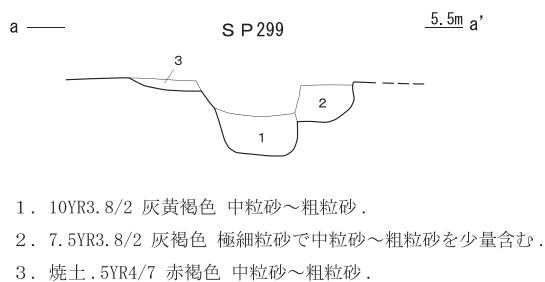
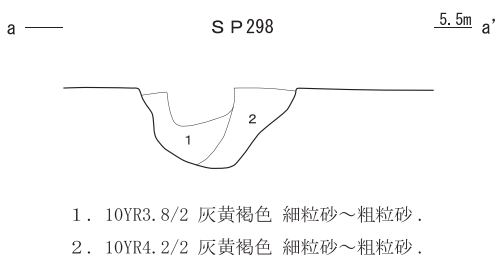
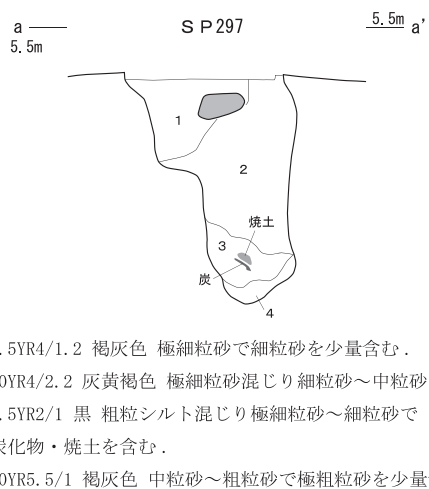
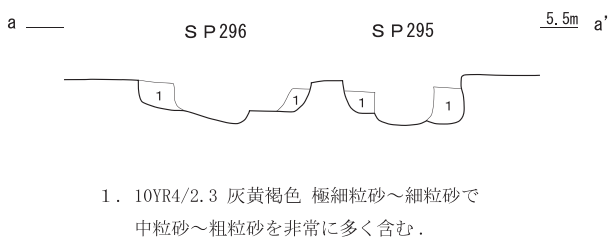
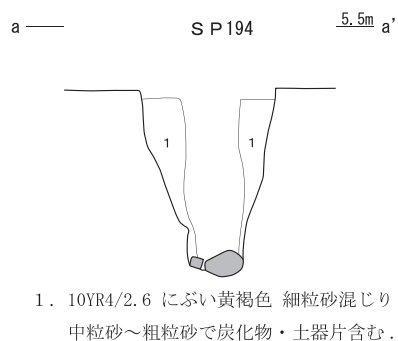
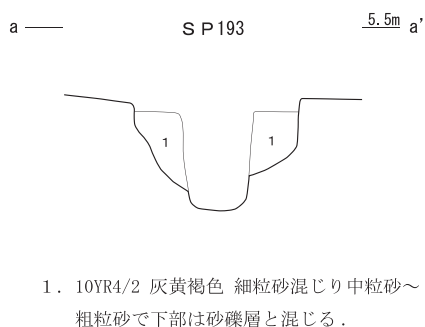
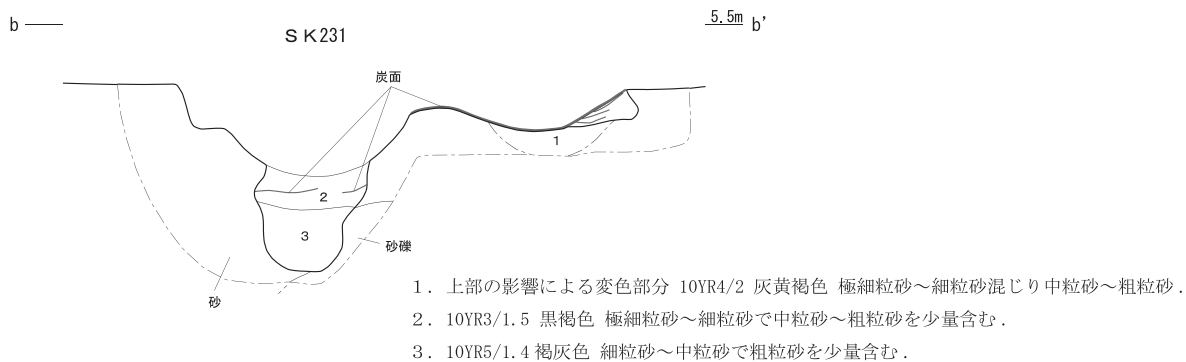
東2区南壁～東壁 土層断面



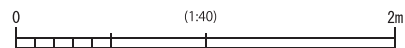
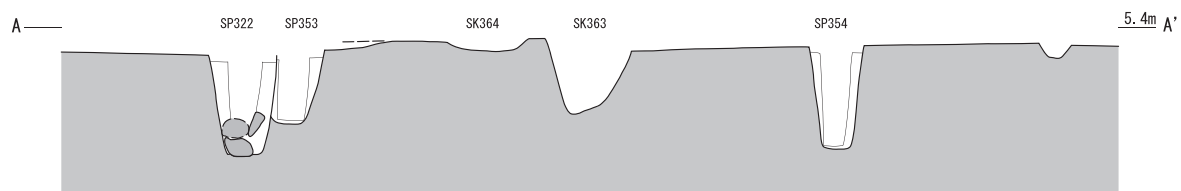
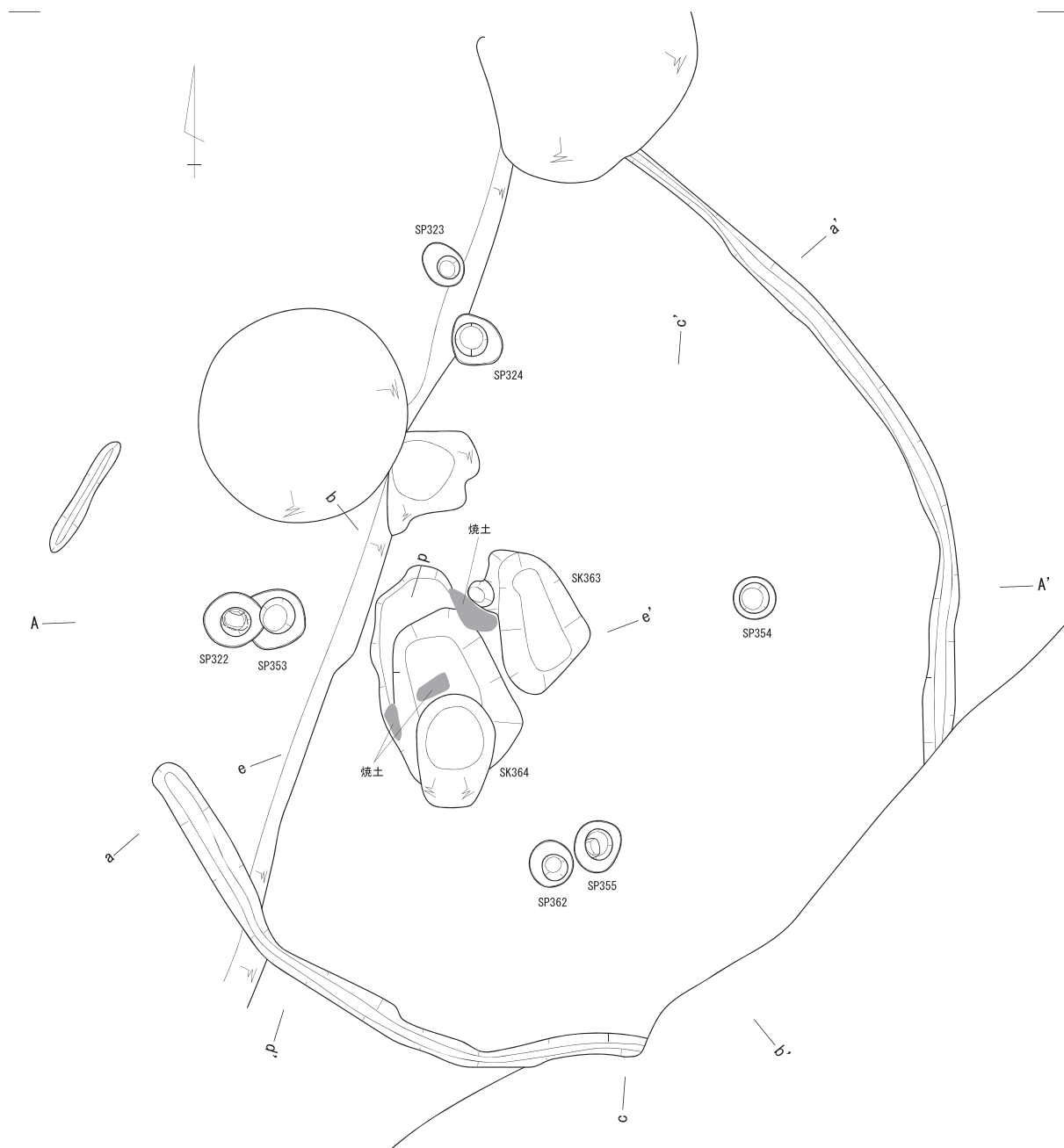
弥生時代遺構全体

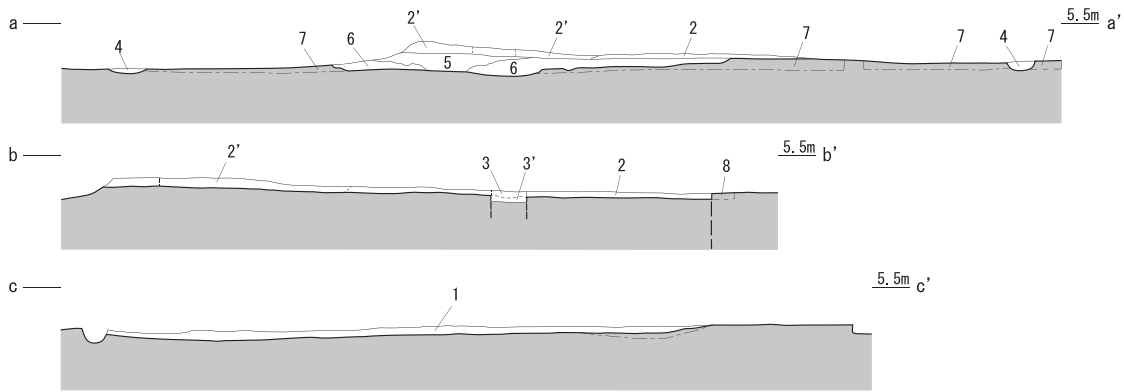


1. 2.5Y5.3/2.4 暗灰黄色
2. 10YR3.7/1.7 灰黄褐色
3. 10YR2.7/1.3 黒褐色
4. 10YR3.3/1.7 黒褐色
5. 2.5Y4.6/1.4 黄灰色
6. 10YR3.6/1.6 灰黄褐色
7. 2.5Y5.3/1.4 黄灰色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で炭化物を僅かに含む。
10YR4.3/1 褐色で直径1cm未満のシルトブロックが疎らに入る。
マンガン粒・酸化鉄混じる。
8. 2.5Y6.3/1.7 灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂で炭化物・マンガン
を僅かに含む。酸化鉄混じる。
9. 2.5Y5.4/1.8 暗灰黄色 極細粒砂～細粒砂で炭化物含む。酸化鉄混じる。

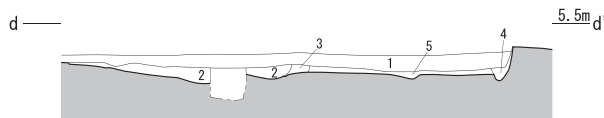


S H 1 内中央土坑・柱穴等 埋土土層断面

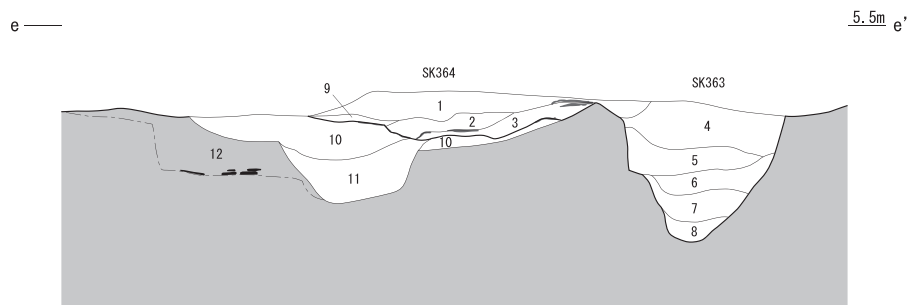
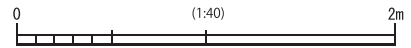




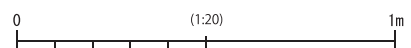
1. 10YR3.6/2 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂を含む。に 10YR5.4/4 にぶい黄褐色 細粒砂で中粒砂を含みやや砂質 が約 15%混じる。貼床。
2. 10YR5.3/2.4 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で土器片・粘土塊を僅かに含む。マンガンを疎らに含む。
- 2'. 10YR4.3/1.6 灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で土器片を僅かに含む。焼土・マンガンを疎らに含む。
3. 2.5Y4.7/1.7 暗灰黄色 極細粒砂～細粒砂で 2.5Y6.7/2.3 灰白色シルト質極細粒砂がブロック状に入る。S P 355 埋土。
- 3'. 10YR5.3/1.4 褐灰色 シルト混じり極細粒砂で 2.5Y4.2/1 黄灰色シルト質極細粒砂ブロックを含む。S P 355 埋土。
4. 2.5Y5.7/2.1 灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂で 10YR6/1 褐灰色 極細粒砂をブロック状に含む。周壁溝埋土。
- 4'. 2.5Y5.4/2.3 暗灰黄色 細粒砂混じりシルト質極細粒砂～極細粒砂で直径 2 cm 大の中円礫を含む。10YR5/1.7 灰黄褐色 極細粒砂をブロック状に含む。周壁溝埋土。
5. 10YR4.7/1.4 褐灰色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で土器片・炭化物を僅かに含む。マンガン・酸化鉄を含む。
6. 2.5Y4.8/1.7 暗灰黄色 極細粒砂～細粒砂で 10YR6.7/6 明黄褐色細粒砂をブロック状に含む。マンガン・酸化鉄を含む。貼床。
7. 10YR6.2/1.4 褐灰色 極細粒砂混じり細粒砂でマンガン粒を疎らに含む。S D 340 埋土。
8. 2.5Y5.7/2.4 灰黄色 極細粒砂～中粒砂でマンガン・酸化鉄混じる。S R 308 埋土。



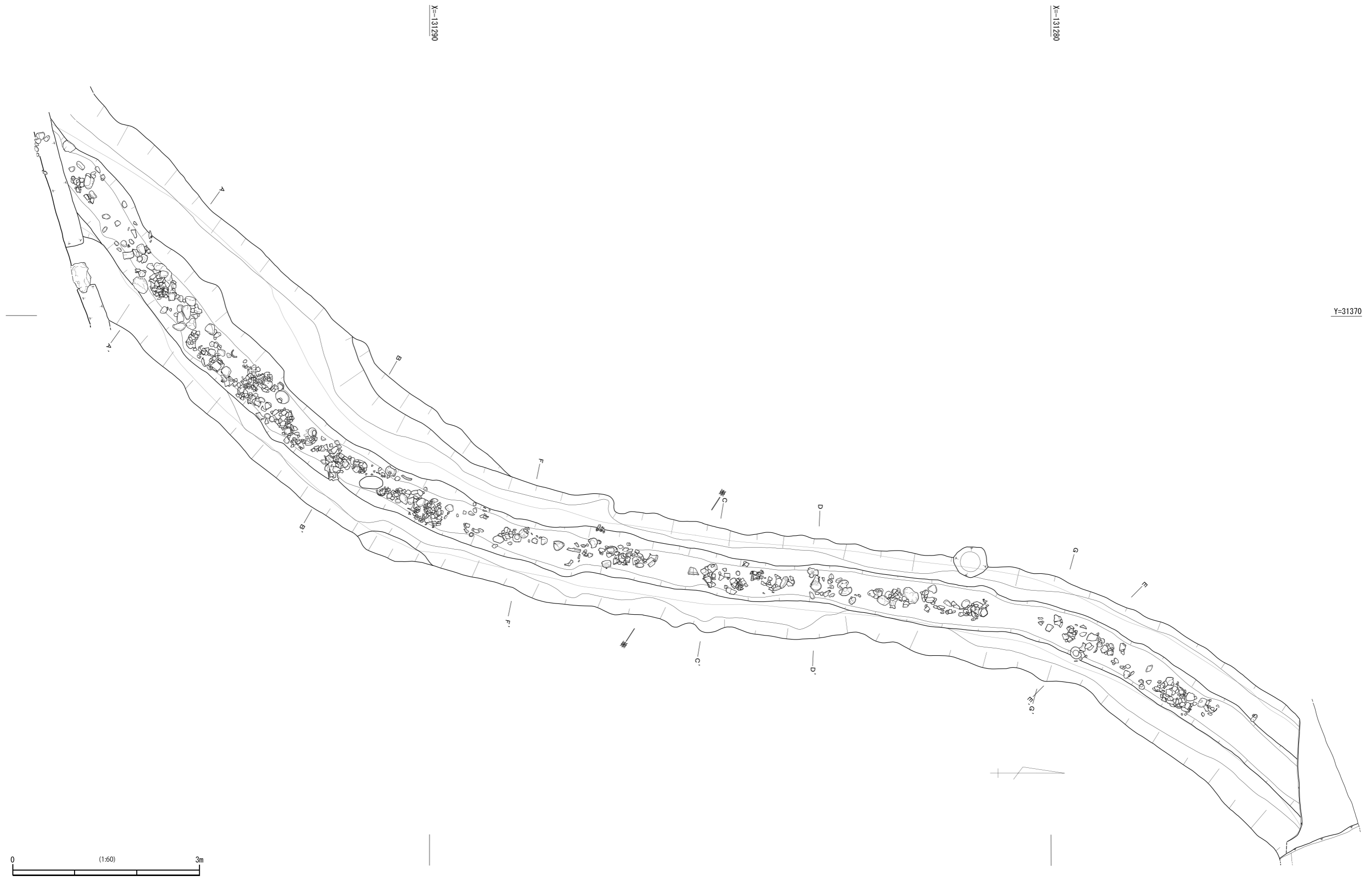
1. 10YR4.5/2 灰黄褐色 極細粒砂で中粒砂～粗粒砂を少量含む。鉄分・マンガン含む。
2. 2.5Y5.7/2.5 灰黄色 極細粒砂で細粒砂～中粒砂を含み 2.5Y7/6 明黄褐色 極細粒砂を多く含む。
3. 10YR3.8/1.6 灰黄褐色 極細粒砂で土器片を僅かに含み炭化物・マンガン含む。
4. 2.5Y4.3/1.4 黄灰色 極細粒砂～細粒砂で細礫を少量含みマンガン少量含む。周壁溝埋土。
5. 2.5Y4.8/1.7 暗灰黄色 極細粒砂～細粒砂で 10YR6.7/6 明黄褐色 細粒砂をブロック状に含む。マンガン含む。貼床。



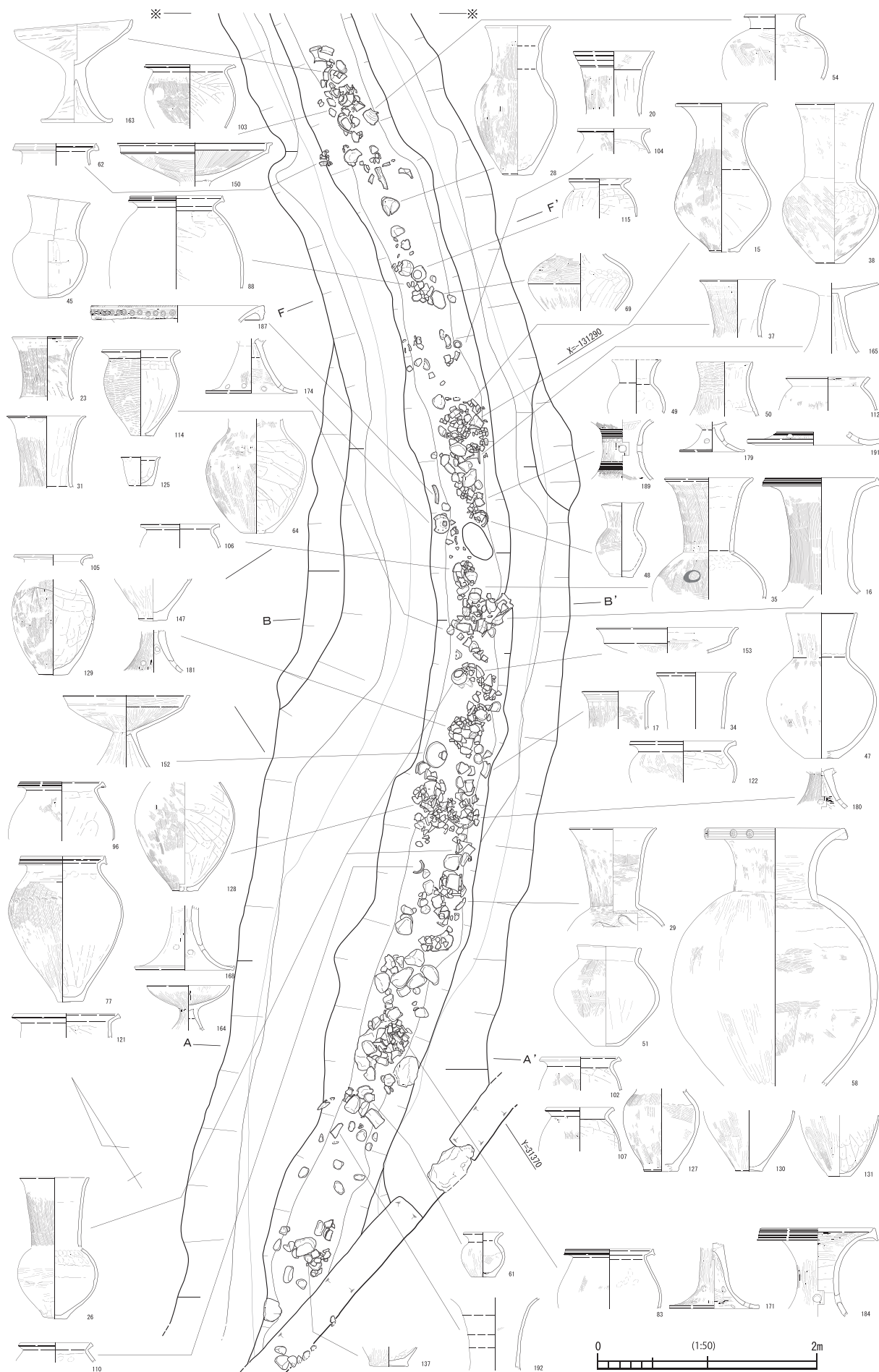
1. 10YR3/1.7 黒褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を微量含む。
2. 10YR4/1.8 灰黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂で炭・焼土塊を多く含む。灰層と思われる。
3. 7.5YR5/1 褐灰色 細粒砂混じり極細粒砂で炭・焼土塊を含む。灰層と思われる。上下端面に炭ラインあり。
4. 10YR3.6/2 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂を少量含む。
5. 10YR3.7/2 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂を少量含む。ラミナ状の炭層あり。土器少量含む。
6. 7.5YR3.6/1 褐灰色 細粒砂で粗粒シルト少量含み粘質。灰層に似るが粒子は粗い。
7. 10YR4/2 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂でやや粘質。炭化物を微量含む。
8. 10YR4/2.6 にぶい黄褐色 極細粒砂で細粒砂～中粒砂を少量含む。やや粘質。
9. 10YR4.2/1.6 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を微量含む。
10. 10YR5/3.1 にぶい黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂を含む。やや砂質。貼床土の堆積。
11. 10YR3/1.8 黒褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂を含む。土坑埋土。
12. 10YR4.8/4 にぶい黄褐色 細粒砂で極細粒砂を少量含む。土器含む。S D 340 埋土。



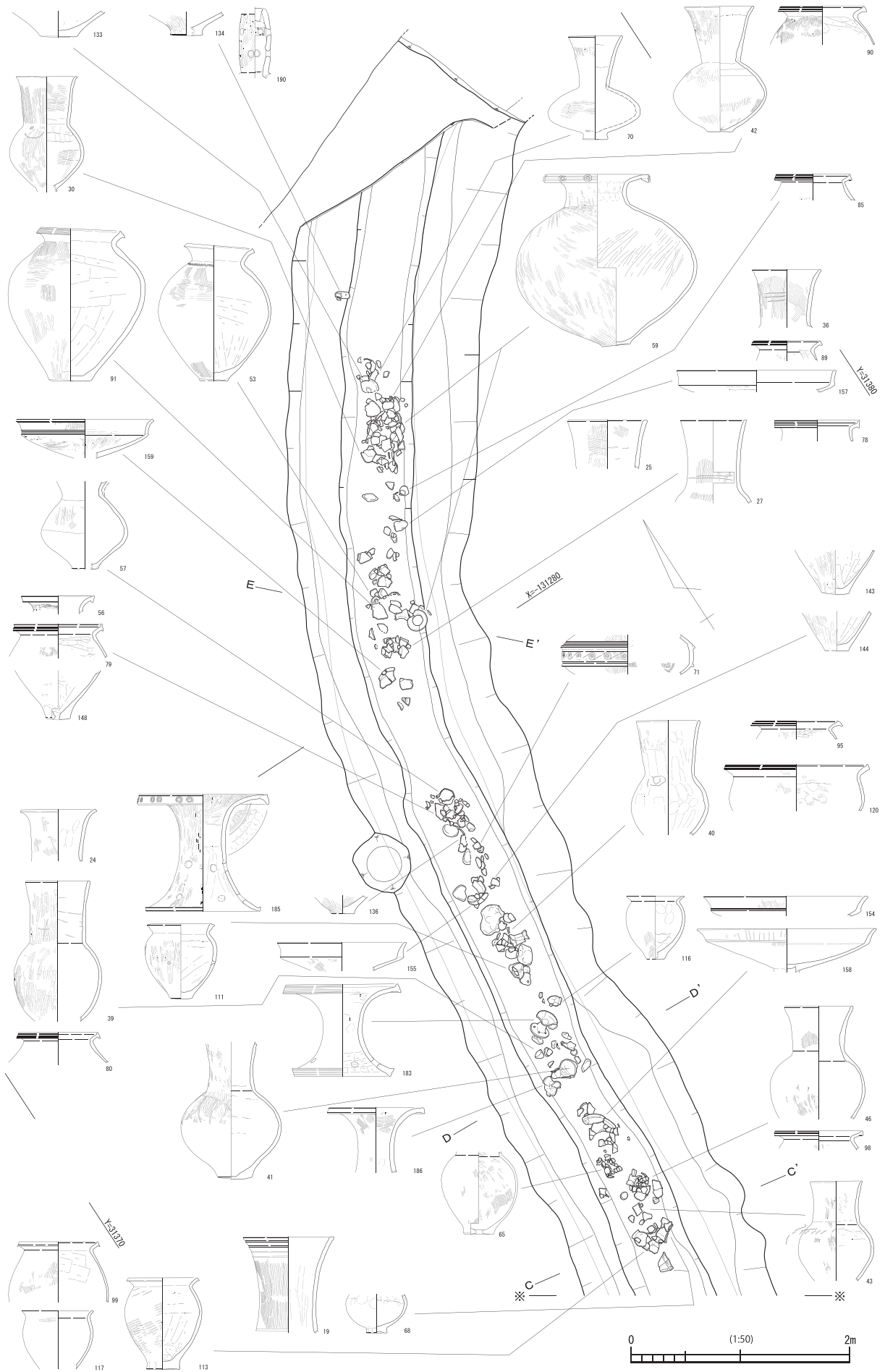
SH2 埋土土層断面



SD 202 平面

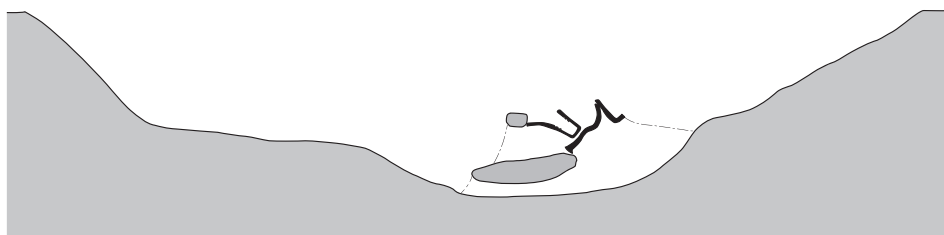


S D 202 南半 土器出土状况

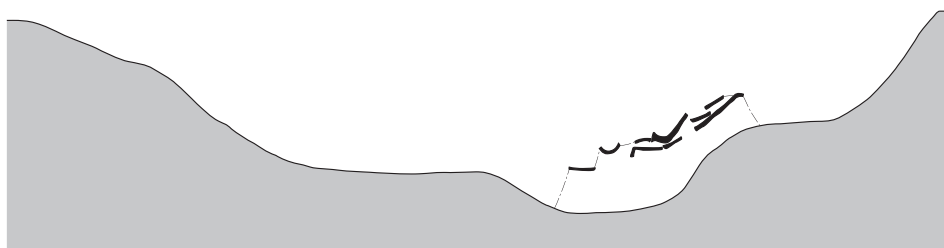


S D 202 北半 土器出土状况

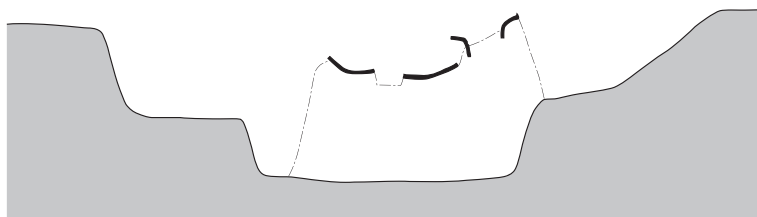
A — 5.4m A'



B — 5.4m B'



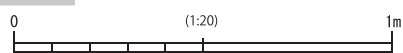
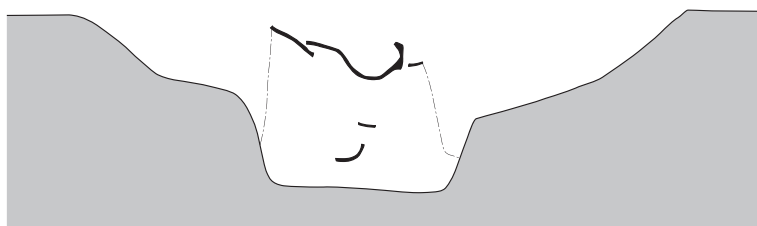
C — 5.4m C'



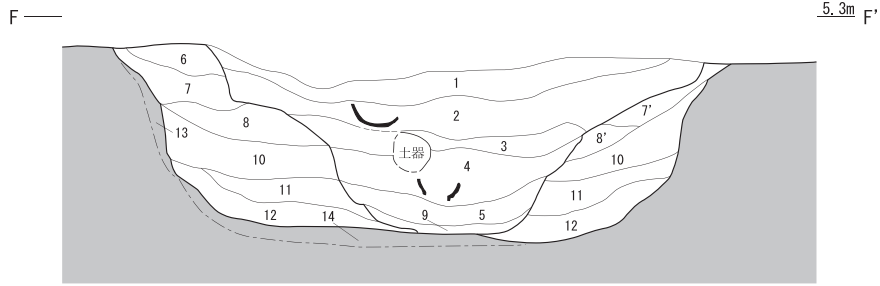
D — 5.4m D'



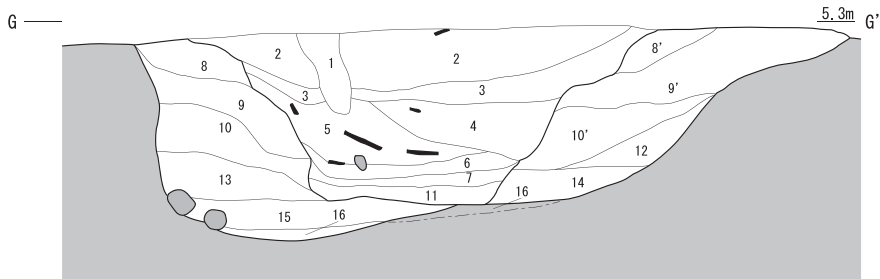
E — 5.4m E'



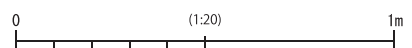
S D 202 土器出土状况断面



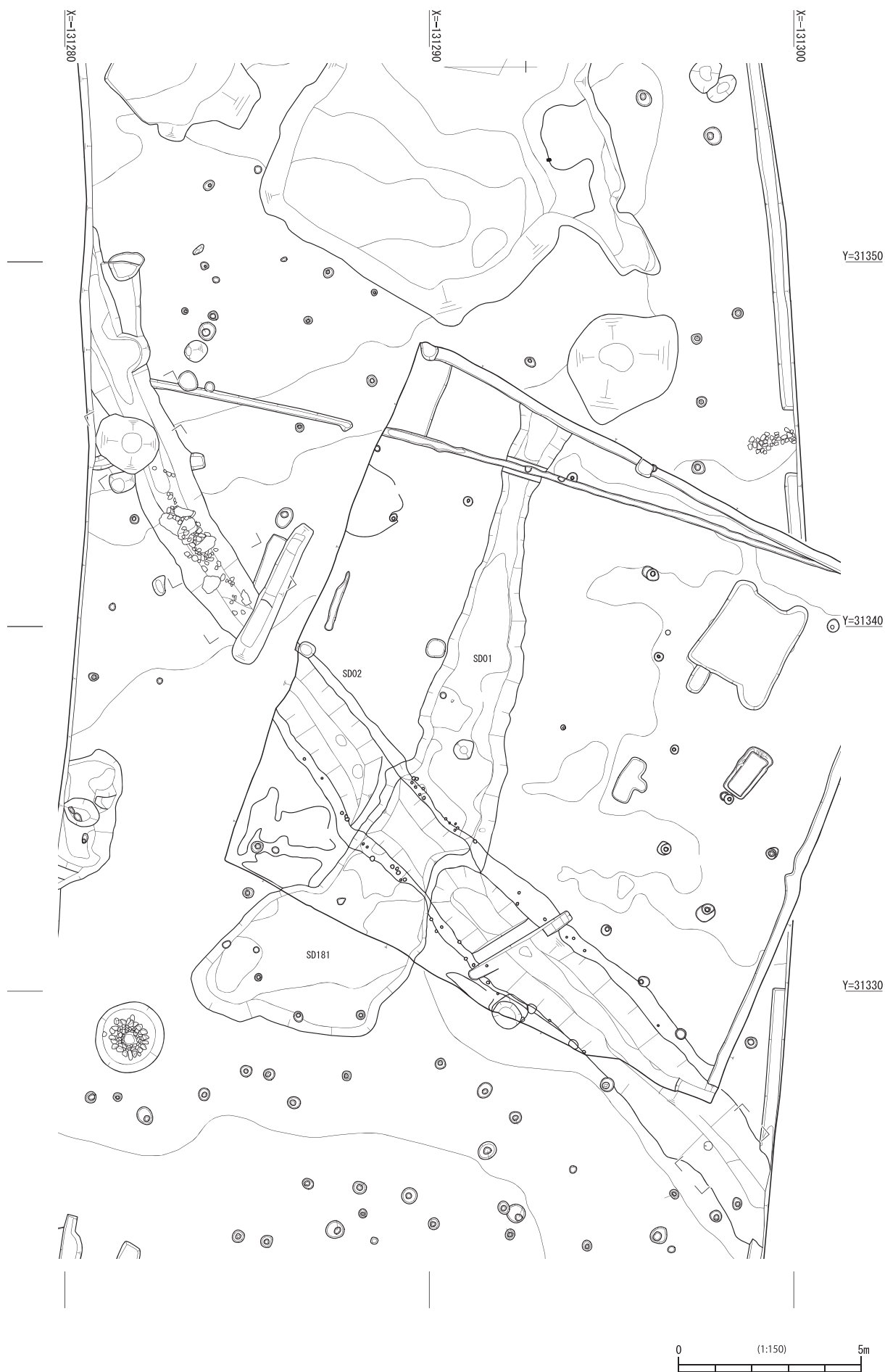
1. 10YR3.7/1.3 褐灰色 細粒砂混じりシルト質極細粒砂で直径2～3cm大の円中礫と焼土・炭化物を僅かに含む。土器片を疎らに含む。G-G'の第3層に対応。
2. 10YR3.3/1.4 黒褐色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径2～3cm大の円中礫と微少な粘土塊・炭化物を僅かに含む。土器片多く含む。G-G'の第4層に対応。
3. 2.5Y3.2/1.3 黒褐色 シルト質極細粒砂で直径1～2cm大の円中礫や微少な粘土塊・炭化物および直径0.5～1cm大の浅黄色シルト質極細粒砂ブロックを僅かに含む。土器片含む。G-G'の第5層に対応。
4. 2.5Y4.2/1.1 黄灰色 シルト質極細粒砂で直径1～4cm大の亜円～円中礫を疎らに含み上面に酸化鉄が層状に入る。2.5Y6.7/2.7 浅黄色 極細粒砂がブロック状に入る。炭化物含み土器片多く含む。G-G'の第6層に対応。
5. 2.5Y5.2/1.4 黄灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で直径2～5cm大の亜円～円中礫を含む。G-G'の第7層に対応。
6. 10YR5.1/1.3 褐灰色 極細粒砂～細粒砂で炭化物・焼土塊を僅かに含む。G-G'の第8層に対応。
7. 2.5Y5.7/1.4 黄灰色 極細粒砂で 10YR3.3/1.6 黒褐色 極細粒砂ブロックを僅かに含む。G-G'の第9層に対応。
- 7'. 2.5Y4.8/1.7 暗黄褐色 極細粒砂で上部に2.5Y6.2/1.2 黄灰色 シルト質極細粒砂がブロック状に入る。G-G'の第9層に対応。
8. 10YR4.3/1.4 褐灰色 細粒砂混じりシルト質極細粒砂で 2.5Y6.3/1.2 黄灰色 シルト質極細粒砂ブロックを僅かに含む。G-G'の第10層に対応。
- 8'. 2.5Y5.3/1.8 暗黄褐色 シルト質極細粒砂で直径1～2cm大の亜角中礫を僅かに含み 10YR4.2/1.7 灰黄褐色 極細粒砂がブロック状に入る。G-G'第10層に対応。
9. 5Y3.6/1 灰色 シルト質極細粒砂で直径1～3cm大の円中礫を含む。炭化物を僅かに含む。
10. 10YR5.7/1.6 灰黄褐色 シルト質極細粒砂～極細粒砂で細礫を疎らに含む。マンガン粒入る。
11. 2.5Y4.7/1.3 黄灰色 極細粒砂～細粒砂で直径1～2cm大の亜角～亜円中礫を僅かに含む。2.5Y7.2/3.3 浅黄色 極細粒砂がブロック状に疎らに入る。
12. 10YR4.6/1.4 褐灰色 極細粒砂で直径1～2cm大の亜角～円中礫と炭化物を僅かに含む。下面に 2.5Y6/1 黄灰色 細粒砂がブロック状に入る。
13. 2.5Y6.7/5 明黄褐色 シルト質極細粒砂。地山。
14. 2.5Y5.7/2.6 にぶい黄色 シルト混じり細粒砂～中粒砂で直径1～8cm大の円中礫～円大礫が非常に多く入る。地山。



1. 2.5Y4.2/1.3 黄灰色 極細粒砂～細粒砂で直径2cm大の円中礫と炭化物を僅かに含む。木根による攪乱。
2. 10YR4.3/1.6 灰黄褐色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径2cm大の亜円～円中礫と炭化物・焼土を疎らに含む。土器片を多く含む。
3. 10YR3.7/1.4 褐灰色 細粒砂混じり極細粒砂で直径1～1.5cm大の亜円中礫と炭化物を疎らに含む。土器片僅かに含む。
4. 10YR3.2/1.2 黒褐色 シルト混じり極細粒砂で直径1～3cm大の亜円～円中礫を僅かに含み炭化物を疎らに含む。土器片を多く含む。
5. 7.5YR3.6/1.3 褐灰色 シルト混じり極細粒砂で直径2～4cm大の亜円～円中礫と炭化物を疎らに含む。土器片を多く含む。
6. 2.5Y4.3/1.2 黄灰色 細粒砂混じりシルト質極細粒砂で直径1cm大の亜角～円中礫を疎らに含む。土器片含む。上面に炭化物を多く含む。
7. 2.5Y5.3/1.4 黄灰色 極細粒砂で直径1cm大の円中礫を僅かに含む。2.5Y6.7/2.3 灰黄色 シルトブロックを疎らに含む。
8. 10YR5.3/1.2 褐灰色 極細粒砂～細粒砂でシルト混じり極細粒砂が1mm程度の厚さで層状に入る。上面に酸化鉄を多く含む。
- 8'. 10YR4.8/1.4 褐灰色 極細粒砂～細粒砂で直径1～2cm大の円中礫を僅かに含む。
9. 2.5Y5.2/1.7 暗黄褐色 細粒砂混じりシルト質極細粒砂で直径1～2cm大の亜角～亜円中礫を僅かに含む。
- 9'. 2.5Y5.1/1.3 黄灰色 シルト質極細粒砂で微少な焼土塊を僅かに含む。
10. 10YR4.4/1.7 灰黄褐色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径1cm大の 5Y5.7/1 灰色 シルトブロックを含む。
- 10'. 10YR5.3/2.2 灰黄褐色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で約8×約9cmの 10YR3.4/1.6 黒褐色 シルト質極細粒砂がブロック状に入る。
11. 5Y3.6/1 灰色 シルト質極細粒砂で直径1～3cm大の円中礫を含む。炭化物を僅かに含む。
12. 10YR5.6/1.7 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で直径1～3cm大の円中礫を疎らに含む。
13. 10YR3.6/1.7 灰黄褐色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で 10YR6.7/5.3 明黄褐色 シルトがマーブル状に入る。
14. 2.5Y4.7/1.3 黄灰色 シルト質極細粒砂で 7.5YR4/1 褐灰色 シルトブロックと細礫を僅かに含む。焼土塊・炭化物を僅かに含む。
15. 10YR4.3/1.6 灰黄褐色 シルト質極細粒砂～細粒砂で直径1～2cm大の円中礫を疎らに含み直径5～7cm大の円中～大礫を2石含む。
16. 2.5Y5.7/2.6 にぶい黄色 シルト混じり細粒砂～中粒砂で直径1～8cm大の円中礫～円大礫が非常に多く入る。地山。



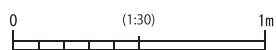
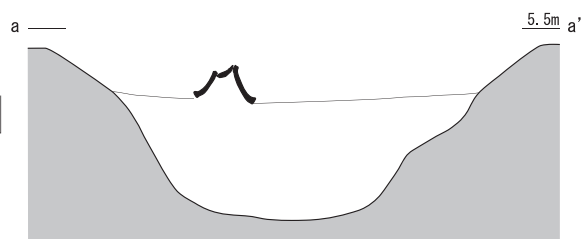
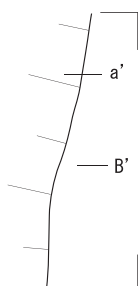
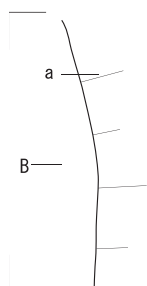
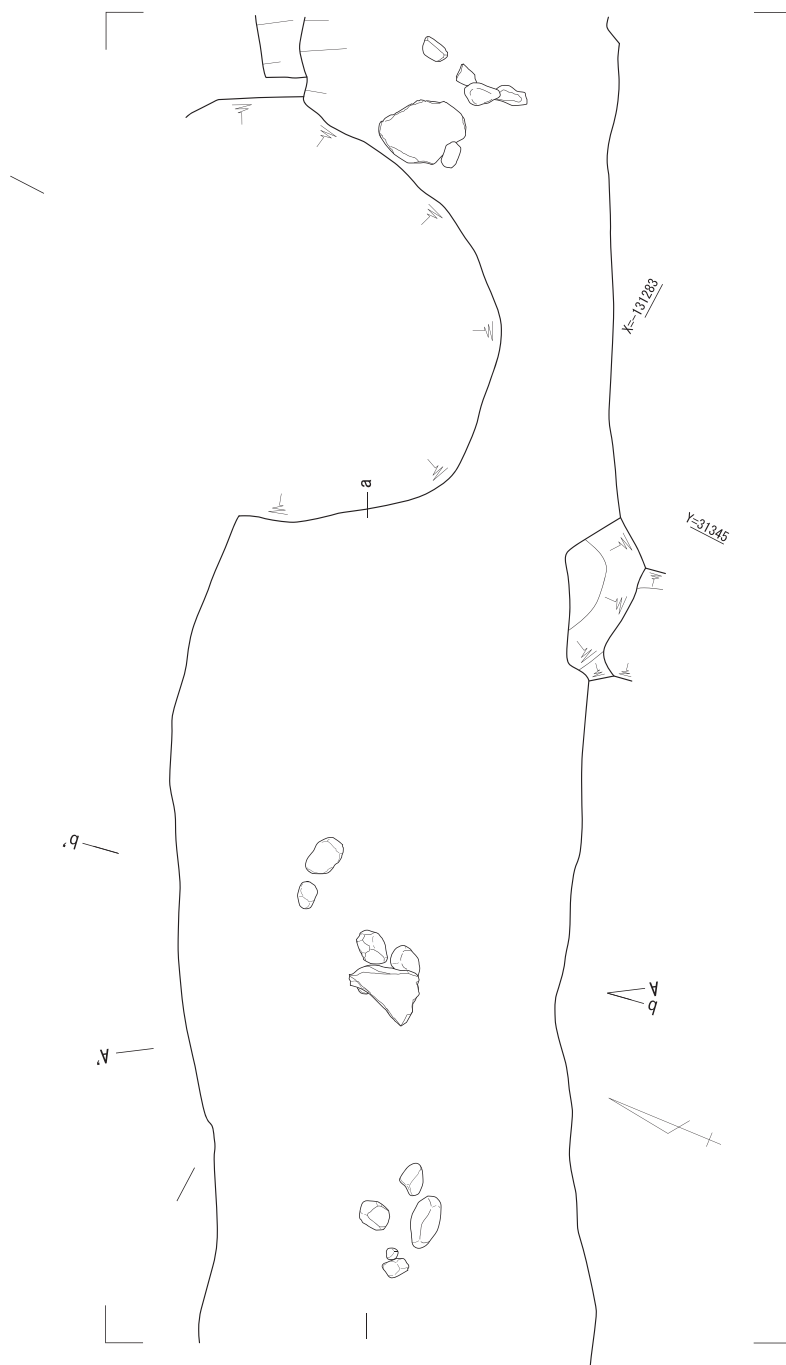
S D 202 埋土土層断面図



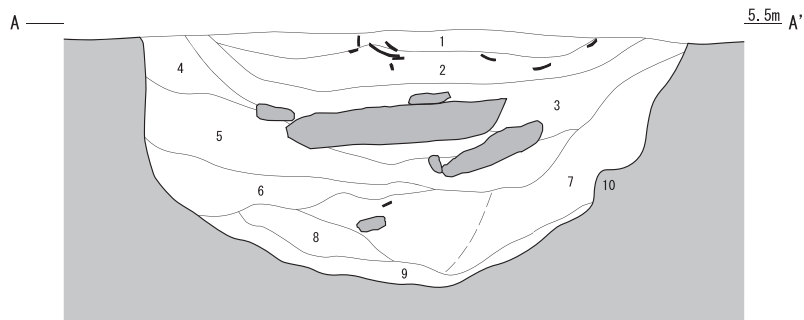
SD 164 平面



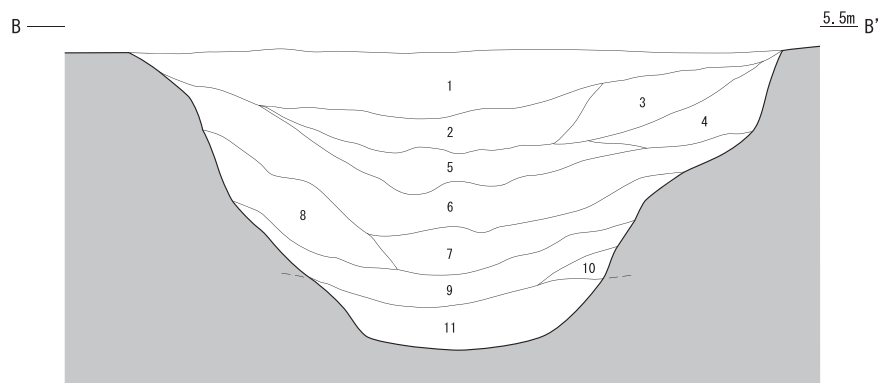
S D 164 遺物出土状況(1)



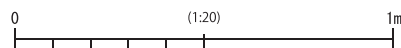
S D 164 遺物出土状況(2)



1. 10YR5.3/1.7 灰黄褐色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径1cm大の 10YR4/1 褐灰色 シルトブロックを含む。土器片・炭化物を含みマンガン粒入る。
2. 2.5Y4.7/1.2 黄灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で土器片を多く含み炭化物を含み。マンガン粒入る。
3. 10YR2.7/1.3 黒褐色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂で直径10～20cm大の円中礫と50～80cm長の亜角大～巨礫を多く含み直径1cm大の 2.5Y6.6/2.6 浅黄色 シルトシルトブロックを含む。土器片・炭化物を含みマンガン粒入る。
4. 2.5Y5.4/1.3 黄灰色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で炭化物を僅かに含みマンガン粒入る。
5. 2.5Y4.9/1.1 黄灰色 シルト質極細粒砂～極細粒砂で直径1cm大の 10YR4/1 褐灰色 シルトブロックを含み炭化物を僅かに含む。マンガン粒入る。
6. 10YR5.6/1.3 褐灰色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径1cm大の 2.5Y4.7/1 黄灰色 シルトブロックを僅かに含む。
7. 2.5Y5.2/1.5 黄灰色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂で直径1cm大の 2.5Y4/1 黄灰色 シルトブロックを含み20cm長の亜角大礫を含む。中央は褐色が強まり土器片が含まれる。マンガン粒が疎らに入る。
8. 5Y4.4/1.2 灰色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂でやや粘質。炭化物を僅かに含みマンガン粒僅かに入る。
9. 2.5Y5.7/1.4 黄灰色 シルト～極細粒砂で直径1cm大の 5Y5.4/1 灰色 シルトブロックを僅かに含む。粘性強い。
10. 2.5Y6.2/2.6 にぶい黄色 シルト～細粒砂で鉄分・マンガン粒入る。地山。



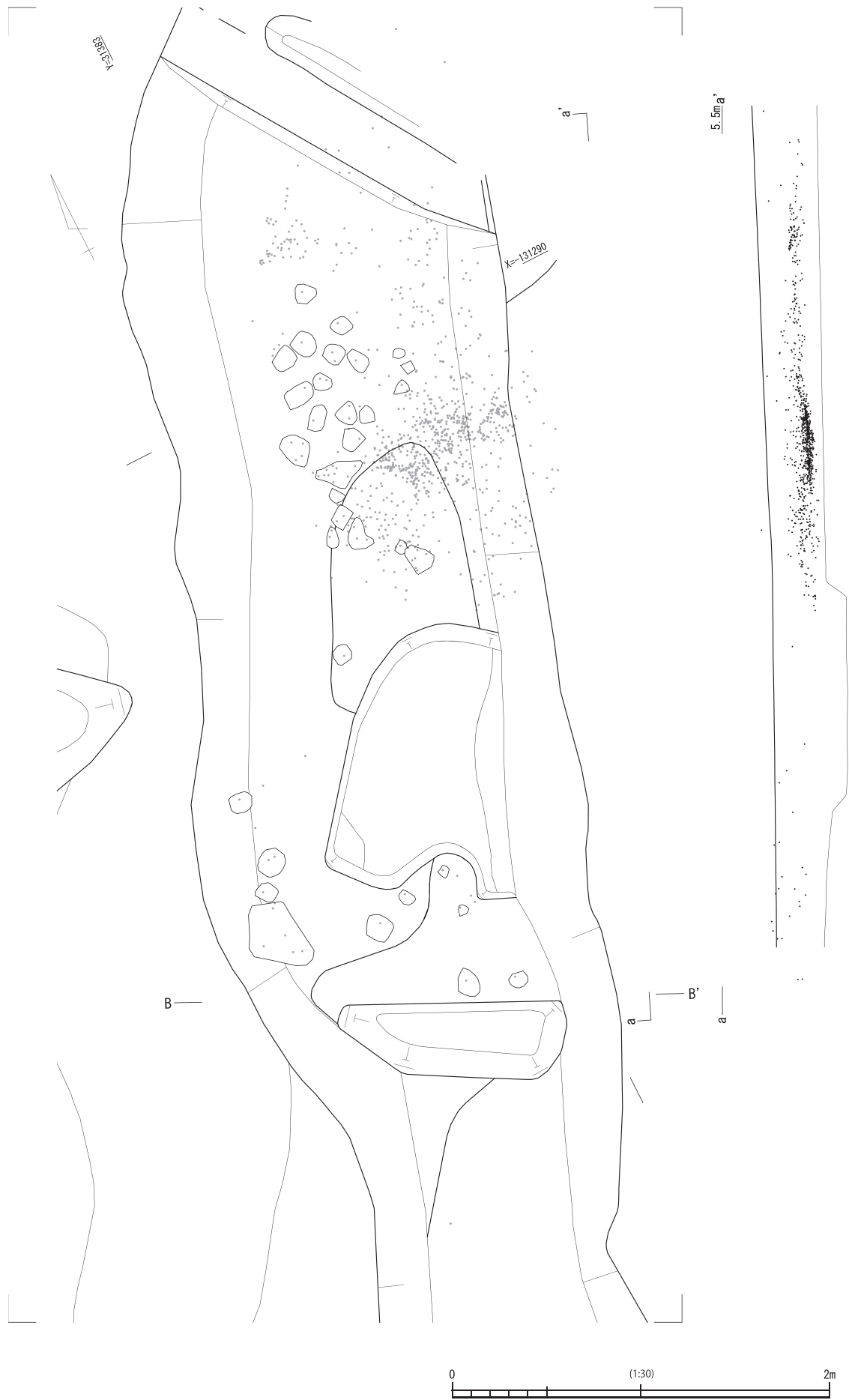
1. 10YR5.4/1.2 褐灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で直径1～3cm大の 7.5YR4/1 褐灰色 シルト～極細粒砂ブロックを疎らに含む。下部に所々 5Y6.3/1.4 灰色 シルトが入る。炭化物・土器片を疎らに含みマンガン粒が入る。
2. 10YR3.7/1.3 褐灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で直径2cm大の 2.5Y4.7/1 黄灰色 シルトブロックを含む。土器片を含み炭化物・マンガン粒を疎らに含む。
3. 2.5Y5.2/1.7 暗灰黄色 シルト混じり極細粒砂で直径1cm大の円中礫を僅かに含む。マンガン粒入る。
4. 2.5Y5.8/1.6 灰黄色 極細粒砂～細粒砂で直径1cm大の 10YR6/1 褐灰色 シルトブロックを僅かに含む。マンガン粒が疎らに入る。
5. 10YR3.8/1.1 褐灰色 細粒砂混じりシルト～細粒砂で直径3cm大の円中礫を僅かに含む。土器片を僅かに含みマンガン粒が疎らに入る。
6. 2.5Y4.7/1.7 暗灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂で直径1～2cm大の 10YR6/1.3 褐灰色 シルトブロックを疎らに含む。マンガン粒入る。
7. 2.5Y5.4/1.3 黄灰色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂で直径1～3cm大の 5Y6.6/1 灰白色のシルトブロックを疎らに含む。炭化物を疎らに含みマンガン粒が疎らに入る。
8. 2.5Y5.2/2.2 暗灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で 10YR5.4/1 褐灰色 シルトがマーブル状に入る。マンガン粒が入る。
9. 5Y6.3/1.3 灰色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径0.5～1cm大の 10YR6/1 褐灰色 シルトブロックを含む。東側が砂質強くマンガン粒が疎らに入る。炭化物を僅かに含む。
10. 2.5Y6.3/1.3 黄褐色 シルト混じり細粒砂で直径1cm以下の 10YR6/1 褐灰色 シルトブロックを僅かに含む。炭化物を僅かに含む。
11. 5Y5.4/1.2 灰色 極細粒砂混じり細粒砂～粗粒砂で中央付近に直径10cm大の 2.5Y5.8/1.9 灰黄色 シルトブロックを含み直径1cm大の円中礫を僅かに含む。酸化鉄分が多く入る。下部が粒子粗い。



S D 164 埋土土層断面



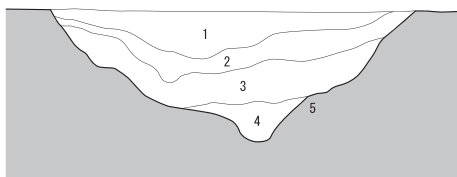
SD 340 平面



SD 340 内 サヌカイト検出状況

A —

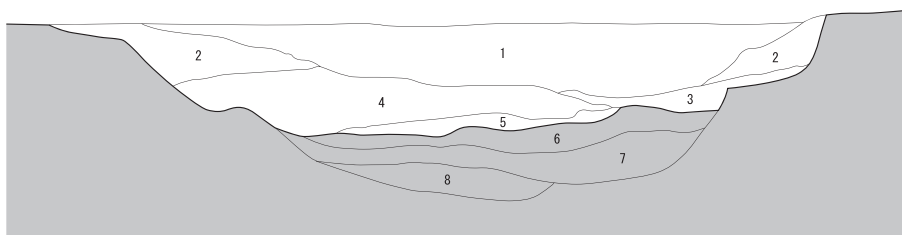
5.5m A'



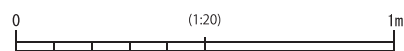
1. 2.5Y5.2/1.7 暗灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で 10YR6.4/1 褐灰色 シルトブロックと焼土塊を僅かに含む。上層。
2. 2.5Y6.2/1.5 灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂で 2.5Y7/1 灰白色 シルトブロックを僅かに含む。やや粘質。上層。
3. 10YR6.4/1.6 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で北半が砂粒粗い。上層。
4. 10YR5.6/1.7 灰黄褐色 シルト混じり細粒砂～中粒砂で細礫～直径1cm大以下の中礫を疎らに含む。2.5Y7.2/1.3 灰白色 シルトブロックを含む。下層。
5. 2.5Y5.7/2.7 にぶい黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂でマンガンを多く含む。地山。

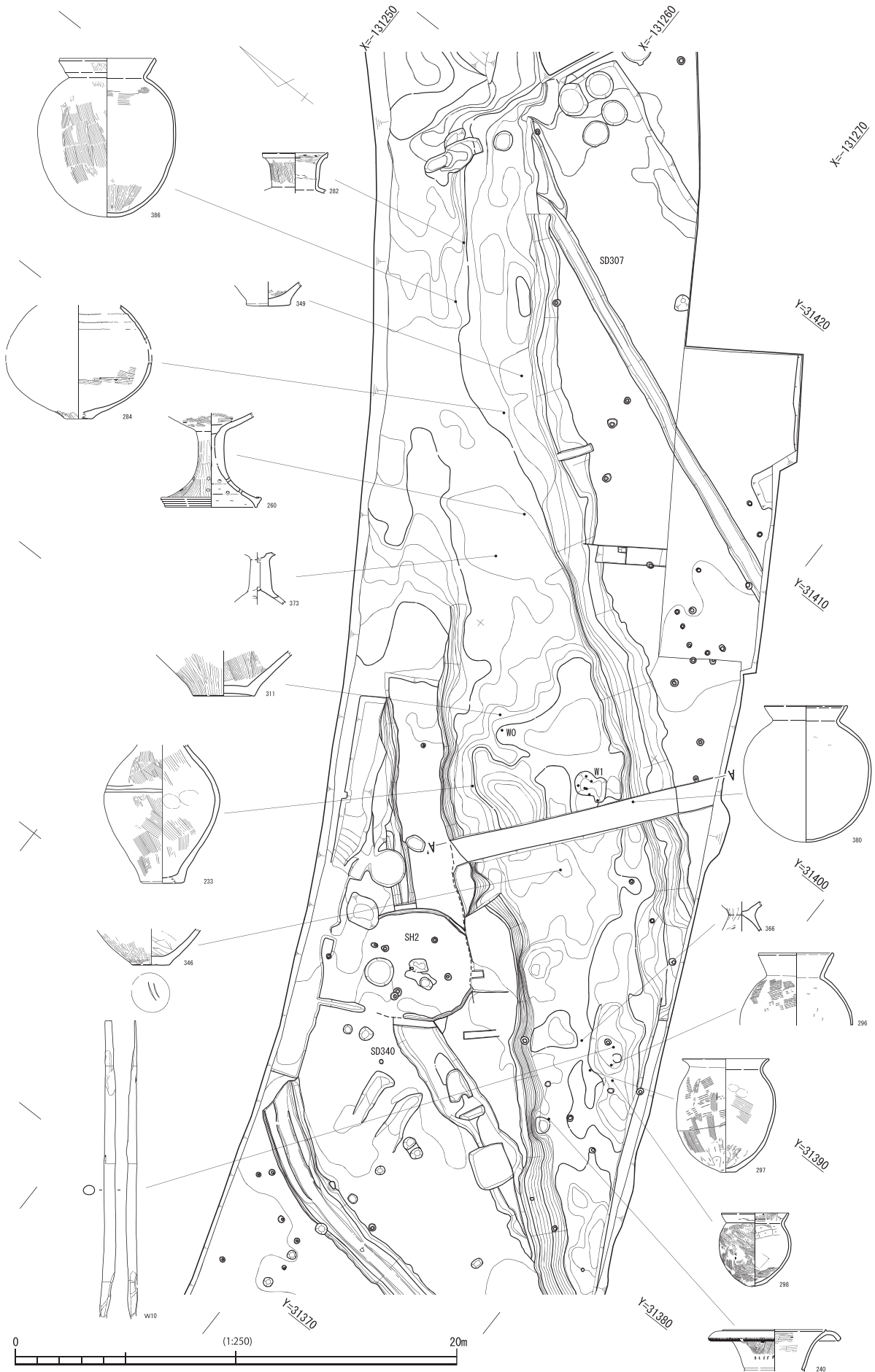
B —

5.5m B'



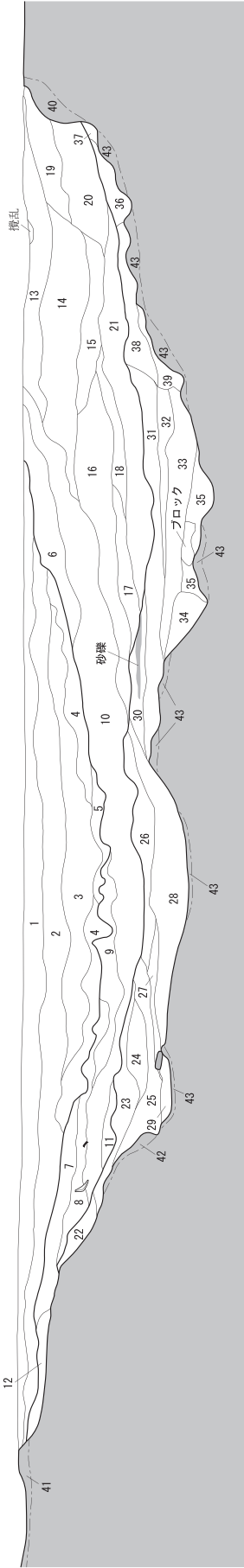
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂を含む。
2. 10YR4.5/3 にぶい黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂を少量含む。
3. 10YR3.6/2 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂。
4. 10YR5/2 灰黄褐色 細粒砂～中粒砂。砂層。
5. 10YR4.7/3 にぶい黄褐色 細粒砂で中粒砂を少量含む。
6. 10YR5/2 灰黄褐色 細粒砂～中粒砂。砂層。
7. 10YR3.4/3 暗褐色 極細粒砂～細粒砂。
8. 10YR5.4/3 にぶい黄褐色 砂層。細粒砂で粗粒シルトを若干含む。





SR 308

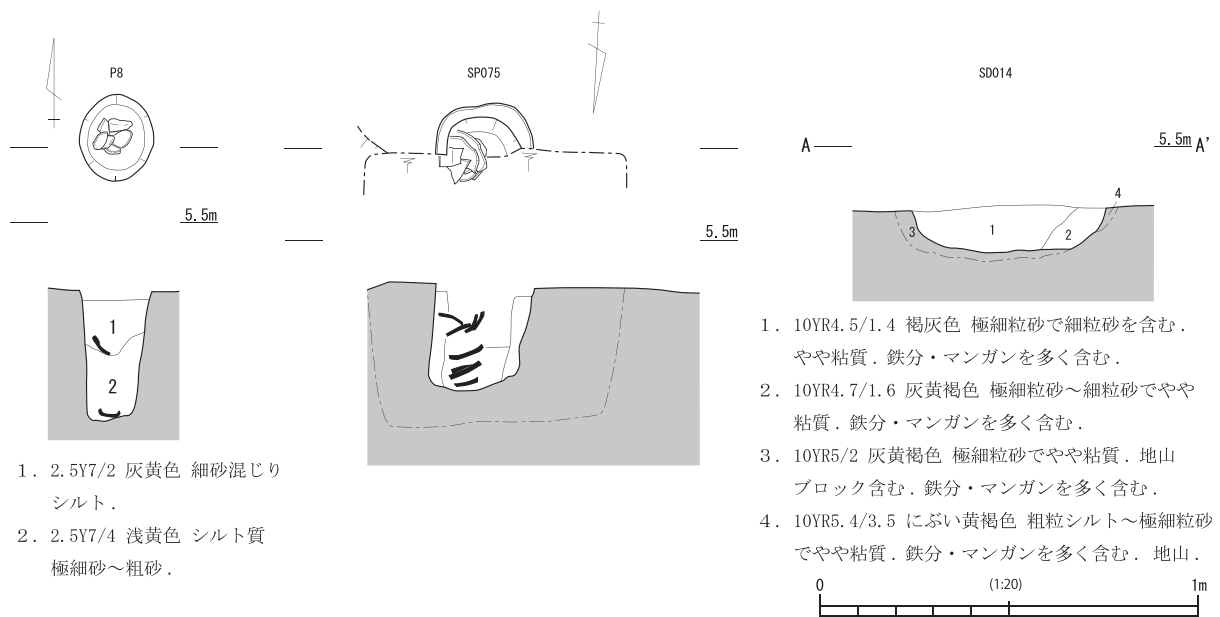
5.5m
A'



0 1 2m
(1:50)

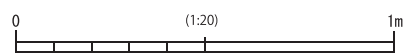
1. 2.5V6.7/1.6 灰黄色 粗粒砂混じり極細粒砂～細粒砂で細礫～直径1cm大の中礫を疎らに含む。マンガン粒入る。
2. 7.5YR4.6/1.3 褐灰色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径2～5cm大の円中礫を僅かに含む土器片を疎らに含む。
3. 2.5Y4.7/1 黄灰色 細粒砂混じりシルト質極細粒砂～極細粒砂で上面は砂質が強く下半部は下層の中粒砂・粗粒砂を巻き上げて含む。直径8cm大の円中礫を含ま炭化物を僅かに含む。
4. 2.5V5.7/1.8 灰黄色 シルト混じり極細粒砂～粗粒砂で 10YR5.4/1.2 褐灰色 シルトブロックを疎らに含む。炭化物僅かに含む。
5. 10YR4.7/1.7 灰黄褐色 極細粒砂～中粒砂で 10YR5.7/1 褐灰色 シルトブロックを疎らに含む。炭化物・土器片を含む。
6. 10YR3.7/1.3 褐灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で直径1～3cm大の円中礫を含む。土器片を疎らに含む。
7. 2.5V3.8/1 黄灰色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂で上半部は上層の影響で砂質が強い。土器片を疎らに含む炭化物僅かに含む。
8. 10YR4.2/1.3 褐灰色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径0.5～1cm大の中礫を疎らに含む。土器片を含ま炭化物僅かに含む。
9. 10YR3.6/1 褐灰色 シルトで第8層がえぐり込むように入る。土器片を僅かに含む。
10. 2.5V3.8/1.2 黄灰色 中粒砂混じりシルト～細粒砂で北半部は砂質が強く直径2～10cm大の中礫～大礫(重円～円)を含む。南半部は下層由来の細粒砂～中粒砂がマール状に入る。土器片・炭化物を疎らに含む。
11. 10YR4.6/1.6 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で北半部下面に 10YR4.4/1 褐灰色 のシルトが層状に入る。炭化物を含む。
12. 2.5V5.4/2.2 暗灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を疎らに含む。
13. 10YR6.4/2.6 におい黄褐色 極細粒砂～細粒砂で細礫～直径2cm大の円中礫を疎らに含む。
14. 2.5V5.2/2.4 暗灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂を疎らに含む。マンガン粒が入り上面では層状をなす。
15. 10YR5.7/2.2 灰黄褐色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で直径3～4cm大の円中礫を僅かに含む。
16. 10YR5.2/1.4 褐灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で直径0.5～6cm大の円中礫を含ま炭化物を僅かに含む。
17. 2.5V5.6/1.7 灰黄色 極細粒砂～細粒砂で細礫～直径3cm大の円中礫を含む。10YR5/1 褐灰色 のシルトブロックと炭化物を僅かに含む。
18. 2.5V4.8/1.7 暗灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂で細礫～直径1cm大の円中礫を僅かに含む。炭化物を僅かに含む。
19. 2.5V6.2/3.4 におい黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を含む。
20. 10YR6.2/2.3 灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂で上半にマンガン粒を含ま下半は砂質が強い。10YR4/1 褐灰色のシルトブロックを僅かに含む。
21. 2.5V4.6/1.2 黄灰色 極細粒砂～細粒砂で直径1～5cm大の円中礫を疎らに含む。炭化物を僅かに含む。
22. 10YR5.7/1.2 褐灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で細礫を僅かに含む。
23. 2.5V6.4/2.2 灰黄色 シルト混じり極細粒砂～中粒砂で炭化物を疎らに含む。ラミナあり。
24. 10YR6.2/1.3 褐灰色 極細粒砂～粗粒砂で細礫を多く含む。ラミナあり。
25. 10YR4.8/1.4 褐灰色 シルト混じり極細粒砂～中粒砂で 5V6.2/1.7 灰オリーブ色 細粒砂～中粒砂がブロック状に入る。炭化物・木片を僅かに含む。ラミナあり。
26. 2.5V5.4/1.3 黄灰色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で粗粒砂～直径1cm以下の中礫が層状に入る。
27. 2.5V4.3/1.3 黄灰色 シルト混じり細粒砂で細礫～10cm長の中礫～大礫(直角～円礫)を含む。土器片を疎らに含む。
28. 10YR3.8/1.2 褐灰色 シルト～細粒砂で中粒砂がマール状に入る。下部に直径3～5cm大の重円～円中礫を含む。植物遺体を僅かに含む。
29. 7.5YR5.7/1 褐灰色 細粒砂～極粗粒砂でラミナあり。
30. 10YR4.3/1.7 灰黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂～中粒砂で上面～中央部にかけて中粒砂～直径1cm大の中礫が層状に入る。
31. 2.5V6.4/1.2 黄灰色 シルト質混じり細粒砂～中粒砂で北部に 2.5V5.2/1 黄灰色 シルト～極細粒砂のブロックを含む。上半部に極粗粒砂～5cm長の重円～円中礫が層状に多く入る。下半部に炭化物を疎らに含む。
32. 2.5Y4.3/1.1 黄灰色 細粒砂混じりシルトで直径0.5～2cm大の円中礫を疎らに含む。北半部は細粒砂の混じりが多い。炭化物を含ま植物遺体を僅かに含む。
33. 2.5V5.2/1 黄灰色 細粒砂～5cm長の重円～円中礫で酸化構造。2.5V5/1 黄灰色 シルト～極粗粒砂ブロックを疎らに含む。
34. 10YR3.4/1 褐灰色 極細粒砂混じりシルト。
35. 5V5.4/1.3 灰色 細粒砂～極粗粒砂で細礫～直径1cm大の重円～円中礫を多く含む。第34層をブロック状に含む。
36. 10YR4.6/1.3 褐灰色 細粒砂～極粗粒砂で細礫～直径5cm大の円中礫を多く含む。
37. 2.5V5.6/3.7 におい黄色 極細粒砂～細粒砂で 2.5V6.2/2.4 灰黄色 細粒砂～中粒砂がブロック状に入る。
38. 2.5V4.7/1.2 黄灰色 細粒砂～中粒砂で直径0.5～3cm大の円中礫を疎らに含む。直径1～3cm大の 2.5V6.4/3.3 におい黄色 シルト質極細粒砂ブロックを疎らに含む。
39. 2.5V6.3/2.3 灰黄色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂で 5V6.7/1.3 灰白色 細粒砂～中粒砂がブロック状に入る。
40. 10YR5.6/3.6 におい黄褐色 シルト質極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を含む。地山(古い流れの堆積)。
41. 2.5V5.7/3.3 におい黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を僅かに含む。地山(古い流れの堆積)。
42. 2.5V4.3/1.4 黄灰色 シルト質極細粒砂～極細粒砂で上半部は 2.5V6.6/1.4 灰白色 を呈する。地山(古い流れの堆積)。
43. 5V5.8/1.2 灰色 シルト混じり極細粒砂～中粒砂で粗粒砂が疎らに混じる。地山(古い流れの堆積)。

S R 308 埋土層断面

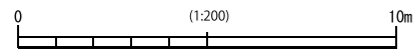
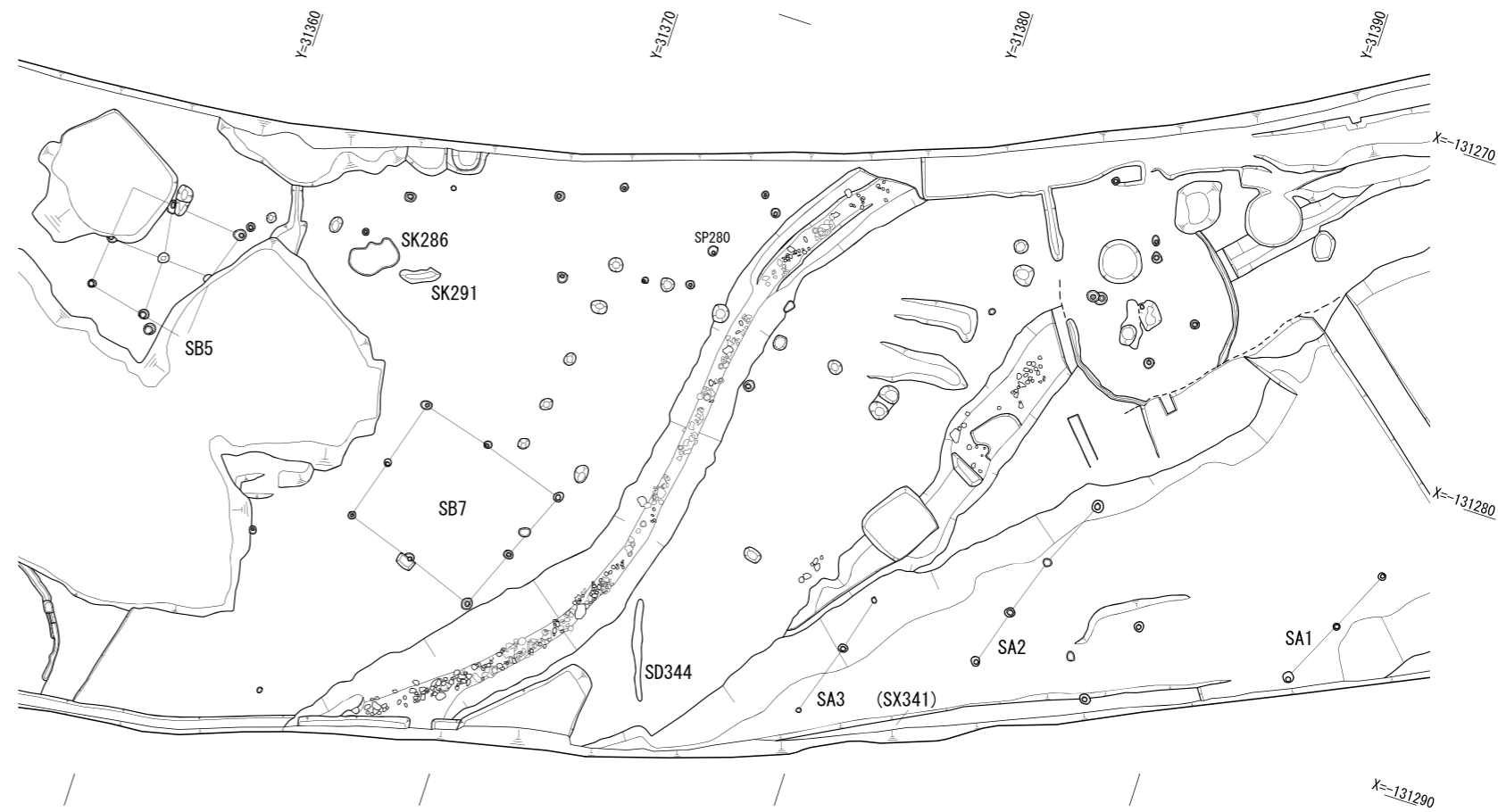
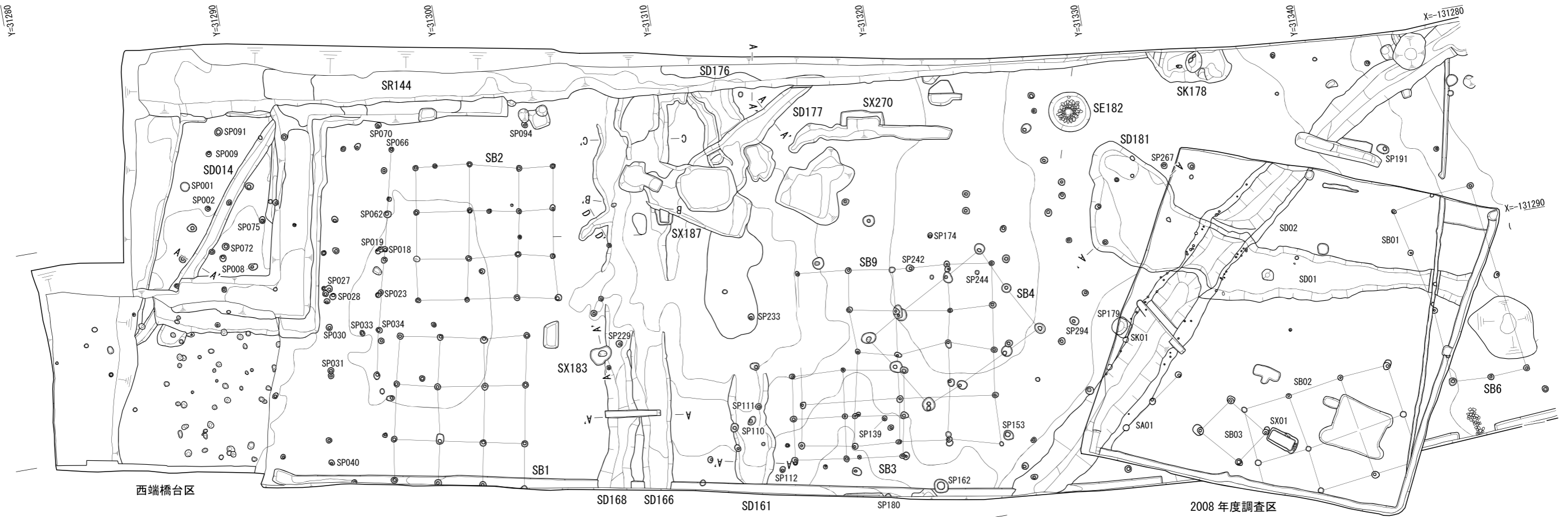


- 1. 2.5Y7/2 灰黄色 細砂混じりシルト。
- 2. 2.5Y7/4 浅黄色 シルト質 極細砂～粗砂。

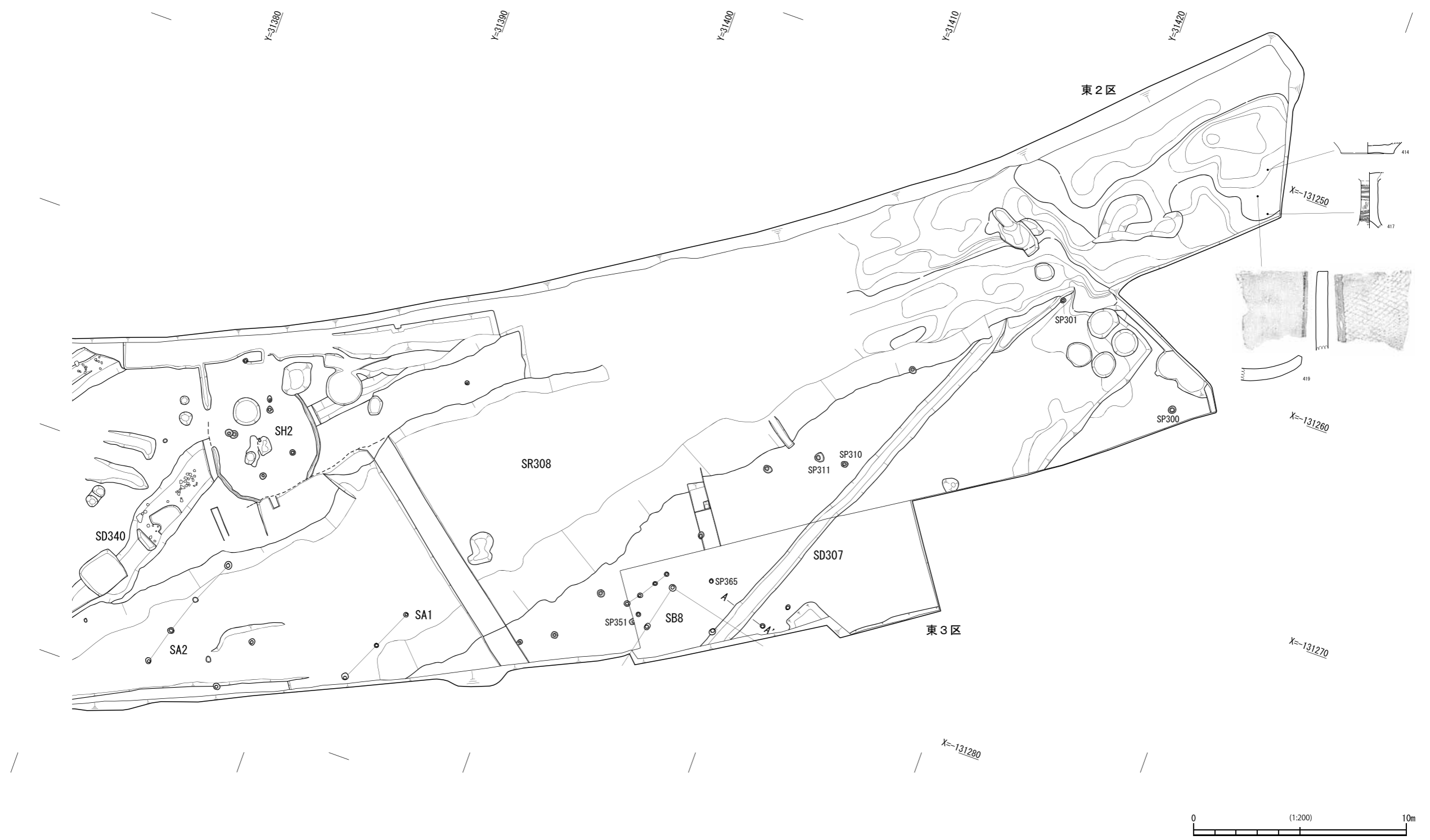
- 1. 10YR4.5/1.4 褐灰色 極細粒砂で細粒砂を含む。やや粘質。鉄分・マンガンを多く含む。
- 2. 10YR4.7/1.6 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂でやや粘質。鉄分・マンガンを多く含む。
- 3. 10YR5/2 灰黄褐色 極細粒砂でやや粘質。地山ブロック含む。鉄分・マンガンを多く含む。
- 4. 10YR5.4/3.5 にぶい黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂でやや粘質。鉄分・マンガンを多く含む。地山。



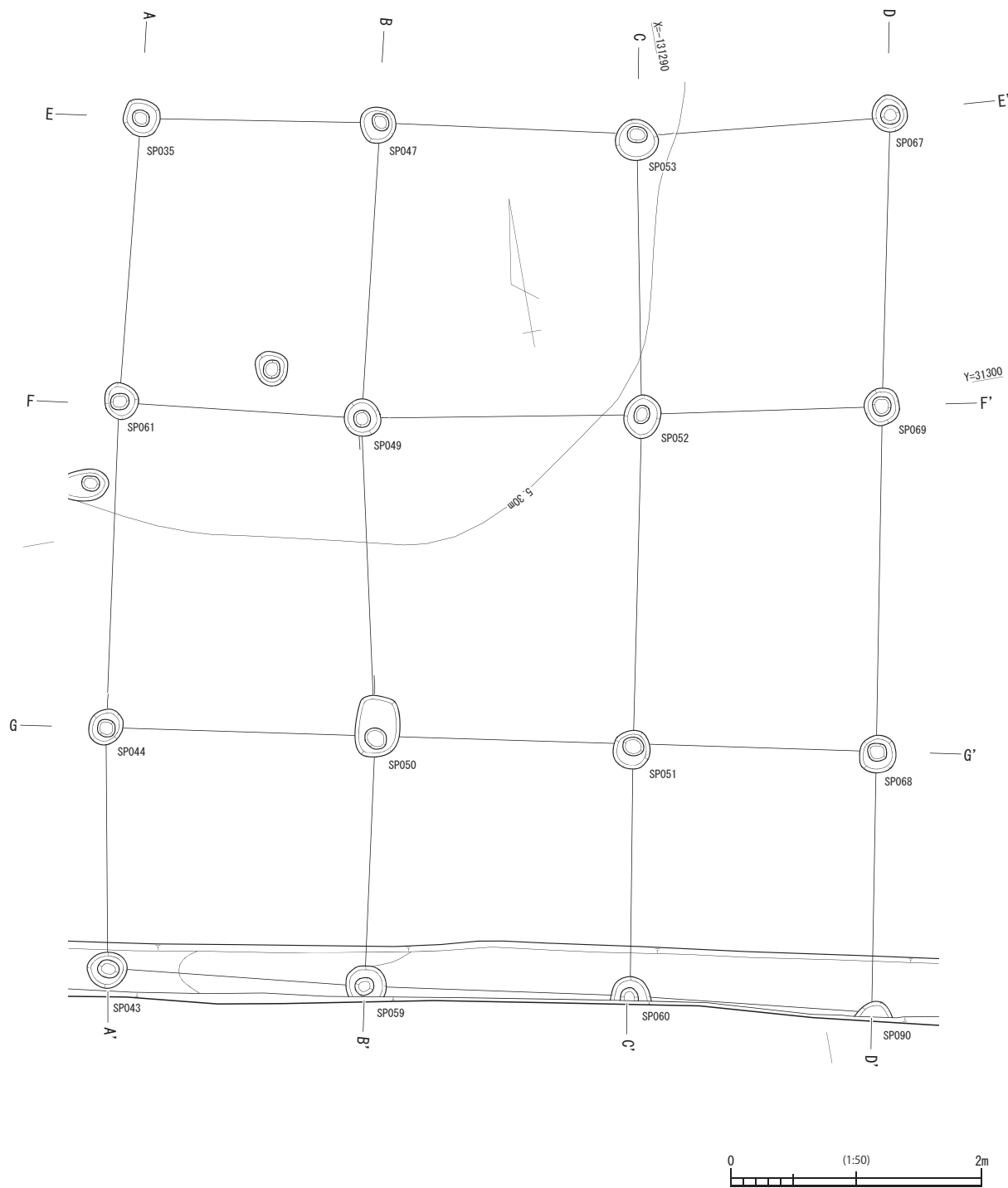
西端橋台区・西端区の遺構



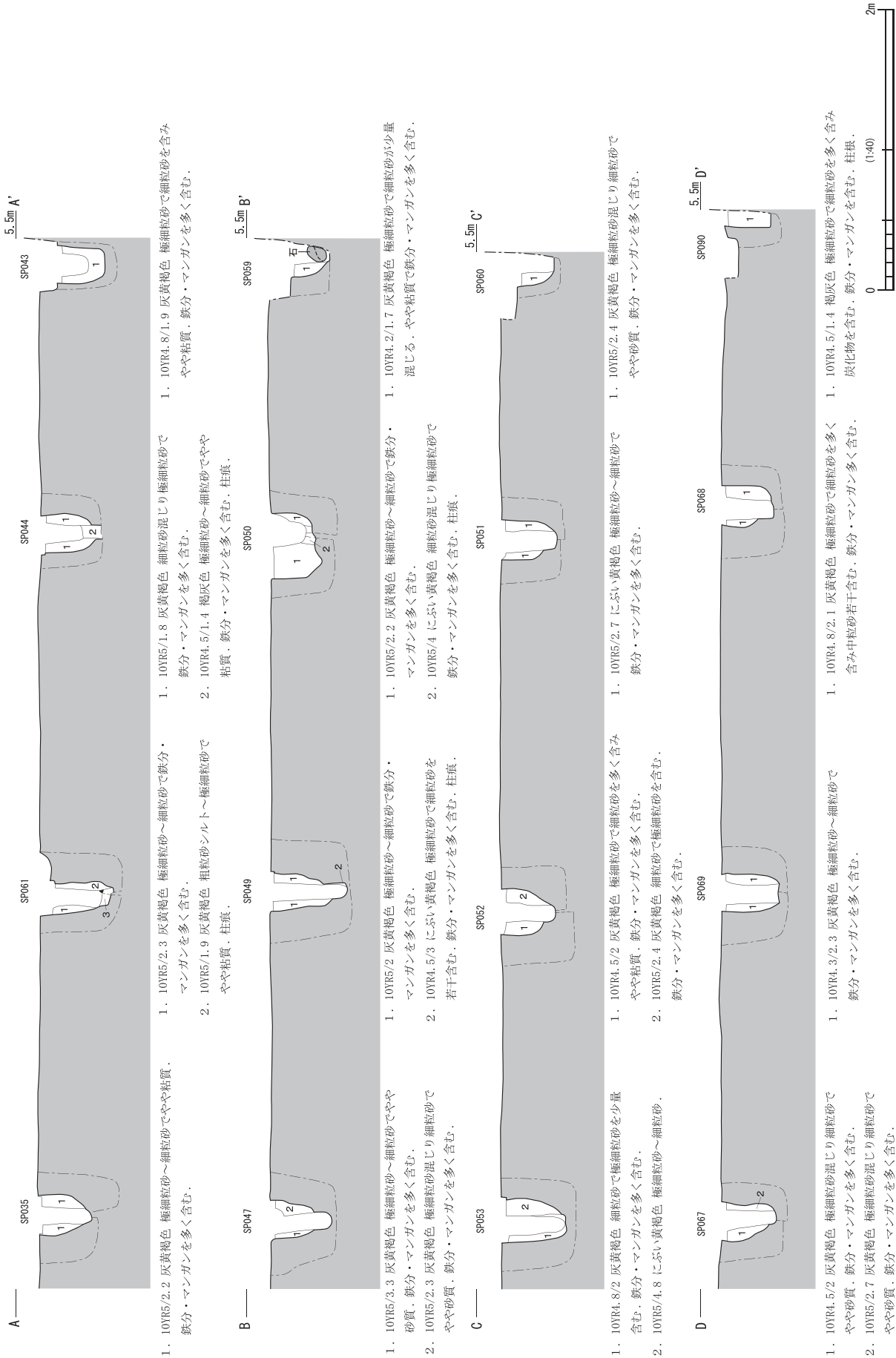
平安時代~中世の遺構(1)



平安時代～中世の遺構(2)

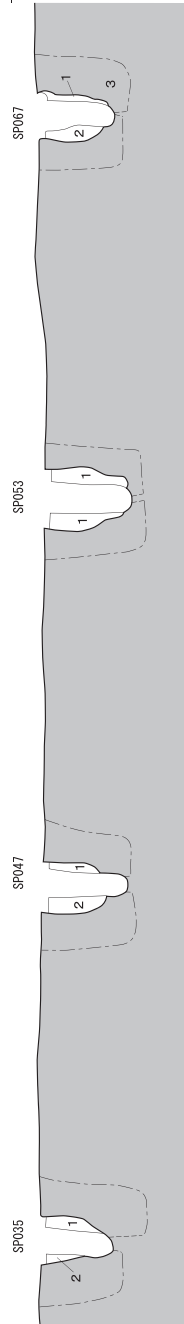


SB1 平面



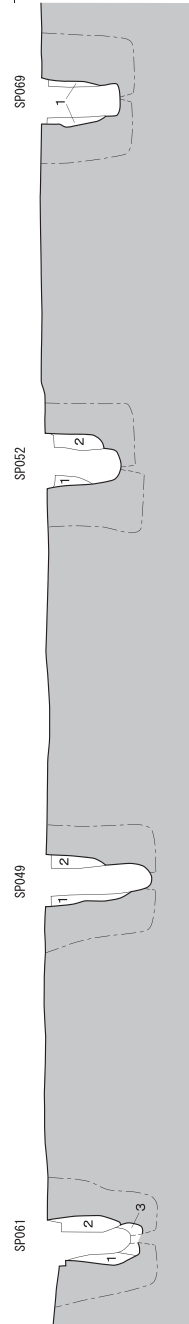
S B 1 断面(1)

5.5m E'



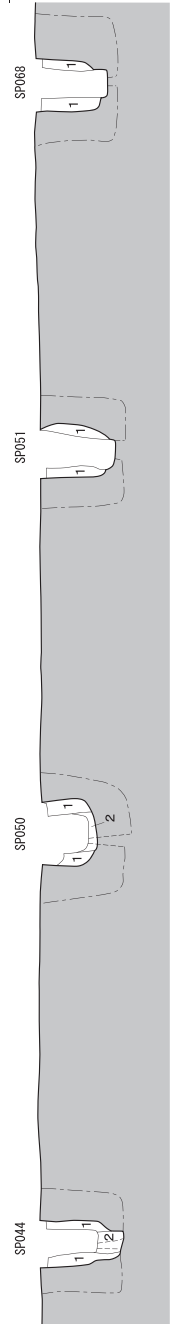
- 1. 10YR5/1.8 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂でやや粘質・鉄分・マンガンを多く含む。
- 2. 10YR5/2.2 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で粘質・鉄分・マンガンを多く含む。
- 1. 10YR5/2 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂でやや粘質・鉄分・マンガンを多く含む。
- 2. 10YR5/2.3 灰黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂でやや粘質・鉄分・マンガンを多く含む。
- 1. 10YR5/2.7 灰黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂でやや粘質・鉄分・マンガンを多く含む。
- 2. 10YR4.5/2 灰黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂でやや粘質・鉄分・マンガンを多く含む。
- 3. 10YR5/4.2 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂で砂質気味・鉄分・マンガンを多く含む。地山。

5.5m F'



- 1. 10YR5/1.3 褐灰色 細粒砂混じり極細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む。
- 2. 10YR5/1.3 褐灰色 極細粒砂混じり細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む。
- 3. 10YR5/1.9 灰黄褐色 粗粒砂シルト～極細粒砂でやや粘質・柱痕。
- 1. 10YR5/1.2 褐灰色 細粒砂で極細粒砂を少量含むやや粘質・鉄分・マンガンを多く含む。
- 2. 10YR5/1.4 褐灰色 極細粒砂を少量含むやや粘質・鉄分・マンガンを多く含む。
- 1. 10YR4.3/2.3 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む。

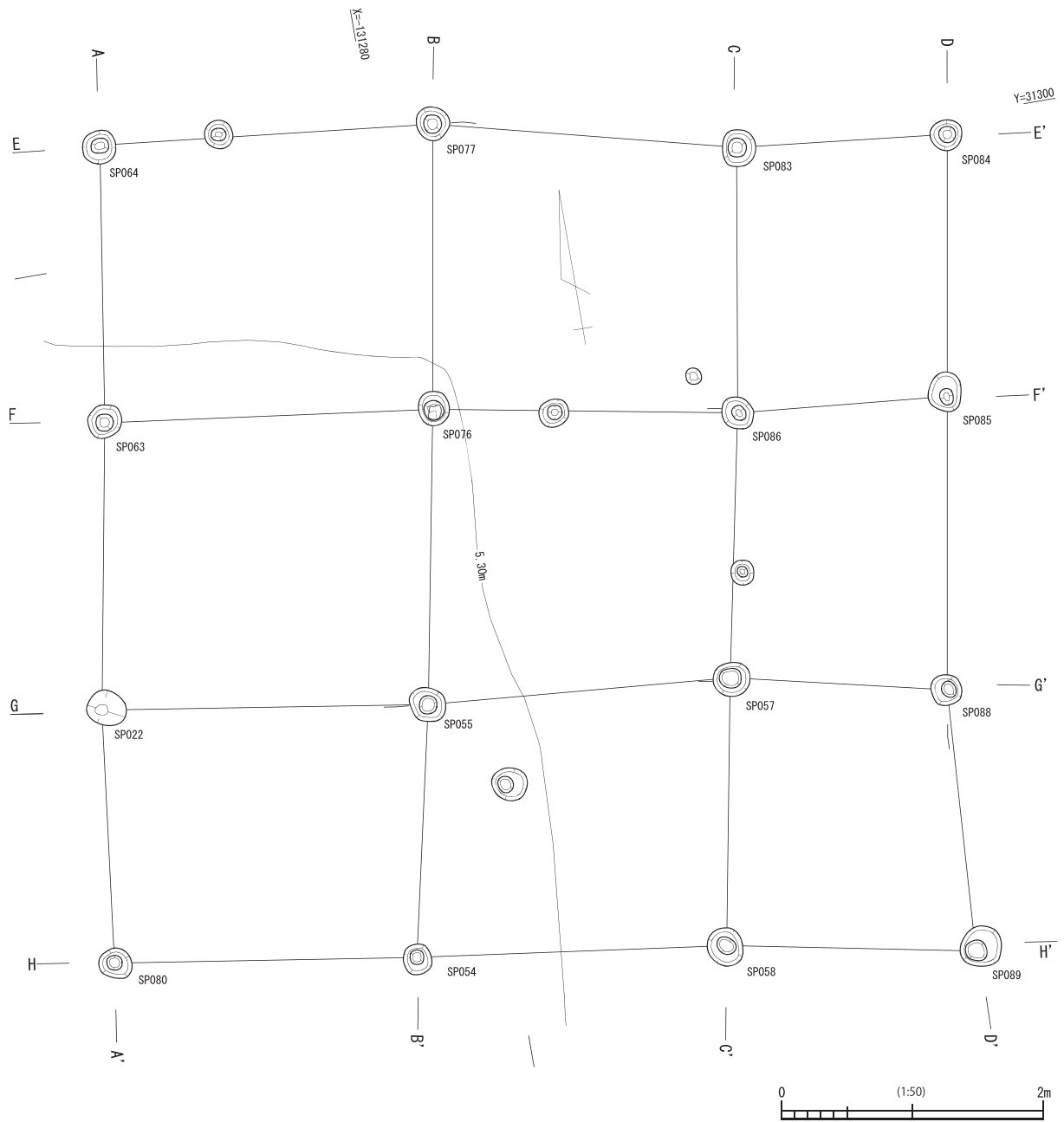
5.5m G'



- 1. 10YR5/1.8 灰黄褐色 細粒砂混じり極細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む。
- 2. 10YR4.5/1.4 褐灰色 極細粒砂～細粒砂でやや粘質・鉄分・マンガンを多く含む。柱痕。
- 1. 10YR5/2.2 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む。
- 2. 10YR5/4 にぶい黄褐色 細粒砂混じり極細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む。
- 1. 10YR4.8/2.1 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で鉄分・マンガン若干含む。鉄分・マンガン多く含む。
- 2. 10YR5/2.7 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む。



S B 1 断面(2)



SB 2 平面

A — SP064 SP063 SP022 SP080 5.5m A'



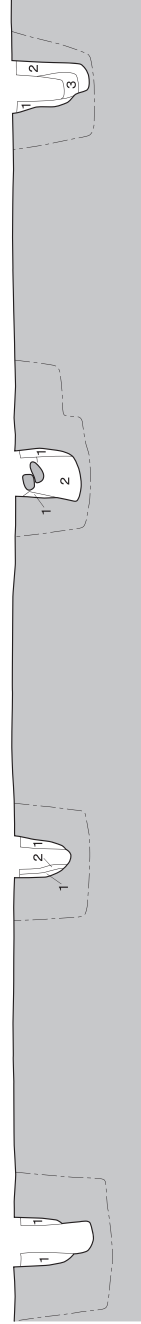
- 1. 10YR5/1.1 褐灰色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂を若干含む。鉄分・マンガンを多く含む。1'、1に鉄分をさらに多く含む黄褐色に近い色調。
- 1. 10YR5/2.3 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む。
- 1. 10YR5/1.8 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂でやや粘質。鉄分・マンガンを多く含む。
- 2. 10YR5/1.4 褐灰色 細粒砂で極細粒砂を少量含む。やや砂質。鉄分・マンガンを多く含む。
- 3. 7.5YR4.6/1 褐灰色 粗粒シルト～極細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む。

B — SP077 SP076 SP055 SP054 5.5m B'



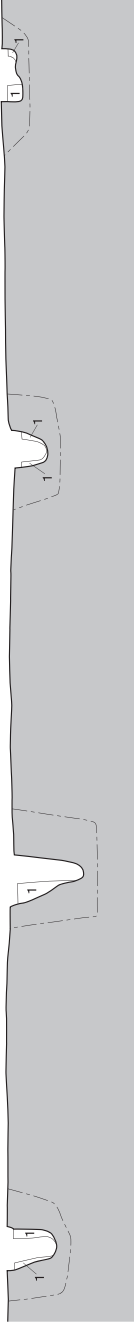
- 1. 10YR5/1.4 褐灰色 極細粒砂で細粒砂を多く含む。鉄分・マンガンを多く含む。
- 2. 8YR5/1 褐灰色 粗粒シルト混じり極細粒砂で細粒砂を含む。鉄分・マンガンを多く含む。
- 1. 10YR5/1.6 灰黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂でやや砂質。鉄分・マンガンを多く含む。
- 2. 10YR5/1.4 褐灰色 粗粒シルト～極細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む。柱痕。
- 1. 10YR5/2.4 灰黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂でやや砂質。鉄分・マンガンを多く含む。
- 2. 10YR5.5/1.4 褐灰色 極細粒砂～細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む。柱痕。

C — SP083 SP086 SP057 SP058 5.5m C'



- 1. 10YR5/3.2 におい黄褐色 極細粒砂～細粒砂でやや砂質。鉄分・マンガンを多く含む。
- 2. 10YR5/4.8 におい黄褐色 極細粒砂～細粒砂。
- 1. 10YR5/2.6 におい黄褐色 極細粒砂～細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む。
- 2. 10YR5/1.6 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む。
- 1. 10YR5/1.9 灰黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂でやや砂質。鉄分・マンガンを多く含む。
- 2. 9YR5/1 褐灰色 粗粒シルト～極細粒砂でやや粘質。鉄分・マンガンを多く含む。柱痕。
- 1. 10YR5/2.3 灰黄褐色 極細粒砂を少量含む細粒砂でやや砂質。鉄分・マンガンを多く含む。
- 2. 10YR4.9/2 灰黄褐色 極細粒砂で細粒砂を微量含む。鉄分・マンガンを多く含む。
- 3. 9YR5/1 褐灰色 粗粒シルト～極細粒砂でやや粘質。鉄分・マンガンを多く含む。柱痕。

D — SP084 SP085 SP088 SP089 5.5m D'

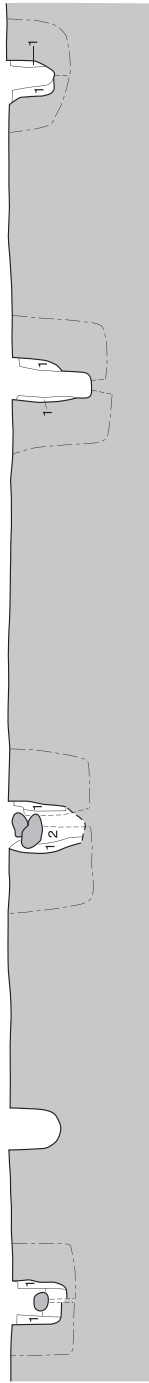


- 1. 10YR5/1.3 褐灰色 極細粒砂～細粒砂でやや砂質。鉄分・マンガンを多く含む。
- 1. 10YR4.5/3 におい黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂でやや砂質。鉄分・マンガンを多く含む。
- 1. 10YR5/3 におい黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む。
- 1. 10YR5/2 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む。



S B 2 断面(1)

E ————— SP064

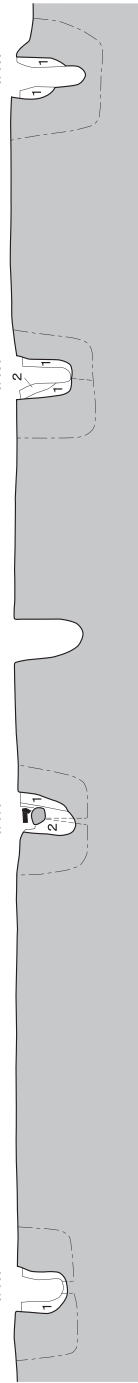


1. 10YR5/1.1 褐灰色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂を若干含む，鉄分・マンガンを多く含む，

1. 10YR5/3.2 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂でやや砂質，鉄分・マンガンを多く含む，

1. 10YR5/1.3 褐灰色 極細粒砂～細粒砂でやや砂質，鉄分・マンガンを多く含む，

F ————— SP063

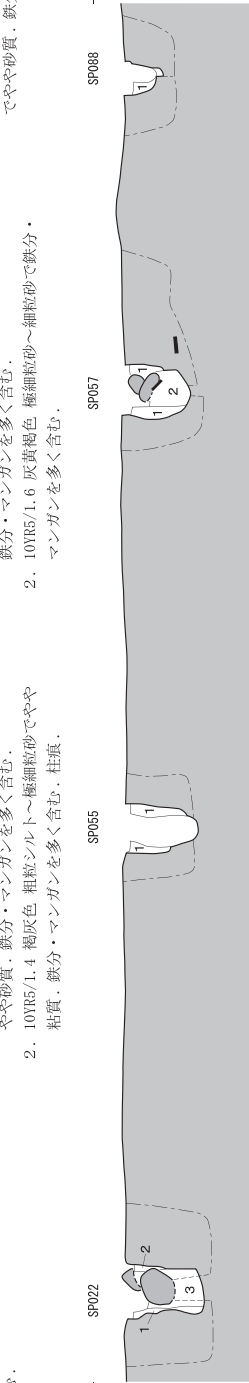


1. 10YR5/1.4 褐灰色 極細粒砂で細粒砂を多く含む鉄分・マンガンを多く含む，
2. 8YR5/1 褐灰色 粗粒シルト混じり極細粒砂で細粒砂を含む，鉄分・マンガンを多く含む，

1. 10YR5/3.2 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂でやや砂質，鉄分・マンガンを多く含む，

1. 10YR5/1.3 褐灰色 極細粒砂～細粒砂でやや砂質，鉄分・マンガンを多く含む，

G ————— SP022

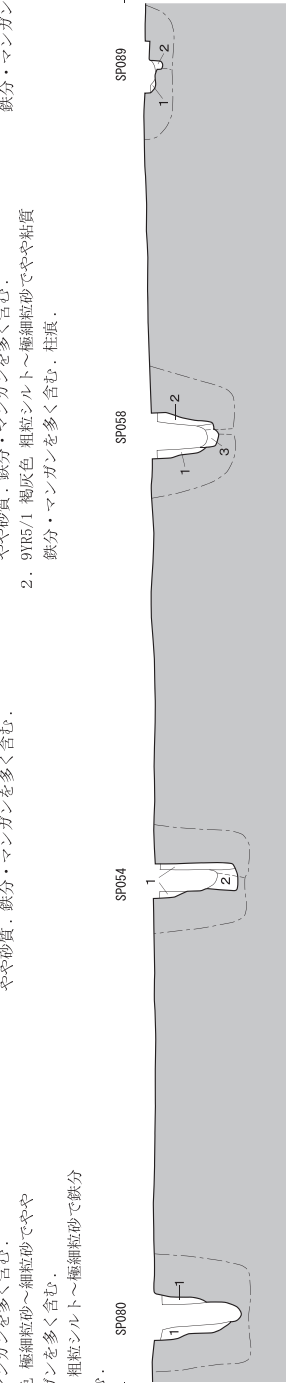


1. 10YR5/2.3 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む，
2. 10YR5/1.4 褐灰色 粗粒シルト～極細粒砂でやや粘質，鉄分・マンガンを多く含む，柱状，

1. 10YR5/2.6 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む，
2. 10YR5/1.6 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む，

1. 10YR4.5/3 にぶい黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂でやや砂質，鉄分・マンガンを多く含む，

H ————— SP080

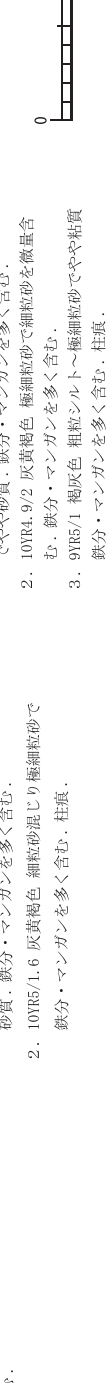


1. 10YR5/1.4 褐灰色 細粒砂で極細粒砂を少量含むやや砂質，鉄分・マンガンを多く含む，
2. 10YR5/1.8 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂でやや粘質，鉄分・マンガンを多く含む，
3. 7.5YR4.6/1 褐灰色 粗粒シルト～極細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む，

1. 10YR5/1.9 灰黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂でやや砂質，鉄分・マンガンを多く含む，
2. 9YR5/1 褐灰色 粗粒シルト～極細粒砂でやや粘質鉄分・マンガンを多く含む，柱状，

1. 10YR5/3 にぶい黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む，

I ————— SP084



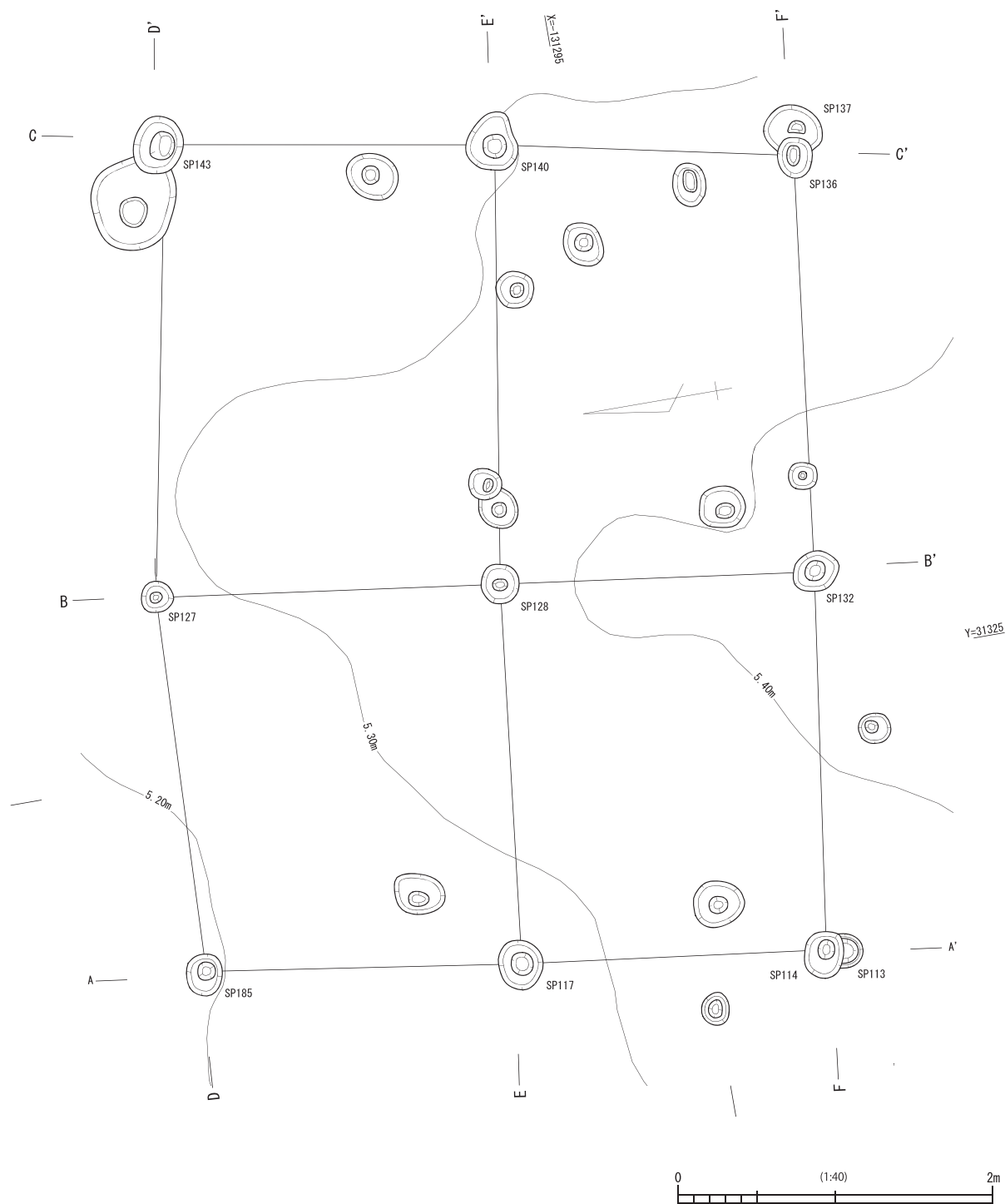
1. 10YR5/1.2 褐灰色 極細粒砂～細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む，
2. 10YR5/1.6 灰黄褐色 細粒砂混じり極細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む，柱状，

1. 10Y45/2.3 灰黄褐色 極細粒砂を少量含む細粒砂でやや砂質，鉄分・マンガンを多く含む，
2. 10YR4.9/2 灰黄褐色 極細粒砂で細粒砂を微量含む，鉄分・マンガンを多く含む，
3. 9YR5/1 褐灰色 粗粒シルト～極細粒砂でやや粘質鉄分・マンガンを多く含む，柱状，

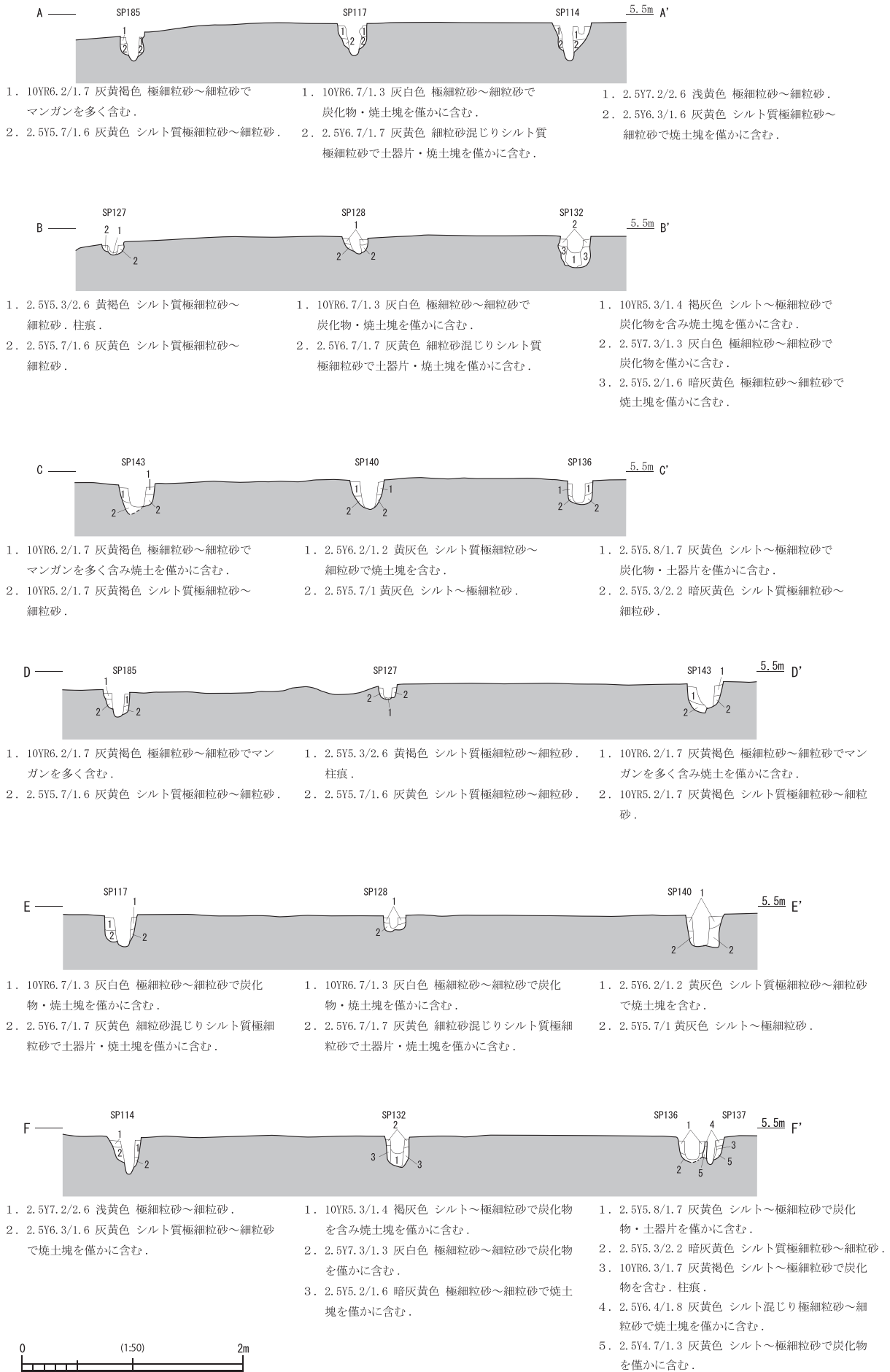
1. 10YR5/2 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む，
2. 10YR5/1.4 褐灰色 極細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む，



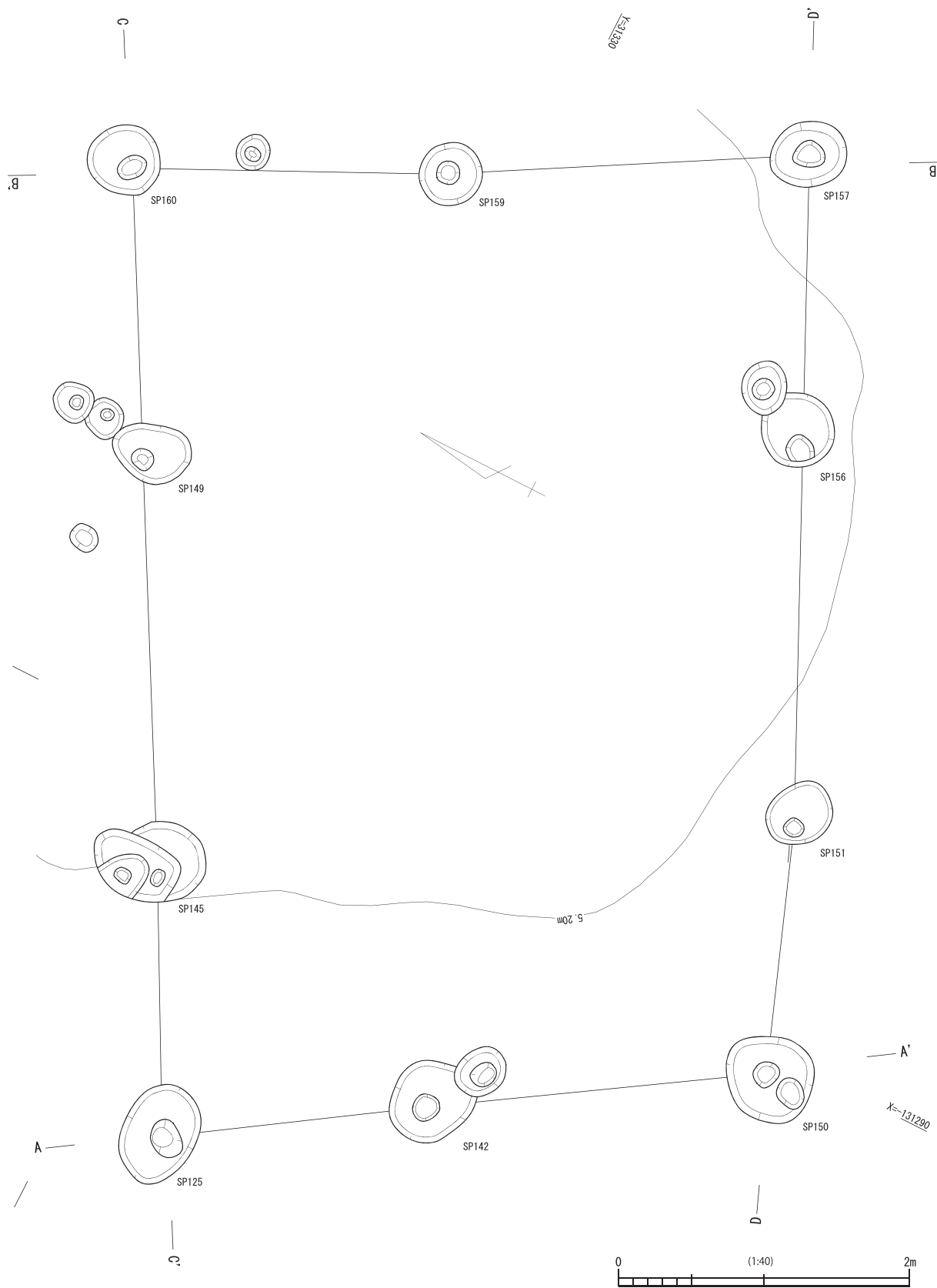
S B 2 断面(2)



SB3 平面

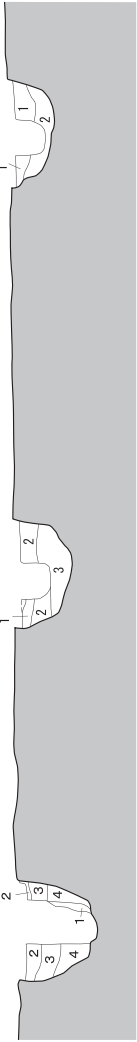


SB3 断面



SB4 平面

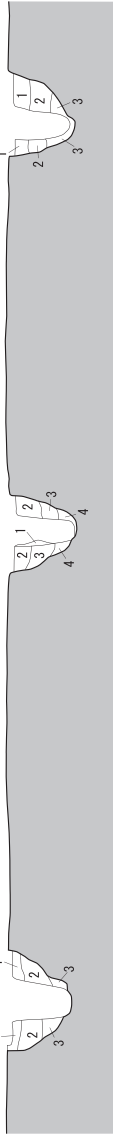
A ————— SPI25 SPI42 SPI150 5.5m A'



1. 2.5V5.2/1.7 灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂，柱根。
2. 2.5V6.2/1.6 灰黄色 極細粒砂～細粒砂。
3. 10VR5.4/2.2 灰黄褐色 シルト質極細粒砂～細粒砂。
4. 10VR4.7/2.8 にぶい黄褐色 シルト～細粒砂。

1. 2.5V5.3/1.7 暗灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で土器片を僅かに含み 2.5V4/1 黄灰色 シルトがマーブル状に入る。
2. 2.5V5.8/1.8 灰黄色 極細粒砂～細粒砂。

B ————— SPI157 1 SPI159 SPI160 5.5m B'



1. 10VR4.7/1.2 褐灰色シルト質極細粒砂～細粒砂で 10VR3.7/1.7 灰黄褐色 シルトブロックが疎らに入る。
2. 2.5V4.8/1.7 暗灰黄色 極細粒砂～細粒砂でマンガが入る。
3. 10VR5.2/1.7 灰黄褐色 シルト～極細粒砂。

1. 10VR4.6/1.2 褐灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で粘土塊を僅かに含む。
2. 2.5V5.6/1 黄灰色 シルト～極細粒砂でマンガが入る。
3. 2.5V5.2/1.6 暗灰黄色 シルト質極細粒砂。

C ————— SPI160 SPI49 SPI145 SPI25 5.5m C'



1. 10VR4.6/1.2 褐灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で粘土塊を僅かに含む。
2. 2.5V5.6/1 黄灰色 シルト～極細粒砂でマンガが入る。
3. 2.5V5.2/1.6 暗灰黄色 シルト質極細粒砂。

1. 2.5V4.2/1.3 黄褐色 シルト～極細粒砂，柱根。
2. 10VR4.3/1.8 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂。
3. 2.5V5.3/1.7 暗灰黄色 シルト～極細粒砂。
4. 10VR5.2/1.4 褐灰色 シルト質極細粒砂。
5. 10VR4.7/1.8 灰黄褐色 シルト～極細粒砂。

1. 2.5V5.3/1.6 灰黄色 極細粒砂混じりシルトで 2.5V4.3/1 黄灰色 シルトがマーブル状に入る。柱根。
2. 10VR4.3/1.2 褐灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂。
3. 2.5V4.3/1 黄灰色 極細粒砂。
4. 10VR5.7/1.8 灰黄褐色 シルト～極細粒砂。

1. 2.5V5.2/1.7 灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂，柱根。
2. 2.5V6.2/1.6 灰黄色 極細粒砂～細粒砂。
3. 10VR5.4/2.2 灰黄褐色 シルト質極細粒砂～細粒砂。
4. 10VR4.7/2.8 にぶい黄褐色 シルト～細粒砂。

D ————— SPI150 SPI151 SPI156 SPI157 5.5m D'

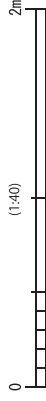


1. 2.5V5.3/1.7 暗灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で土器片を僅かに含み 2.5V4/1 黄灰色 シルトがマーブル状に入る。
2. 2.5V5.8/1.8 灰黄色 極細粒砂～細粒砂。

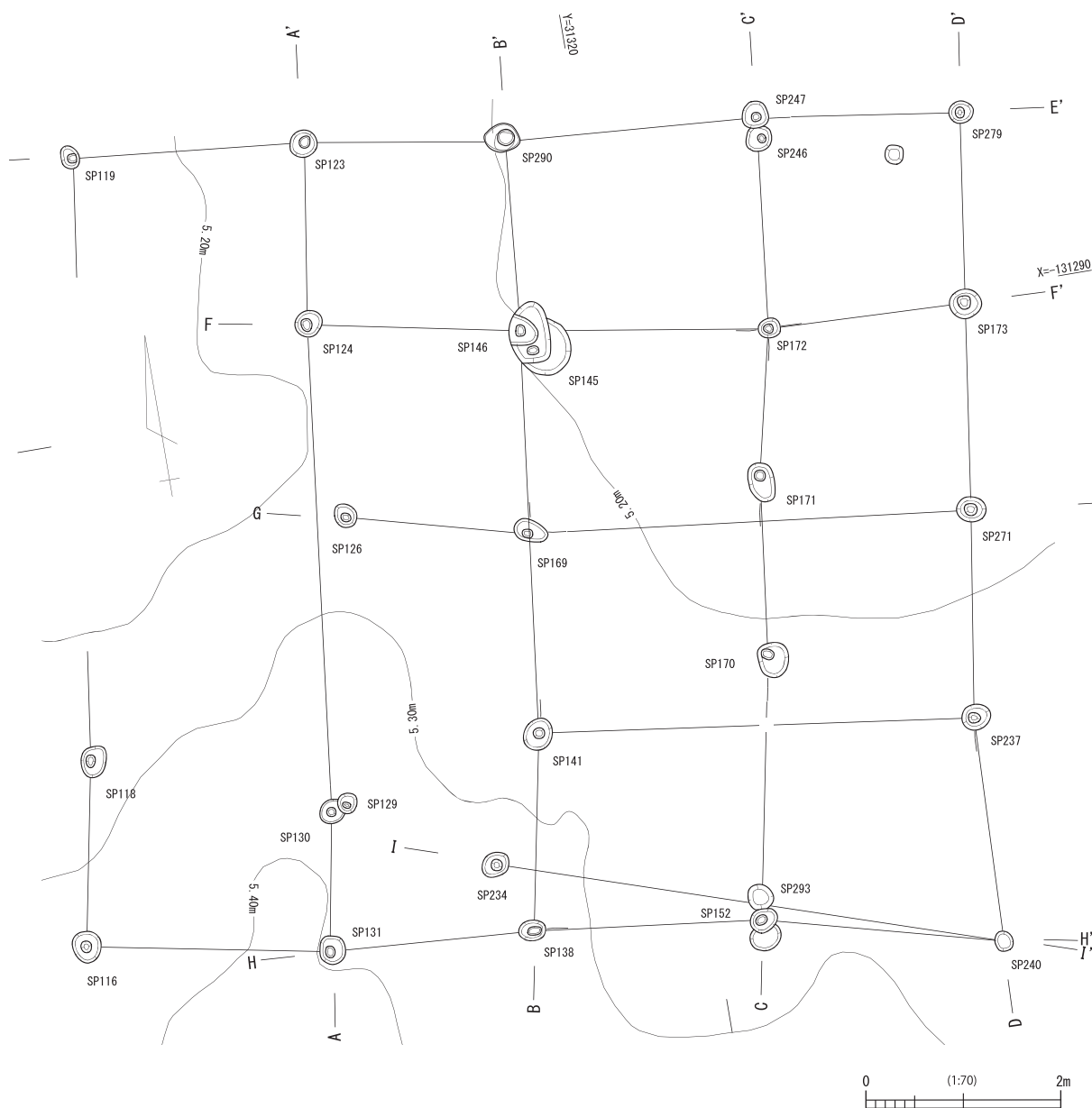
1. 2.5V3.8/1 黄灰色 シルト～極細粒砂で下部に炭化物を多く含む。柱根。
2. 2.5V5.3/2.2 暗灰黄色 極細粒砂。
3. 2.5V4.3/1.3 黄灰色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂。
4. 2.5V6.2/1.7 灰黄色 シルト～極細粒砂。
5. 2.5V6.2/1.8 灰黄色 極細粒砂混じりシルト。
6. 2.5V6.7/1.8 灰黄色 シルト～細粒砂で炭化物を僅かに含む。

1. 2.5V5.3/1.8 暗灰黄色 シルト～細粒砂，柱根。
2. 10VR5.2/1.8 灰黄褐色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂。
3. 2.5V6.2/2.2 灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂で炭化物を僅かに含む。
4. 2.5V5.7/2.8 にぶい黄色 シルト～極細粒砂。

1. 10VR4.7/1.2 褐灰色シルト質極細粒砂～細粒砂で 10VR3.7/1.7 灰黄褐色 シルトブロックが疎らに入る。
2. 2.5V4.8/1.7 暗灰黄色 極細粒砂～細粒砂。
3. 10VR5.2/1.7 灰黄褐色 シルト～極細粒砂。



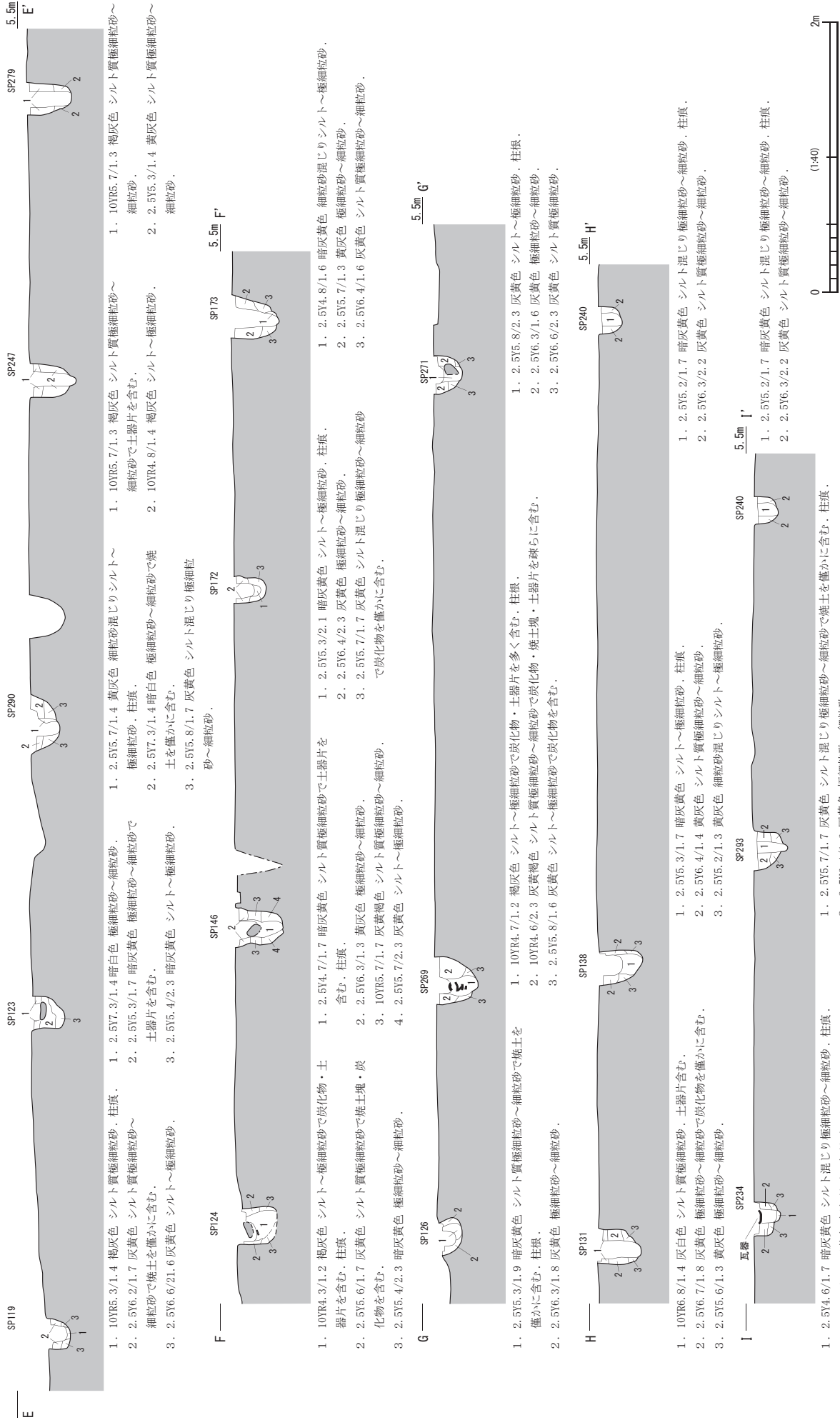
S B 4 断面



SB9 平面



SB 9 断面(1)



S B 9 断面(2)

5.5m A'

S D 166

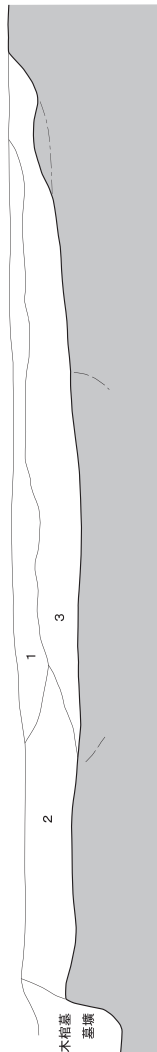
S D 166



1. 10YR6/7 明黄褐色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂を含む。鉄分・マンガンを多く含む。
2. 10YR4.8/1.3 褐灰色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂を少量含む。やや粘質で鉄分・マンガンを多く含む。
3. 10YR5.8/1.8 灰黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂を少量含む。鉄分・マンガンを多く含む。
4. 10YR5.6/1.3 褐灰色 極細粒砂～細粒砂で中粒砂を微量含む。鉄分・マンガンを多く含む。
5. 10YR5.4/2.4 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む。
6. 10YR5/2.9 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む。
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂でやや砂質。鉄分・マンガンを非常に多く含む。地山。

5.5m B'

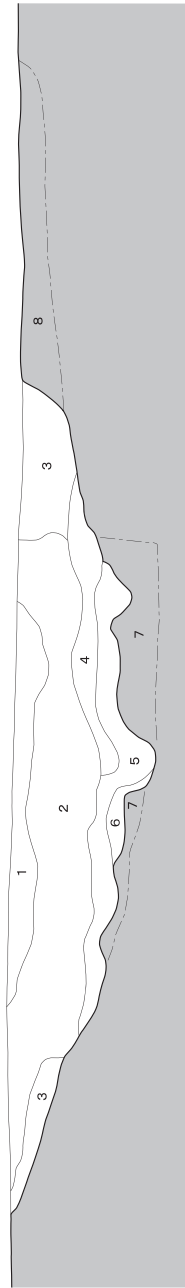
B—



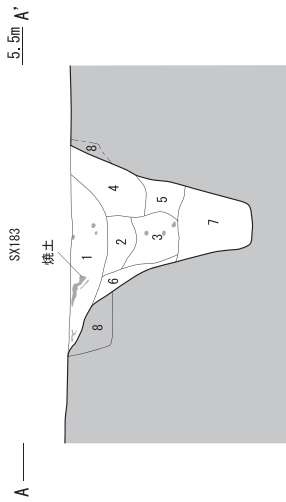
1. 10YR5/5.5 黄褐色 極細粒砂～細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む。
2. 10YR5/3.2 にぶい黄褐色 極細粒砂で細粒砂を多く含む。鉄分・マンガンを多く含む。
3. 10YR5/1.8 灰黄褐色 極細粒砂で細粒砂を含まない粘質。鉄分・マンガンを多く含む。

5.5m C'

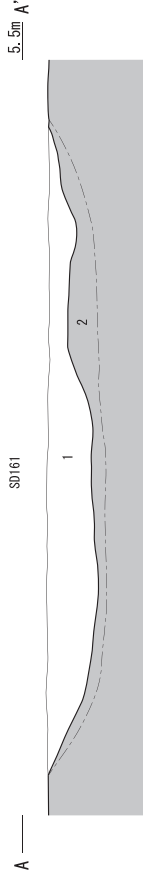
C—



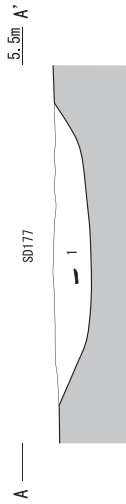
1. 10YR5.5/1.3 褐灰色 極細粒砂～細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む。
2. 10YR4.2/1.3 褐灰色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂を少量含む。やや粘質で鉄分・マンガンを多く含む。6世紀末頃の須恵器片出土。
3. 10YR4.1/1.6 灰黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で鉄分・マンガンを多く含む。
4. 10YR5.2/4 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で細粒砂を多く含む。鉄分・マンガンを多く含む。
5. 9YR4/1.4 褐灰色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂を多く含む。直径1～4cm大の灰色粘土ブロック多く含む。鉄分・マンガンを多く含む。
6. 10YR5/1.3 褐灰色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂を多く含む。やや砂質。鉄分・マンガンを多く含む。
7. 10YR5/3.9 にぶい黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で細粒砂を含まない粘質。鉄分・マンガンを多く含む。(古い時期の溝埋土)
8. 10YR5/6 黄褐色 極細粒砂で細粒砂を含む。鉄分・マンガンを多く含む。(古い時期の溝埋土)



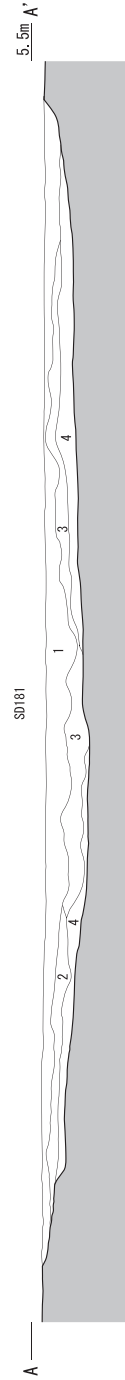
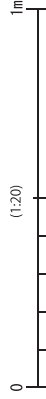
1. 10YR4.6/2.7 にぶい黄褐色 極細粒砂～細粒砂で焼土・炭化物を含む。黄灰色 極細粒砂がマーブル状に入る。マンガン粒を含む。
2. 10YR4.3/2 灰黄色 極細粒砂～細粒砂で焼土・炭化物を僅かに含む。マンガン粒を含む。
3. 10YR4.8/2.2 灰黄褐色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂で焼土・炭化物を含む。上部に黄灰色 極細粒砂がブロック状に入る。
4. 2.5Y4.7/2.3 暗灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂で直径2cm大の灰色 シルトブロックが入る。マンガン粒を疎らに含み酸化鉄がマーブル状に入る。
5. 10YR4.7/1.7 灰黄褐色 シルト～極細粒砂で酸化鉄が入る。
6. 2.5Y4.8/1.7 暗灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を疎らに含む。
7. 10YR3.6/1.5 灰黄褐色 シルト～極細粒砂で焼土・炭化物を含む。やや粘質でマンガンを含む。
8. 2.5Y5.6/2.3 灰黄色 シルト～極細粒砂でマンガン粒を多く含む。地山。



1. 10YR3.7/2 灰黄褐色 シルト質極細粒砂～細粒砂で 灰色 極細粒砂をブロック状に含む。須恵器・マンガン粒を含む。
2. 2.5Y5.6/2.3 灰黄色 シルト～極細粒砂でマンガン粒を多く含む。地山。



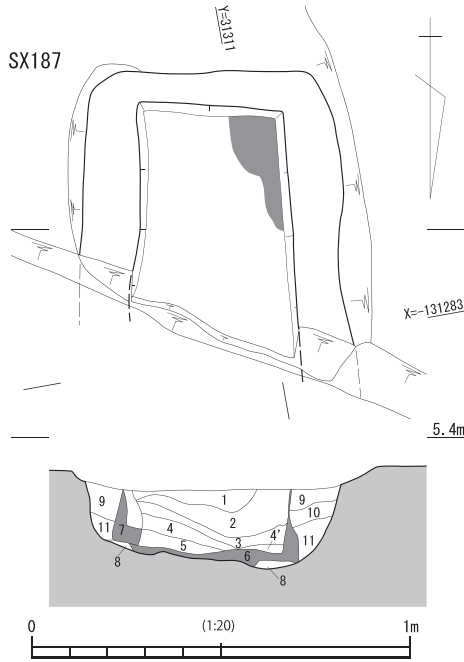
1. 2.5Y5.7/1.4 黄灰色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を疎らに含む。土器含む。



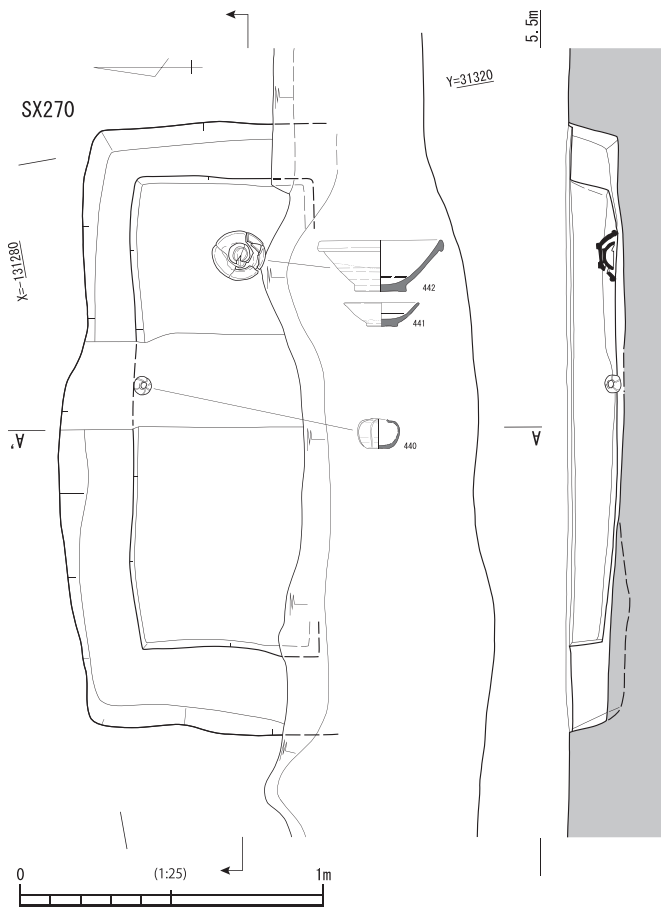
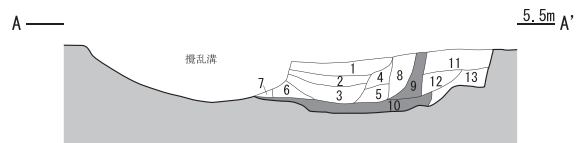
1. 2.5Y6.3/1.8 灰黄色 極細粒砂～細粒砂で 5Y5/1 灰色 シルトブロックと直径1cm大の円中礫を疎らに含む土器片・炭化物を僅かに含みマンガン粒を含む。
2. 2.5Y5.6/1.6 灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で 5Y5/1 灰色 シルトブロックを僅かに含む。マンガン粒を含む。
3. 2.5Y5.2/1.3 黄灰色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂で 2.5Y8/1.3 灰白色 細粒シルト・2.5Y5.3/2 暗灰色 細粒シルトが渦を巻くように薄く入る。10YR4.3/1.4 褐灰色 極細粒砂ブロックを僅かに含み土器片を疎らに含む。
4. 2.5Y5.4/1.8 暗灰黄色 極細粒砂～細粒砂で 10YR4.7/1.8 灰黄褐色 シルトブロックと炭化物を僅かに含む。マンガン粒を含む。



SD 161・177・181、S X 183 埋土土層断面

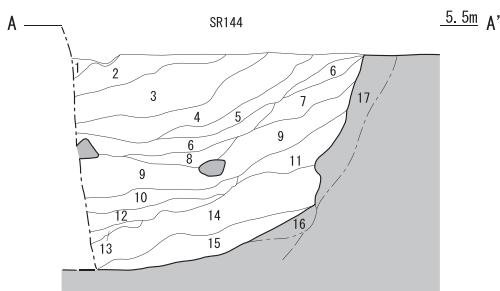


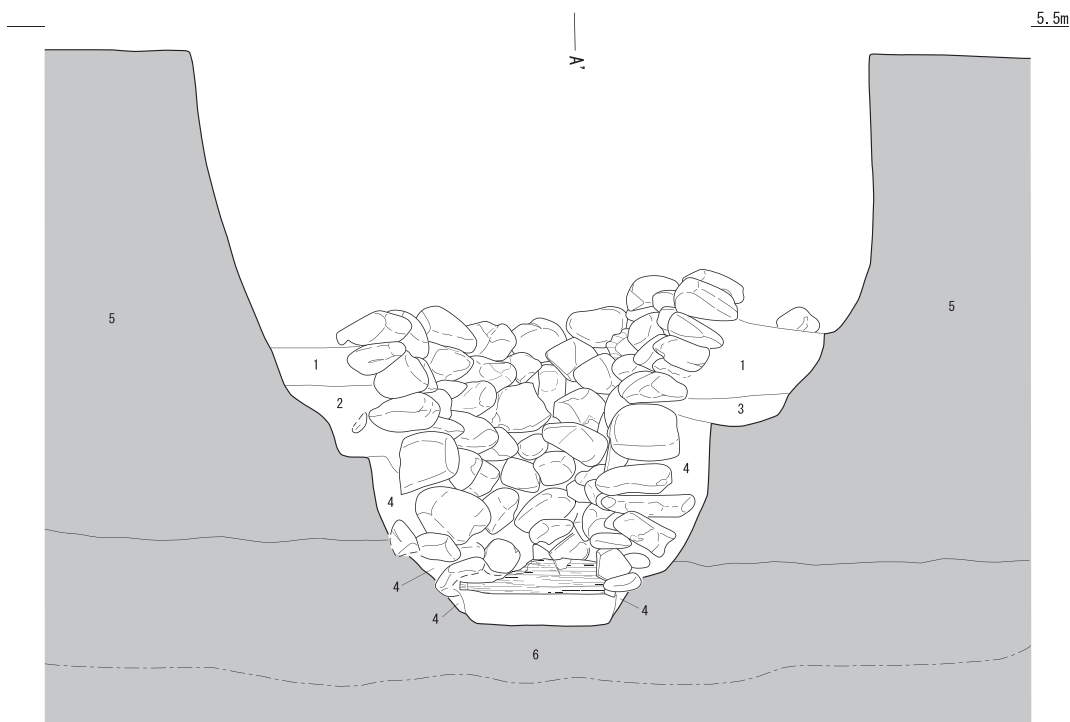
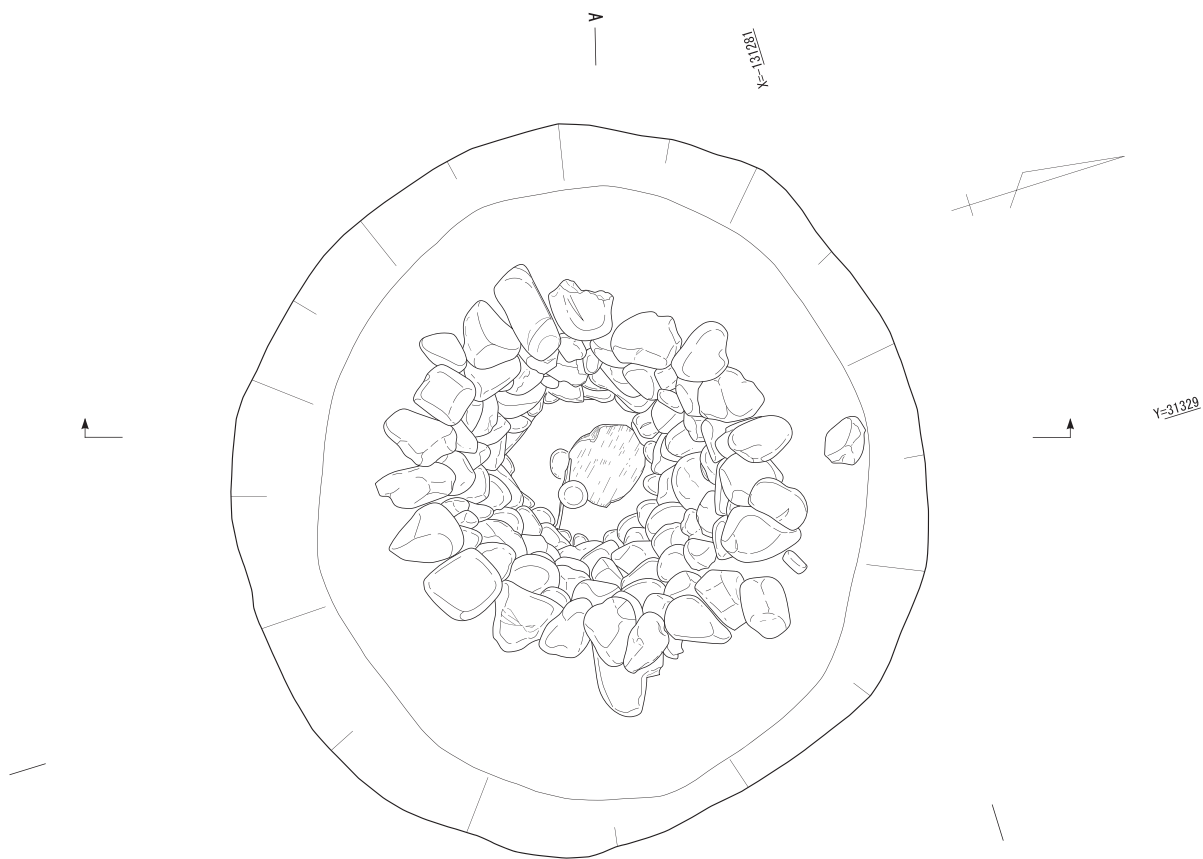
1. 2.5Y6.6/2.2 灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂でマンガン粒が疎らに入る。
2. 2.5Y4.7/2.3 暗灰黄色 シルト質極細粒砂で直径2cm大の 10Y5/1 褐灰色 シルトがブロック状に入る。マンガン・鉄分入る。
3. 10YR5.3/1.3 褐灰色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂でやや粘質。東側は砂質強まる。木箱蓋の腐朽・落ち込んだものか。
4. 2.5Y6.3/2.1 灰黄色 シルト質極細粒砂～極細粒砂で直径1cm大の 10YR5.6/1 褐灰色 シルトブロックを疎らに含む。マンガン入る。
- 4'. 2.5Y6.1/2.1 灰黄色 シルト質極細粒砂で第4層よりシルト分がやや多く炭化物を僅かに含む。
5. 10YR5.1/1.1 褐灰色 シルト～極細粒砂で酸化鉄が入る。酸化鉄が入りマンガンが僅かに入る。
6. 2.5Y5.4/1 黄灰色 シルトでやや粘質。炭化物を僅かに含む。棺腐朽に伴う粘土層。
7. 10YR5/1.2 褐灰色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂を少量含む。棺腐朽に伴う粘質土層。鉄分・マンガンを多く含む。
8. 10YR5/6 黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で細粒砂を少量含む。第6・7層と地山の土壌化層。鉄分・マンガンを多く含む。
9. 10YR5/1.6 灰黄褐色 極細粒砂で細粒砂を多く含む。鉄分・マンガンを多く含む。
10. 10YR5/1.4 褐灰色 極細粒砂で細粒砂を少量含む。鉄分・マンガンを多く含む。
11. 10YR4.5/1.4 褐灰色 極細粒砂混じり細粒砂。鉄分・マンガンを多く含む。



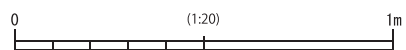
1. 2.5Y7.3/1.3 灰白色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂でマンガン粒が疎らに入り酸化鉄が入る。白色砂粒含む。
2. 2.5Y6.4/1.8 灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂で炭化物と 10YR5.4/1 褐灰色 シルトブロックが僅かに入る。酸化鉄入る。
3. 2.5Y6.2/2.3 灰黄色 シルト～細粒砂で 2.5Y5.2/1.7 暗灰黄色 シルトブロックが僅かに入る。マンガン粒と酸化鉄が入る。
4. 10YR6.3/1.7 灰黄褐色 シルト～極細粒砂でマンガン粒が入る。
5. 2.5Y5.7/1.3 黄灰色 シルト混じり極細粒砂で 10YR5/1 褐灰色 シルトのブロックが僅かに入る。マンガン粒が疎らに入る。
6. 2.5Y6.7/1.4 灰白色 シルト質極細粒砂～細粒砂で白色砂粒・マンガン粒が入る。
7. 10YR5.7/1.8 灰黄褐色 シルト～極細粒砂。棺材痕跡か。
8. 10YR5/2.6 にぶい黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂を含む。
9. 10YR5/2.2 灰黄褐色 極細粒砂で細粒砂を含む。棺材痕跡。
10. 10YR5/1.8 灰黄褐色 粗粒シルト～極細粒砂で粘質。棺材痕跡。
11. 10YR5/3.5 にぶい黄褐色 極細粒砂混じり細粒砂でやや砂質。
12. 10YR5/2.7 にぶい黄褐色 極細粒砂。
13. 10YR5/1.4 褐灰色 極細粒砂。

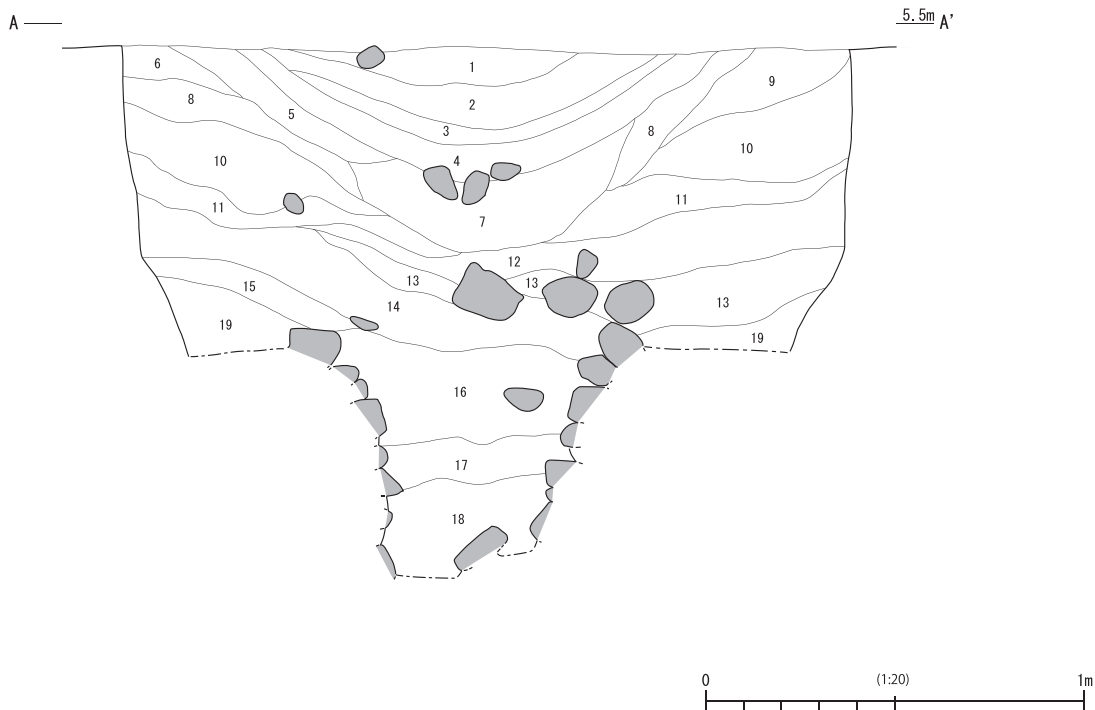
1. 攪乱埋土。河川護岸工事に伴うものか。
2. 2.5Y5.3/3.2 黄褐色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で土器片を僅かに含む。マンガンが疎らに入り酸化鉄が入る。
3. 2.5Y5.2/2.2 暗灰黄色 極細粒砂～細粒砂で土器片を僅かに含みマンガン入る。
4. 2.5Y6.4/1.7 灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で砂質強く締まり弱い。土器片を僅かに含みマンガンが入る。
5. 5Y5.3/1.7 灰オリーブ色 シルト混じり細粒砂～極細粒砂で直径1～5cm大の円中礫を多く含む。淘汰悪い。
6. 2.5Y6.6/2.4 灰黄色 シルト質極細粒砂～極細粒砂で直径10cm大の円大礫・土器片・炭化物を僅かに含む。マンガンが多く入る。
7. 2.5Y5.8/2.4 灰黄色 シルト混じり細粒砂～極粗粒砂で直径1～5cm大の円中礫を含む。
8. 10YR5.3/2.3 灰黄褐色 シルト質極細粒砂～細粒砂で直径1～2cm大の 2.5Y6.3/1 灰黄色 シルトのブロックを含む。土器片を僅かに含みマンガンが入る。
9. 2.5Y6.2/1.4 灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂で直径1～2cm大の 5Y6.4/1 灰色 シルトのブロックを含む。土器片・マンガンが疎らに入る。
10. 10YR5.5/1.3 褐灰色 極細粒砂～細粒砂で直径1～2cm大の 2.5Y4.6/1.3 黄灰色 シルトのブロックを含む。炭化物を僅かに含みマンガンが入る。
11. 2.5Y5.1/2.4 暗灰黄色 細粒砂～極粗粒砂で直径1～3cm大の円中礫を多く含む。淘汰悪い。土器片を僅かに含む。
12. 2.5Y6.6/2.3 灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で土器片を僅かに含む。
13. 10YR6.4/1.2 褐灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で直径1cm大の 2.5Y6.3/2 灰黄色 シルトのブロックを僅かに含む。酸化鉄入る。
14. 2.5Y4.7/2.7 黄褐色 シルト混じり細粒砂～粗粒砂で直径0.5～5cm大の円中礫を多く含み直径1cm大の 5Y6.3/1 灰色 シルトのブロックを疎らに含む。北に礫多い。
15. 2.5Y6.4/1.5 灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂で直径1cm大の 10YR6.2/1.7 灰黄褐色 シルトのブロックを疎らに含む。酸化鉄入る。
16. 10YR5.2/2.1 灰黄褐色 シルト混じり細粒砂～極粗粒砂で直径1～5cm大の円中礫を多く含む。
17. 2.5Y5.7/1.3 黄灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で 10YR6.7/1 灰白色 シルトがブロック状に入る。酸化鉄・マンガンが入る。地山。





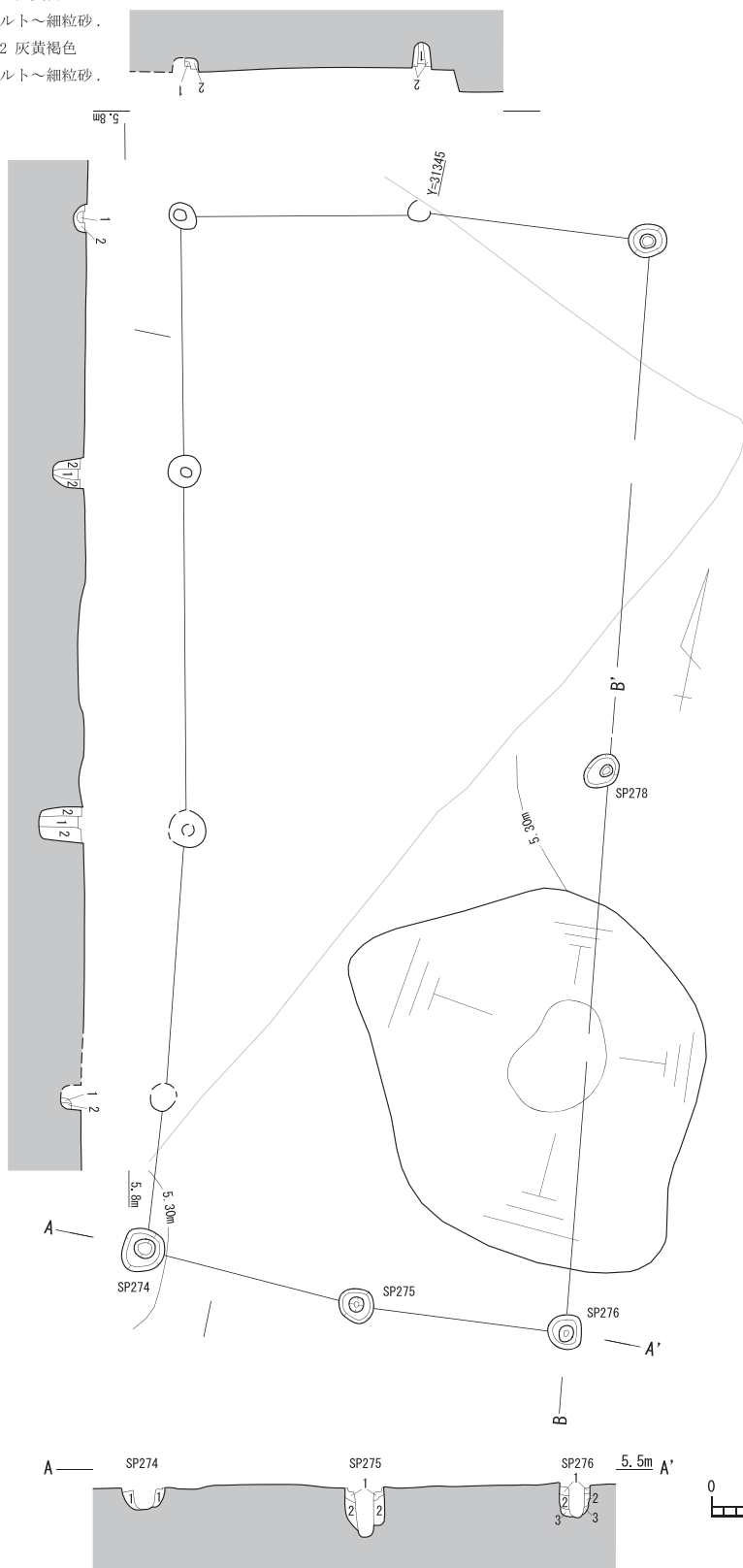
- | | |
|---|--|
| 1. 2.5Y6/1.7 灰黄色 極細粒砂混じり細粒砂で中粒砂を含む. | 5. 10YR4/3.8 褐色 粗粒シルト～極細粒砂で細粒砂を含む. |
| 2. 2.5Y5/1.4 黄灰色 粗粒シルト混じり極細粒砂～細粒砂で中粒砂を少量含む. | 下部は粗粒シルトが多い. 還元により 2.5Y5/3 黄褐色 を呈する. やや粘質. 地山. |
| 3. 10YR5/1.6 灰黄褐色 粗粒シルト混じり極細粒砂で細粒砂を多く含む. | 6. 砂礫層. 中粒砂混じり粗粒砂～直径 2 cm 大の亜円～円中礫で直径 4 cm 大も少量含む. 淘汰悪いが図の下端以下には直径 5～15 cm 大までのものが目立つ. 地山 (湧水層). |
| 4. 2.5Y6/3 にぶい黄色 粗粒シルト～極細粒砂でやや粘質. | |





1. 2.5Y5.8/1.4 黄灰色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂で 10 cm 大の円大礫が混じる。土器片を僅かに含み酸化鉄・マンガンが上部に入る。
2. 2.5Y5.3/1.3 黄灰色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で土器片・炭化物を含む。マンガン含む。
3. 2.5Y5.6/2.3 灰黄色 極細粒砂～細粒砂で直径 1 cm 大の灰色シルトブロックを僅かに含む。
4. 2.5Y5.7/1 黄灰色 極細粒砂混じりシルトで直径 10 cm 大の円大礫を含む。両端は砂質強まる。土器片・炭化物を含む。
5. 2.5Y5.8/1.8 灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂で炭化物を僅かに含む。両端は砂質強まる。マンガンが疎らに入る。
6. 2.5Y6/1.3 黄灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂でマンガンが入る。
7. 2.5Y4.7/1 黄灰色 シルトで 10 cm 大の円大礫を含む。直径 1 cm 未満の 2.5Y7/3.6 浅黄色 シルト～極細粒砂ブロックを含む。炭化物を僅かに含む。
8. 2.5Y6.3/1.7 灰黄色 極細粒砂～細粒砂で炭化物・焼土を僅かに含む。マンガン・酸化鉄を含む。
9. 5Y6.7/1.3 灰白色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で土器片を僅かに含む。鉄分・マンガン入る。
10. 5Y5.4/1.3 灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で直径 10 cm 大の円大礫入る。炭化物・土器片を僅かに含む。マンガンが多く入る。
11. 5Y6.2/1 灰色 極細粒砂混じりシルトで直径 1 cm 大の 2.5Y7/2.6 浅黄色 シルトのブロックを含む。炭化物・土器片を僅かに含む。酸化鉄入る。
12. 2.5Y5.4/1.2 黄灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で端は砂質強まる。土器片を僅かに含み酸化鉄入る。
13. 5Y5.7/1.2 灰色 シルト～極細粒砂で直径 20 cm 大の亜円～円大礫が入る。直径 1～5 cm 大の 5Y6.8/2.7 浅黄色 シルトのブロックを含む。土器片を僅かに含む。
14. 2.5Y5.7/1.3 黄灰色 シルト～極細粒砂で直径 10 cm 大の円大礫が入る。炭化物・土器片を僅かに含み酸化鉄多く入る。
15. 5Y5.8/1.4 灰色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で炭化物が疎らに入る。酸化鉄入る。
16. 2.5Y6/1.3 黄灰色 シルト～極細粒砂で直径 15 cm 大の円大礫が入る。間隙多く酸化鉄入る。
17. 5Y5.4/1.4 灰色 極細粒砂混じりシルトで粘性高い。炭化物を僅かに含み酸化鉄疎らに入る。
18. 2.5Y5.3/1.7 暗灰黄色 シルト～極細粒砂で直径 20 cm 大の亜円大礫が入る。酸化鉄入る。
19. 2.5Y6.2/1.4 黄灰色 シルト質極細粒砂で炭化物を僅かに含む。酸化鉄が疎らに入る。

1. 10YR5/2 灰黄褐色
粘質シルト～細粒砂.
2. 10YR4/2 灰黄褐色
粘質シルト～細粒砂.



X=131290

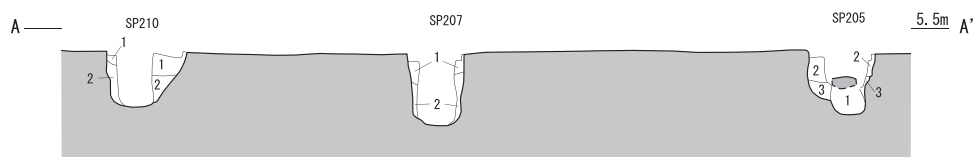
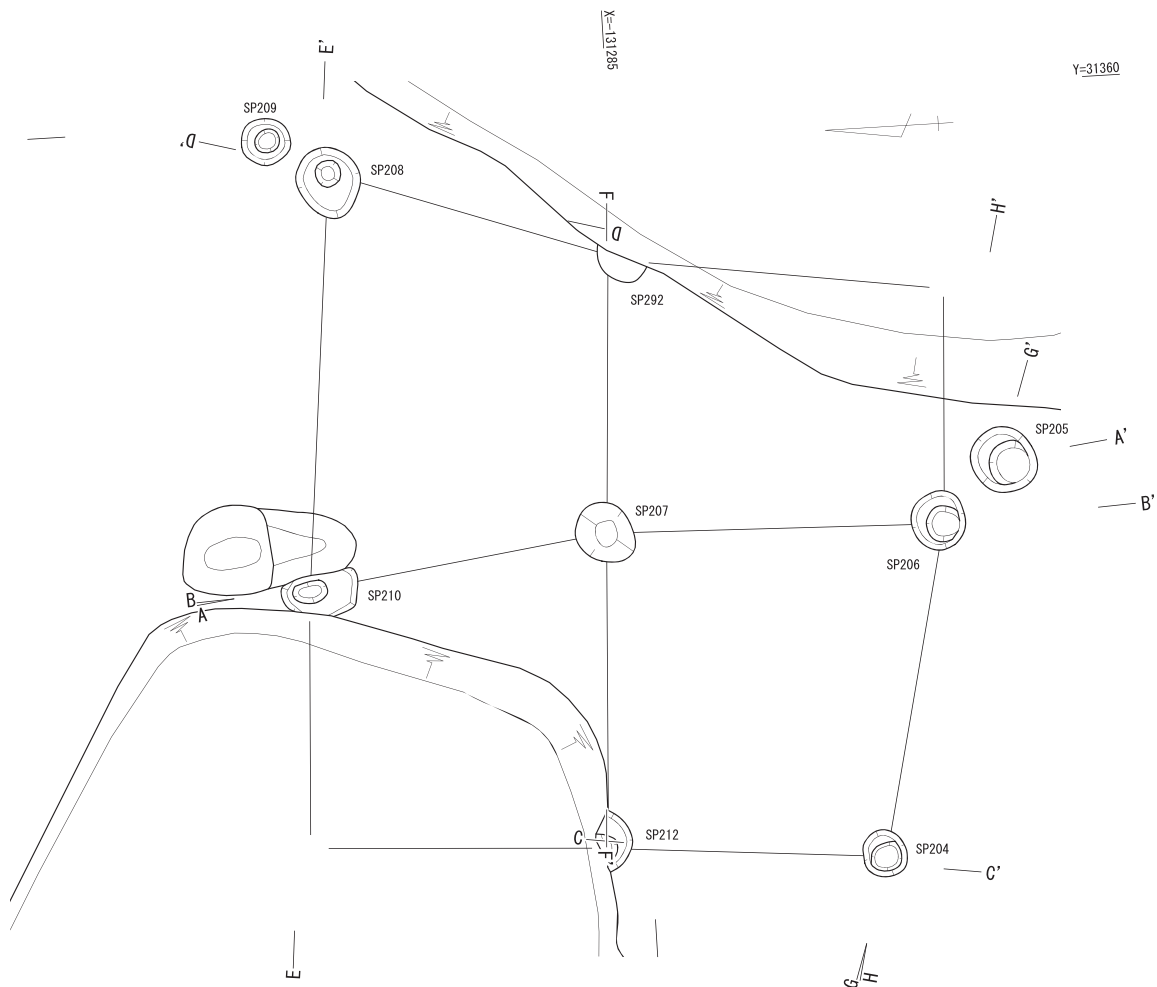
1. 10YR5. 7/3. 2 にぶい黄橙色 シルト質
極細粒砂～細粒砂.
2. 7. 5YR4/3. 8 褐色 シルト混じり細粒砂.

1. 2. 5Y5. 7/2. 8 にぶい黄色 極細粒砂～
細粒砂でマンガン粒を疎らに含む.
2. 10YR4. 6/3. 3 にぶい黄褐色 細粒砂で
炭化物を僅かに含む.
3. 7. 5YR4. 2/4. 5 褐色 細粒砂.

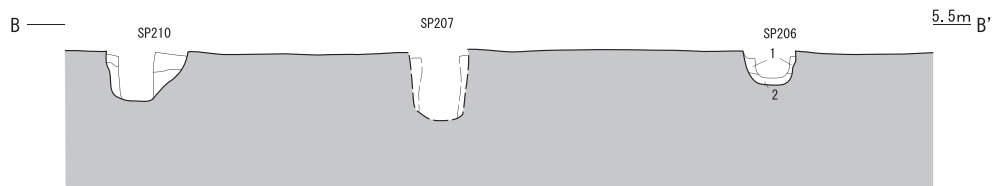
1. 10YR4. 7/3. 6 にぶい黄褐色 シル
ト混じり細粒砂～中粒砂で
2. 5Y6/1 黄灰色極細粒砂のプロ
ックを僅かに含む.

1. 10YR5. 4/2. 3 灰黄褐色 細粒砂でシルトが
僅かに混じりマンガン粒が疎らに入る.
2. 7. 5Y4. 3/3. 3 褐色 シルト混じり細粒砂～
中粒砂で 10YR6. 6/1 灰白色シルトブロック
を僅かに含む.

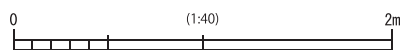
1. 2. 5Y5. 7/2. 8 にぶい黄色 極細粒砂～
細粒砂でマンガン粒を疎らに含む.
2. 10YR4. 6/3. 3 にぶい黄褐色 細粒砂で
炭化物を僅かに含む.
3. 7. 5YR4. 2/4. 5 褐色 細粒砂.

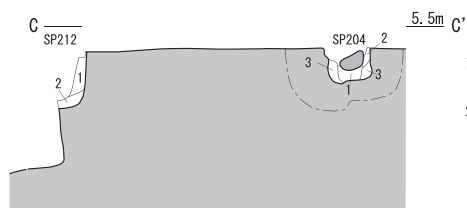


- | | | |
|---|--|---|
| <p>1. 2.5Y5.7/1.6 灰褐色 シルト質極細粒砂～細粒砂で 10YR3.7/1.3 褐灰色シルトのブロックを含む。マンガン粒が疎らに入る。</p> <p>2. 2.5Y6.7/1.6 灰黄色 シルト～極細粒砂でマンガン粒を疎らに含む。</p> | <p>1. 10YR5.2/1.3 褐灰色 シルト質極細粒砂でマンガン粒を僅かに含む。</p> <p>2. 2.5Y5.3/1.7 灰黄色 シルト～極細粒砂で 10YR3.4/3.2 暗褐色 シルトのブロックをを僅かに含む。</p> | <p>1. 2.5Y6.3/2.3 灰黄色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂で 10YR4.3/1.2 褐灰色シルトブロックを含む。柱痕。</p> <p>2. 10YR4.4/2.1 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂でマンガンを僅かに含む。</p> <p>3. 2.5Y5.7/2.2 灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂。</p> |
|---|--|---|



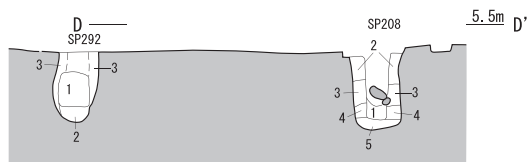
- | |
|--|
| <p>1. 2.5Y4.7/2.4 暗灰黄色 極細粒砂～細粒砂で炭化物を僅かに含む。</p> <p>2. 2.5Y6.3/1.2 黄灰色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂。</p> |
|--|





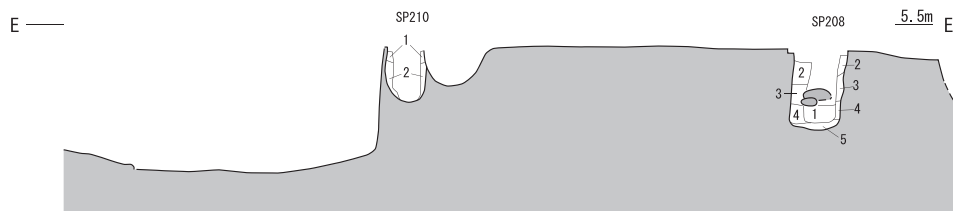
- 1. 2.5Y6.3/3.3 にぶい黄色 シルト混じり細粒砂でマンガン粒を含む。
- 2. 2.5Y6.7/2.3 灰黄色 極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を僅かに含む。

- 1. 10YR4.3/1.2 褐灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で炭化物を僅かに含む。柱根。
- 2. 2.5Y5.8/2.4 灰黄色 極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を含む。
- 3. 2.5Y5.4/1.7 暗灰黄色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂で2.5Y6.6/2.4 灰黄色 シルトがブロック状に入る。



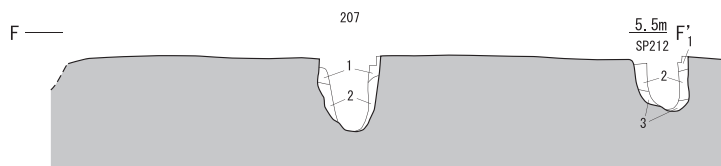
- 1. 10YR5.8/1.3 褐灰色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂で炭化物・焼土を含み下部に多い。柱根。
- 2. 2.5Y4.3/2.3 暗灰黄色 極細粒砂～細粒砂で炭化物を僅かに含む。柱根。
- 3. 2.5Y4.8/1.2 黄灰色 シルト～極細粒砂。

- 1. 10YR3.6/1.2 褐灰色 シルト質極細粒砂で 10YR4.7/3.7 にぶい黄褐色 極細粒砂がブロック状に入る。柱根。
- 2. 2.5Y5.2/1.7 暗灰黄色 シルト～極細粒砂。
- 3. 10YR4.3/1.1 褐灰色 中粒砂混じり極細粒砂～細粒砂で炭化物を僅かに含む。
- 4. 2.5Y3.5/1 黒褐色 シルトで2.5Y6.2/1.3 黄灰色 シルトのブロックを含む。
- 5. 2.5Y6.3/1.6 灰黄色 シルト～極細粒砂。



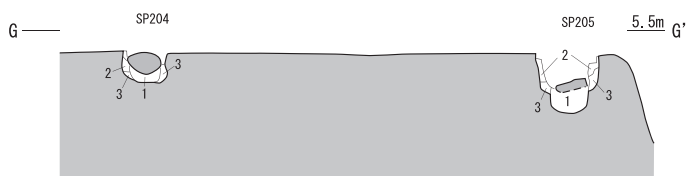
- 1. 2.5Y5.7/2.2 灰黄色 シルト混じり極細粒砂で焼土塊を僅かに含みマンガン粒を疎らに含む。
- 2. 10YR5.4/1.7 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を疎らに含む。

- 1. 10YR3.6/1.2 褐灰色 シルト質極細粒砂で 10YR4.7/3.7 にぶい黄褐色 極細粒砂がブロック状に入る。柱根。
- 2. 2.5Y5.2/1.7 暗灰黄色 シルト～極細粒砂。
- 3. 10YR4.3/1.1 褐灰色 中粒砂混じり極細粒砂～細粒砂で炭化物を僅かに含む。
- 4. 2.5Y3.5/1 黒褐色 シルトで 2.5Y6.2/1.3 黄灰色 シルトのブロックを含む。
- 5. 2.5Y6.3/1.6 灰黄色 シルト～極細粒砂。



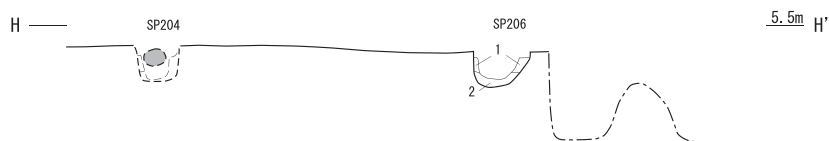
- 1. 10YR5.2/1.3 褐灰色 シルト質極細粒砂でマンガン粒を僅かに含む。
- 2. 2.5Y5.3/1.7 灰黄色 シルト～極細粒砂で 10YR3.4/3.2 暗褐色 シルトのブロックをを僅かに含む。

- 1. 10YR4.7/1.2 褐灰色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂で焼土塊を僅かに含む。灰白色の極細粒砂をブロック状に含む。
- 2. 5Y6.3/3.3 にぶい黄色 シルト混じり細粒砂でマンガン粒を含む。
- 3. 2.5Y6.7/2.3 灰黄色 極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を僅かに含む。

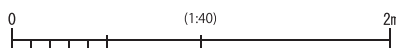


- 1. 10YR4.3/1.2 褐灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂で炭化物を僅かに含む。柱根。
- 2. 2.5Y5.8/2.4 灰黄色 極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を含む。
- 3. 2.5Y5.4/1.7 暗灰黄色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂で2.5Y6.6/2.4 灰黄色 シルトがブロック状に入る。

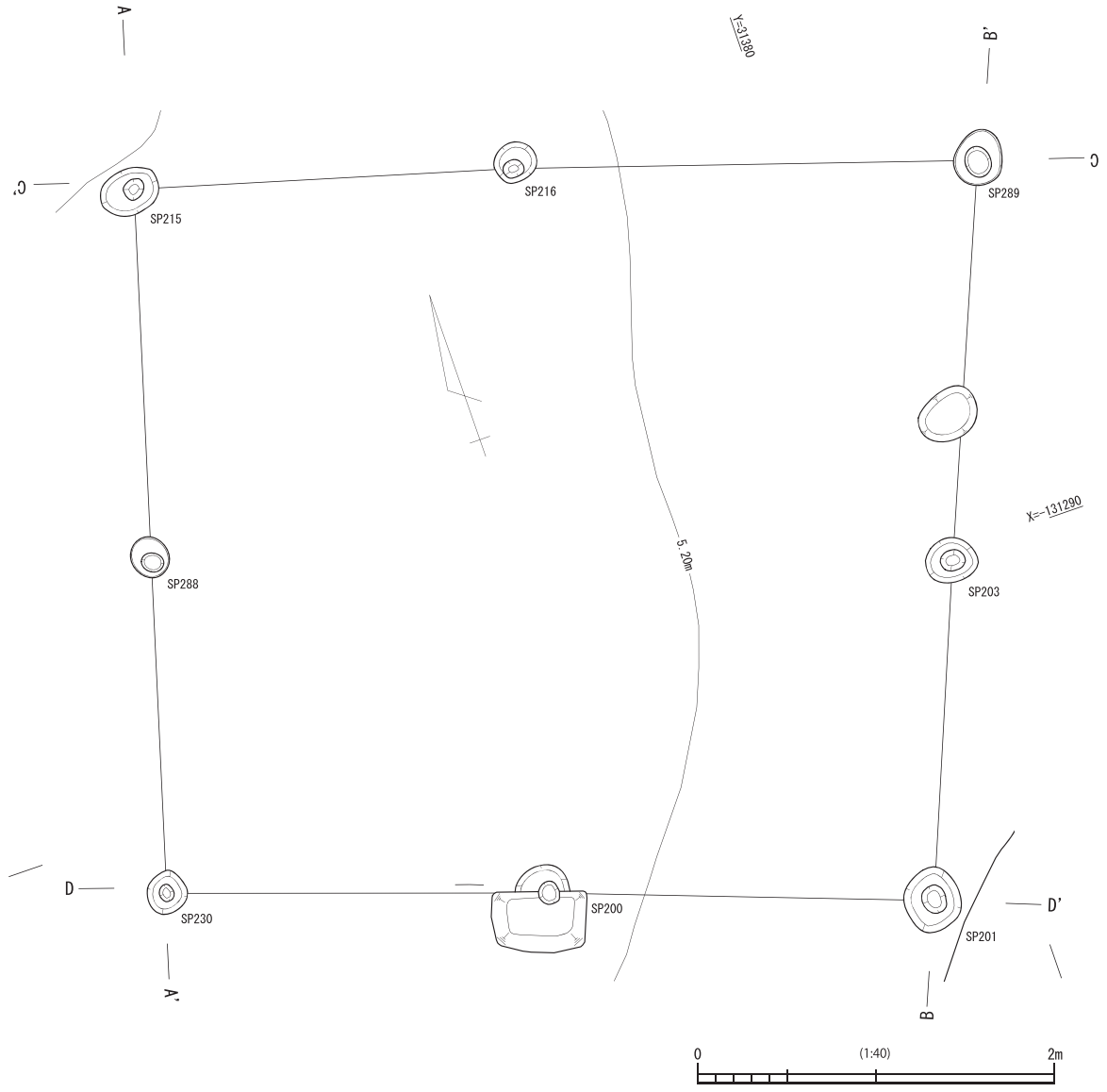
- 1. 2.5Y6.3/2.3 灰黄色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂で 10YR4.3/1.2 褐灰色 シルトブロックを含む。柱根。
- 2. 10YR4.4/2.1 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を僅かに含む。
- 3. 2.5Y5.7/2.2 灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂。



- 1. 2.5Y4.7/2.4 暗灰黄色 極細粒砂～細粒砂で炭化物を僅かに含む。
- 2. 2.5Y6.3/1.2 黄灰色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂。

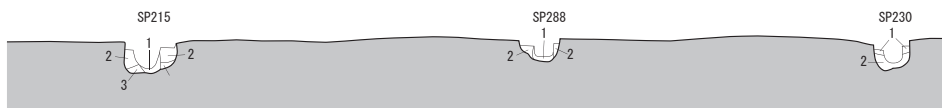


SB5 断面



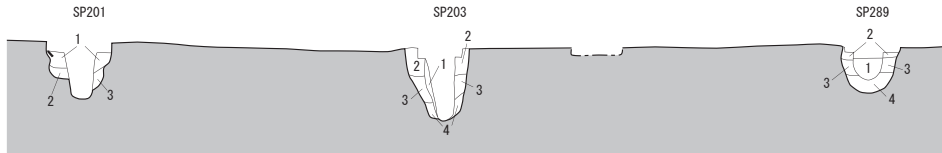
SB 7 平面

A ————— 5.5m A'



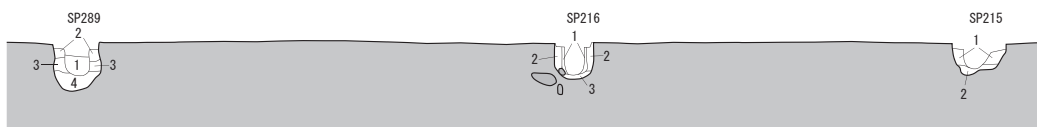
- | | | |
|---|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 10YR5.7/3.8 にぶい黄橙色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂で 2.5Y6/1 黄灰色 シルトのブロックを含む。やや粘質。柱根。 2. 10YR6.4/2.5 灰黄褐色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂でマンガン粒入る。 3. 2.5Y6.2/2.3 灰黄色 細粒砂混じりシルト質極細粒砂で 10YR3.4/2.6 暗褐色 シルトブロックを含む。 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y5.6/2.7 にぶい黄色 シルト～極細粒砂でマンガン粒疎らに入る。柱根。 2. 10YR5.8/2.6 にぶい黄橙色 極細粒砂～細粒砂で 2.5Y6/1 黄灰色 極細粒砂がブロック状に入る。 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y5.3/1.4 黄灰色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂。 2. 2.5Y5.7/1.7 灰黄色 極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を僅かに含む。 |
|---|--|--|

B ————— 5.5m B'



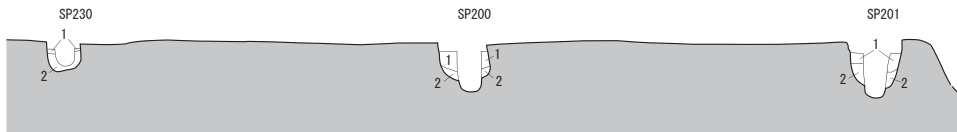
- | | | |
|--|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y5.7/1.6 灰黄色 シルト～極細粒砂で 10YR5.7/4.5 にぶい黄橙色 極細粒砂がマーブル状に入る。2.5Y7.7/1 灰白色 シルトブロックが疎らに入る。土器片・マンガン粒を含む。 2. 2.5Y6.6/1.3 灰白色 シルト～極細粒砂でマンガン粒を僅かに含む。 3. 2.5Y5.2/2.2 暗灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を疎らに含む。 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y4.6/1.7 暗灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂で炭化物を僅かに含む。柱根。 2. 10YR5.4/2.3 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を疎らに含む。 3. 2.5Y6.4/2.3 灰黄色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂でマンガン粒を疎らに含む。 4. 2.5Y5.3/1.4 黄灰色 シルト～極細粒砂。 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y5.3/2.1 暗灰黄色 シルト～極細粒砂で炭化物を僅かに含む。柱根。 2. 2.5Y6.2/1.3 黄灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を僅かに含む。 3. 5Y4.7/1.2 灰色 シルト～極細粒砂。 4. 2.5Y4.8/1.3 黄灰色 シルト質極細粒砂でマンガン粒を疎らに含む。 |
|--|---|---|

C ————— 5.5m C'

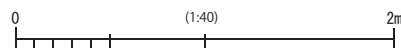


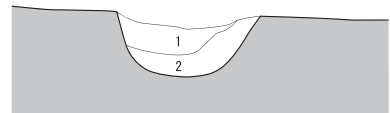
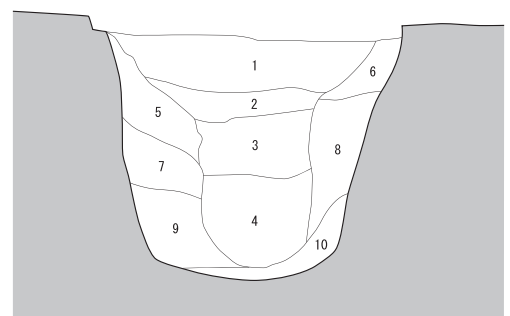
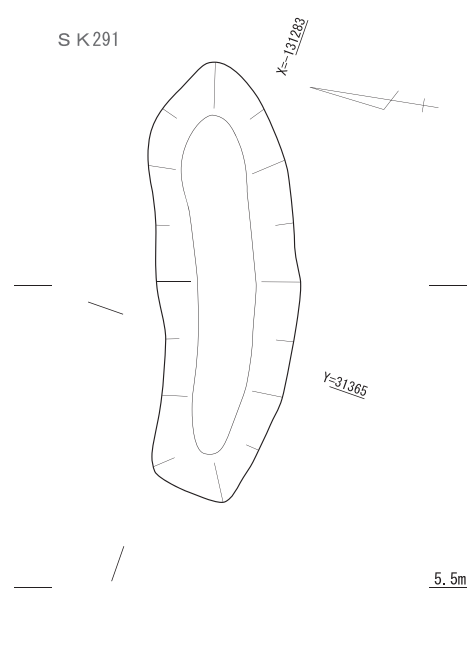
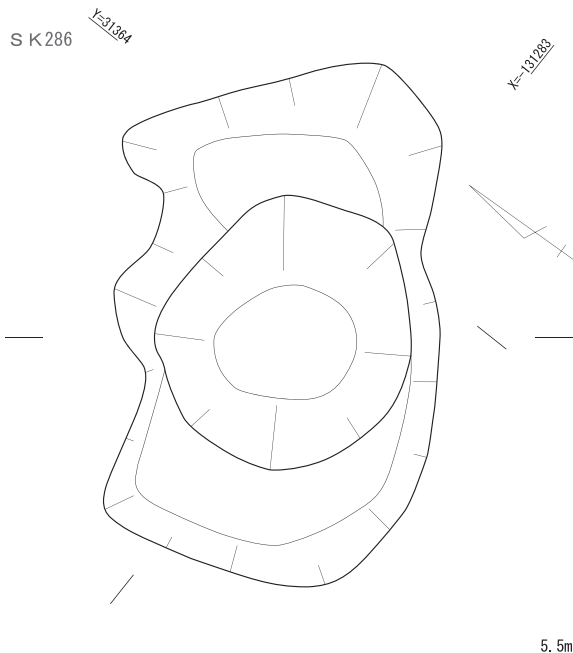
- | | | |
|---|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y5.3/2.1 暗灰黄色 シルト～極細粒砂で炭化物を僅かに含む。柱根。 2. 2.5Y6.2/1.3 黄灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を僅かに含む。 3. 5Y4.7/1.2 灰色 シルト～極細粒砂。 4. 2.5Y4.8/1.3 黄灰色 シルト質極細粒砂でマンガン粒を疎らに含む。 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y4.7/1.3 黄灰色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂。柱根。 2. 2.5Y6.2/2.3 灰黄色 極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を疎らに含む。 3. 10YR5.4/1.3 褐灰色 細粒砂混じりシルト。 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 10YR6.4/2.5 灰黄褐色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂でマンガン粒入る。 2. 2.5Y6.2/2.3 灰黄色 細粒砂混じりシルト質極細粒砂で 10YR3.4/2.6 暗褐色 シルトブロックを含む。 |
|---|--|---|

D ————— 5.5m D'

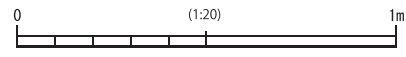


- | | | |
|--|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y5.3/1.4 黄灰色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂。 2. 2.5Y5.7/1.7 灰黄色 極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を僅かに含む。 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y6.2/1.8 灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂。 2. 10YR6.3/2.2 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂。 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y5.7/1.6 灰黄色 シルト～極細粒砂で 10YR5.7/4.5 にぶい黄橙色 極細粒砂がマーブル状に入る。2.5Y7.7/1 灰白色 シルトブロックが疎らに入る。土器片・マンガン粒を含む。 2. 2.5Y5.2/2.2 暗灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を疎らに含む。 |
|--|---|--|

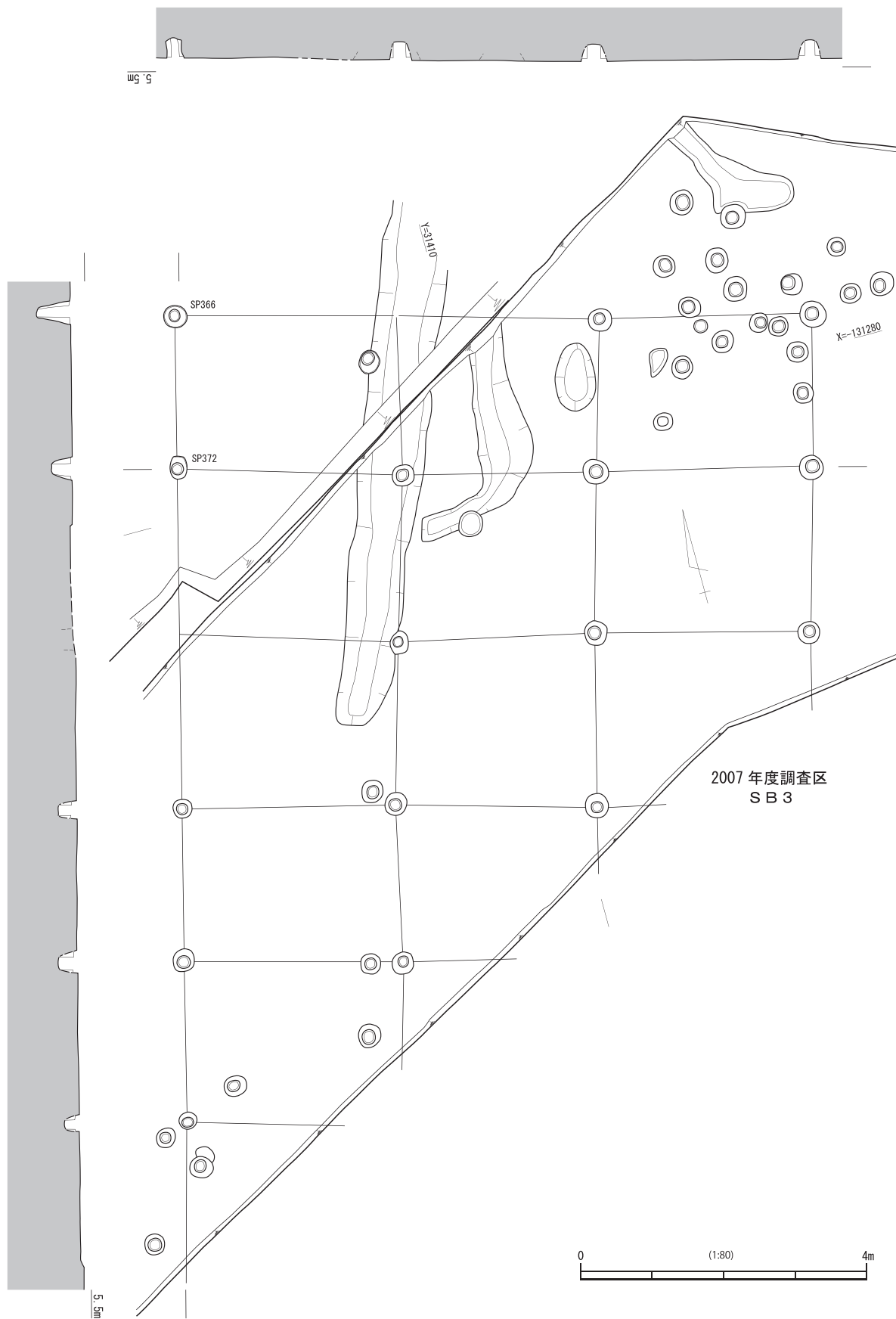




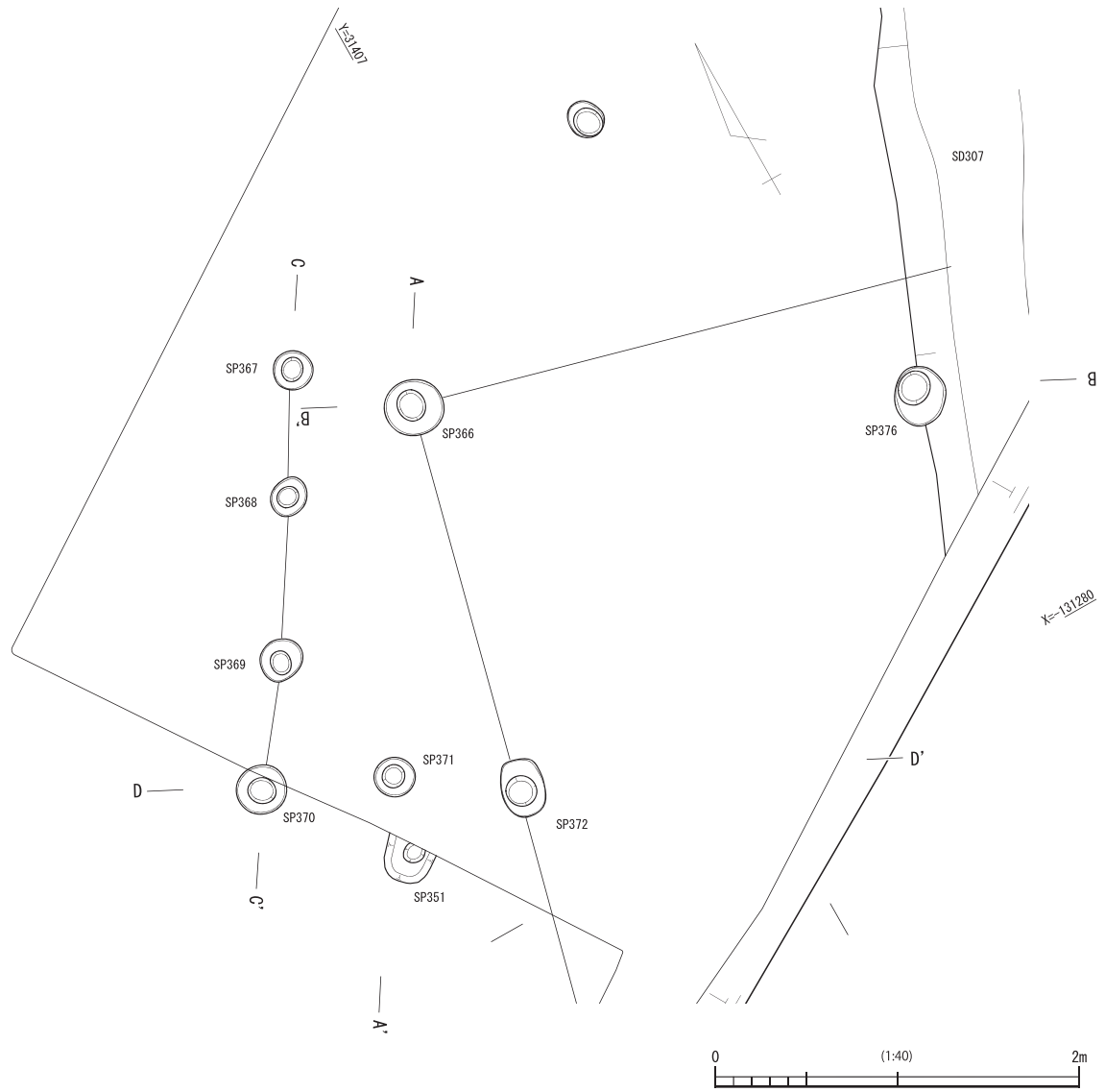
- 1. 10YR5.3/1.4 褐灰色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で炭化物・焼土塊を含む。
- 2. 2.5Y5.4/2.3 暗灰黄色 極細粒砂～細粒砂で炭化物を疎らに含む。10YR4.3/1.4 褐灰色 シルトのブロックを含む。



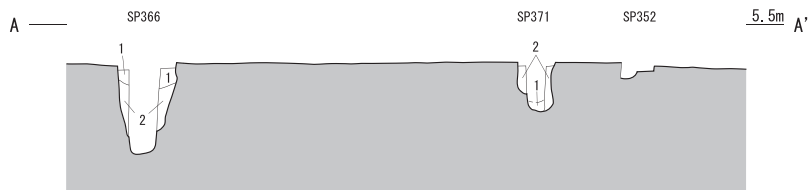
- 1. 2.5Y6.4/1.7 灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂で炭化物を多く含む。
- 2. 10YR5.4/2.4 灰黄褐色 シルト～極細粒砂で炭化物を含む。
- 3. 10YR4.3/1.6 灰黄褐色 シルト質極細粒砂で炭化物を疎らに含む。
- 4. 10YR5.7/1.3 褐灰色 細粒砂混じりシルト～極細粒砂で炭化物を疎らに含む。
- 5. 2.5Y5.3/1.7 暗灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で炭化物を僅かに含む。
- 6. 2.5Y5.7/2.2 灰黄色 極細粒砂～細粒砂で炭化物を僅かに含む。
10YR4.7/1 褐灰色 シルトのブロックを疎らに含む。
- 7. 2.5Y5.2/1.3 黄灰色 シルト～極細粒砂で炭化物を僅かに含む。やや粘質。
- 8. 2.5Y5.8/1.3 黄灰色 シルト質極細粒砂で炭化物を僅かに含む。
- 9. 2.5Y5.2/2.3 暗灰黄色 シルト～極細粒砂で炭化物を僅かに含む。やや粘質。
- 10. 10YR5.7/1.8 灰黄褐色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂で炭化物を僅かに含む



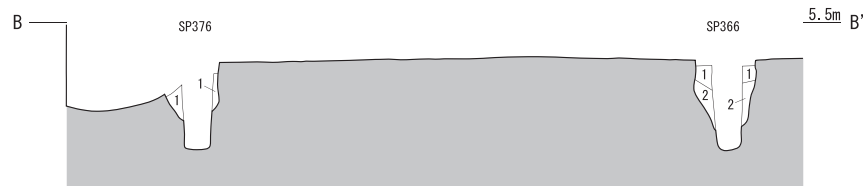
SB 8 (SB 3)



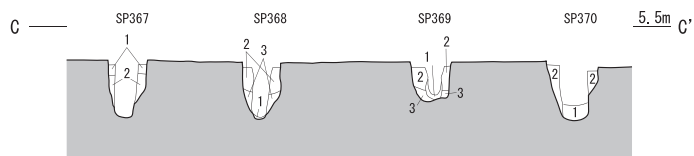
SB8他 平面



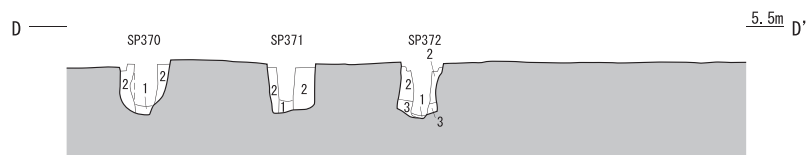
- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y5.7/2.2 灰黄色 シルト混じり極細粒砂で焼土塊を僅かに含みマンガン粒を疎らに含む。 2. 10YR5.4/1.7 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を疎らに含む。 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 10YR4.8/1.8 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂。柱痕。 2. 2.5Y5.7/1.6 灰黄色 極細粒砂でマンガン粒を疎らに含む。 10YR4.4/1 褐灰色 極細粒砂ブロックを僅かに含む。 |
|--|---|



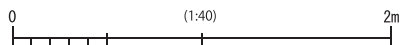
- | | |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y6.2/1.7 灰黄色 シルト質極細粒砂～細粒砂マンガン粒を含む。 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y5.7/2.2 灰黄色 シルト混じり極細粒砂で焼土塊を僅かに含みマンガン粒を疎らに含む。 2. 10YR5.4/1.7 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を疎らに含む。 |
|--|--|



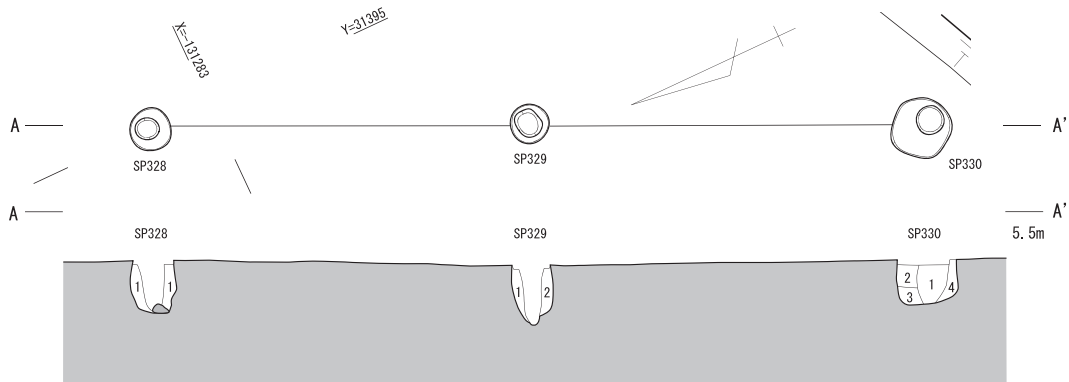
- | | | | |
|---|--|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 10YR4.7/1.7 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂でマンガン粒を僅かに含む。 2. 2.5Y5.7/1.9 灰黄色 シルト混じり極細粒砂。 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y4.6/1.3 黄灰色 シルト質極細粒砂～細粒砂。柱根。 2. 2.5Y5.6/2.3 灰黄色 極細粒砂で炭化物を僅かに含む。 3. 2.5Y4.3/1.7 暗灰黄色 シルト混じり極細粒砂～細粒砂。 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y5.6/1.7 灰黄色 シルト質極細粒砂。柱根。 2. 2.5Y4.8/1.7 暗灰黄色 細粒砂混じり極細粒砂でマンガン粒を僅かに含む。 3. 2.5Y4.4/1.4 黄灰色 極細粒砂。 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 10YR4.3/1.7 灰黄褐色 シルト混じり極細粒砂。柱根。 2. 2.5Y5.4/2.3 暗灰黄色 極細粒砂～細粒砂で下部に 10YR5/1 褐灰色 極細粒砂がブロック状に入る。5mm大の礫を僅かに含みマンガン粒を疎らに含む。 |
|---|--|--|---|



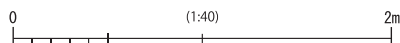
- | | | |
|---|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 10YR4.3/1.7 灰黄褐色 シルト混じり極細粒砂。柱根。 2. 2.5Y5.4/2.3 暗灰黄色 極細粒砂～細粒砂で下部に 10YR5/1 褐灰色 極細粒砂がブロック状に入る。5mm大の礫を僅かに含みマンガン粒を疎らに含む。 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 10YR4.8/1.8 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂。柱痕。 2. 2.5Y5.7/1.6 灰黄色 極細粒砂でマンガン粒を疎らに含む。10YR4.4/1 褐灰色 極細粒砂ブロックを僅かに含む。 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 10YR4.6/1.6 灰黄褐色 極細粒砂～細粒砂で炭化物を僅かに含む。柱痕。 2. 2.5Y4.7/1.4 黄灰色 シルト混じり極細粒砂で炭化物・焼土塊を疎らに含む。 3. 10YR4.7/1.8 灰黄褐色 シルト混じり極細粒砂でマンガン粒を僅かに含む。 |
|---|---|---|



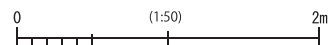
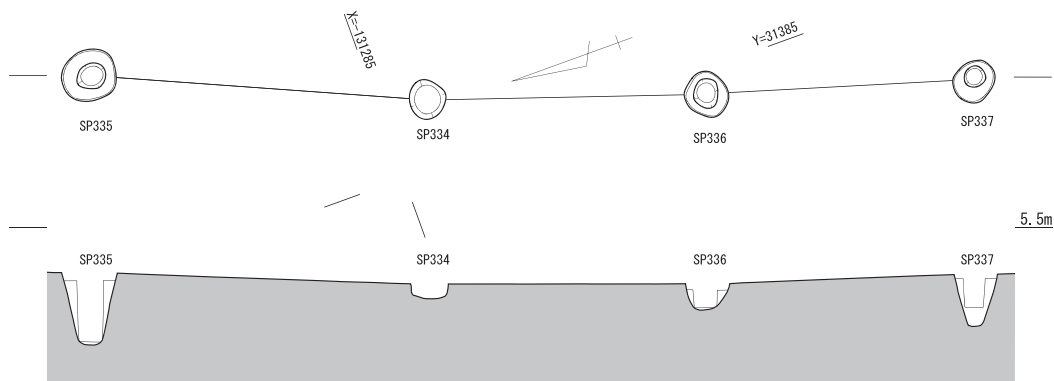
SA1



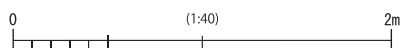
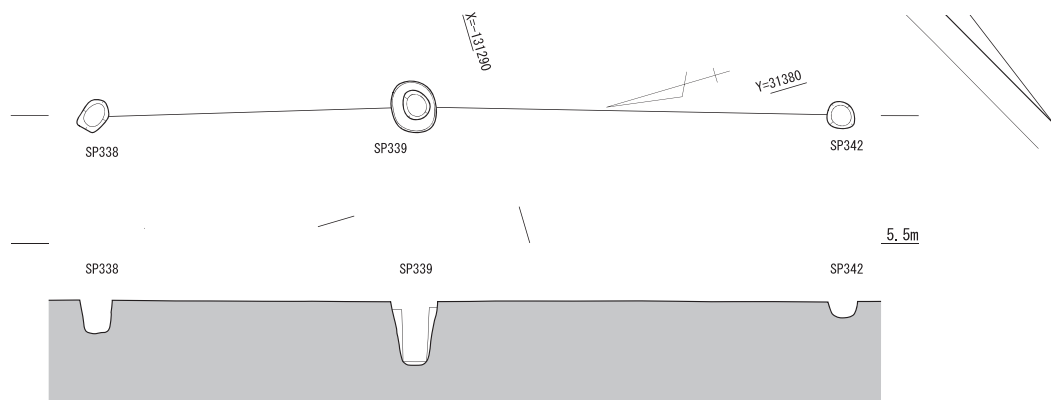
- | | | |
|--|--|---|
| <p>1. 2.5Y5/2.4 暗灰黄色
極細粒砂～細粒砂.</p> | <p>1. 10YR4.5/2 灰黄褐色 極細粒砂で
細粒砂を含む. やや粘質.
2. 10YR5/2 灰黄褐色 極細粒砂で細
粒砂を含む. やや粘質.</p> | <p>1. 2.5Y4/1 黄灰色 粗粒シルト～極細粒砂でやや粘質. 柱痕.
2. 10YR4/2 灰黄褐色 極細粒砂で細粒砂が少量混じる.
3. 10YR3.6/2 灰黄褐色 粗粒シルト混じり細粒砂で中粒砂を
微量含む. やや粘質.
4. 10YR3.8/1 褐灰色 粗粒シルト混じり細粒砂で中粒砂を微量
含む. やや粘質.</p> |
|--|--|---|



SA2

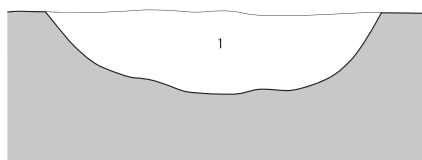


SA3

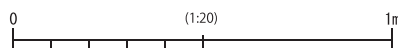


SD307

A — 5.5m A'

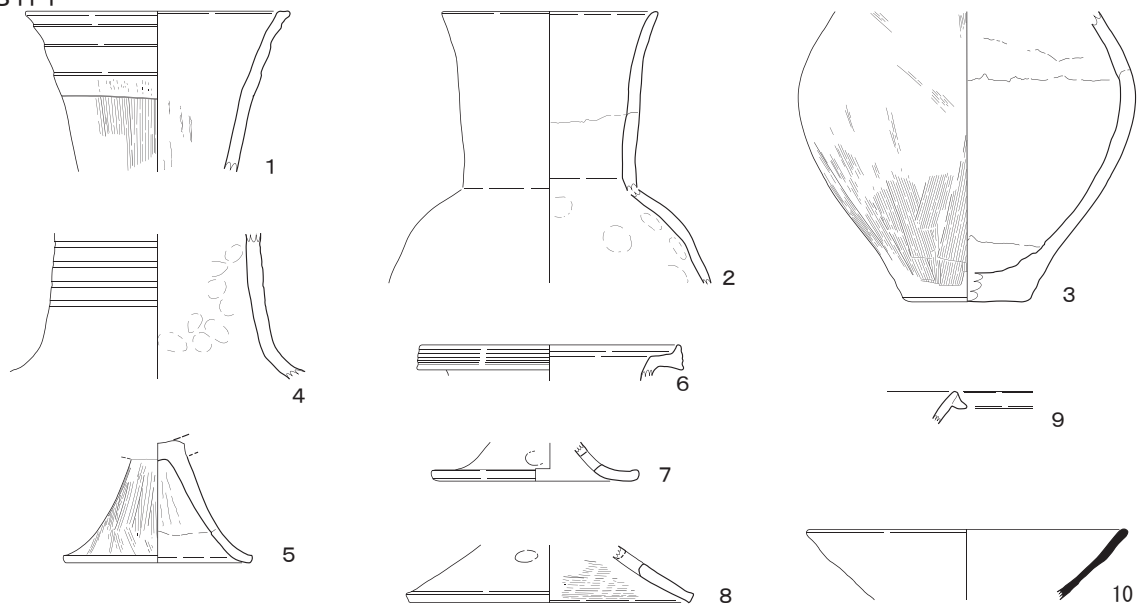


1. 2.5Y5.7/4.8 にぶい黄色 シルト混じり極細粒砂で 2.5Y6.7/2.6 浅黄色 極細粒砂のブロックを多く含み 10YR4.6/1.8 灰黄褐色 極細粒砂のブロックを含む. 土器片・焼土塊・炭化物を僅かに含む. マンガン粒疎らに含む.

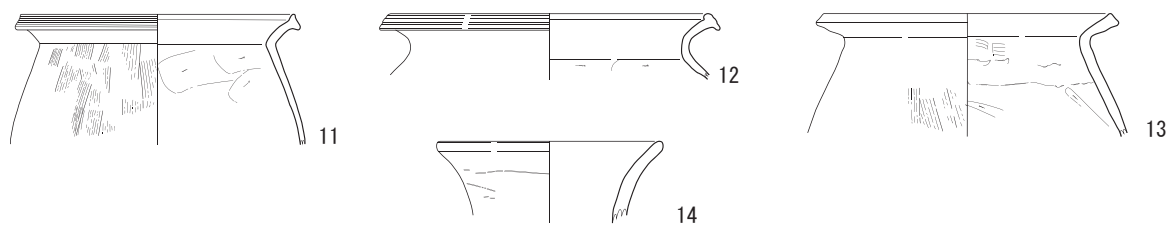


SA1～3 平面・断面、SD307 埋土土層断面

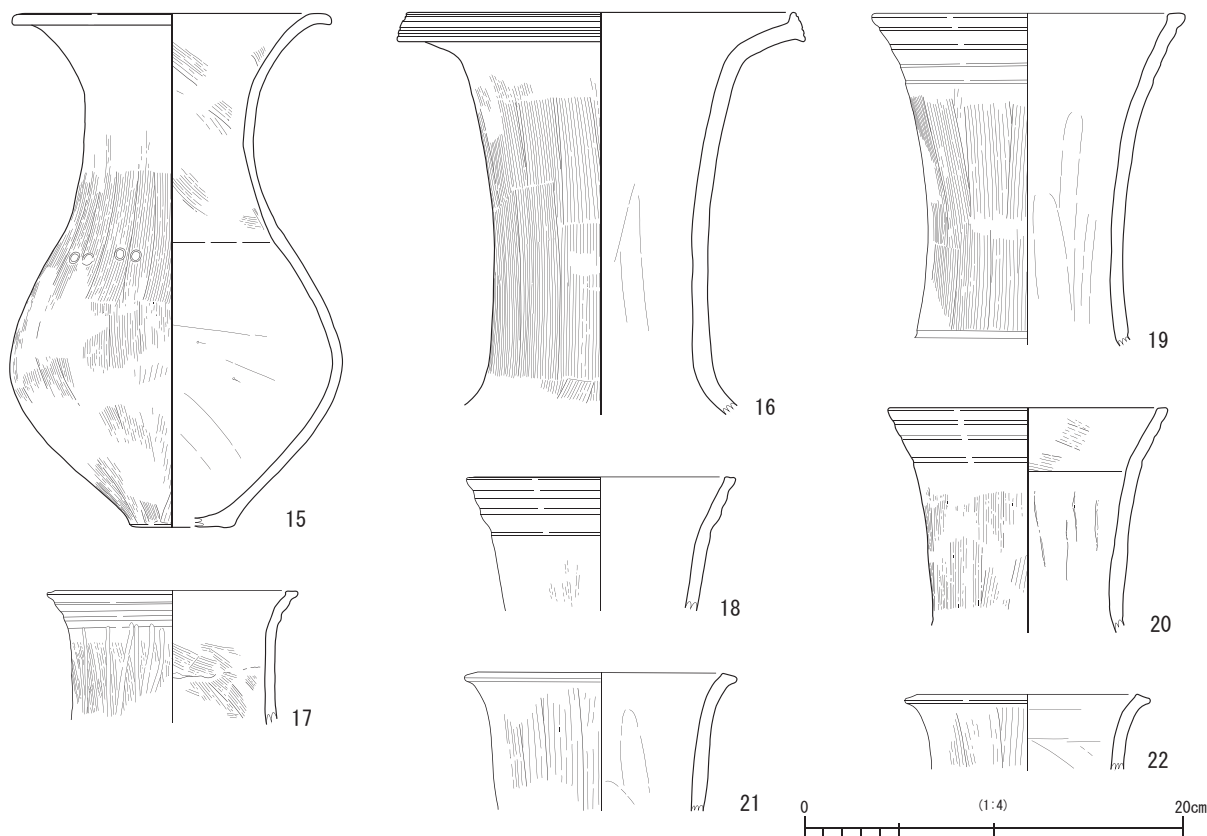
SH 1



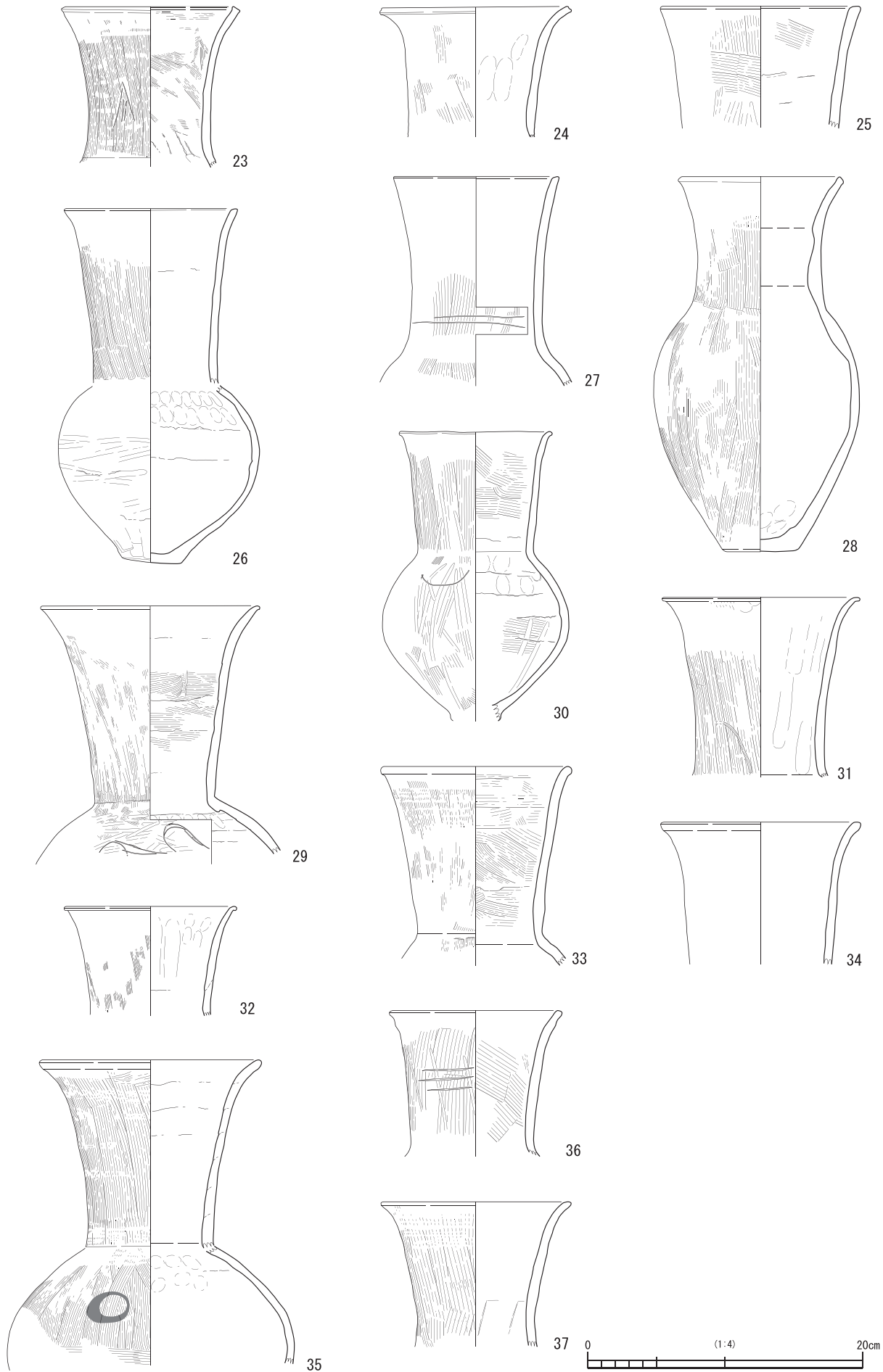
SH 2



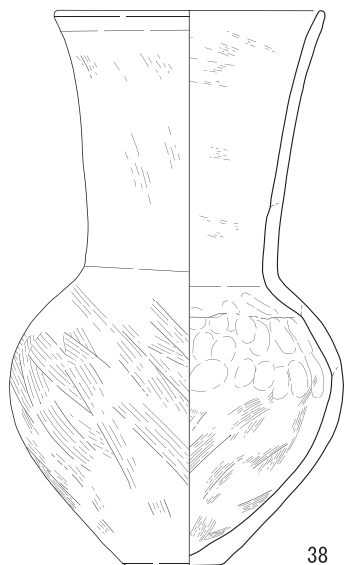
SD 202



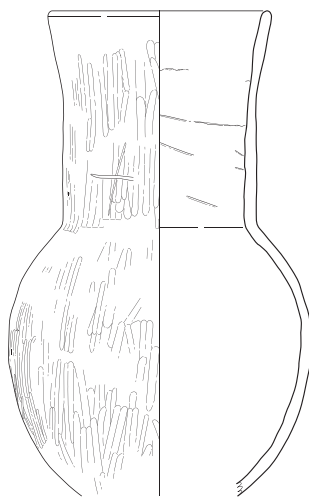
SH 1 · 2 出土土器、SD 202 出土土器(1)



S D 202 出土土器(2)



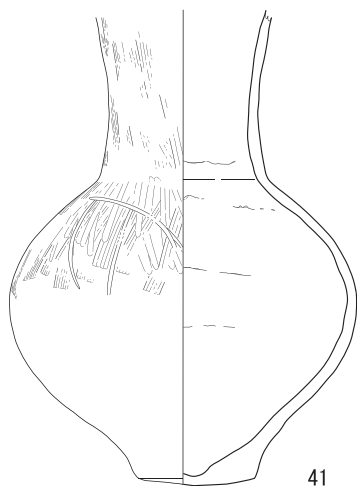
38



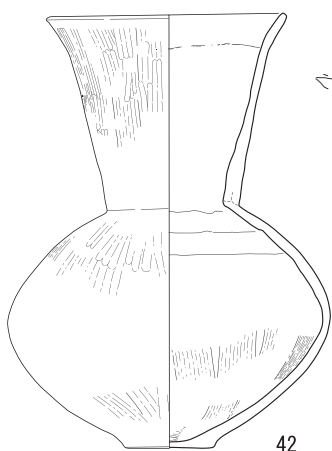
39



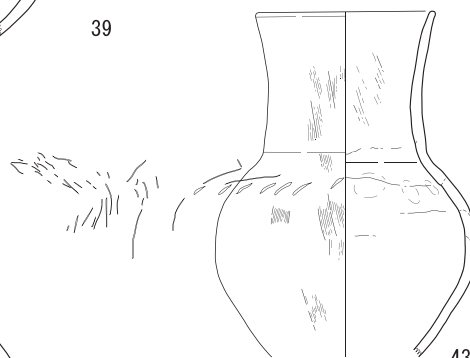
40



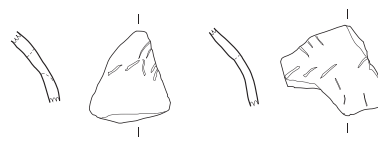
41



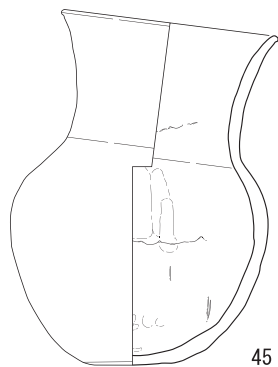
42



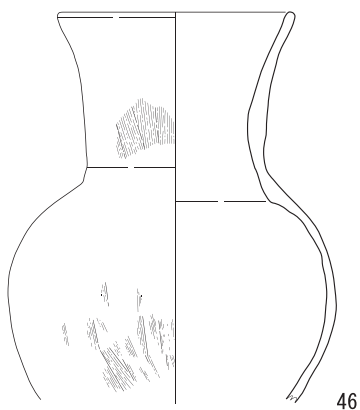
43



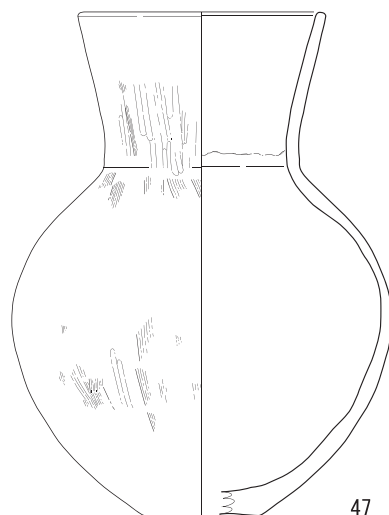
44



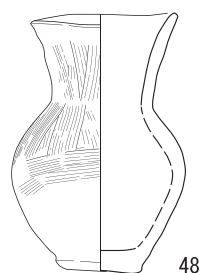
45



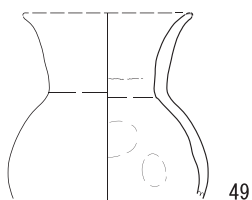
46



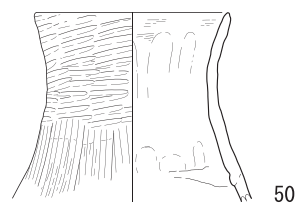
47



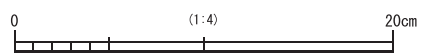
48

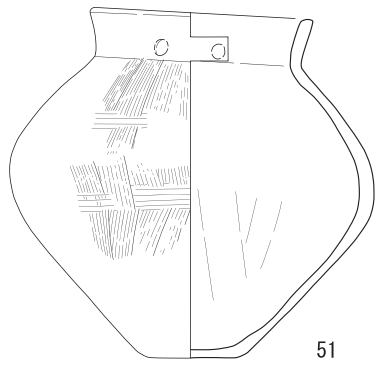


49

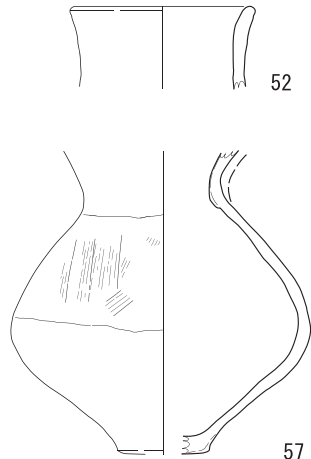


50

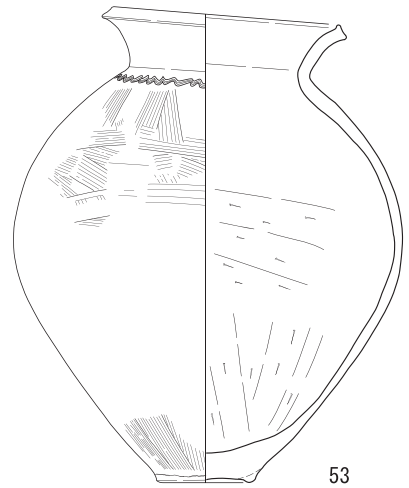




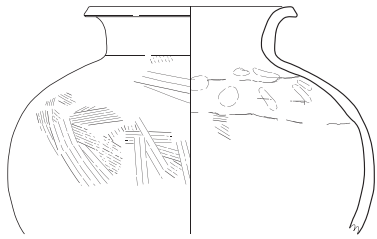
51



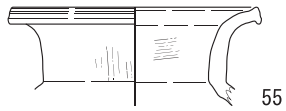
52



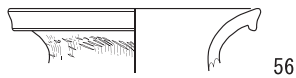
53



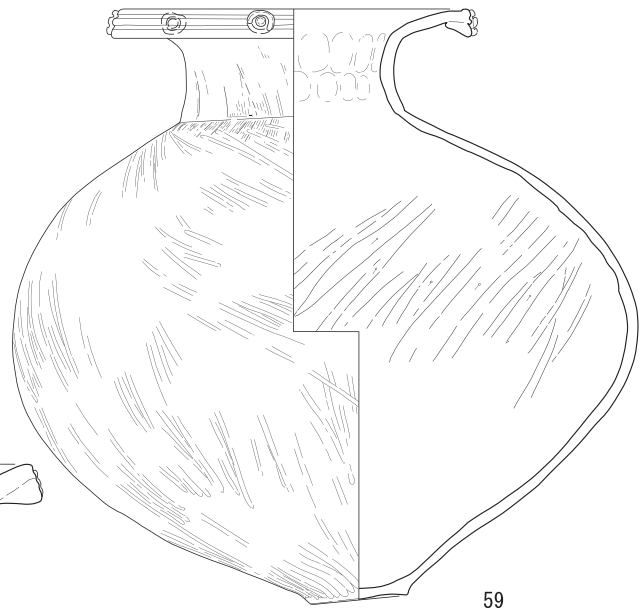
54



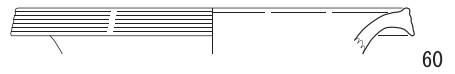
55



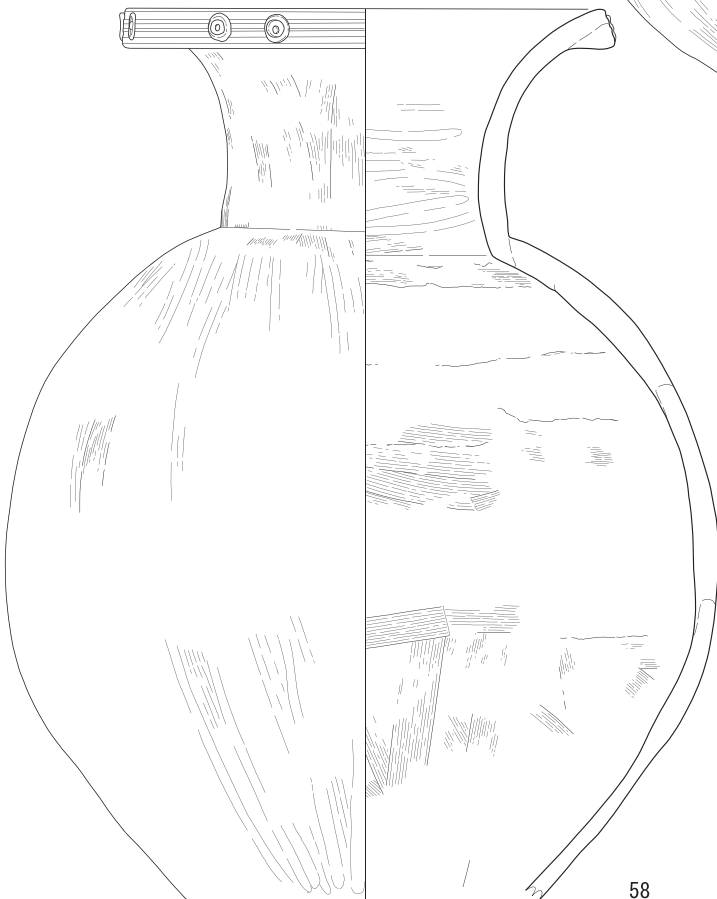
56



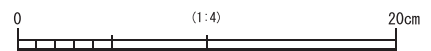
59

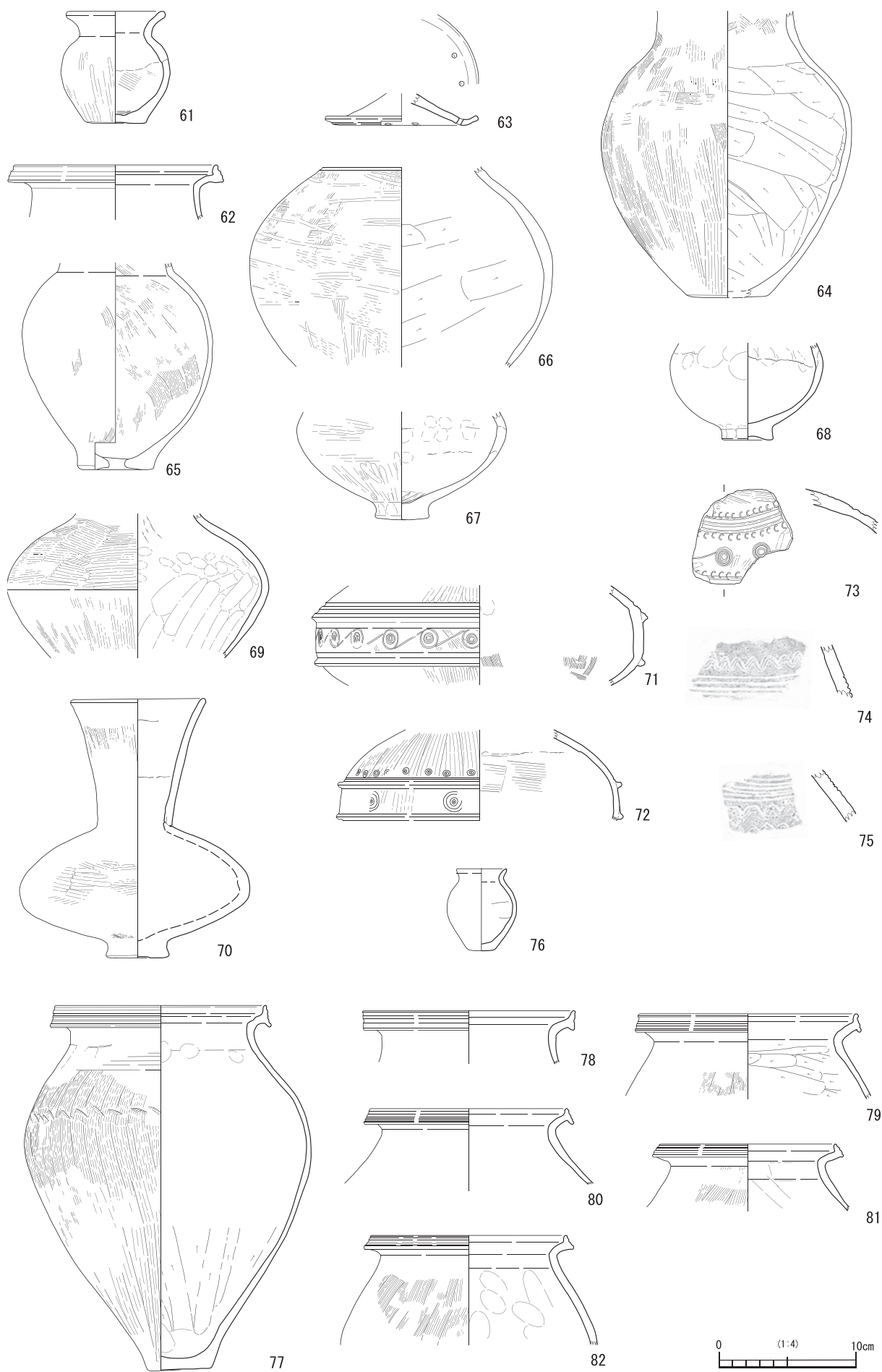


60



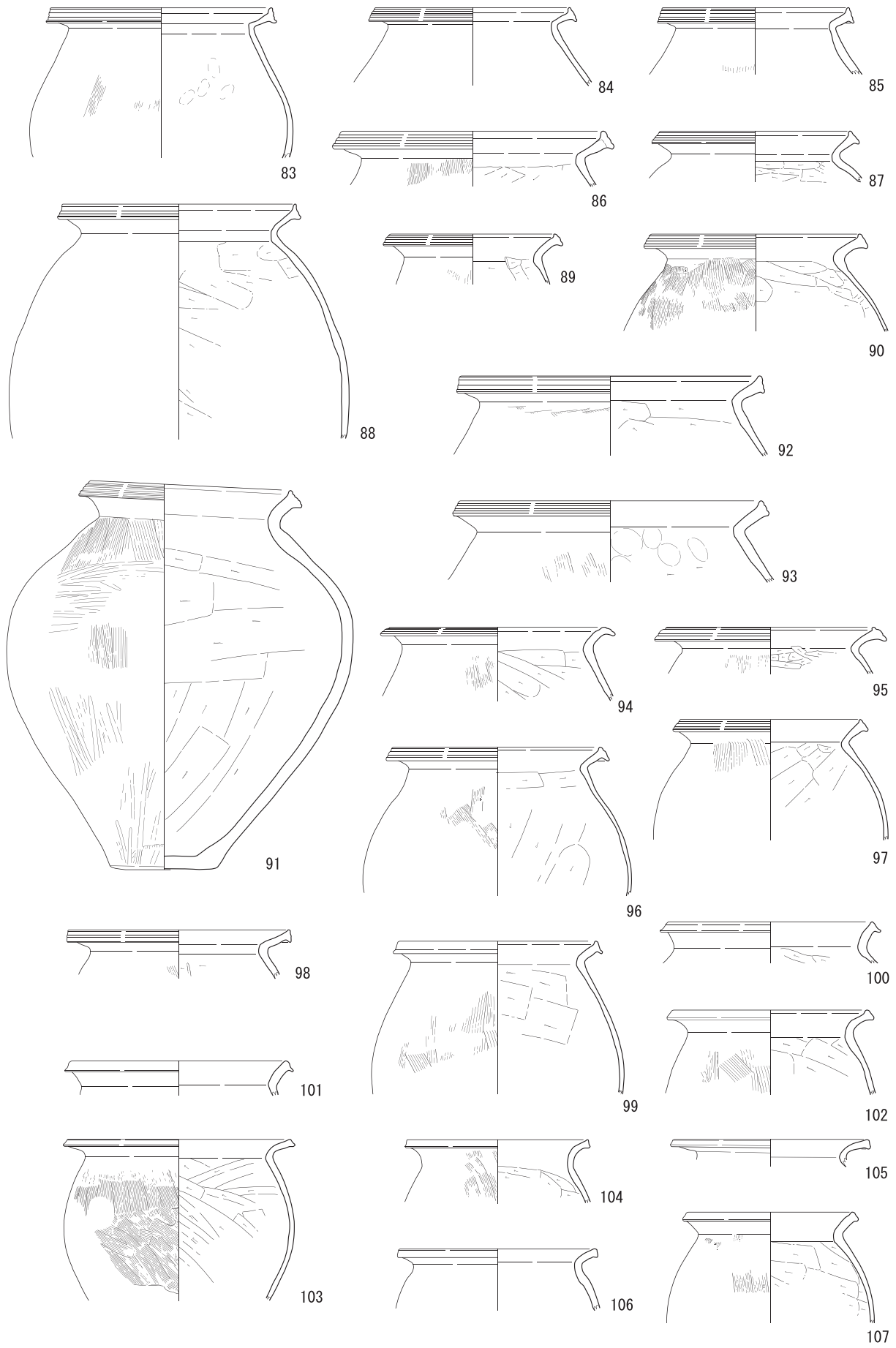
58

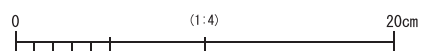
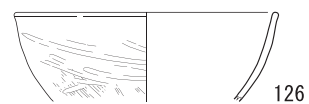
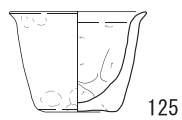
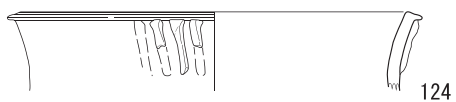
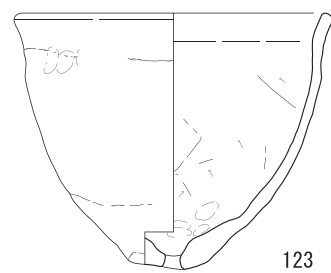
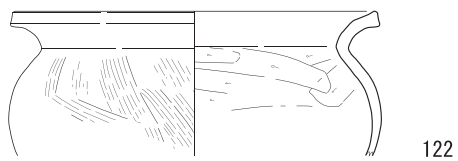
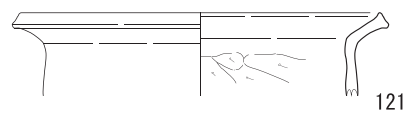
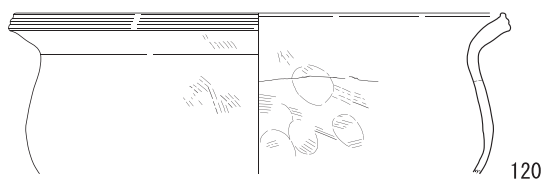
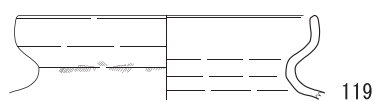
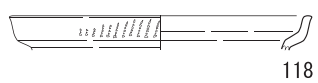
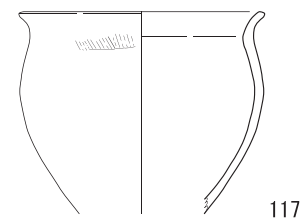
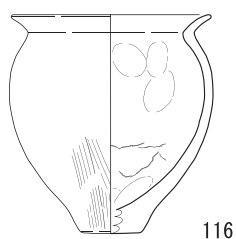
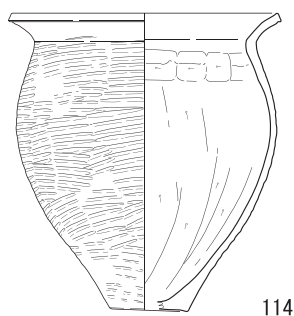
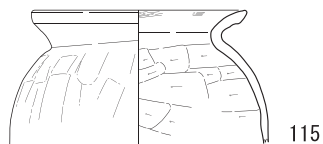
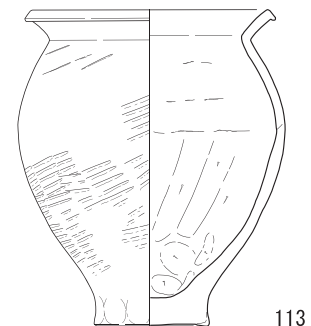
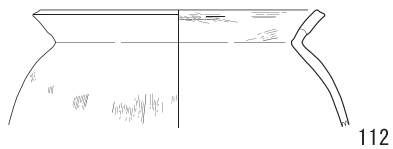
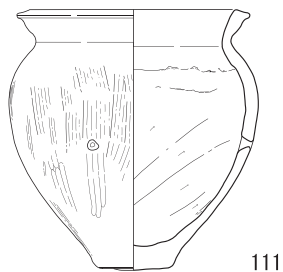
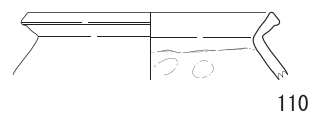
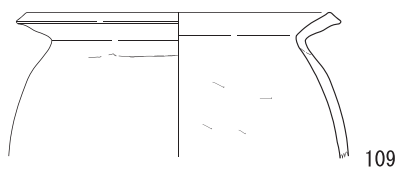
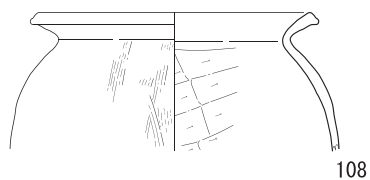


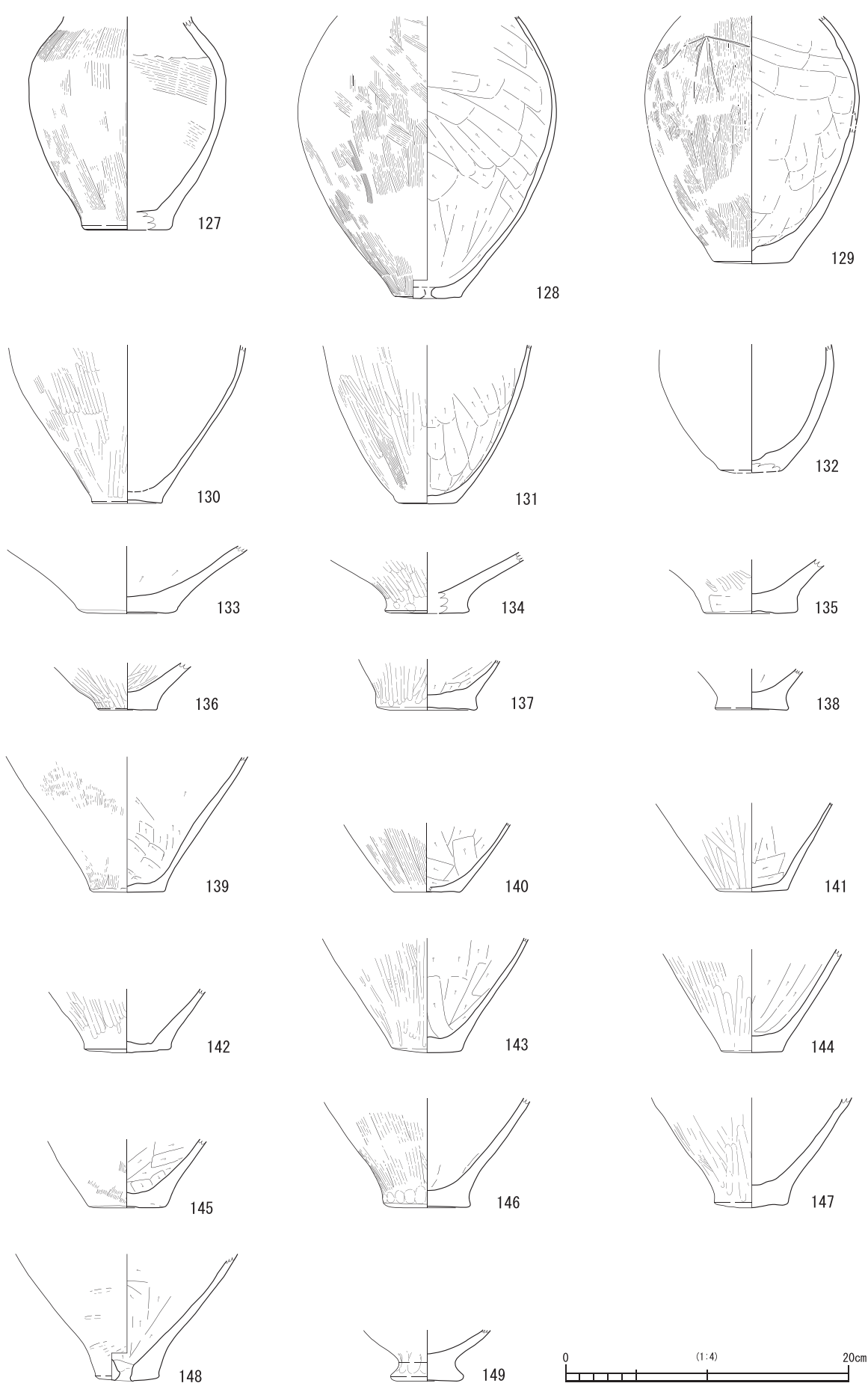


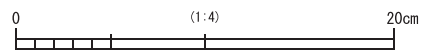
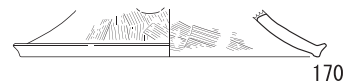
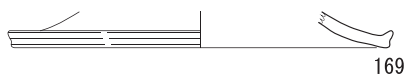
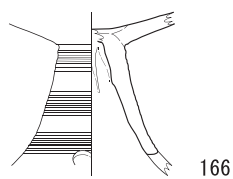
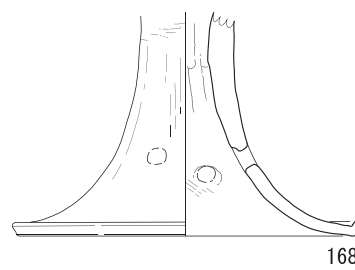
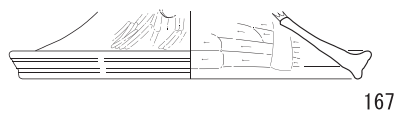
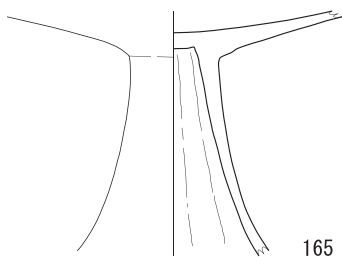
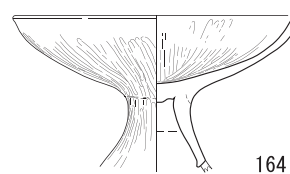
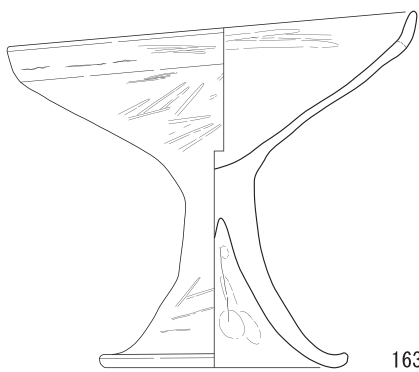
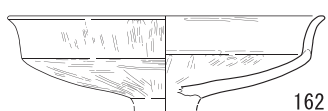
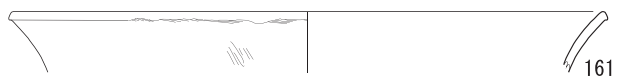
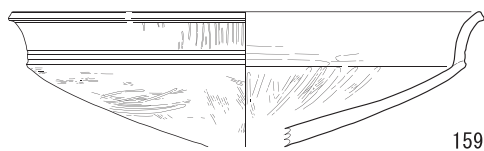
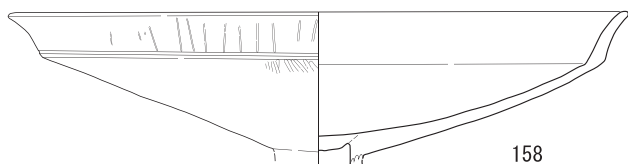
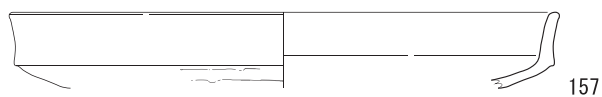
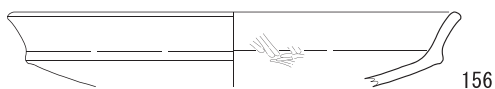
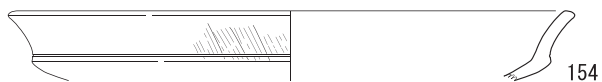
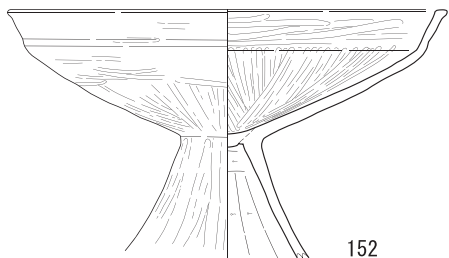
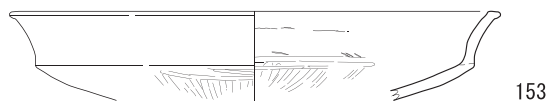
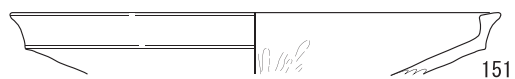
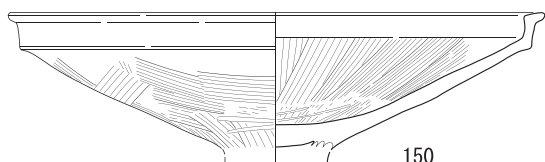
S D 202 出土土器(5)

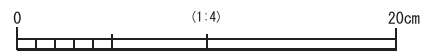
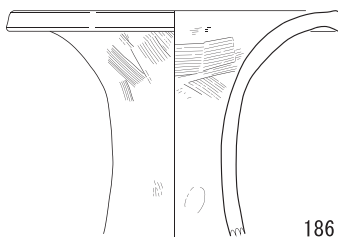
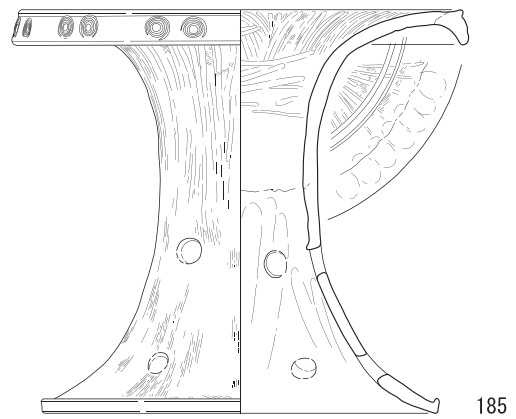
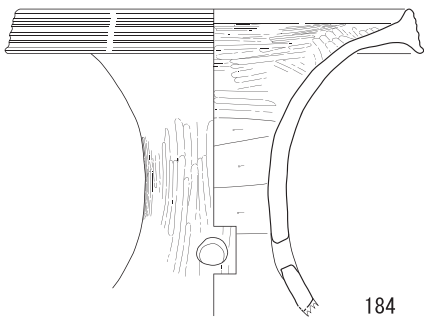
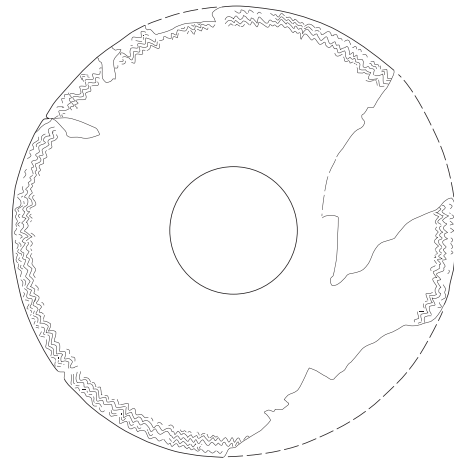
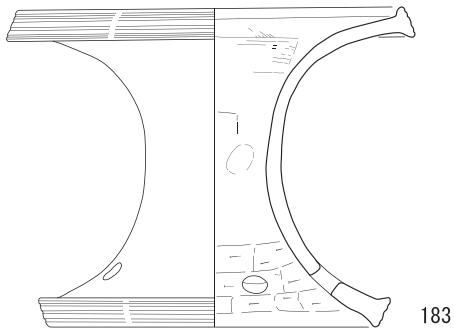
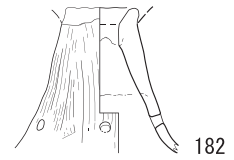
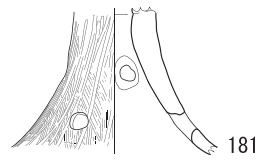
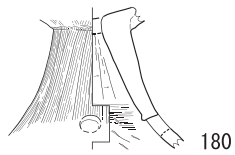
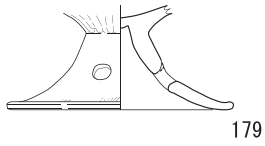
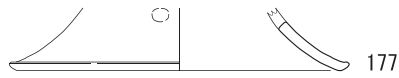
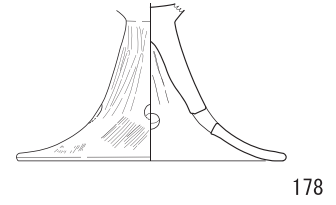
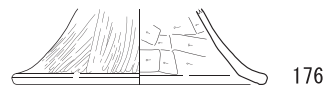
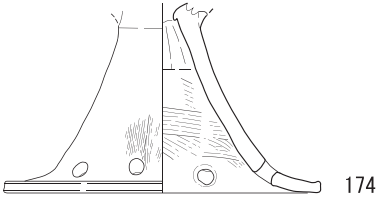
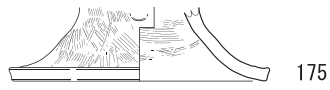
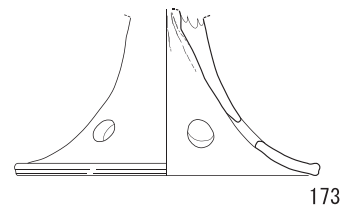
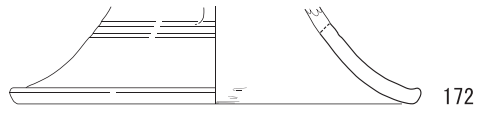
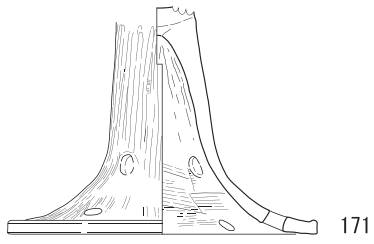
0 (1:4) 10cm

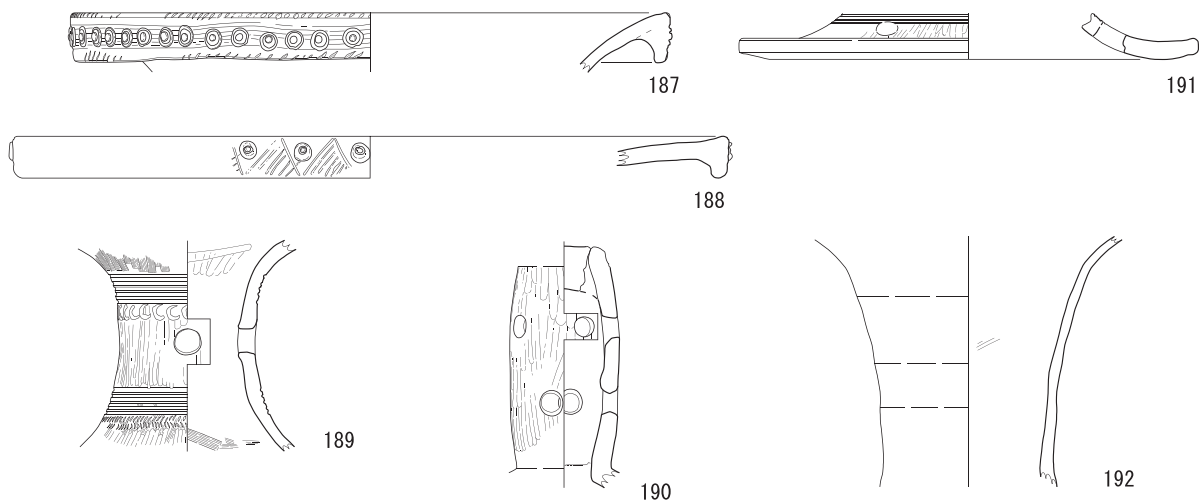




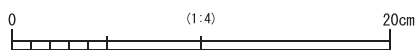
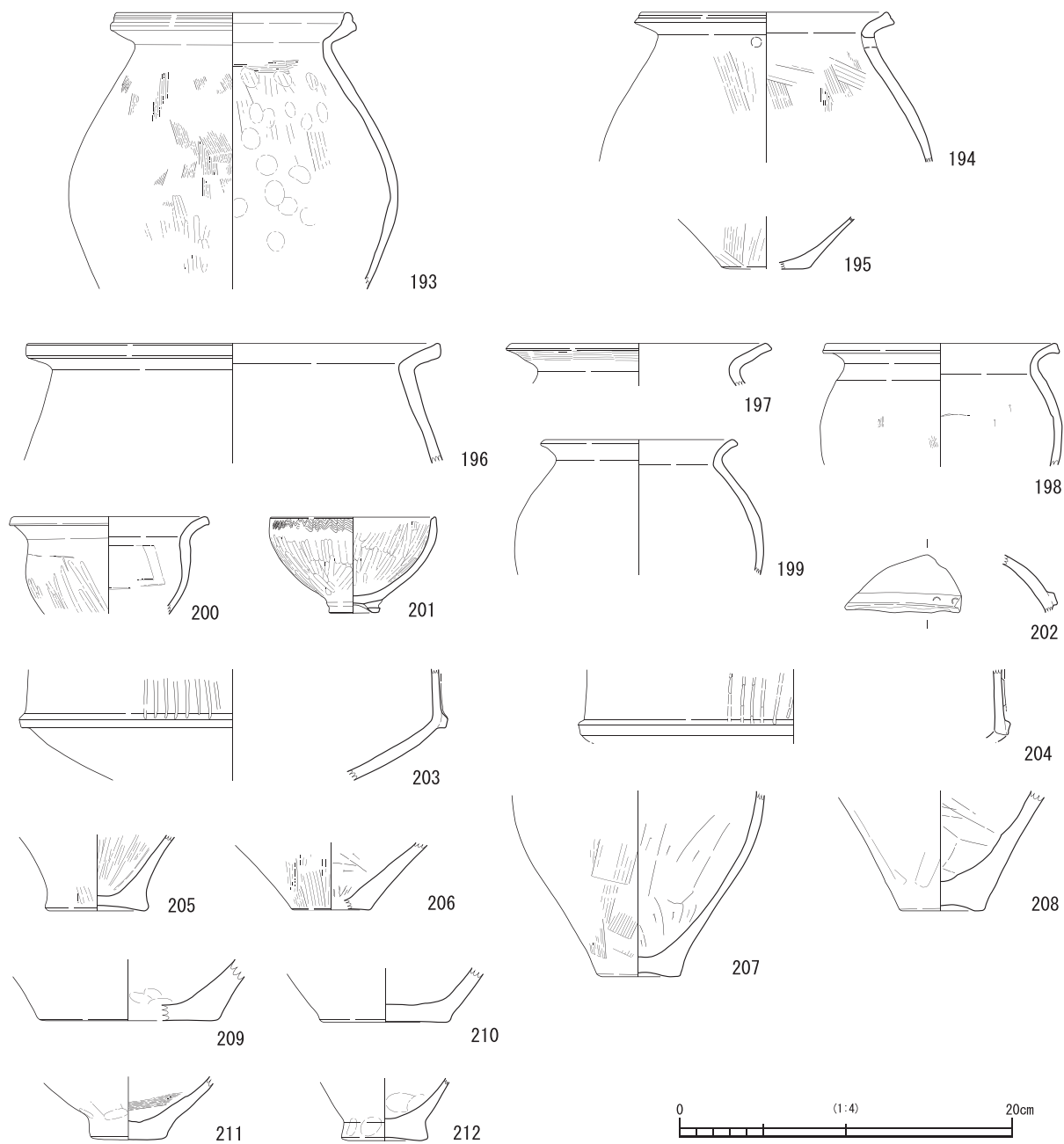




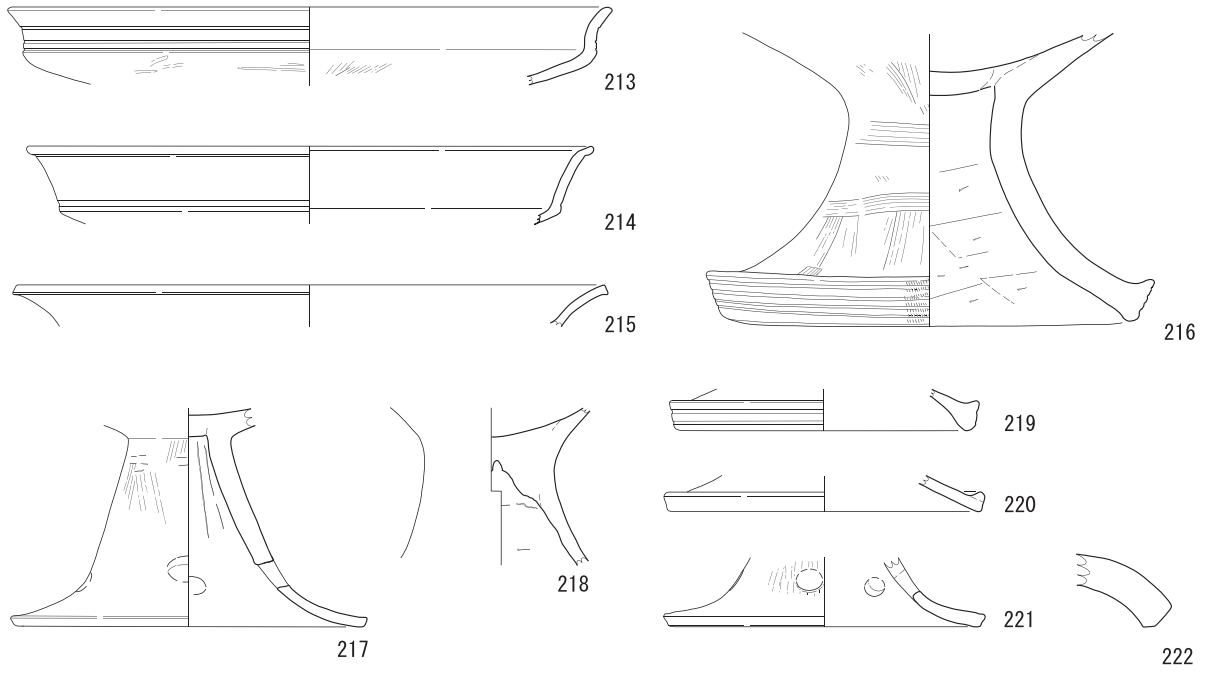




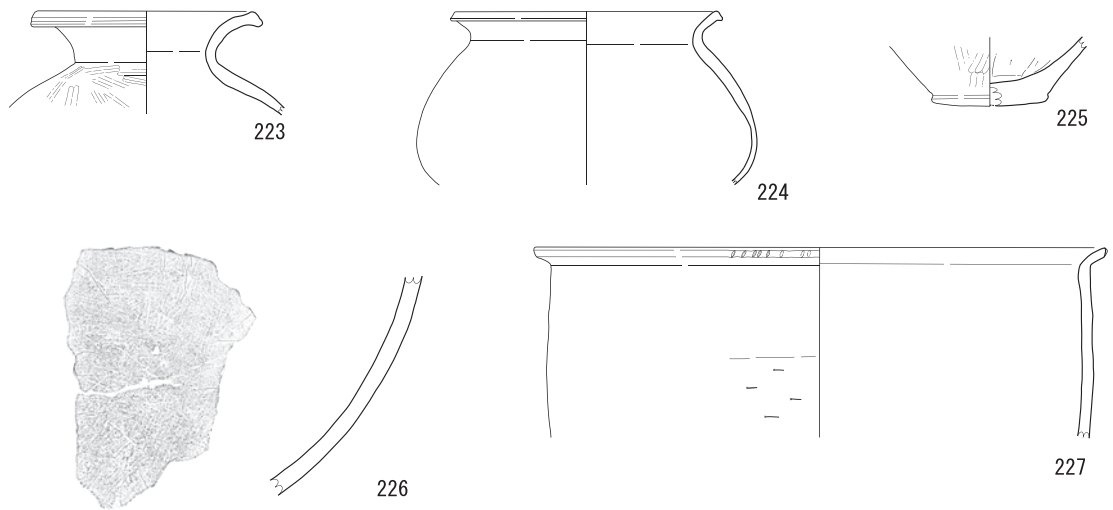
SD 164



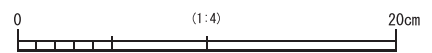
SD 202 出土土器(1) · SD 164 出土土器(1)



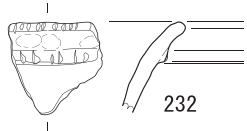
SD340



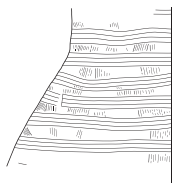
その他のSD



SR308 (前期~後期)



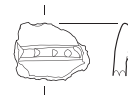
232



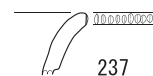
233



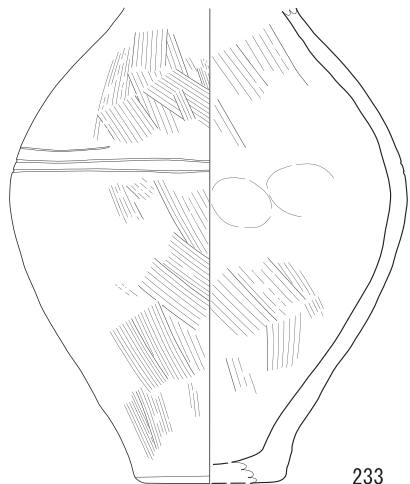
234



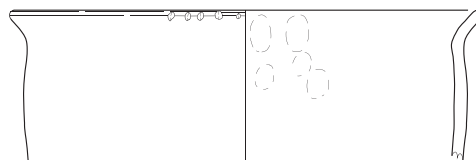
235



237



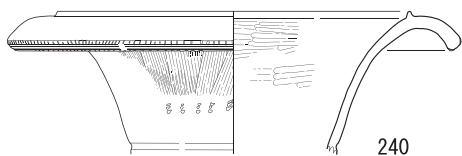
236



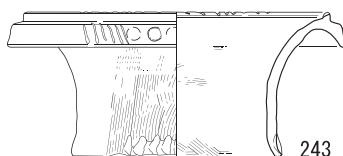
238



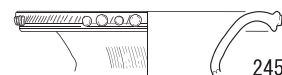
239



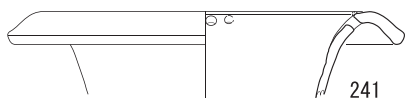
240



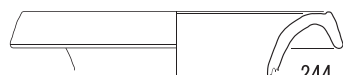
243



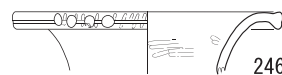
245



241



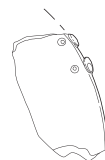
244



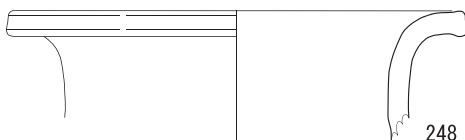
246



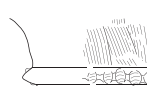
242



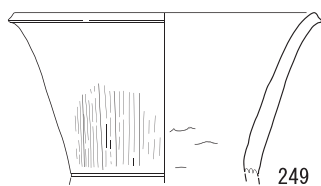
247



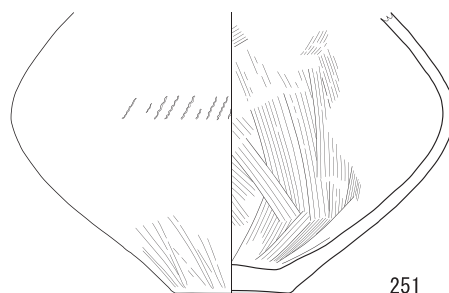
248



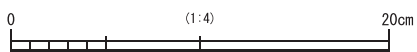
250

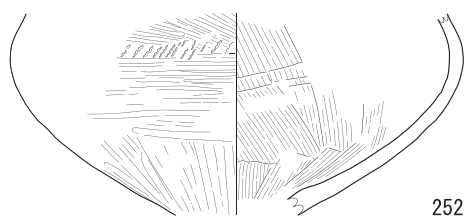


249

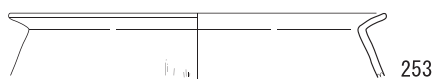


251

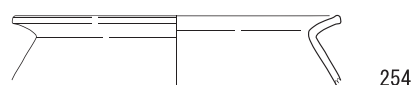




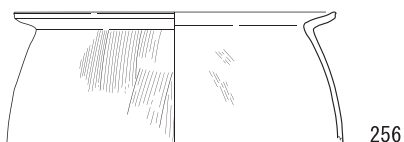
252



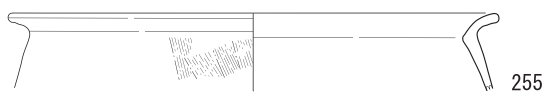
253



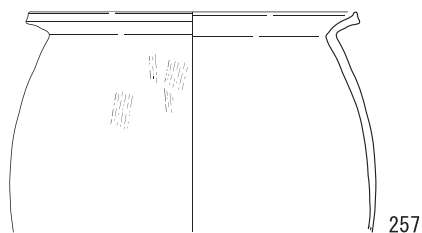
254



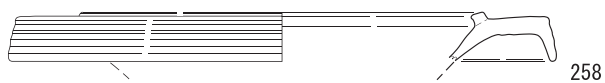
256



255



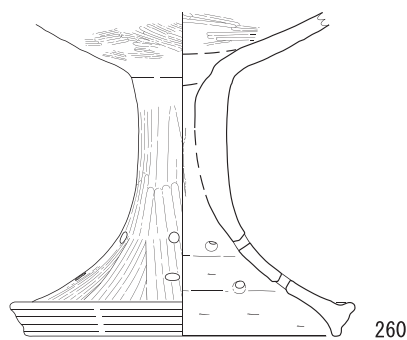
257



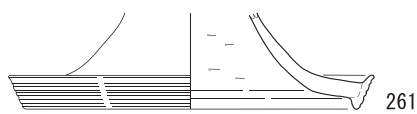
258



259



260



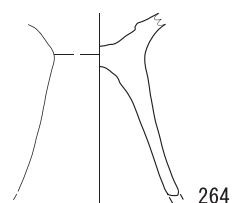
261



262



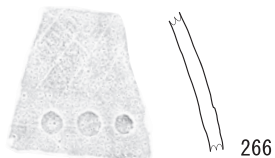
263



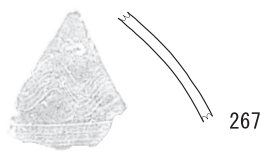
264



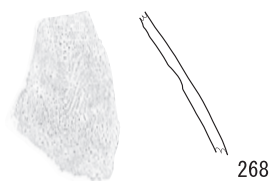
265



266



267



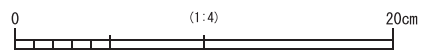
268

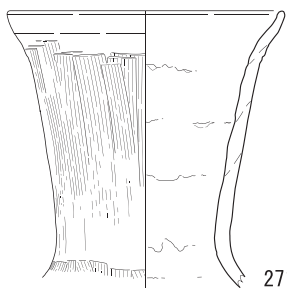


269

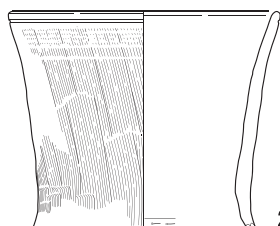


270

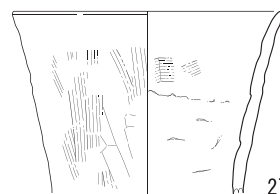




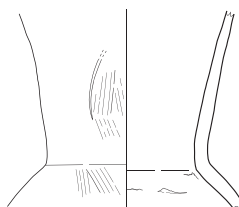
271



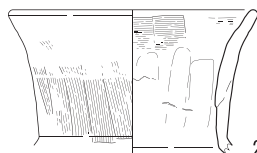
272



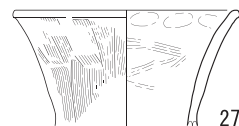
273



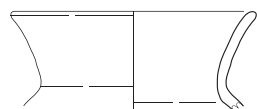
274



275



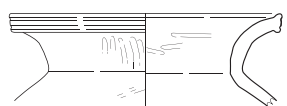
276



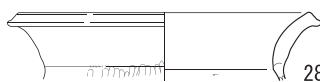
277



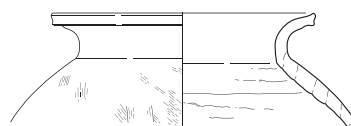
278



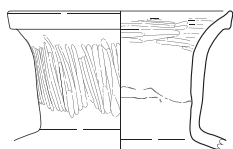
279



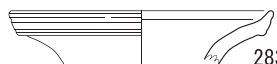
280



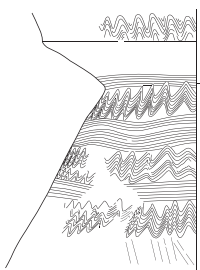
281



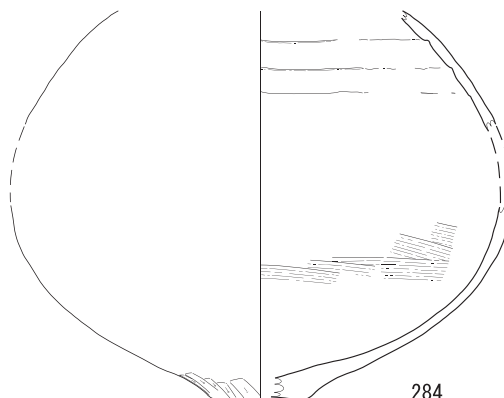
282



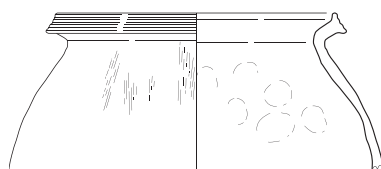
283



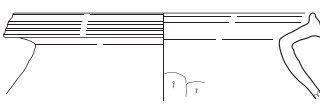
285



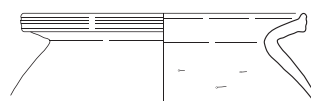
284



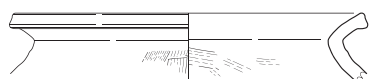
286



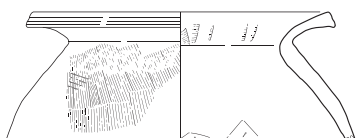
287



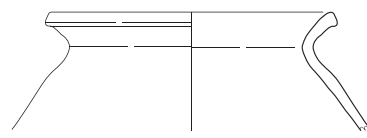
288



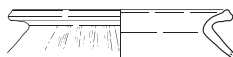
289



290



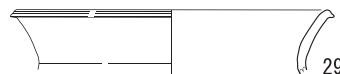
291



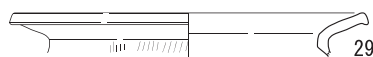
292



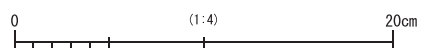
294



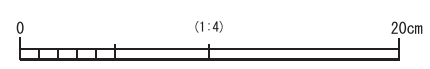
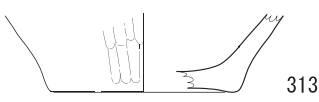
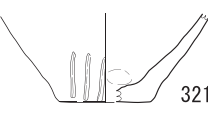
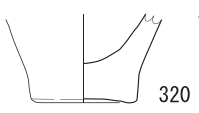
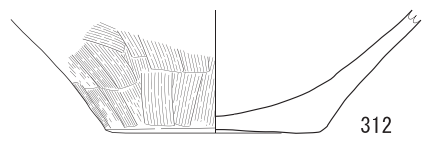
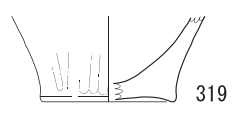
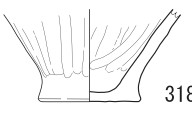
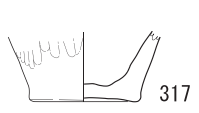
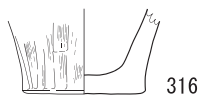
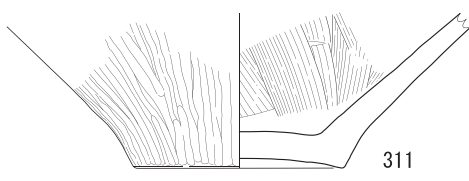
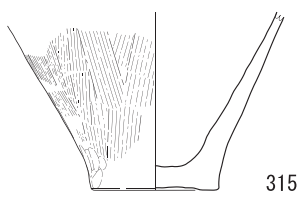
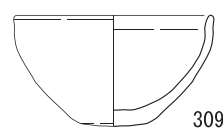
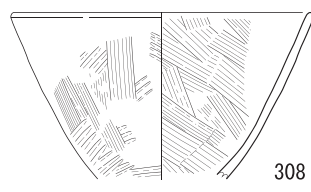
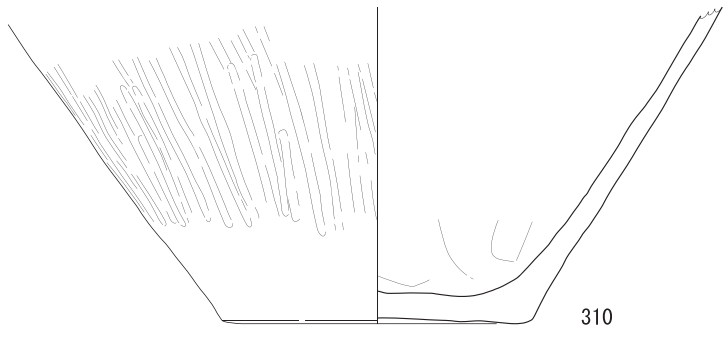
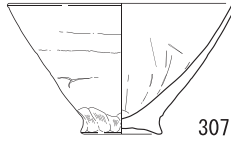
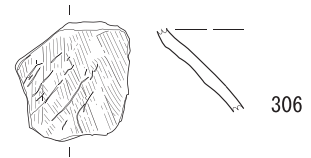
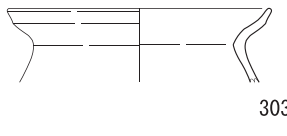
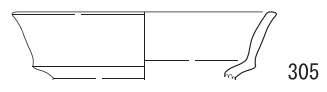
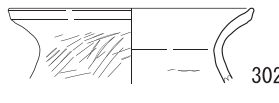
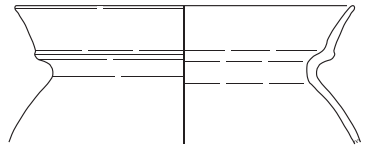
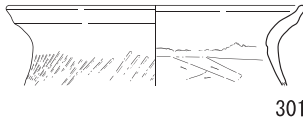
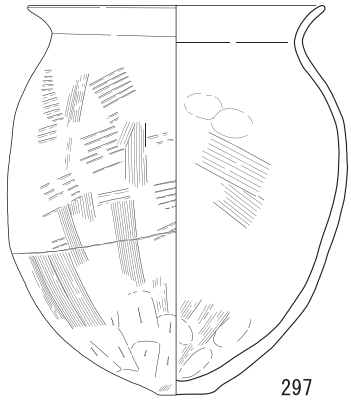
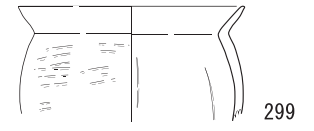
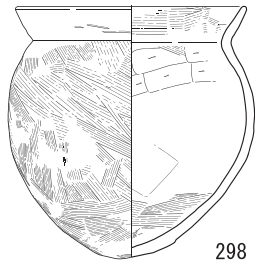
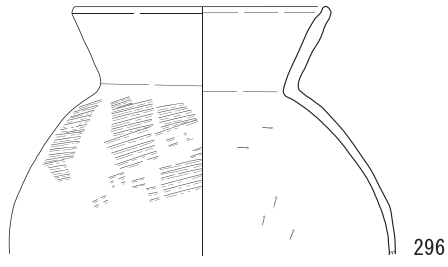
295



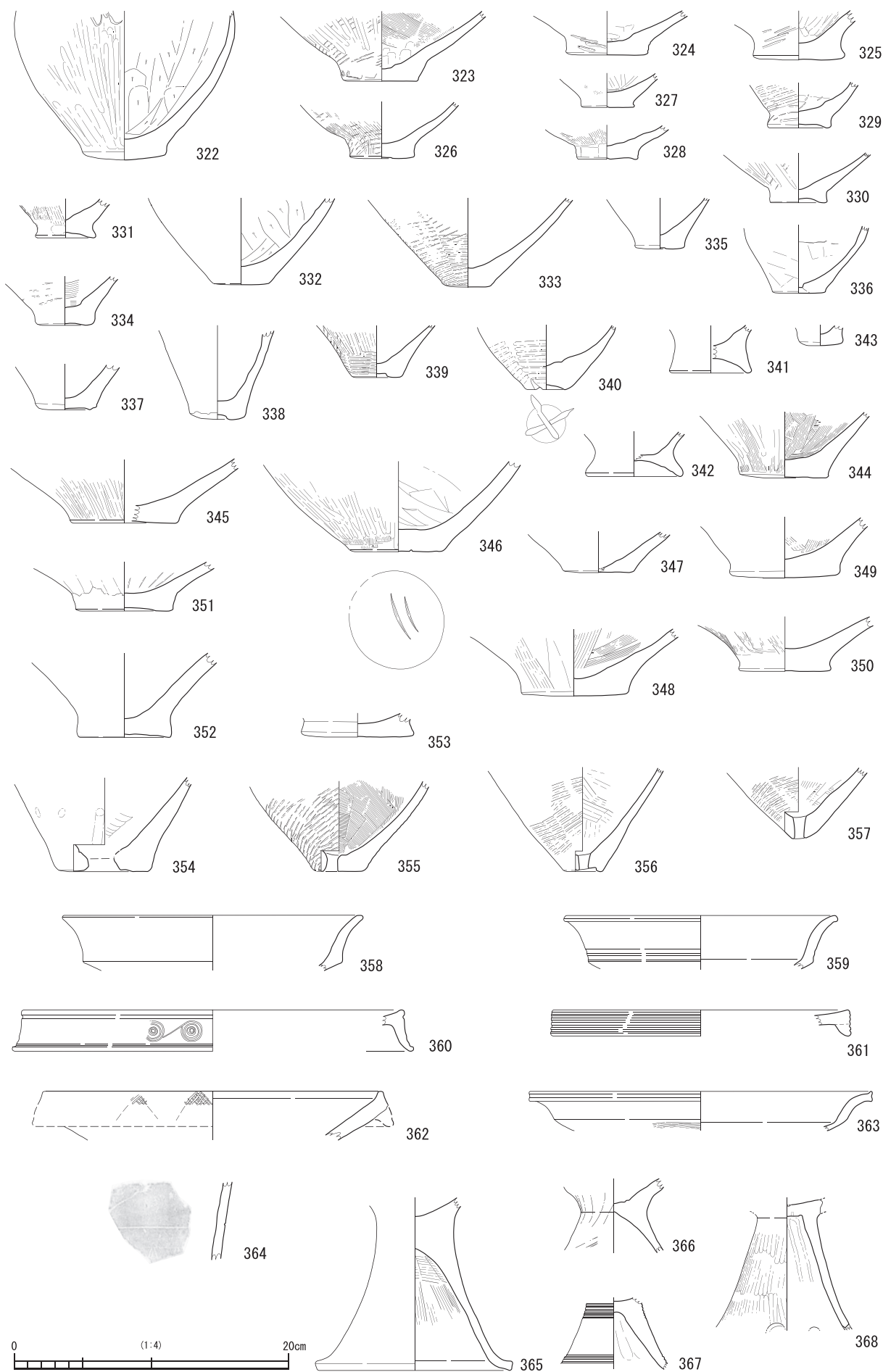
293



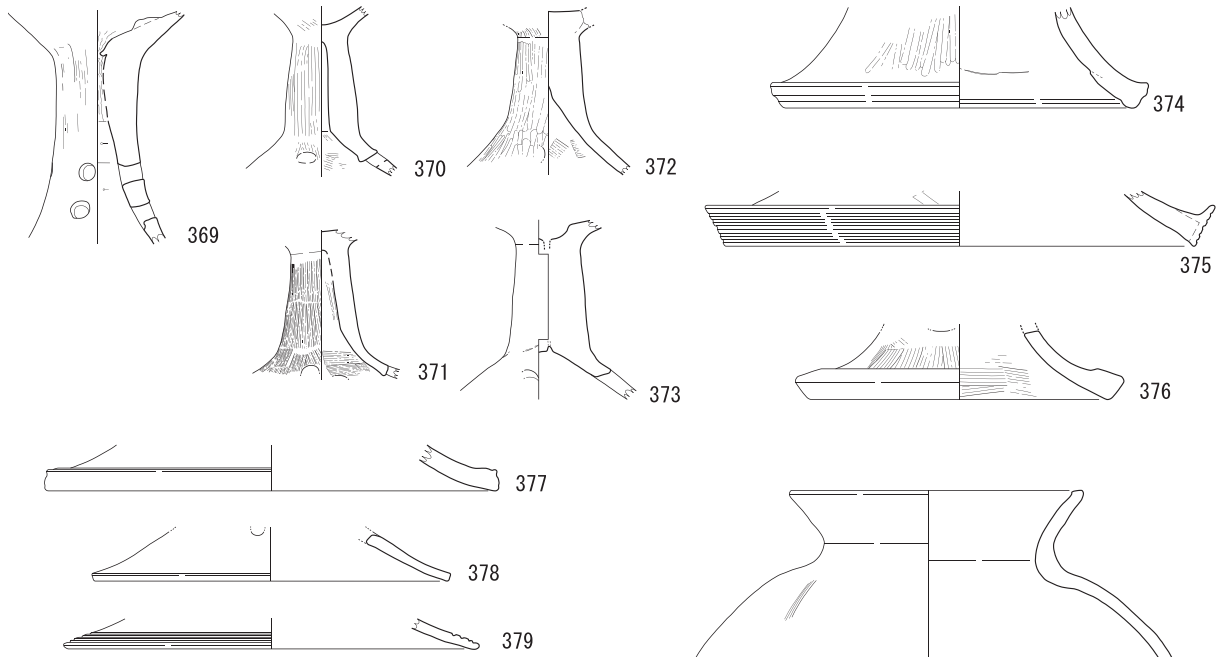
S R 308 出土土器(3)



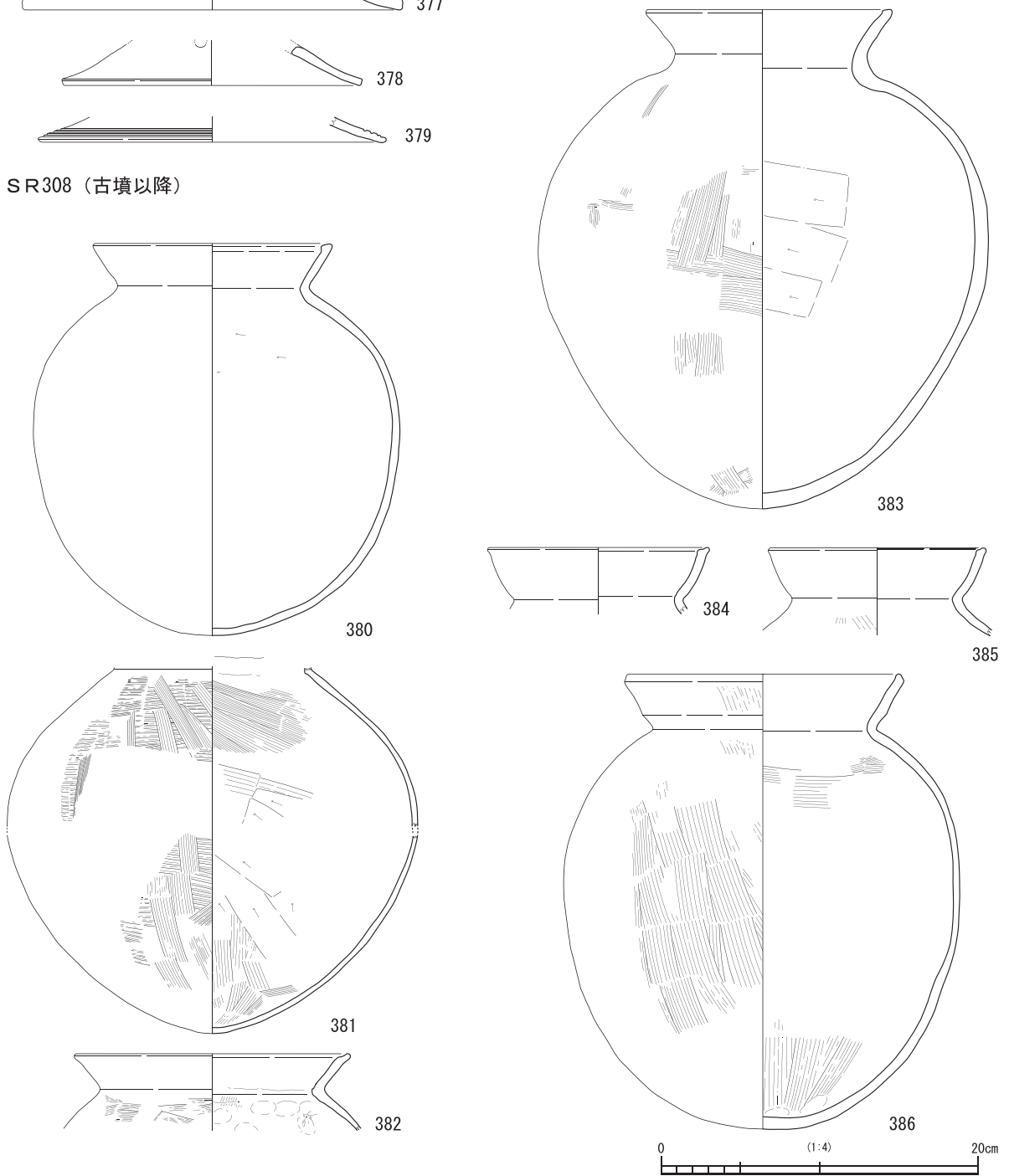
S R 308 出土土器(4)



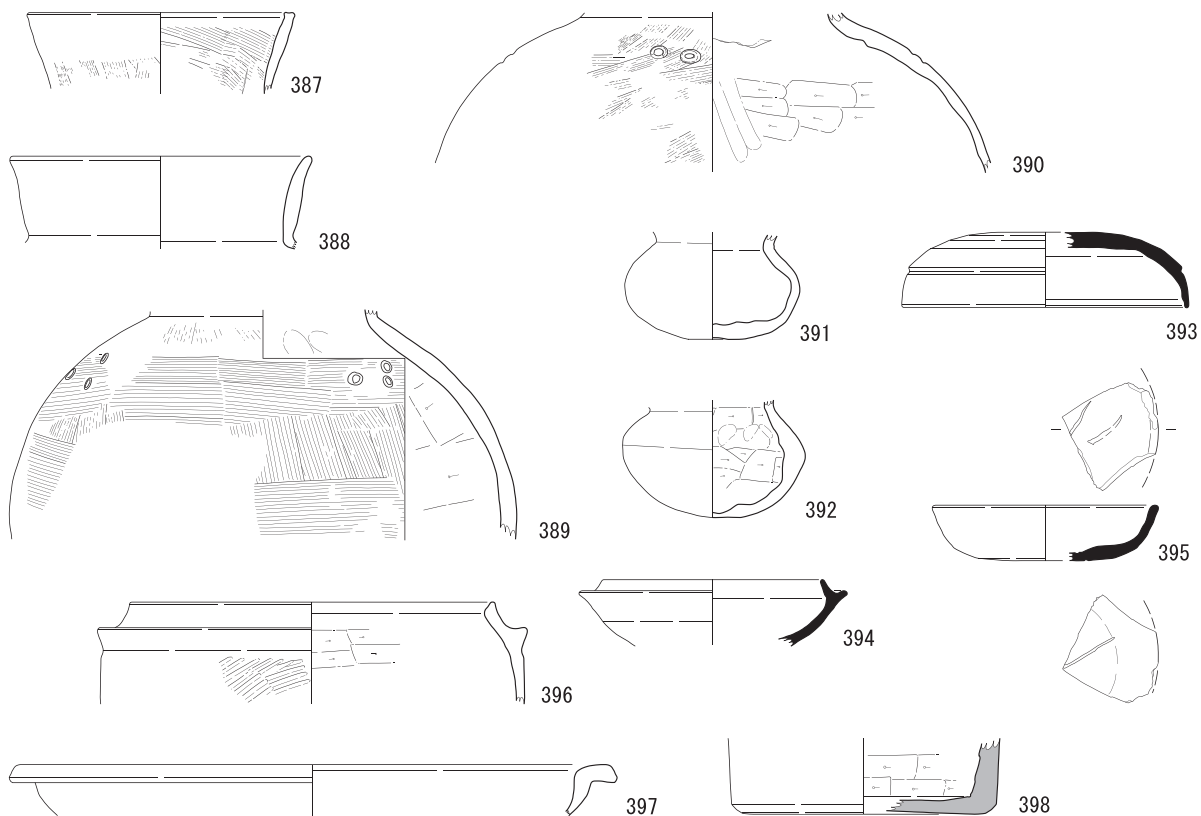
S R 308 出土土器(5)



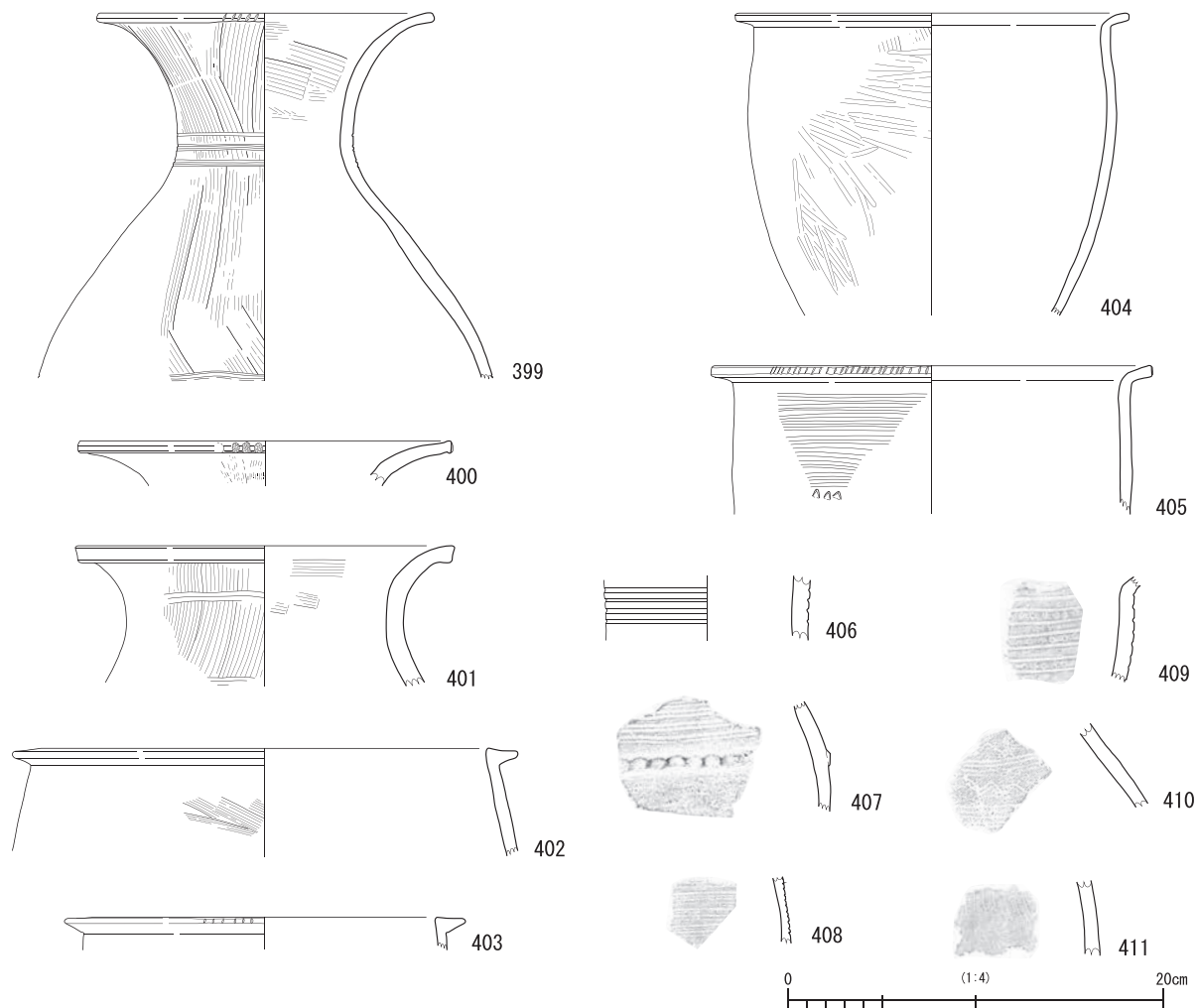
SR308 (古墳以降)



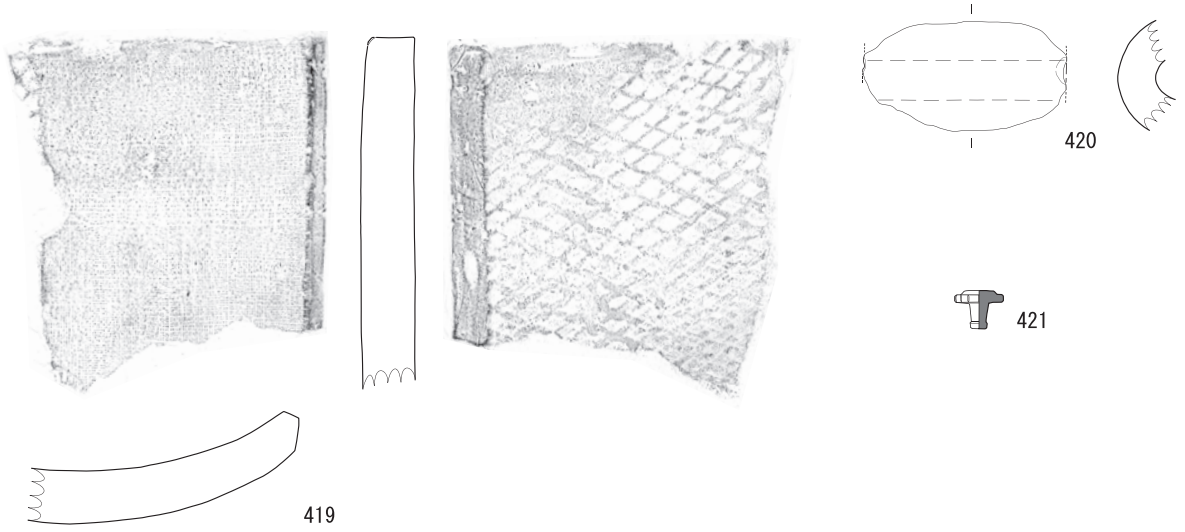
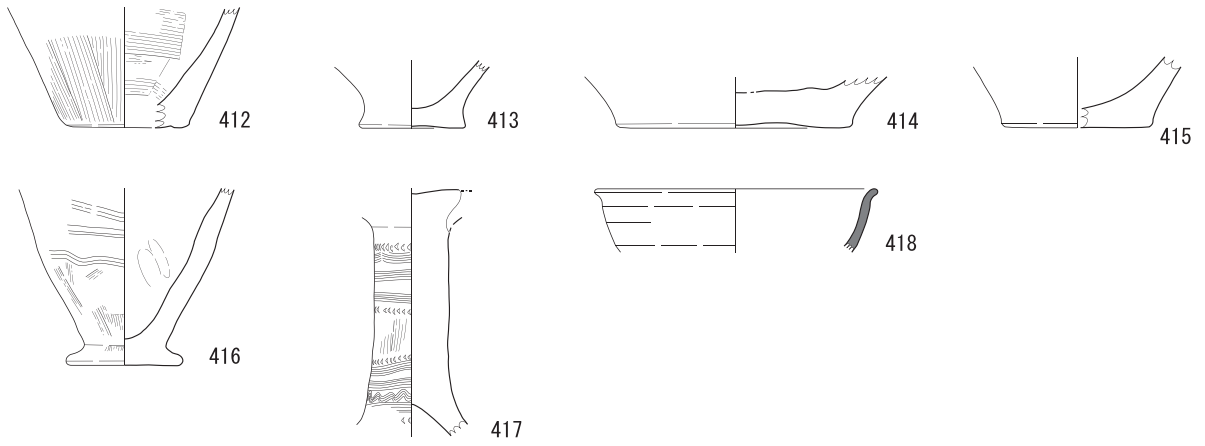
SR 308 出土土器(6)



流路 (東 2 区)



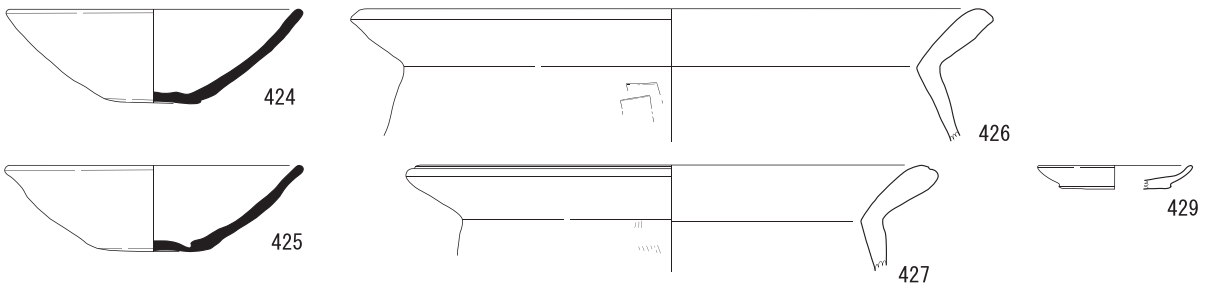
S R 308 出土土器(7) · 東 2 区流路出土遺物(1)



SB 1



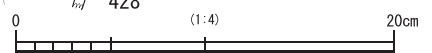
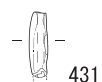
SB 2



SB 3

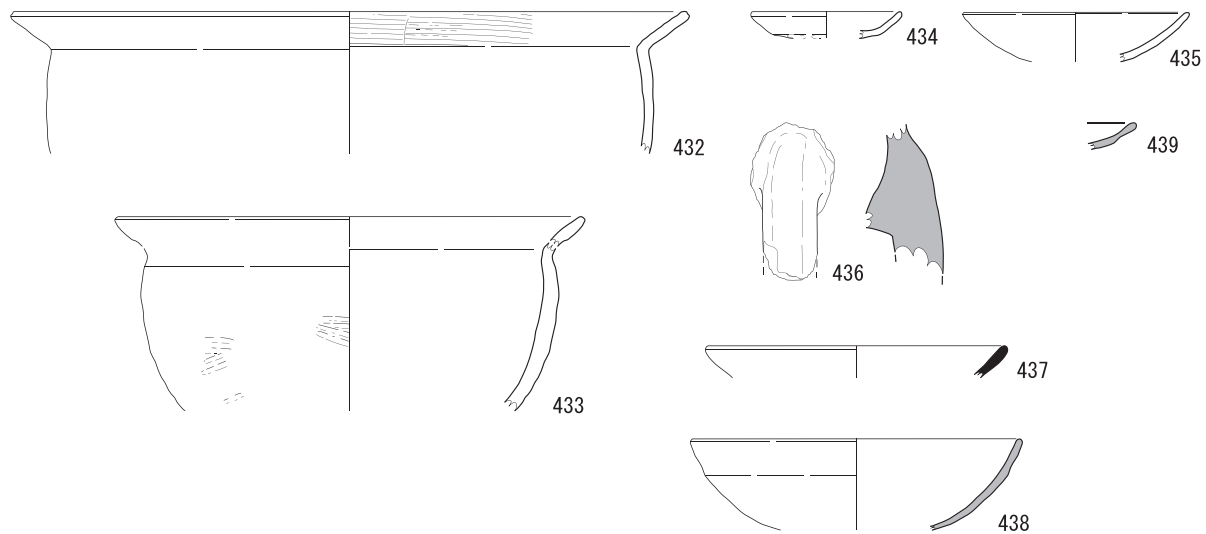


SB 8

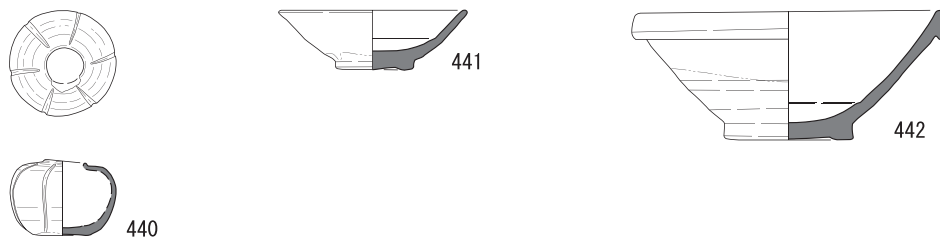


東2区流路出土遺物(2)、SB 1~3・8 出土遺物

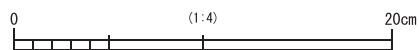
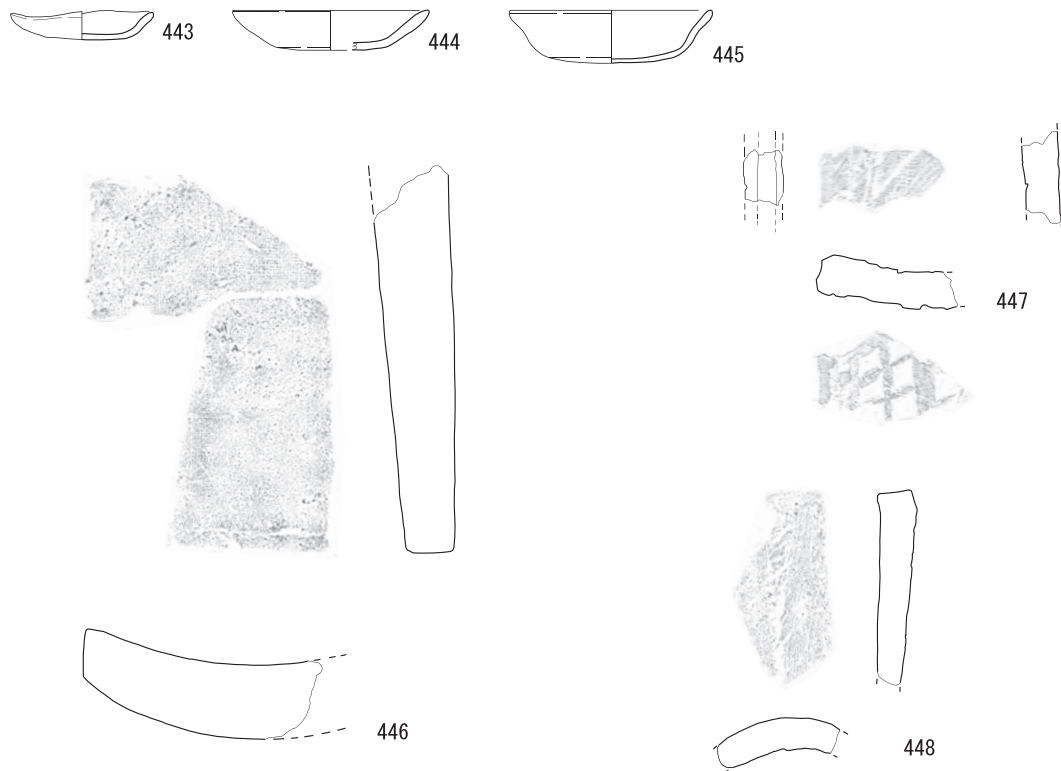
SB 9



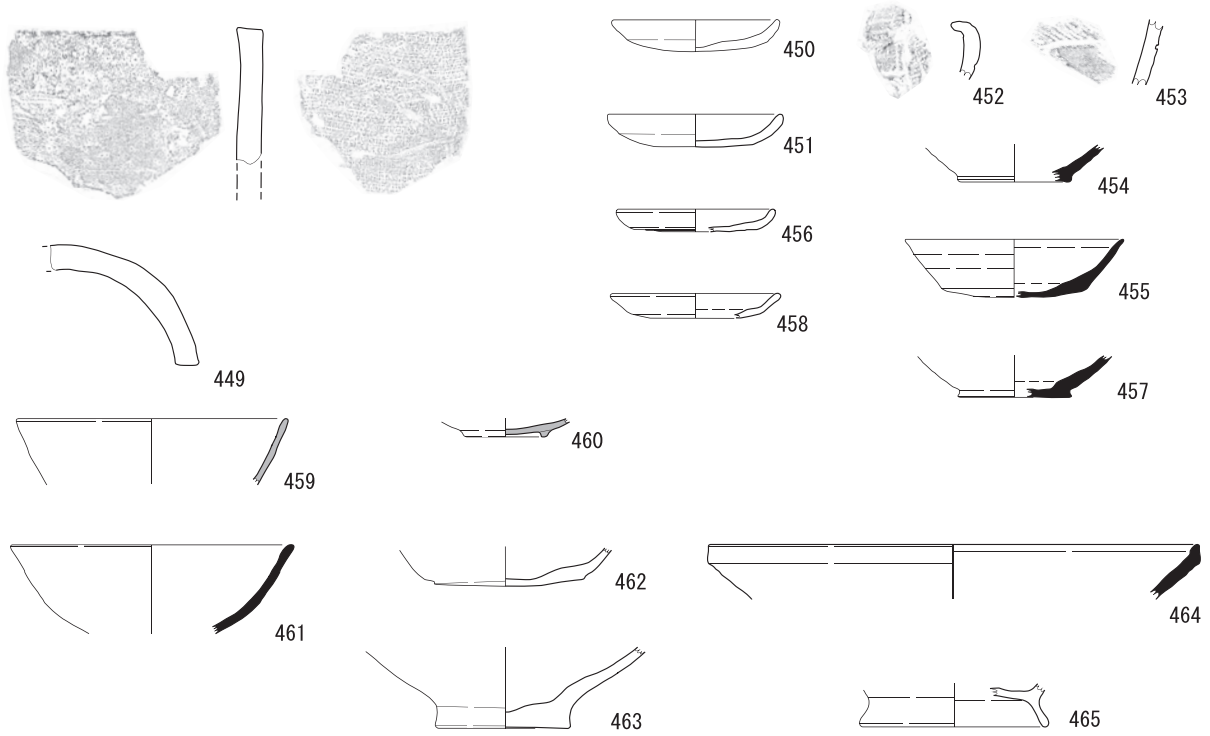
木棺墓 2 (S X 270)



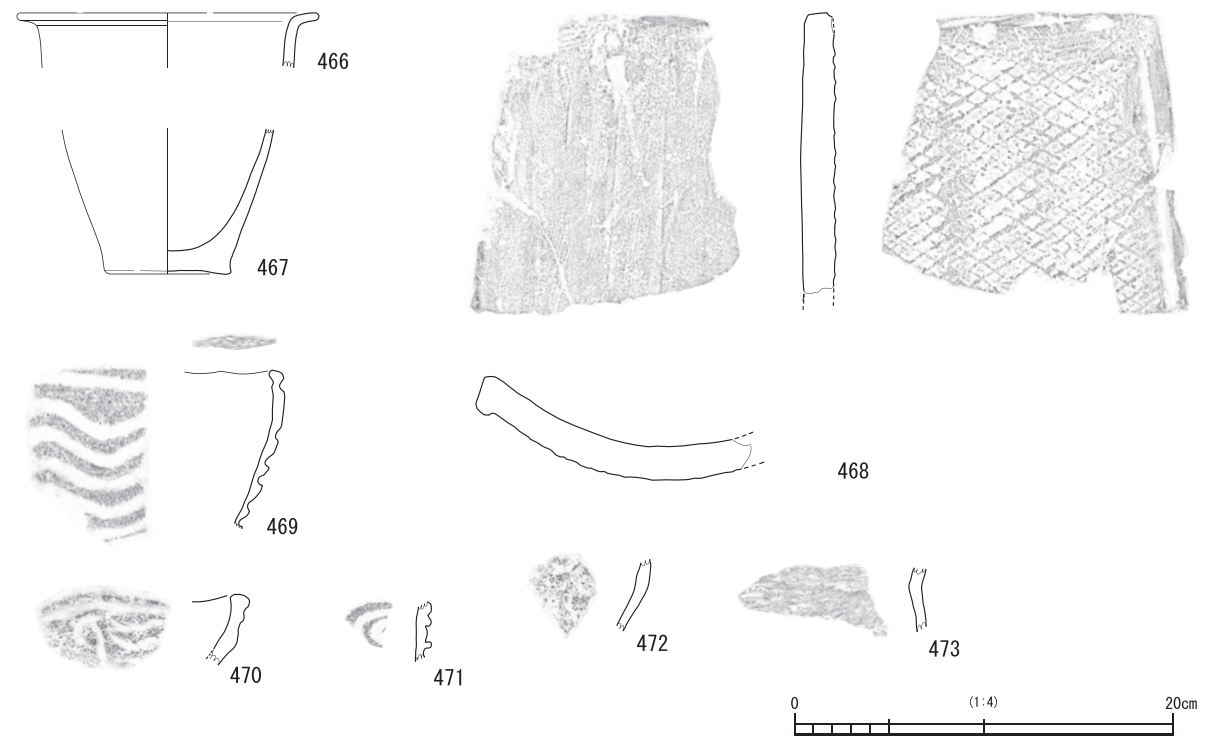
SE 182

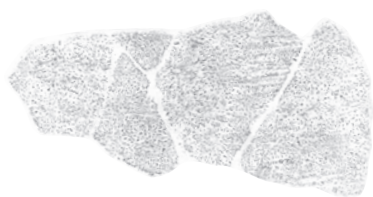


その他柱穴

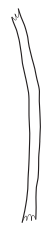


包含層





474



475



476

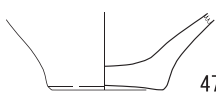


477

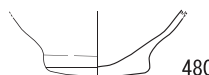


478

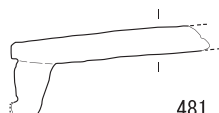
SR144



479



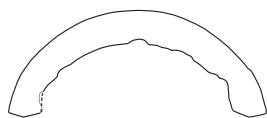
480



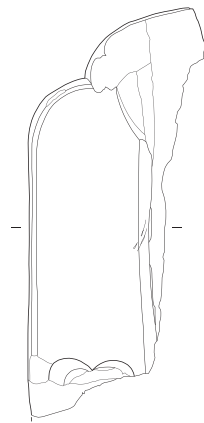
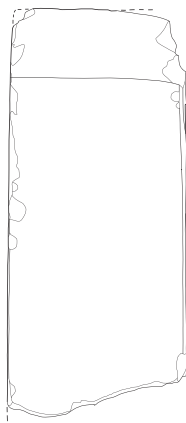
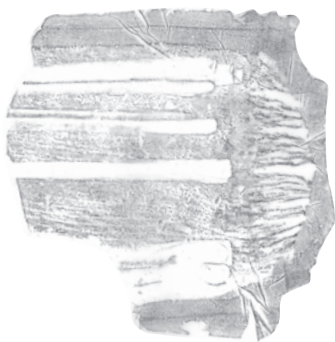
481



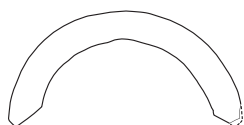
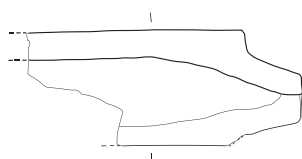
482



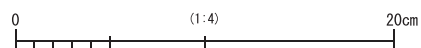
483



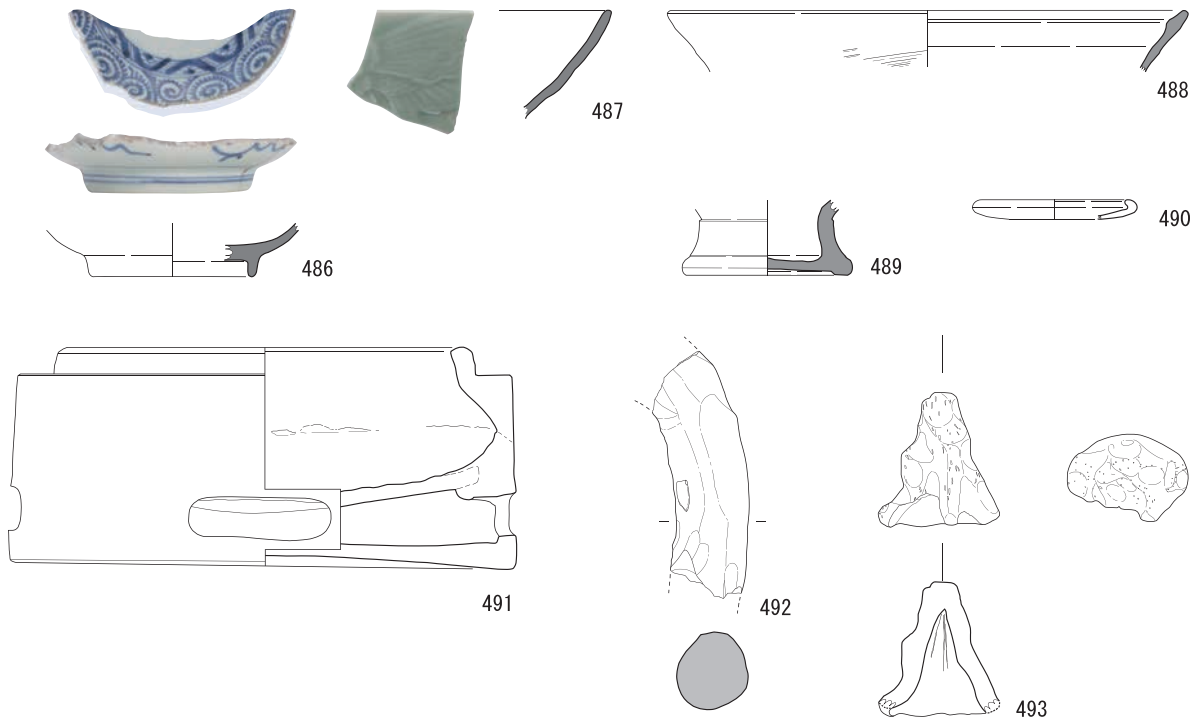
485



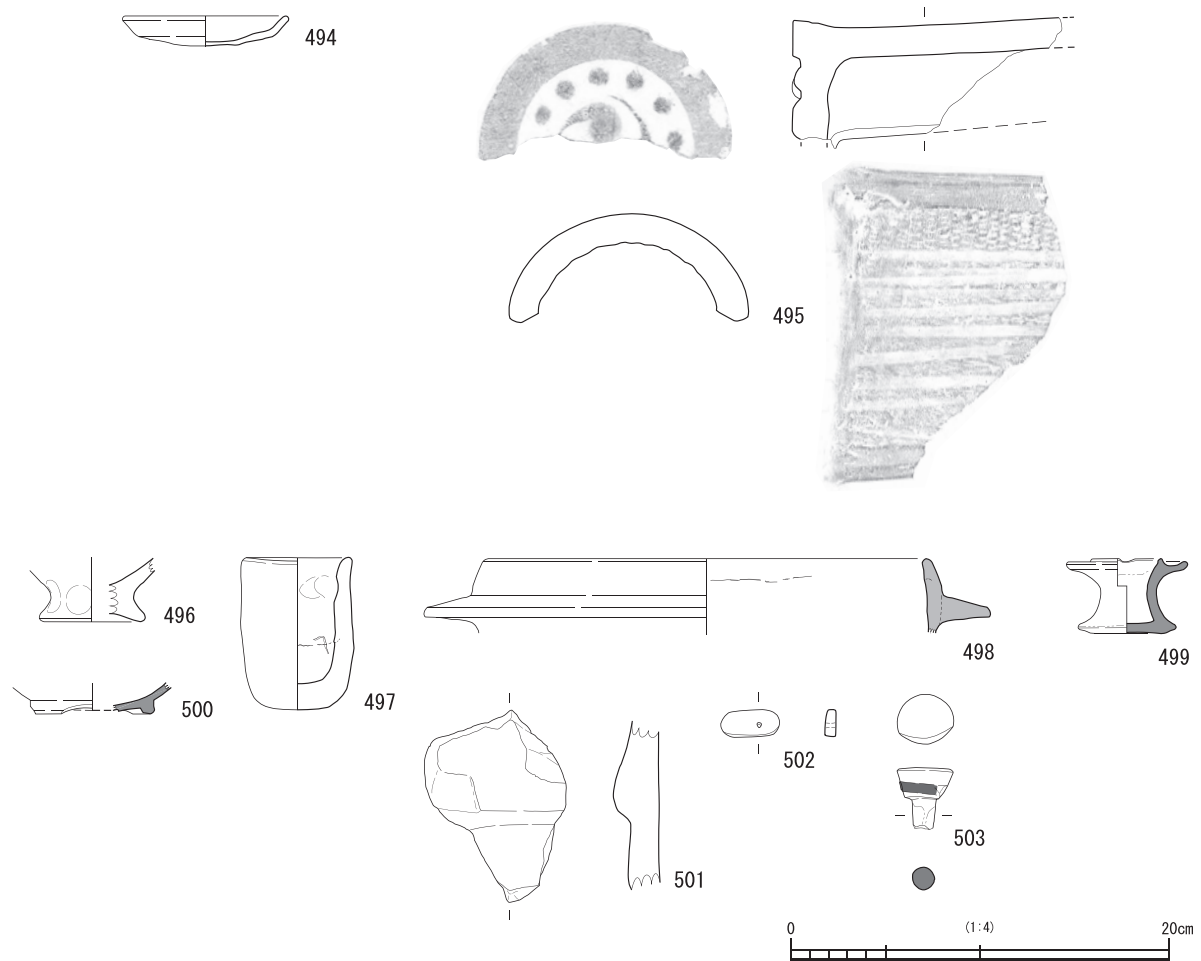
484



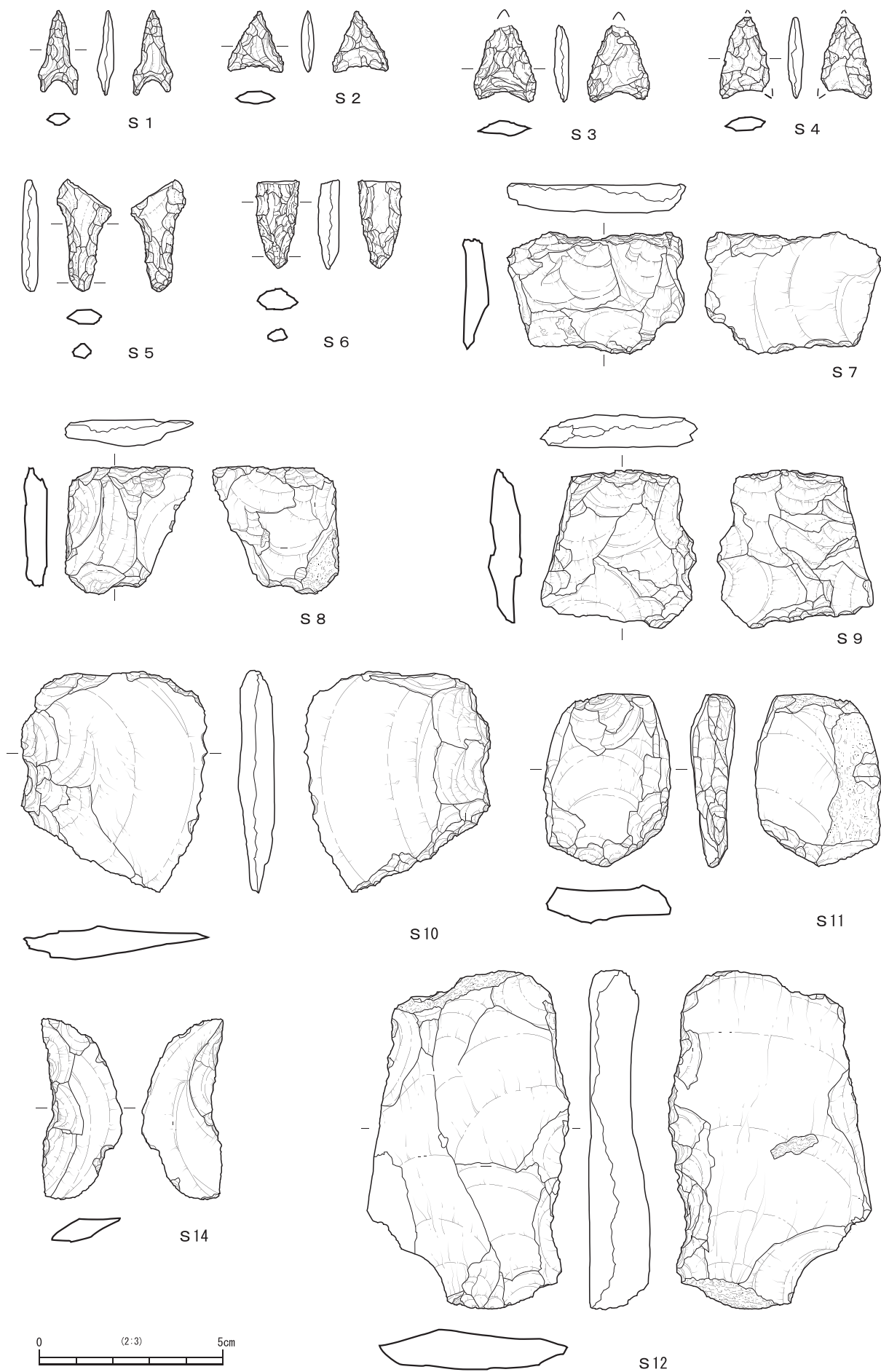
包含層・攪乱出土遺物(2)



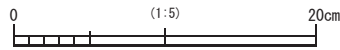
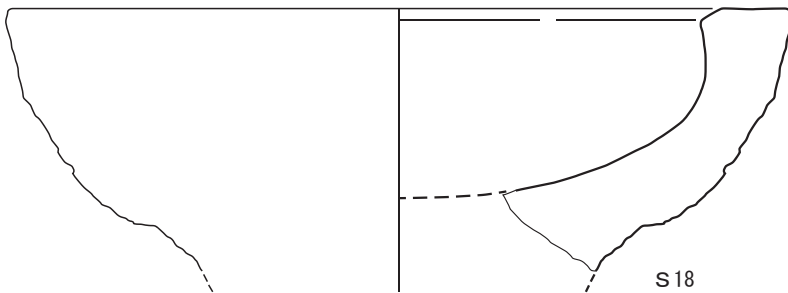
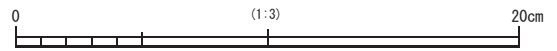
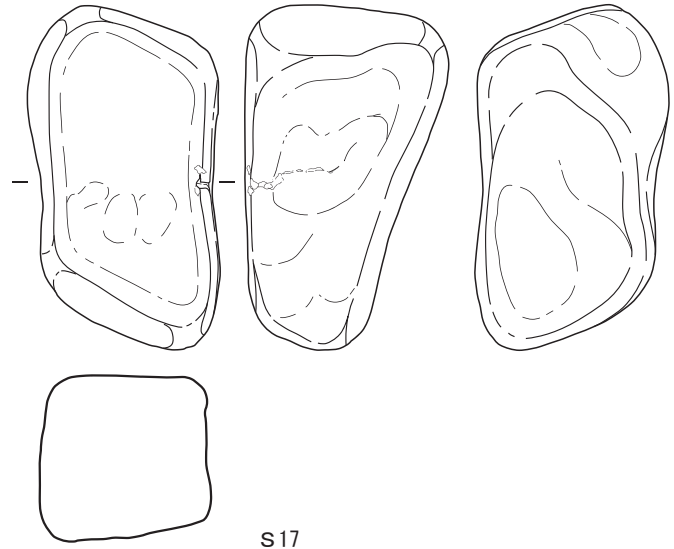
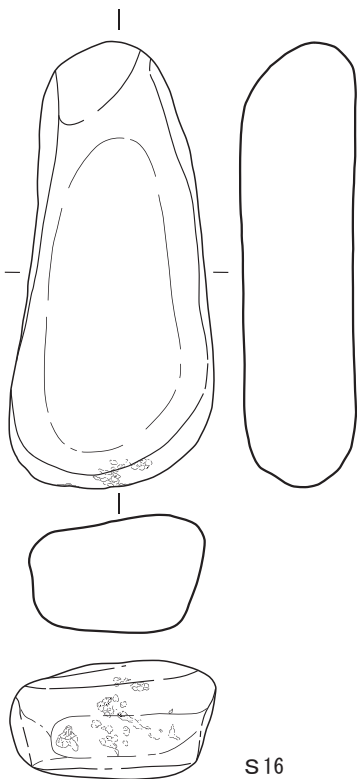
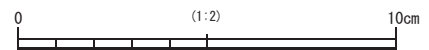
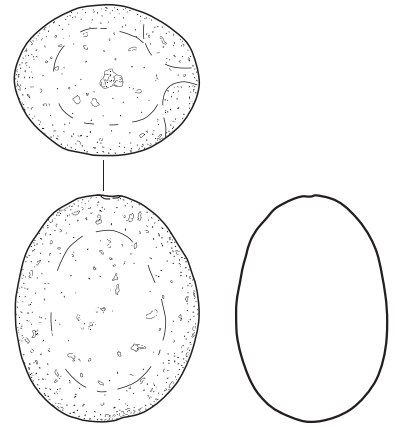
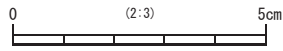
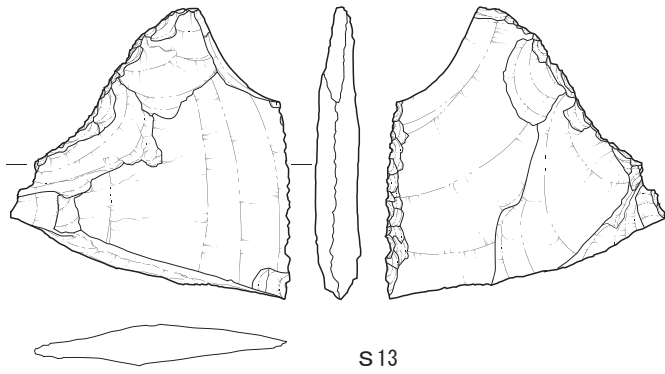
搅乱

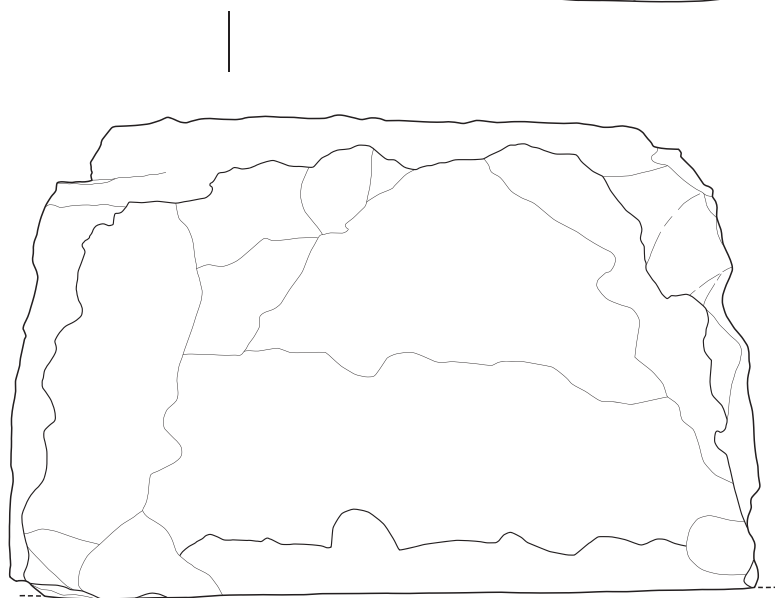
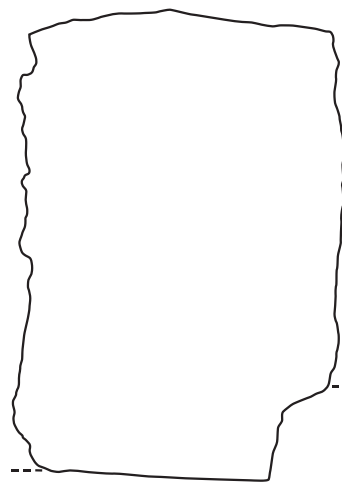
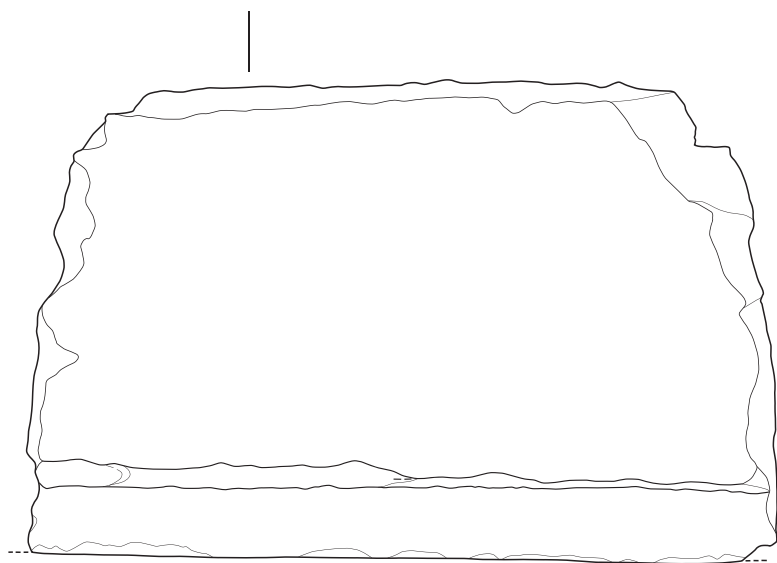
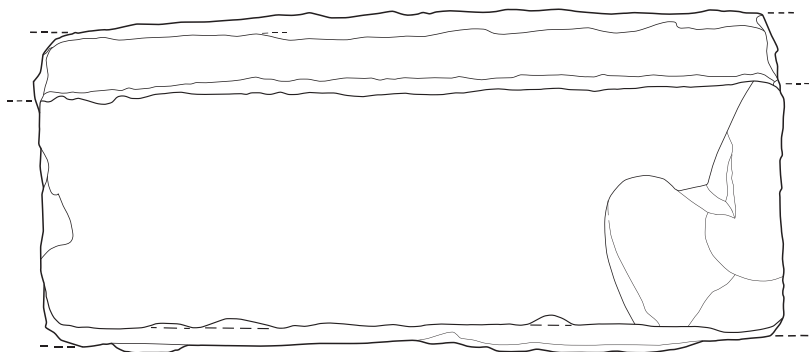


包含層・搅乱出土遺物(3)

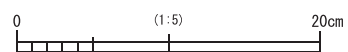


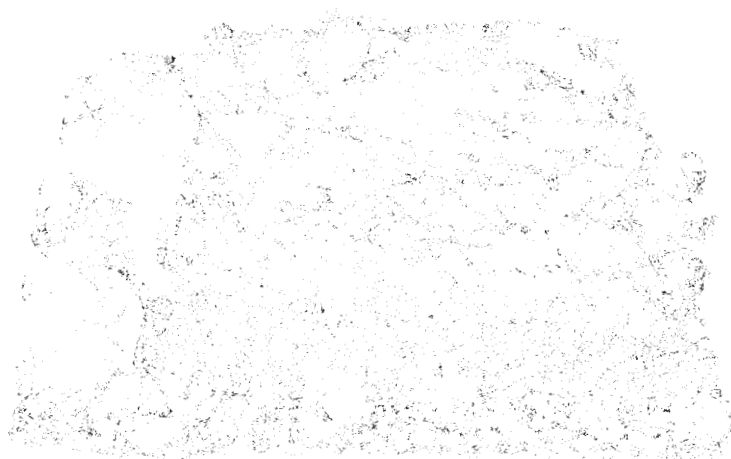
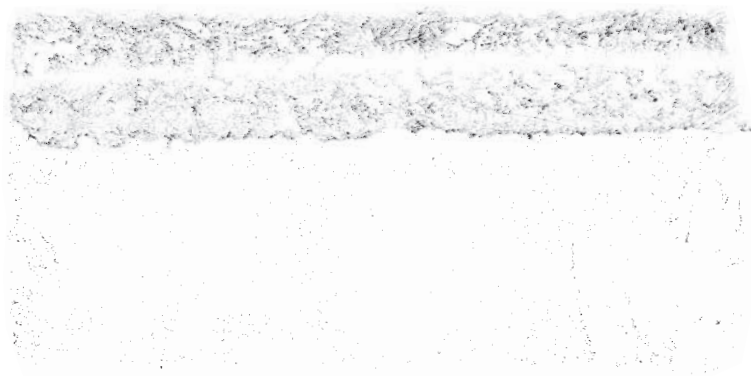
出土石器・石製品(1)



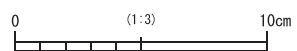
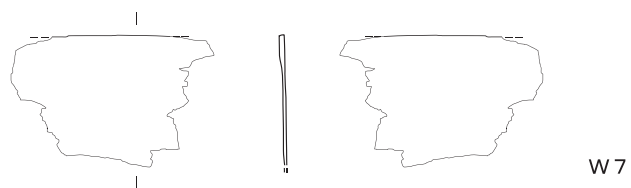
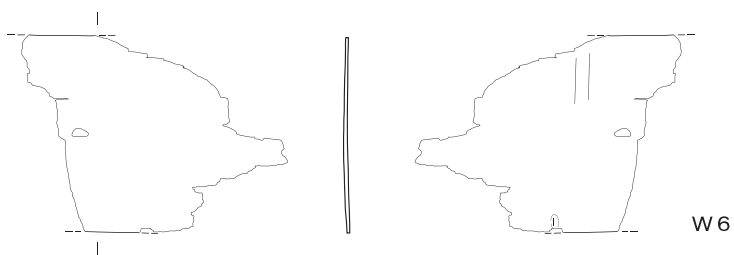
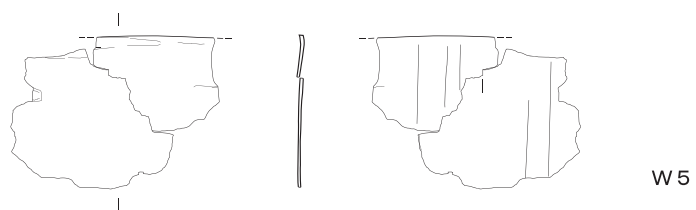
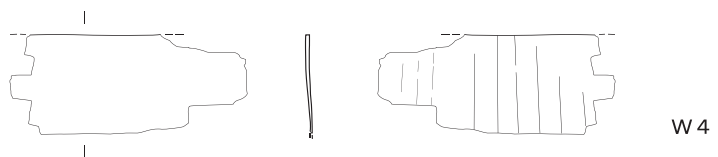
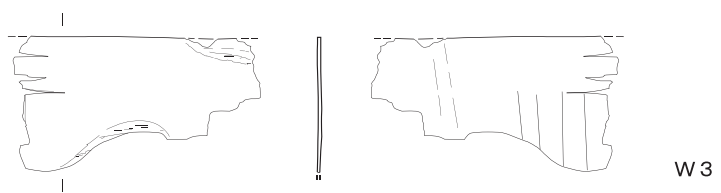
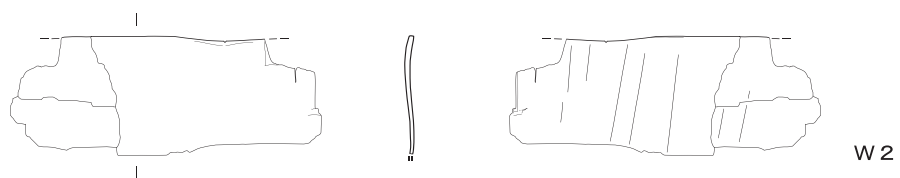
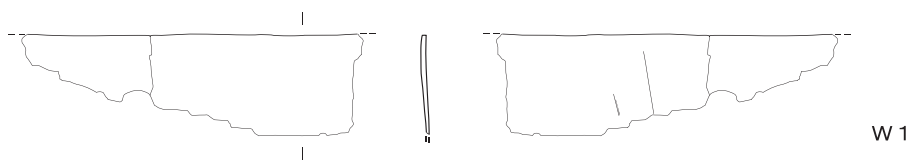


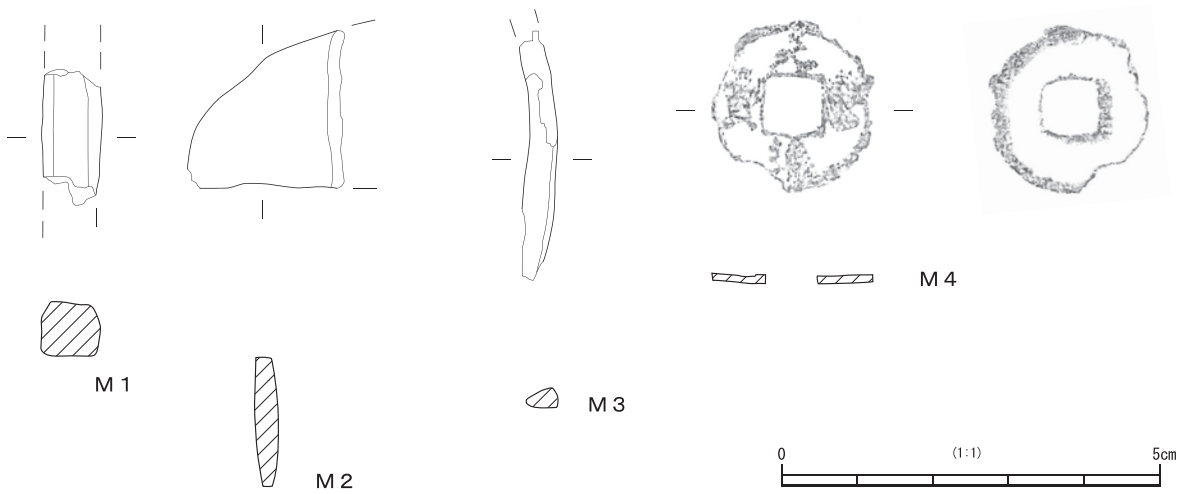
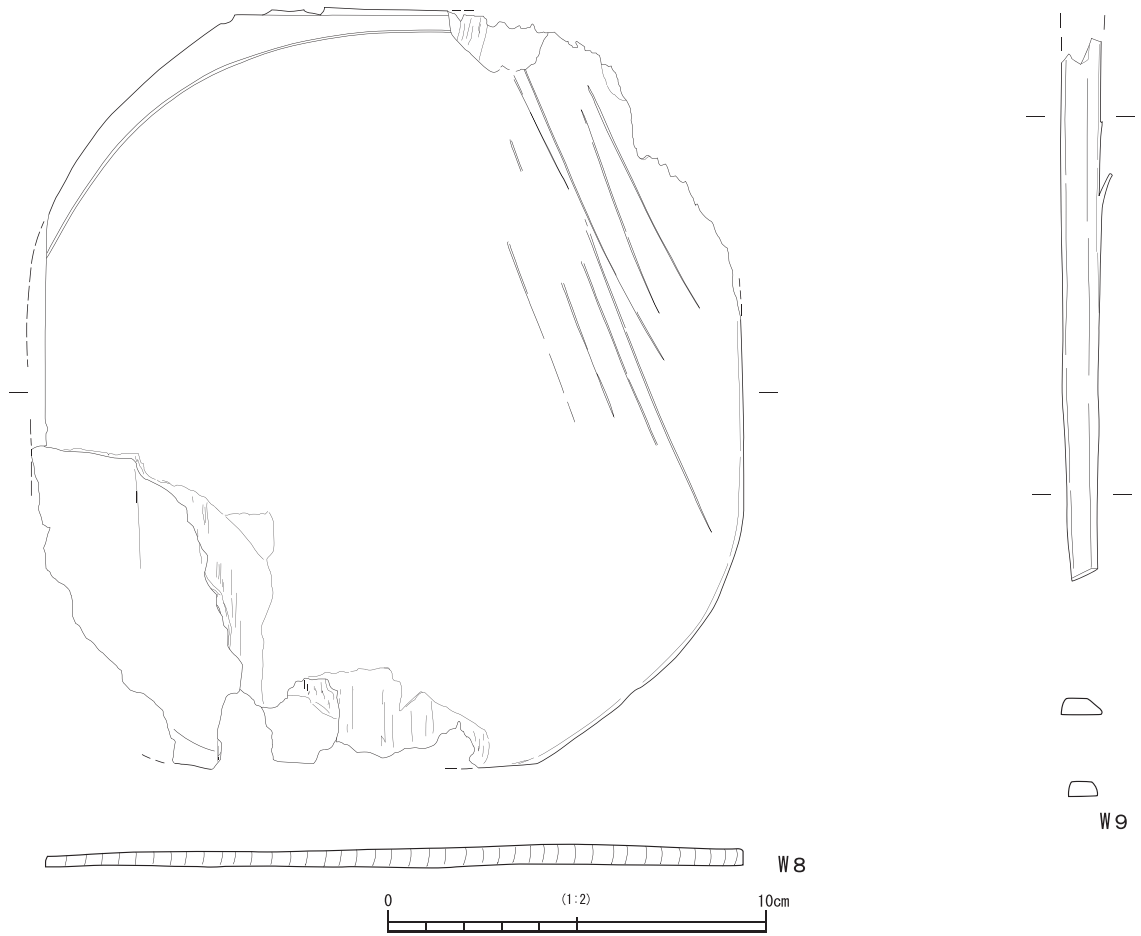
S 19

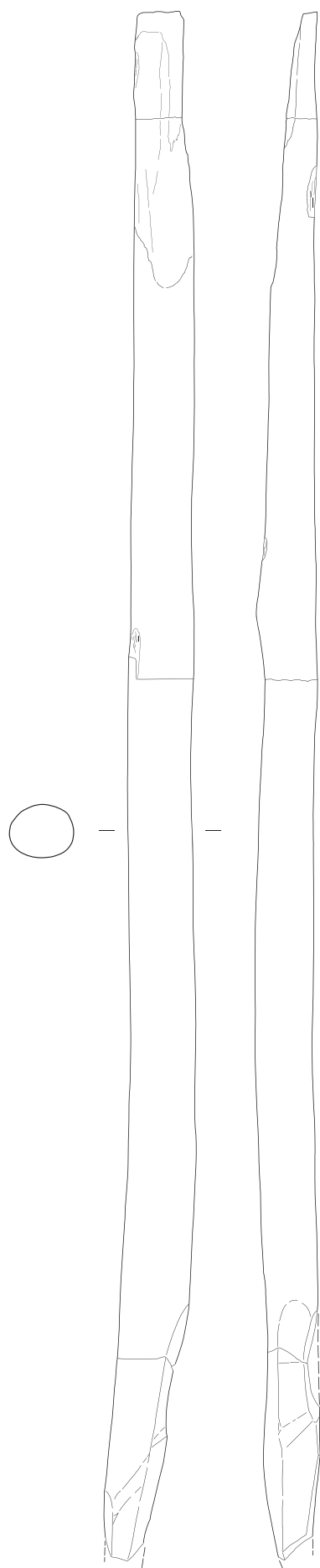




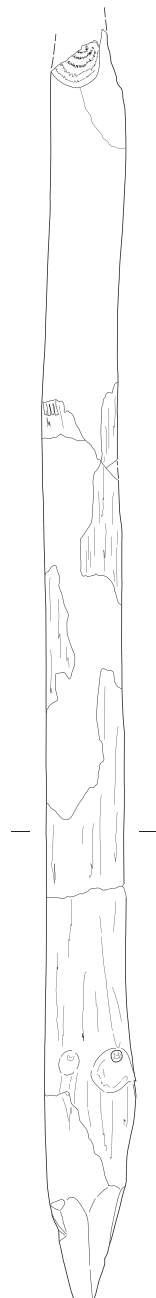
S19







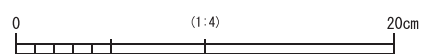
W10

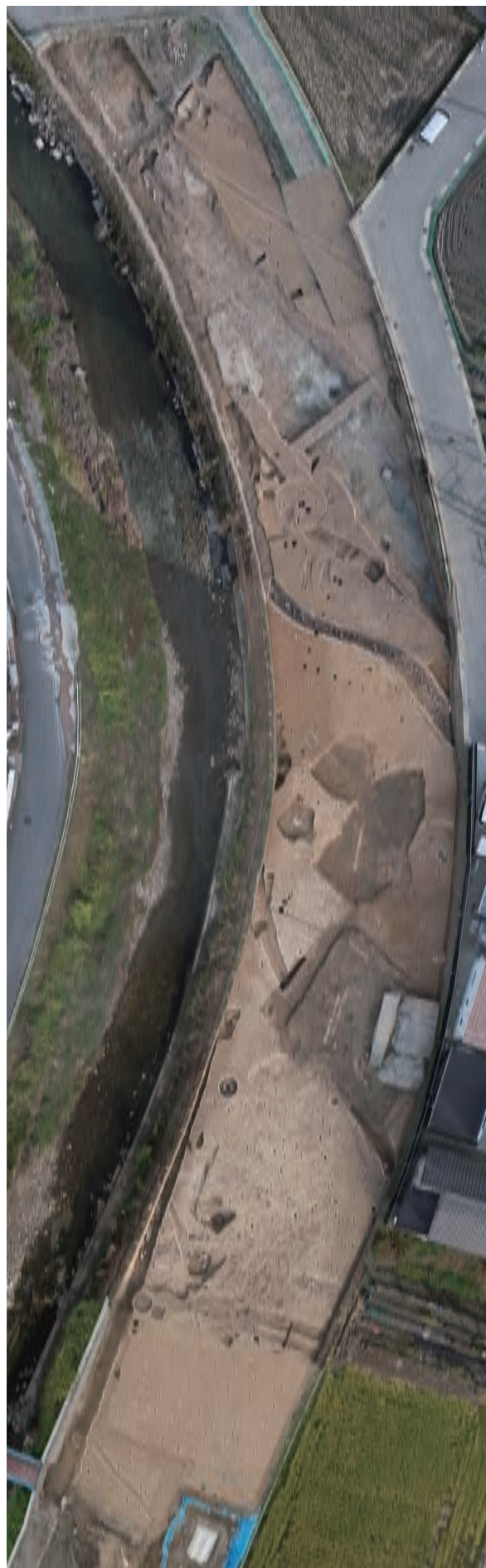


W11



W12





調査区全景（オルソ画像）



調査区上空から南西を望む



調査区上空から北を望む



調査区上空から東を望む



調査区上空から南を望む



西区全景（西上空から）



西区全景（東から）



東・東2区全景（南西上空から）



東・東2区全景（南東上空から）



①西端橋台区調査前状況（北東から）



②西端区調査前状況（西から）



③調査前状況（西から）



④西端区・西区調査前状況（東から）



⑤西端橋台区南壁土層断面（北西から）



⑥西区東端部南壁土層断面（北東から）



⑦東2区南壁土層断面（北から）



⑧東2区東壁土層断面（西から）



SH1 (北から)



SH1 中央土坑 (北西から)



①SH1 中央土坑等検出状況（西から）



②SH1 中央土坑等埋土断面（西から）



③SH1 中央土坑埋土断面（西から）



④SH1 中央土坑埋土断面（南西から）



⑤SH1 中央土坑内遺物出土状況（南から）



⑥SH1 中央土坑内遺物出土状況（東から）



⑦SH1 中央土坑下部土層断面（西から）



⑧SH1 中央炭土坑埋土断面（西から）



①SH1 中央炭土坑 (西から)



②SH1 中央炭土坑内炭等詳細 (北西から)



③SH1 中央炭土坑 截ち割り断面 (西から)



④SH1 周壁溝埋土断面 (北西から)



⑤SH1 内SP 193 断面 (北から)



⑥SH1 内SP 194 断面 (西南西から)



⑦SH1 内SP 194 断面 (南西から)



⑧SH1 内SP 297 断面 (南から)



SH2 (南東から)



SH2中央土坑 (南から)



①SH 2 中央土坑埋土土層断面 (南南東から)



②SH 2 内SK 364 埋土土層断面 (南南東から)



③SH 2 内SK 364 内焼土等 (南西から)



④SH 2 内SK 363 埋土土層断面 (北から)



⑤SH 2 内SK 363 埋土土層断面 (南東から)



⑥SH 2 内SP 322 内礎板石 (西から)



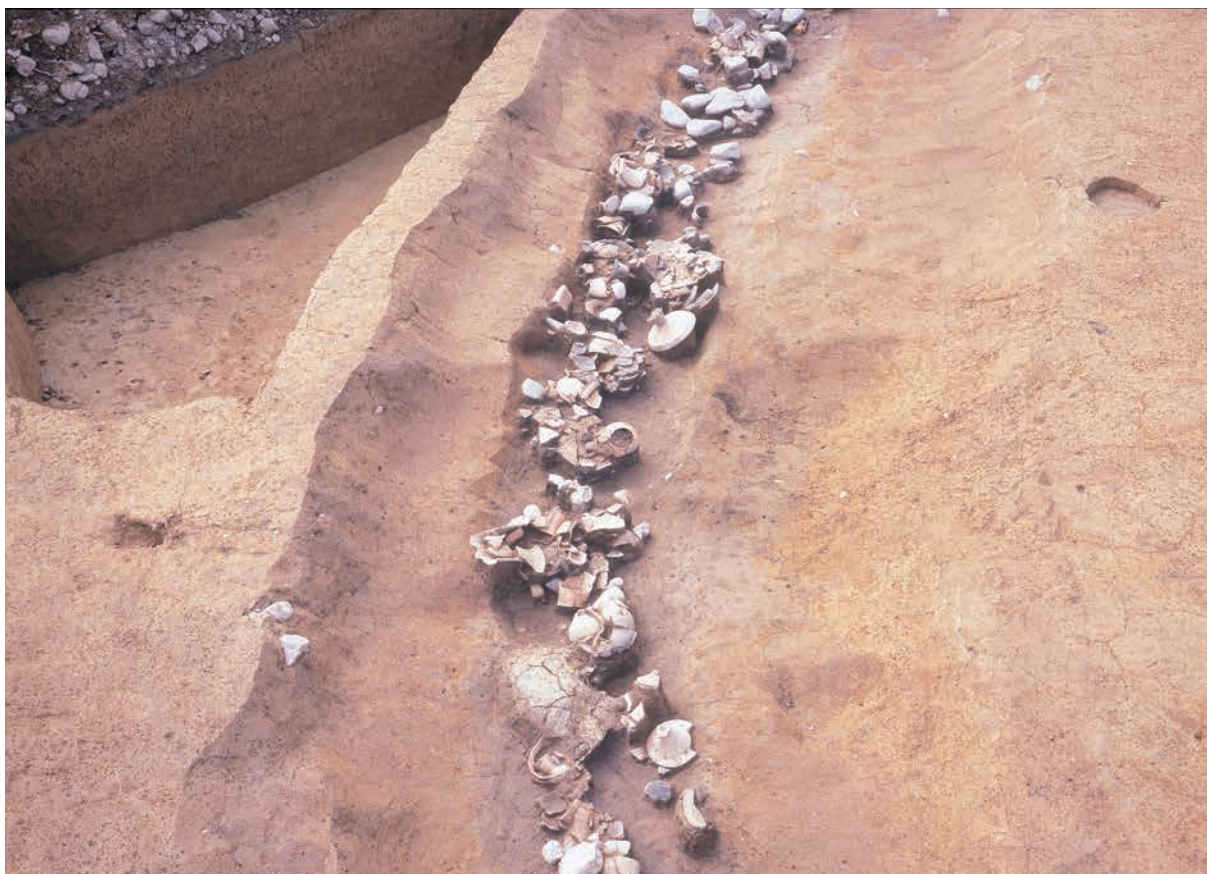
⑦SH 2 内SP 322 内礎板石 (東から)



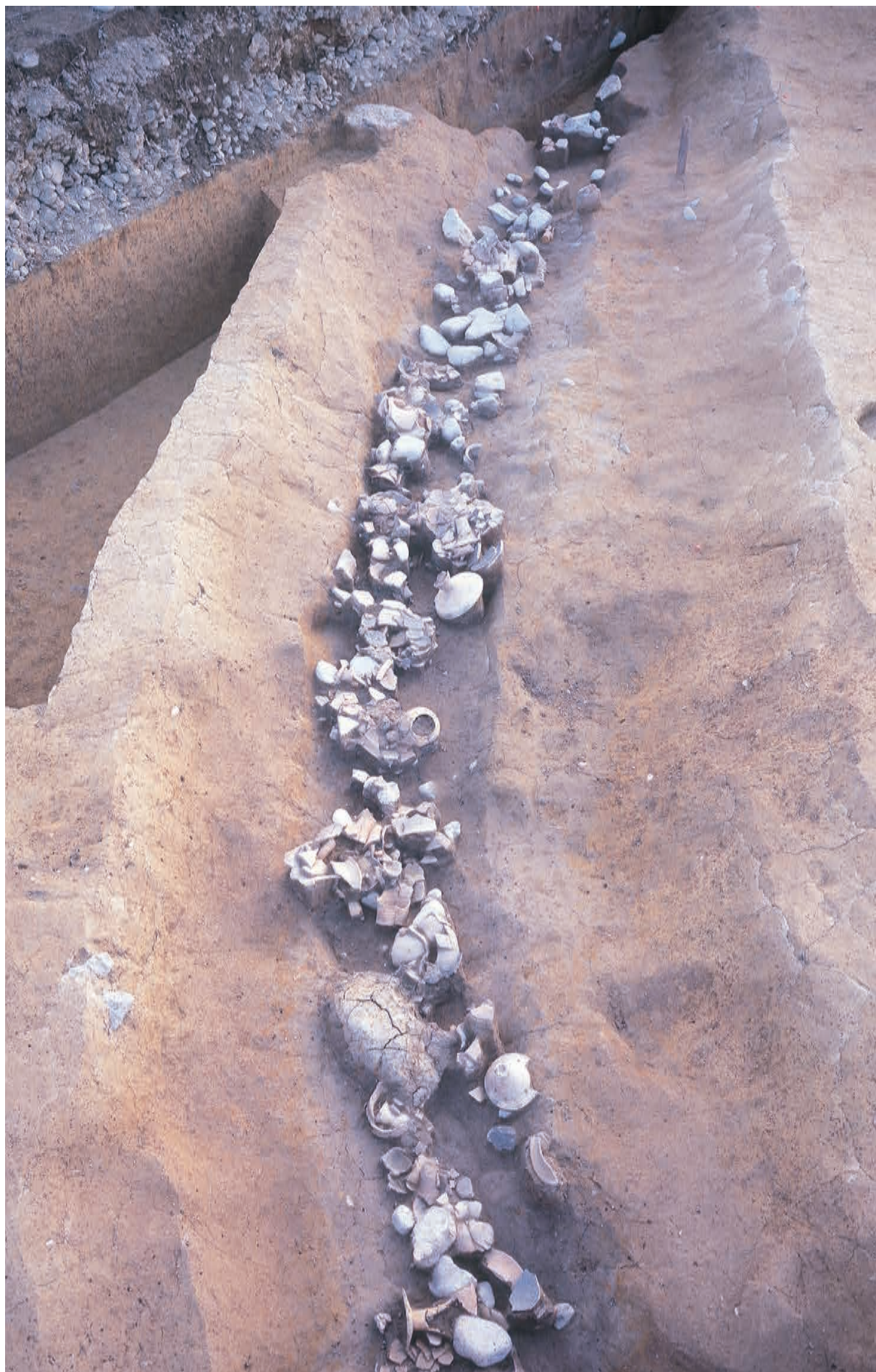
⑧SH 2 内SP 355 内礎板石 (南から)



SD 202 (オルソ画像、西から)



SD 202 南西部 土器出土状況 (北北東から)



S D 202 南西部 土器出土状況（北東から）



S D 202 北東部 土器出土状況（南南西から）



S D 202 中央北部 土器出土状況（北西から）



S D 202 中央部 土器出土状況（南から）



S D 202 中央北部 土器出土状況 (南西から)



S D 202 中央南半部 土器出土状況 (北東から)



S D 202 北半部 完掘状況 (南から)



S D 202 北部 埋土土層断面 (南から)



① S D 202 内土器 16・36 等出土状況（西南西から）



② S D 202 内土器 41・183・186 等出土状況（東から）



③ S D 202 内土器 47 出土状況（西から）



④ S D 202 内土器 48 出土状況（北東から）



⑤ S D 202 内土器 51 出土状況（北から）



⑥ S D 202 内土器 70 出土状況（南東から）



⑦ S D 202 内土器 71 出土状況（西から）



⑧ S D 202 内土器 114 出土状況（北西から）



① S D 202 内土器 122・152・168 等出土状況（東から）



② S D 202 内土器 168 出土状況（北東から）



③ S D 202 内土器 179 出土状況（南西から）



④ S D 202 内土器 184 出土状況（南から）



⑤ S D 202 内土器 190 出土状況（南東から）



⑥ S D 202 南端 埋土土層断面（北から）



⑦ S D 202 北部 埋土下層断面（南から）



⑧ S D 202 中央南部 埋土下層断面（南南西から）



SD 164 全景 (上が北西)



SD 164 南西部 埋土土層断面 (南西から)



①SD 164 南端部 埋土土層断面 (北東から)



②SD 164 南部 土器 216 出土状況 (北東横から)



③SD 164 南部 土器 216 出土状況 (北東から)



④SD 164 南部 土器 216 出土状況 (北東上から)



SD 164 北部 礫検出状況 (西北西から)



S D 164 北東部 埋土上半土層断面（東北東から）



① S D 164 北東部 礫検出状況（北北西から）



② S D 164 北東部 下層礫検出状況（東から）



③ S D 164 北東部 埋土下半土層断面（東北東から）



④ S D 164 北東部 土器 197 出土状況（北から）



S D 340 全景 (南西から)



S D 340 南部 埋土土層断面 (南南西から)



S D 340 北部 埋土土層断面 (北東から)



S D 340 サヌカイト剥片出土状況（北北東から）



S D 340 サヌカイト剥片出土状況（東南東から）



① S D 340 サヌカイト剥片出土状況 1 (北東から)



② S D 340 サヌカイト剥片出土状況 2 (南南西から)



③ S D 340 サヌカイト剥片出土状況 3 (東南東から)



④ S D 340 サヌカイト剥片出土状況 4 (東南東から)



⑤ S D 340 サヌカイト剥片出土状況 5 (東南東から)



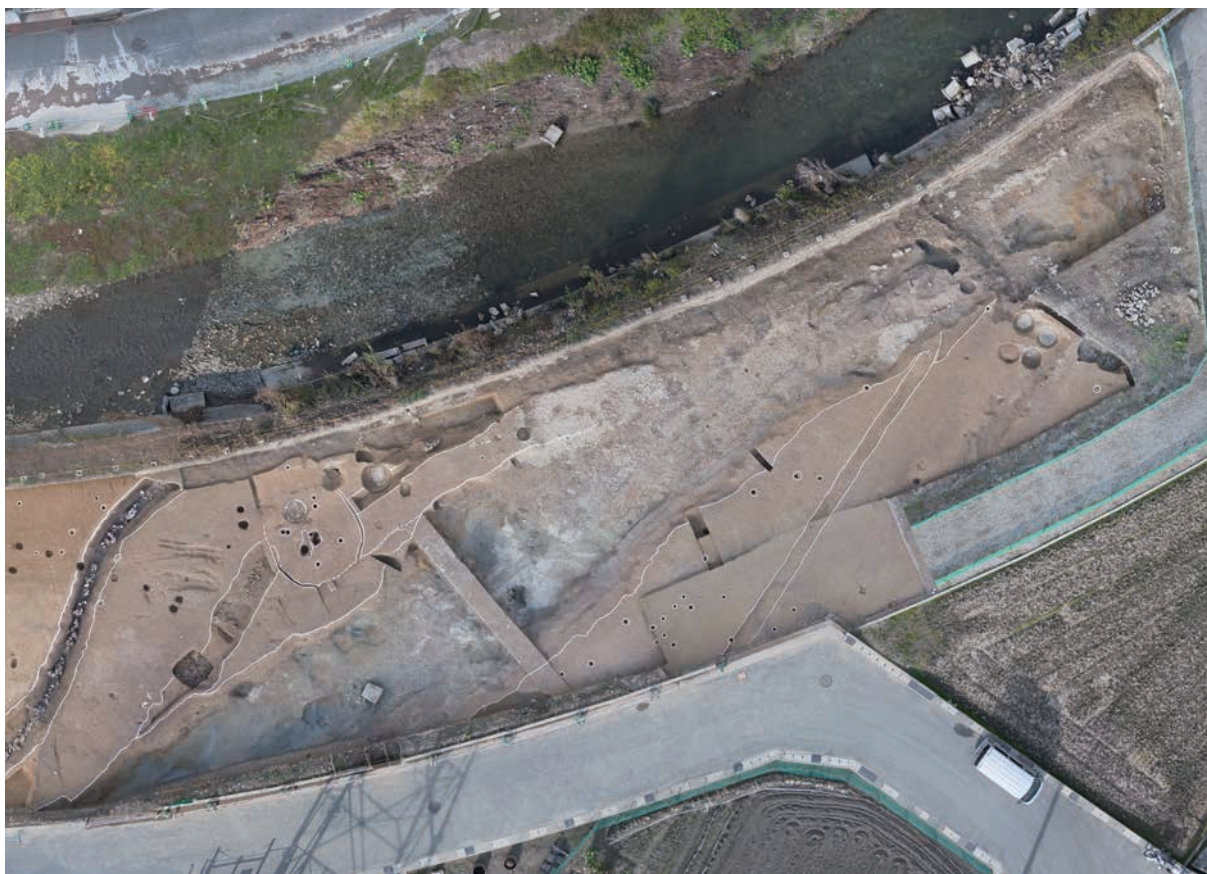
⑥ S D 340 北東端付近 土器出土状況 (北から)



⑦ S D 340 截ち割り土層断面 (南西から)



⑧ S D 340 截ち割り土層断面詳細 (南西から)



SR 308 (南上空から)



SR 308 全景 (南西から)



S R 308 全景（北東から）



S R 308 南西部（北東から）



S R 308 埋土土層断面 (北東から)



① S R 308 埋土土層断面詳細 (北東から)



② S R 308 内杭群 (北東から)



③ S R 308 内杭群 (北西から)



④ S R 308 内木製品 (W10) 出土状況 (南西から)



⑤ S R 308 内小枝等集積状況 (西から)



⑥ S R 308 内小枝等集積部詳細 (南から)



① S R 308 内土器 233 出土状況 (南東から)



② S R 308 内土器 240 出土状況 (南から)



③ S R 308 内土器 260 出土状況 (北から)



④ S R 308 内土器 296 出土状況 (南西から)



⑤ S R 308 内土器 297 出土状況 (南から)



⑥ S R 308 内土器 298 出土状況 (北から)



⑦ S R 308 内土器 380 出土状況 (北西から)



⑧ S R 308 内土器 386 出土状況 (北から)



西端橋台区全景（東から）



①西端橋台区P 2 瓦 449 出土状況（南から）



②西端橋台区P 8 土器 450 出土状況（南から）



③西端橋台区P 8 底土器 451 等出土状況（南から）



④西端橋台区P 13 礫検出状況（南から）



西端区全景（西から）



① S P 075 土器 461 ~ 463 出土状況（南西から）



② S P 075 土器 461 ~ 463 出土状況近景（南西から）



③ S P 075 土器 461 ~ 463 出土状況（北西から）



④ S D 014 埋土土層断面（南西から）



SB 1・2 全景 (東上空から)



SB 1・2 全景 (西から)



SB1 (東から)



①SB1内SP043断面 (西から)



②SB1内SP053断面 (北西から)



③SB1内SP059断面 (西から)



④SB1内SP067断面 (南東から)



SB 2 (南東から)



①SB 2内SP 022 断面 (南東から)



②SB 2内SP 054 内土器 425 検出状況 (南西から)



③SB 2内SP 076 断面と土器検出状況 (南東から)



④SB 2内SP 077 断面 (南東から)



SB3・4・9全景（東上空から）



SB3・4・9全景（西から）



SB3 (西から)



①SB3内SP128断面 (北西から)



②SB3内SP132断面 (南東から)



③SB3内SP140断面 (南東から)



④SB3内SP143断面 (南東から)



SB 4 (北東から)



SB 4 (北西から)



①SB 4内SP 145 断面 (南東から)



①SB 4内SP 151 断面 (南東から)



③SB 4内SP 156 断面 (南東から)



④SB 4内SP 159 断面 (北東から)



SB 9 全景 (西から)



①SB9内SP124 断面 (北西から)



②SB9内SP130 上面土器436 出土状況 (北西から)



③SB9内SP141 断面 (西から)



④SB9内SP146 断面 (北東から)



⑤SB9内SP169 断面と土器検出状況 (南東から)



⑥SB9内SP234 上面土器438 出土状況 (北から)



⑦SB9内SP237 断面 (東から)



⑧SB9内SP293 断面 (北から)



S X 270 (南から)



S X 270 副葬品検出状況 (南から)



① S X 270 白磁碗・青磁碗出土状況（南西から）



② S X 270 白磁碗内青磁碗検出状況（南西から）



③ S X 270 青磁碗出土状況（西から）



④ S X 270 白磁小壺出土状況（南東から）



⑤ S X 270 白磁小壺出土状況（北から）



⑥ S X 270 棺内埋土土層断面（東から）



⑦ S X 270 墓壇埋土土層断面（東から）



⑧ S X 270 墓壇（南から）



S X 187 (北から)



① S X 187 墓壇 (北から)



② S X 187 埋土土層断面 (北から)



③ S X 187 墓壇埋土土層断面 (北から)



④ S X 187 南西部 棺材遺存状況 (北から)



S E 182 (南から)



S E 182 石組 (南から)



S E 182 上半部 埋土土層断面（南から）



S E 182 截ち割り断面（東から）



① S E 182 石組内 埋土土層断面 (南から)



② S E 182 石組底 曲物検出状況 (東から)



③ S E 182 石組底 遺物出土状況 (南から)



④ S E 182 石組底 遺物出土状況 (北から)



⑤ S D 161 埋土土層断面 (北から)



⑥ S D 177 埋土土層断面 (南から)



⑦ S D 181 埋土下層断面 (北西から)



⑧ S D 144 埋土下層断面 (西から)



①SD 166・168 南部 埋土土層断面（北東から）



②SD 166 南部 埋土土層断面（北から）



③SD 168 南部 埋土土層断面（北東から）



④SD 168 中央北部 埋土土層断面（北から）



⑤SD 168 北部 埋土土層断面（北から）



⑥SD 168 突出部 埋土土層断面（南西から）



⑦SX 183 埋土土層断面（東から）



⑧SK 178 埋土土層断面（南西から）



SB 5 (南から)



①SB 5 (南東から)



②SB 5内SP 205 断面 (南から)



③SB 5内SP 208 断面 (北から)



④SB 5内SP 292 断面 (東から)



SB5・7 (東北東から)



①SB6 (東から)



②SB6内SP276断面 (東から)



③SB7内SP200断面 (南から)



④SB7内SP203断面 (東から)



東3区SB8他（南西から）



東3区SB8他（北東から）



①SB 8と北西柱列（北東から）



②SB 8内SP 366 断面（北東から）



③SB 8内SP 372 断面（南西から）



④SB 8北西柱列内SP 367 断面（北西から）



⑤SB 8北西柱列内SP 368 断面（北西から）



⑥SB 8北西柱列内SP 369 断面（北西から）



⑦SD 307 埋土土層断面（南西から）



⑧東3区 截ち割り土層断面（東から）



①SK 286 (南から)



②SK 286 埋土土層断面 (南西から)



③SK 291 (南西から)



④SK 291 埋土土層断面 (南西から)



⑤SA 1内SP 328 断面 (北西から)



⑥SA 1内SP 329 断面 (北西から)



⑦SA 1内SP 330 断面 (北西から)



⑧SD 344 埋土土層断面 (南東から)



① S P 300 断面 (北東から)



② 東 2 区流路内土器 414 他出土状況 (北から)



③ 東 2 区流路内土器 417 出土状況 (北から)



④ 東 2 区流路内瓦 419 出土状況 (北西から)



⑤ S D 164 礫精査状況 (西から)



⑥ S B 5 断面実測状況 (北東から)



⑦ ドローンによる空中写真測量状況 (南から)



⑧ 測量のためのポール写真撮影状況 (南東から)



①西区 重機による表土掘削状況（西から）



②SR 308 掘削状況（北東から）



③SB 1・2付近 柱穴掘削状況（南から）



④現地説明会開催状況 1



⑤現地説明会開催状況 2



⑥現地説明会開催状況 3



⑦現地説明会開催状況 4



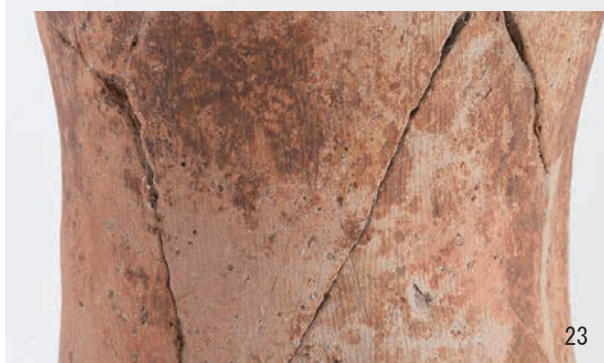
⑧現地説明会開催状況 5



SH1・2出土土器



S D 202 出土土器 1















54



59



57



61



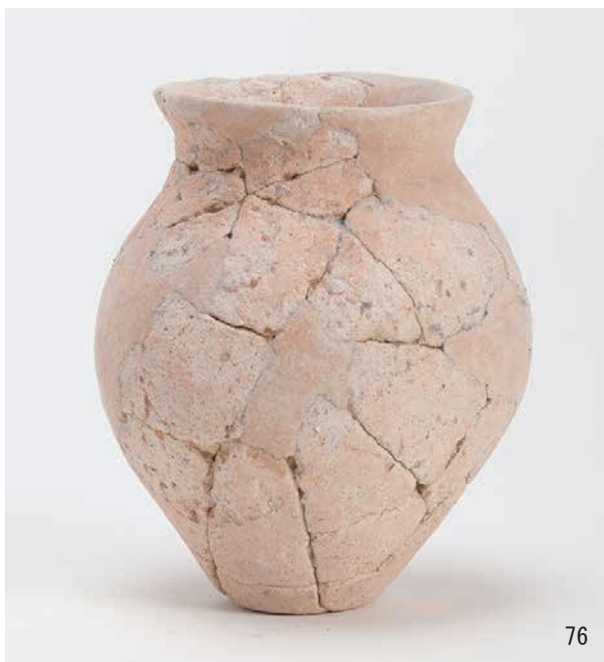
58



64



























S D 164 出土土器 2



SD 164 出土土器 3



SD 340 他出土土器 1





S R 308 出土土器 2



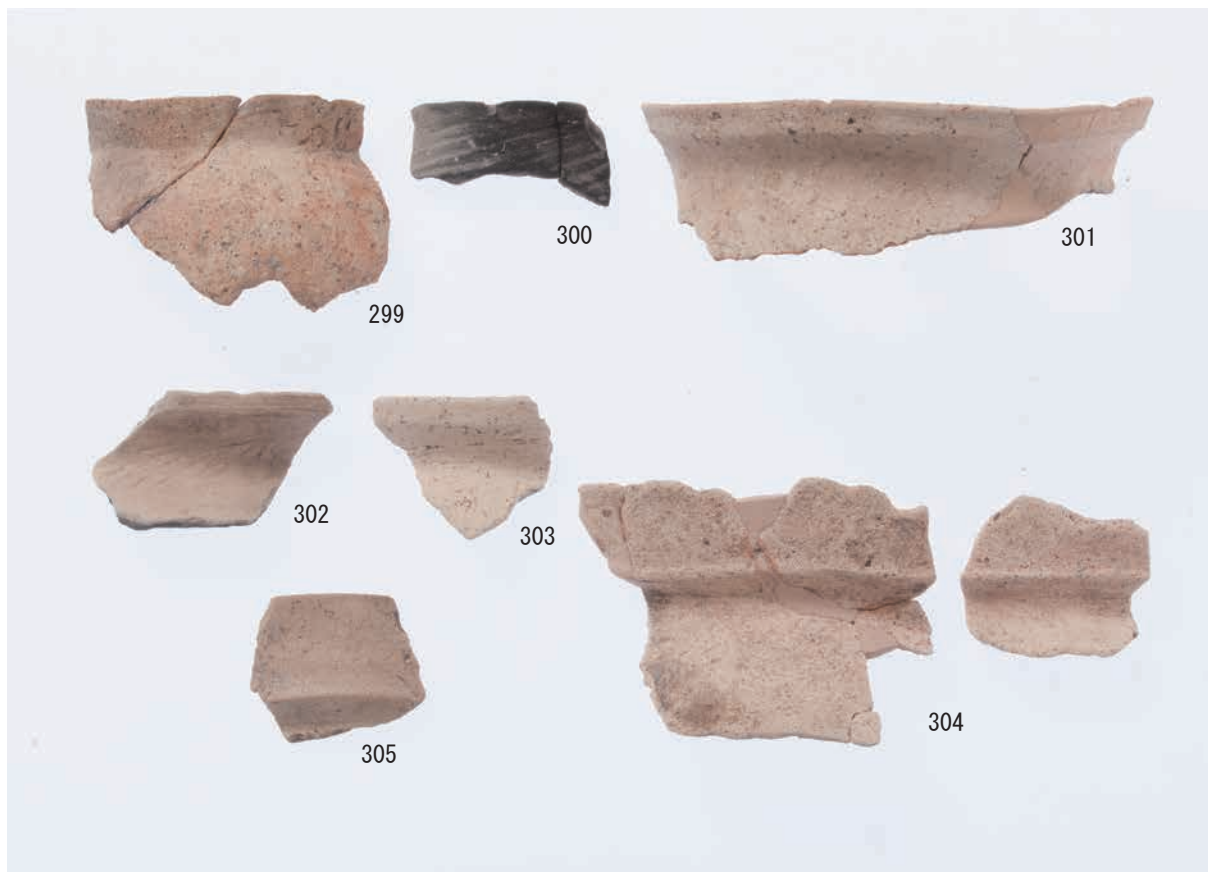
S R 308 出土土器 3







S R 308 出土土器 6



S R 308 出土土器 7





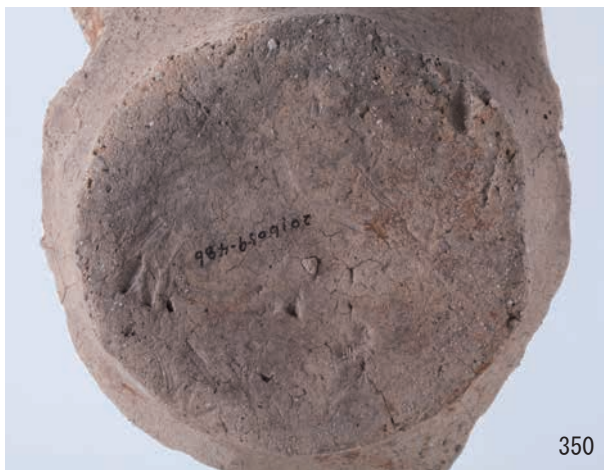
S R 308 出土土器 9



346



346



350



354



354



365



366

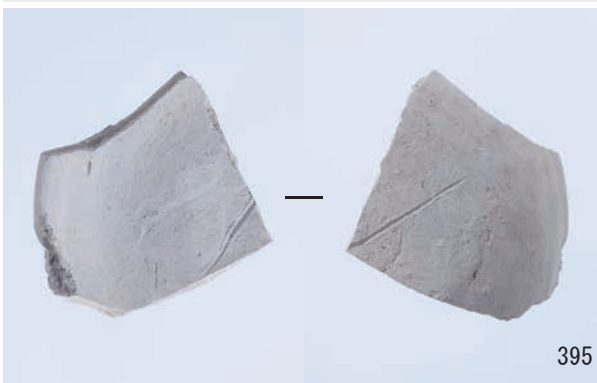


368



369



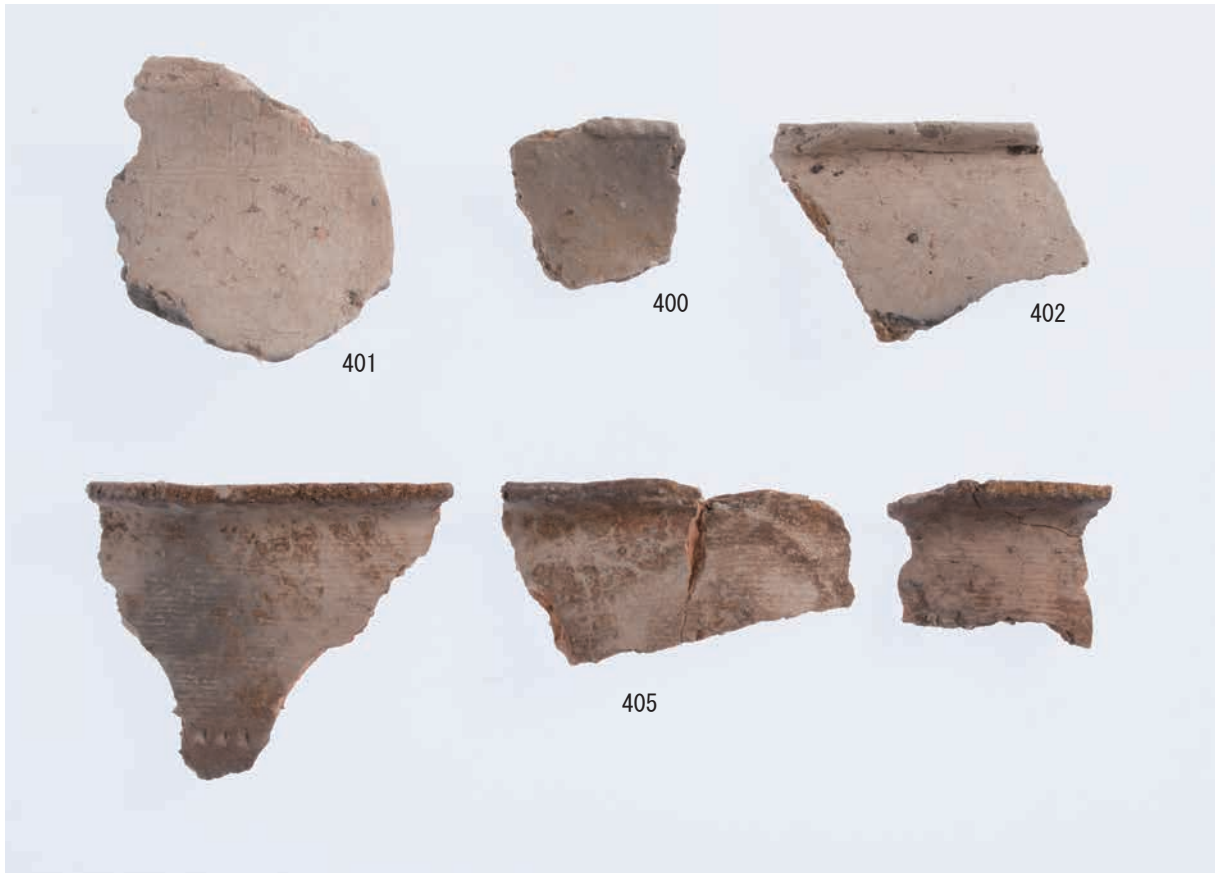




S R 308 出土土器 13



東2区流路出土遺物 1



東2区流路出土遺物2



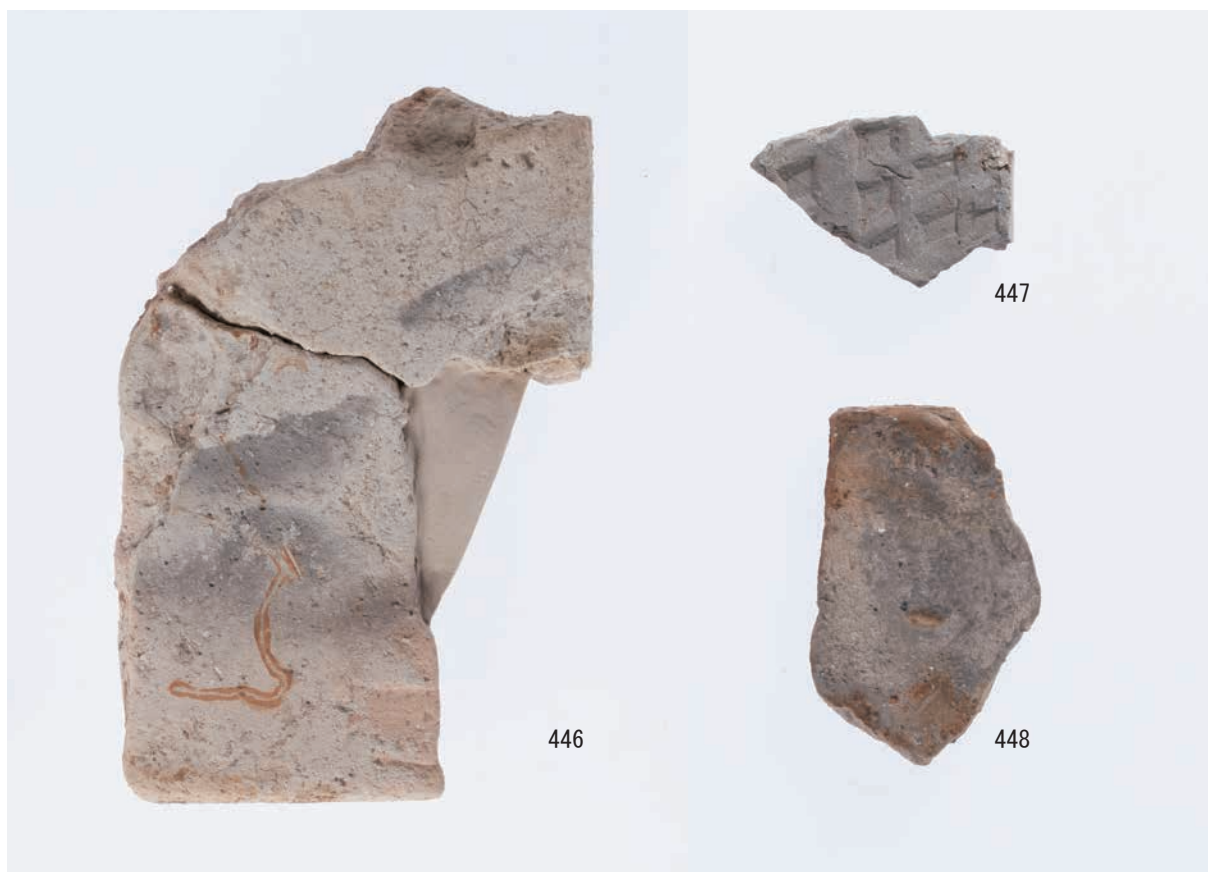
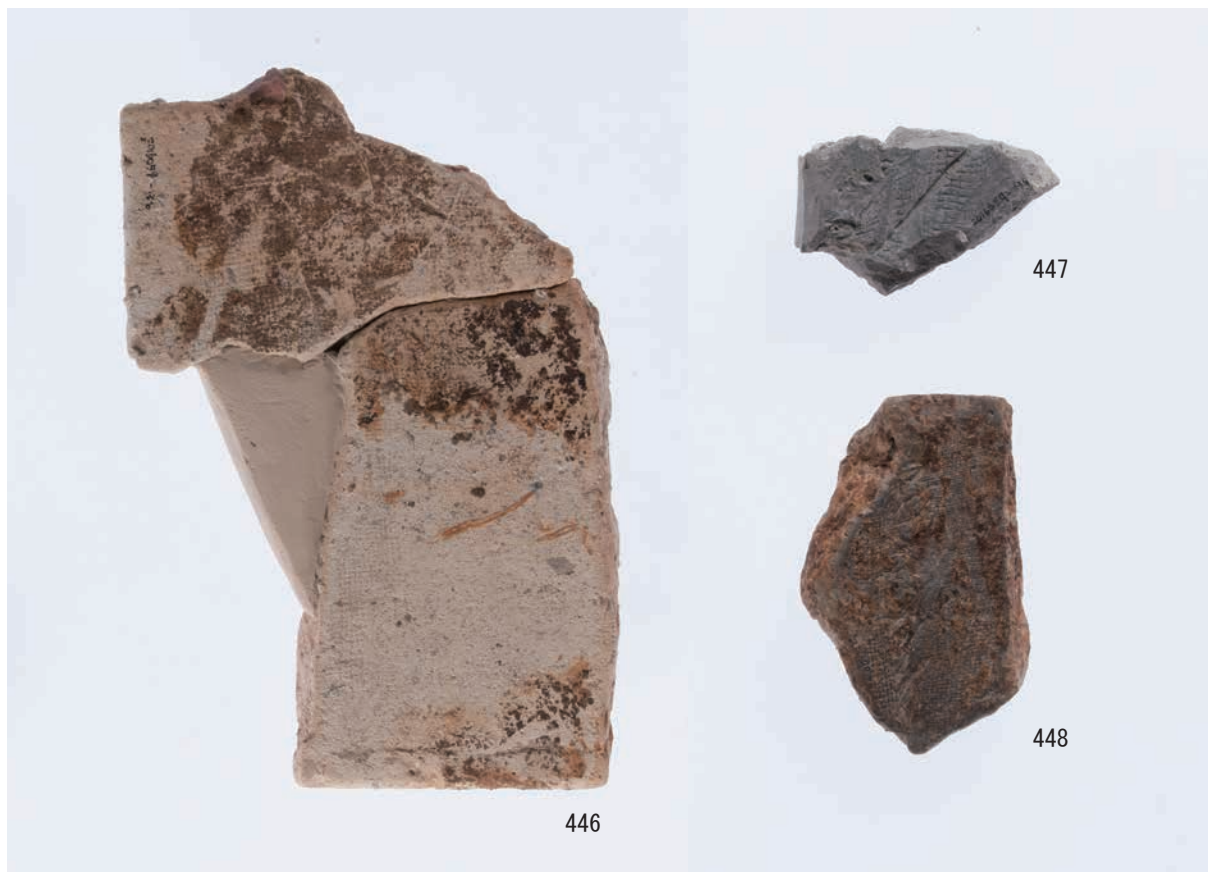


掘立柱建物跡出土土器 1

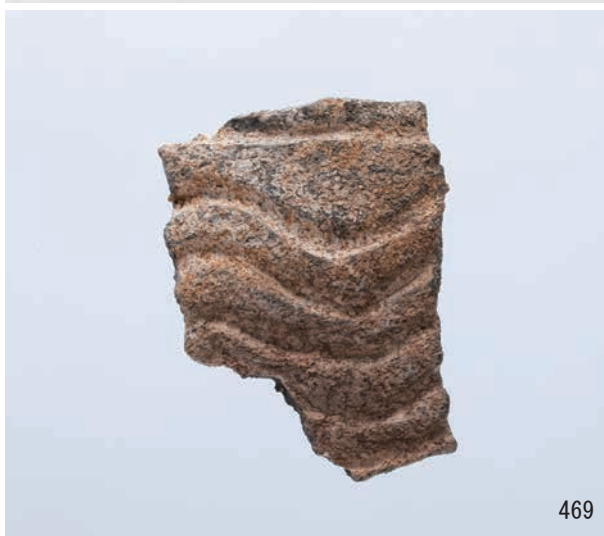


掘立柱建物跡出土土器 2、S X 270 出土土器類、S E 182 他出土遺物 1





S E 182 他出土遺物 3





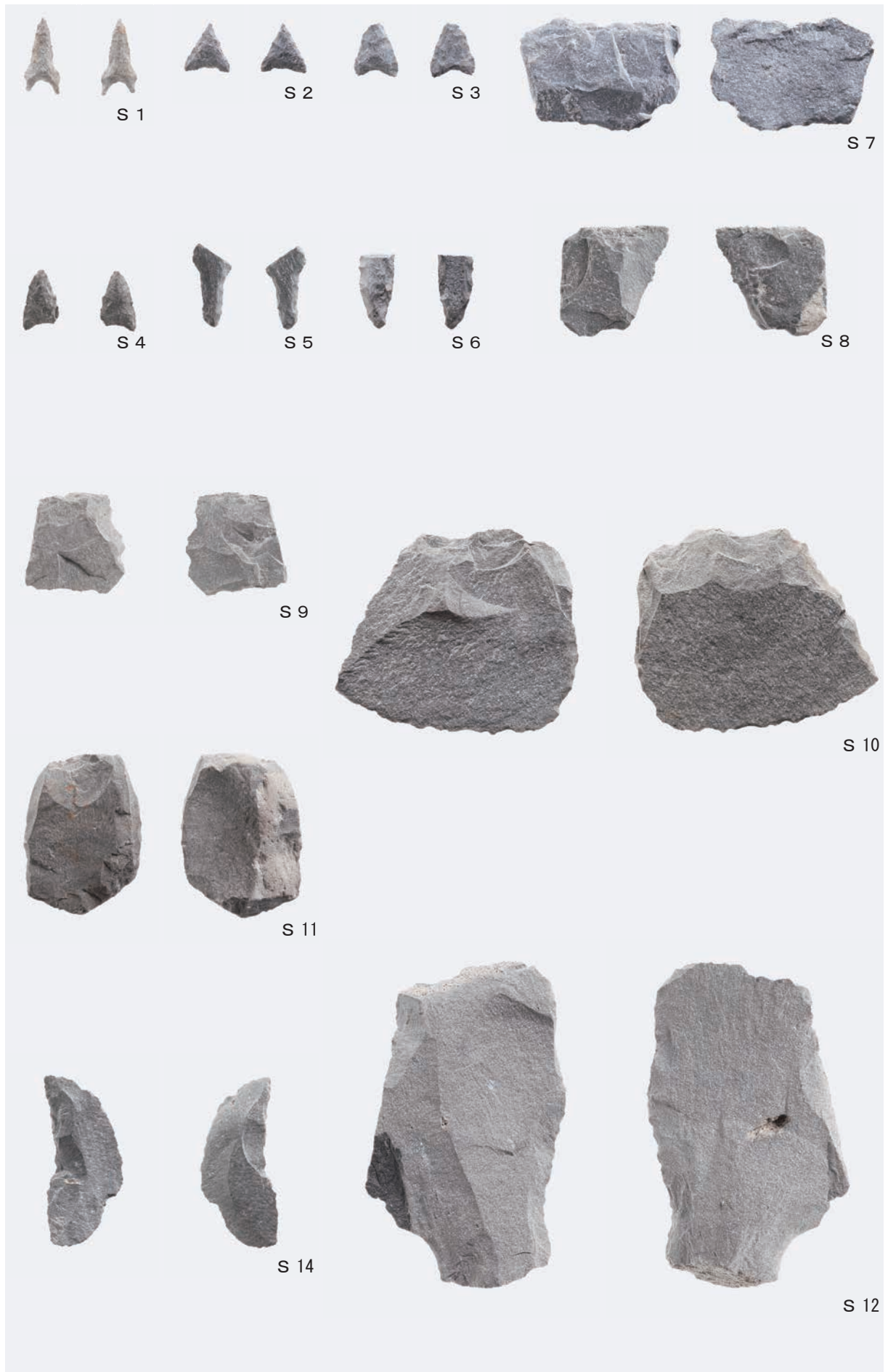
包含層・攪乱出土遺物 2



包含層・攪乱出土遺物 3



包含層・攪乱出土遺物 4

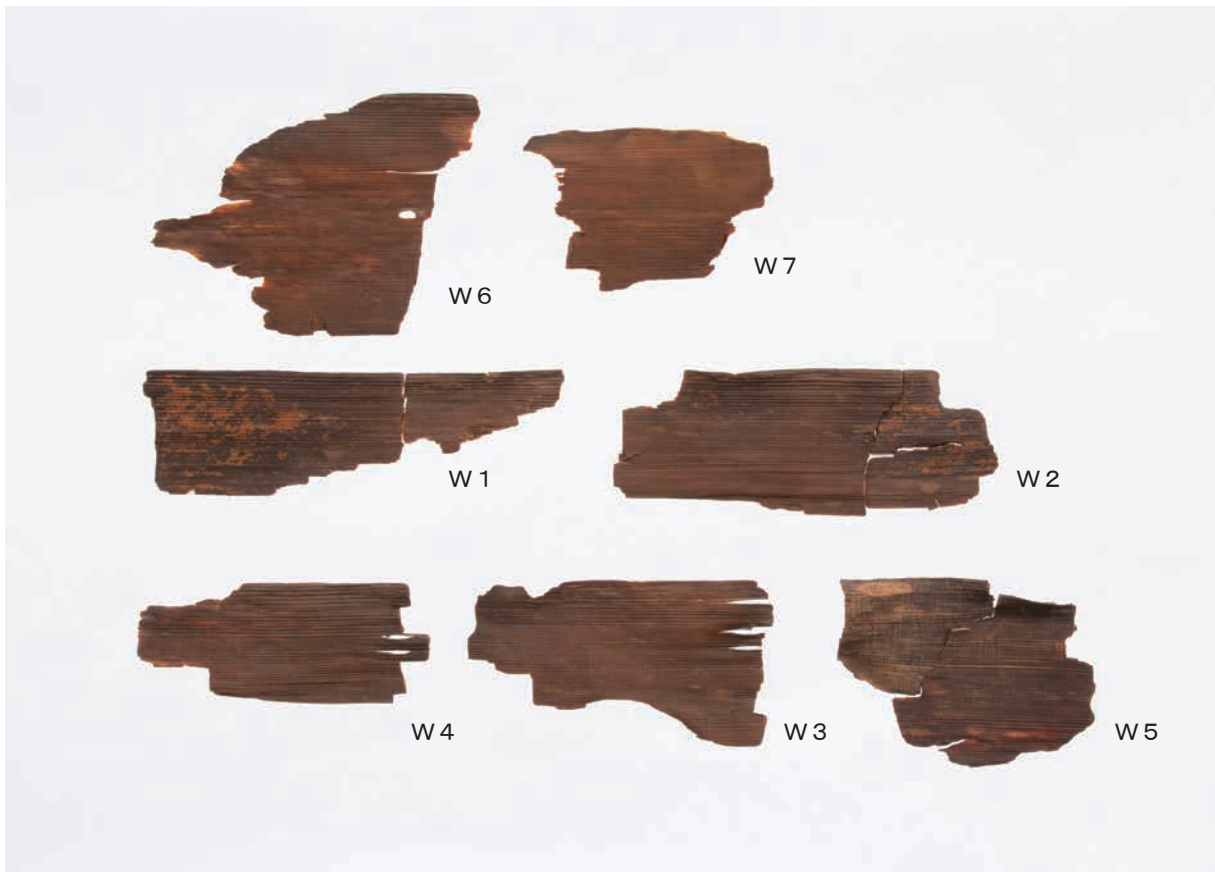


出土石器・石製品 1





S 19



S E 182 出土木製品



S R 308 出土木製品



出土金属製品

兵庫県文化財調査報告 第514冊

姫路市

竹の前遺跡

－ (二) 船場川水系船場川流域治水対策河川事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －

令和2(2020)年3月25日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
(兵庫県立考古博物館内)

発行：兵庫県教育委員会
〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：小野高速印刷株式会社
〒670-0933 姫路市平野町62番地
